西吉田遺跡

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第17集

1985

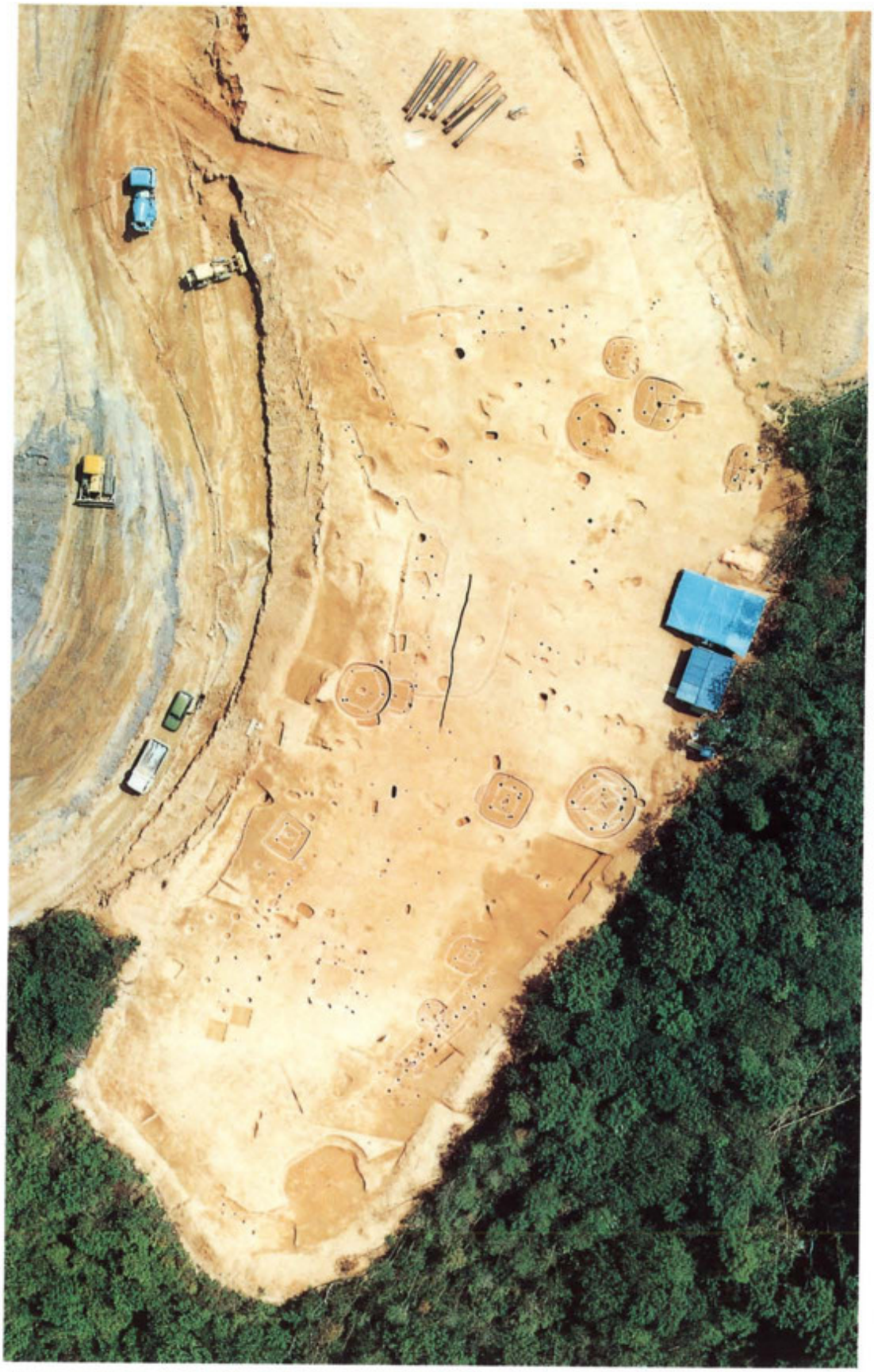
津山市教育委員会

西　吉　田　遺　跡

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第17集

1985

津山市教育委員会



B地区全景

土壙墓３玉類出土状況

土壙墓３出土玉類

土壙墓４土器出土状況

土壙墓３玉類出土状況

土壙墓３出土玉類

土壙墓４土器出土状況

序

西吉田遺跡は津山市土地開発公社による宅地造成事業に伴ない発掘調査された遺跡であります。当初は、あまり大規模な遺跡ではないだろうと予測されていましたが、発掘調査の結果、津山市内でも有数の弥生時代集落遺跡であることが判明いたしました。特にB地区においては、調査区域は遺跡のほぼ全域に相当するものと考えられ、集落遺跡の研究に貴重な資料を提供するものと期待しています。

当然のことながら、記録保存というのは発掘調査終了後は遺跡は消滅してしまうのが常でありますが、幸い原因者である津山市土地開発公社の御好意により、工事の設計変更をしていただき、A地区の西吉田1号墳だけは現状保存措置を取ることができました。

発掘調査が終了して2年、ここにようやく調査の成果を報告することができました。各位の御活用をいただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本報告書作成にいたるまで多大の御協力をいただいた津山市土地開発公社、並びに関係者各位に対し、厚く御礼申し上げる次第であります。

昭和60年3月30日

津山市教育委員会

教育長　福島祐一

例　　言

1．本書は津山市土地開発公社が計画した西吉田住宅団地造成に伴なう西吉田遺跡の発掘調査報告書である。

1．発掘調査経費はすべて原因者である津山市土地開発公社の負担によるものである。

1．発掘調査は津山市教育委員会社会教育課主事安川豊史、行田裕美が担当した。

1．遺構の実測には調査補助員光延稲造の協力を得た。

1．本書に用いたレベル高は海抜高である。また方位は磁北である。

1．本書では遺構配置図等に遺構の略称を用いている。略称名は次の通りである。
SH:住居址、SB:建物址、ST:段状遺構、SG:土壙墓、SK:土壙、SD:溝

1．本書第3図に使用した「西吉田遺跡と周辺主要遺跡分布図」は建設省国土地理院発行5万分の1（津山市東部）を複製したものである。

1．土壙墓の残存脂肪分析は帯広畜産大学中野益男助教授に依頼し「土壙墓に残存する脂肪の分析」の玉稿をいただいた。記して謝意を表します。

1．本書では原則として敬称を省略した。御容赦願いたい。

1．本書の執筆と編集は行田が担当したが、遺構・遺物のトレースと原稿浄書には飯田和江、写真の焼付には杉山紀子の協力を得た。

1．出土遺物、図面は津山市二宮埋蔵文化財整理事務所に保管している。

本 文 目 次

Ⅰ　立地と周辺の遺跡

1　遺跡の位置と立地 …… 1

2　西吉田遺跡と周辺の遺跡 …… 1

Ⅱ　調査の経過

1　調査に至る経過 …… 4

2　調査経過 …… 6

3　調査体制 …… 6

Ⅲ　調査の記録

A地区の記録 …… 7

1　建物址 …… 7

2　溝 …… 11

3　土壙 …… 11

4　土壙墓 …… 12

5　遺構に伴なわない遺物 …… 13

B地区の記録 …… 15

1　住居址 …… 16

2　建物址 …… 46

3　段状遺構 …… 51

4　土壙墓 …… 58

5　土壙 …… 70

6　溝 …… 76

7　遺構に伴なわない遺物 …… 76

Ⅳ　まとめ

1　各遺構の時期について …… 83

2　西吉田遺跡中期弥生土器編年について …… 84

3　西吉田遺跡の集落について …… 89

4　弥生時代中期土壙墓について …… 94

Ⅴ　土壙墓に残存する脂肪の分析 …… 中野益男　伊賀　啓 … 97

挿 図 目 次

第1図　西吉田遺跡位置図 …… 1
第2図　西吉田遺跡周辺地形図（S＝1：2,500） …… 2
第3図　西吉田遺跡と周辺主要遺跡分布図（S＝1：50,000） …… 3
第4図　西吉田遺跡地形測量図及びグリッド配置図（S＝1：1,000） …… 4、5
第5図　確認調査出土土器（S＝1：3） …… 7
第6図　西吉田1号墳地形測量図（S＝1：200） …… 8
第7図　A地区遺構配置図（S＝1：400） …… 9
第8図　建物址1平面・断面図（S＝1：80） …… 10
第9図　建物址1出土土器（S＝1：4） …… 10
第10図　建物址2平面・断面図（S＝1：80） …… 10
第11図　建物址3平面・断面図（S＝1：80） …… 11
第12図　溝1平面・断面図（S＝1：40） …… 11
第13図　溝1出土土器（S＝1：4） …… 11
第14図　焼土壙平面・断面図（S＝1：40） …… 12
第15図　土壙墓1平面・断面図（S＝1：20） …… 12
第16図　土壙墓2平面・断面図（S＝1：20） …… 13
第17図　遺構に伴なわない遺物(1)（S＝1：4） …… 13
第18図　遺構に伴なわない遺物(2)（S＝2：3） …… 14
第19図　B地区遺構配置図（S＝1：400） …… 14、15
第20図　表面採集土器（S＝1：4） …… 16
第21図　住居址1平面・断面図（S＝1：80） …… 17
第22図　住居址1出土土器（S＝1：4） …… 17
第23図　住居址2・13平面・断面図（S＝1：80） …… 18
第24図　住居址2出土土器（S＝1：4） …… 18
第25図　住居址2出土石器（S＝2：3） …… 18
第26図　住居址3平面・断面図（S＝1：80） …… 19
第27図　住居址3出土土器（S＝1：4） …… 20
第28図　住居址4平面・断面図（S＝1：80） …… 21
第29図　住居址4出土土器(1)（S＝1：4） …… 22
第30図　住居址4出土土器(2)（S＝1：4） …… 23
第31図　住居址4出土紡錘車（S＝2：3） …… 24

第32図　住居址４出土石器（S＝2：3）…… 25
第33図　住居址５平面・断面図（S＝1：80）…… 26
第34図　住居址５出土土器(1)（S＝1：4）…… 28
第35図　住居址５出土土器(2)（S＝1：4）…… 29
第36図　住居址５出土土器(3)（S＝1：4）…… 30
第37図　住居址５出土土器(4)（S＝1：4）…… 31
第38図　住居址５出土石器（S＝2：3）…… 32
第39図　住居址６平面・断面図（S＝1：80）…… 33
第40図　住居址６出土土器（S＝1：4）…… 34
第41図　住居址６出土石器（S＝2：3）…… 34
第42図　住居址７・８平面・断面図（S＝1：80）…… 35
第43図　住居址７出土土器（S＝1：4）…… 36
第44図　住居址７出土石器（S＝2：3）…… 36
第45図　住居址８出土土器（S＝1：4）…… 37
第46図　住居址９平面・断面図（S＝1：80）…… 37
第47図　住居址９出土土器（S＝1：4）…… 38
第48図　住居址10平面・断面図（S＝1：80）…… 39
第49図　住居址10出土土器（S＝1：4）…… 40
第50図　住居址10出土石器・鉄器（S＝2：3）…… 41
第51図　住居址11平面・断面図（S＝1：80）…… 41
第52図　住居址11出土土器（S＝1：4）…… 42
第53図　住居址11出土石器（S＝2：3）…… 43
第54図　住居址12、段状遺構６平面・断面図（S＝1：80）…… 44
第55図　住居址12出土土器（S＝1：4）…… 45
第56図　住居址14、建物址３平面・断面図（S＝1：80）…… 46
第57図　建物址１平面・断面図（S＝1：80）…… 47
第58図　建物址１出土土器（S＝1：4）…… 47
第59図　建物址２平面・断面図（S＝1：80）…… 48
第60図　建物址２出土土器（S＝1：4）…… 48
第61図　建物址３出土土器（S＝1：4）…… 49
第62図　建物址４平面・断面図（S＝1：80）…… 49
第63図　建物址５・６平面・断面図（S＝1：80）…… 50
第64図　段状遺構１平面・断面図（S＝1：80）…… 51

第65図　段状遺構1出土土器（S＝1：4）…… 51
第66図　段状遺構2平面・断面図（S＝1：80）…… 52
第67図　段状遺構2出土土器（S＝1：4）…… 52
第68図　段状遺構3平面・断面図（S＝1：80）…… 53
第69図　段状遺構3出土土器（S＝1：4）…… 53
第70図　段状遺構3出土石器（S＝2：3）…… 53
第71図　段状遺構4平面・断面図（S＝1：80）…… 54
第72図　段状遺構4出土土器（S＝1：4）…… 55
第73図　段状遺構5平面・断面図（S＝1：80）…… 56
第74図　段状遺構5出土土器（S＝1：4）…… 57
第75図　段状遺構6出土土器（S＝1：4）…… 58
第76図　土壙墓1遺物出土状態平面・断面図（S＝1：20）…… 58
第77図　土壙墓1出土土器（1 S＝1：3、2・3 S＝1：4）…… 59
第78図　土壙墓2平面・断面図（S＝1：20）…… 60
第79図　土壙墓3平面・断面図（S＝1：20）…… 60
第80図　土壙墓3遺物出土状態（S＝1：4）…… 61
第81図　土壙墓3出土土器（S＝1：4）…… 61
第82図　土壙墓3出土石器、玉類（S＝2：3）…… 61
第83図　土壙墓4遺物出土状態平面・断面図（S＝1：20）…… 62
第84図　土壙墓4出土土器(1)（S＝1：4）…… 64
第85図　土壙墓4出土土器(2)（S＝1：4）…… 65
第86図　土壙墓4出土土器(3)（S＝1：4）…… 66
第87図　土壙墓4出土石器（S＝2：3）…… 67
第88図　土壙墓5平面・断面図（S＝1：20）…… 67
第89図　土壙墓6遺物出土状態平面・断面図（S＝1：20）…… 68
第90図　土壙墓6出土土器（S＝1：5）…… 69
第91図　土壙墓7遺物出土状態平面・断面図（S＝1：20）…… 69
第92図　土壙墓7出土土器（S＝1：3）…… 70
第93図　土壙1平面・断面図（S＝1：40）…… 70
第94図　土壙1出土土器（S＝1：4）…… 70
第95図　土壙2平面・断面図（S＝1：40）…… 70
第96図　土壙2出土土器（S＝1：4）…… 71
第97図　土壙3平面・断面図（S＝1：40）…… 71

第98図　土壙３出土石器（S＝2：3）…… 72
第99図　土壙４平面・断面図（S＝1：40）…… 72
第100図　土壙４出土土器（S＝1：4）…… 72
第101図　土壙５平面・断面図（S＝1：40）…… 72
第102図　土壙５出土土器（S＝1：4）…… 72
第103図　土壙５出土石器（S＝2：3）…… 73
第104図　土壙６平面・断面図（S＝1：40）…… 73
第105図　土壙７平面・断面図（S＝1：40）…… 73
第106図　土壙８・14平面・断面図（S＝1：40）…… 73
第107図　土壙９平面・断面図（S＝1：40）…… 74
第108図　土壙10平面・断面図（S＝1：40）…… 74
第109図　土壙11平面・断面図（S＝1：40）…… 74
第110図　土壙11出土土器（S＝1：4）…… 74
第111図　土壙12平面・断面図（S＝1：40）…… 75
第112図　土壙13平面・断面図（S＝1：40）…… 75
第113図　土壙15平面・断面図（S＝1：40）…… 75
第114図　土壙15出土土器（S＝1：4）…… 76
第115図　土壙16平面・断面図（S＝1：40）…… 76
第116図　遺構に伴なわない遺物(1)（S＝1：4）…… 77
第117図　遺構に伴なわない遺物(2)（S＝1：4）…… 78
第118図　遺構に伴なわない遺物(3)（S＝1：4）…… 79
第119図　遺構に伴なわない遺物(4)（S＝1：4）…… 80
第120図　遺構に伴なわない遺物(5)（1～7 S＝2：3、8 S＝1：2）…… 81
第121図　B地区弥生時代中期遺構配置図（S＝1：400）…… 83
第122図　押入西遺跡 6・7号住居址、住居址10・11平面図（S＝1：200）…… 85
第123図　住居址１・３・４居住空間復元平面模式図（S＝1：200）…… 86
第124図　西吉田遺跡中期弥生土器編年表（S＝1：8）…… 87
第125図　B地区弥生時代中期住居址時期別配置図（S＝1：800）…… 91
第126図　B地区弥生時代後期住居址配置図（S＝1：800）…… 92
第127図　金井別所遺跡２号住居址出土土器（S＝1：4）…… 93
第128図　西吉田遺跡土壙墓３・４・６土壌試料採取地点（S＝1：30）…… 97
第129図　アモウラ遺跡土壙墓（SK 211）土壌試料採取地点（S＝1：30）…… 98
第130図　西吉田遺跡土壙墓内に残存する脂肪の脂肪酸組成 …… 99

第131図 アモウラ遺跡土壙内に残存する脂肪の脂肪酸組成 …… 99
第132図 土壙墓内外に残存するステロール組成 …… 100
第133図 土壙墓内に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図 …… 101
第134図 土壙墓内外に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関 …… 101

図 版 目 次

図版１ Ａ地区－１　建物址（西から）
２　焼土壙（西から）
図版２－１　土壙墓１（南から）
２　土壙墓２（南から）
Ｂ地区－３　Ｂ地区遠景（Ａ地区から）
図版３－１　住居址１（南から）
２　住居址１中央穴断面（東から）
図版４－１　住居址２・13（東から）
２　住居址３（東から）
図版５－１　住居址４（南から）
２　住居址１・３・４（西から）
図版６－１　住居址５（南から）
２　住居址６（南から）
図版７－１　住居址７・８（北から）
２　住居址９（北から）
図版８－１　住居址10（南から）
２　住居址11（南から）
図版９－１　住居址12（西から）
２　建物址１（南から）
図版10－１　建物址２（南から）
２　建物址３、住居址14（東から）
図版11－１　建物址４（東から）
２　建物址５・６（東から）
図版12－１　段状遺構１（西から）
２　段状遺構２（西から）
図版13－１　段状遺構３（南から）
２　段状遺構４、土壙15（東から）
図版14－１　段状遺構５（東から）
２　段状遺構６（南から）
図版15－１　土壙墓１（南から）
２　土壙墓２・３（東から）
図版16－１　土壙墓４（北から）
２　土壙墓６（西から）
３　土壙墓７（西から）
図版17－１　土壙12（南から）
２　土壙13（東から）
３　土壙14（北から）
４　土壙15（北から）
図版18　出土遺物(1)
図版19　出土遺物(2)
図版20　出土遺物(3)
図版21　出土遺物(4)
図版22　出土遺物(5)
図版23　出土遺物(6)
図版24　出土遺物(7)
図版25　出土遺物(8)

Ⅰ　立地と周辺の遺跡

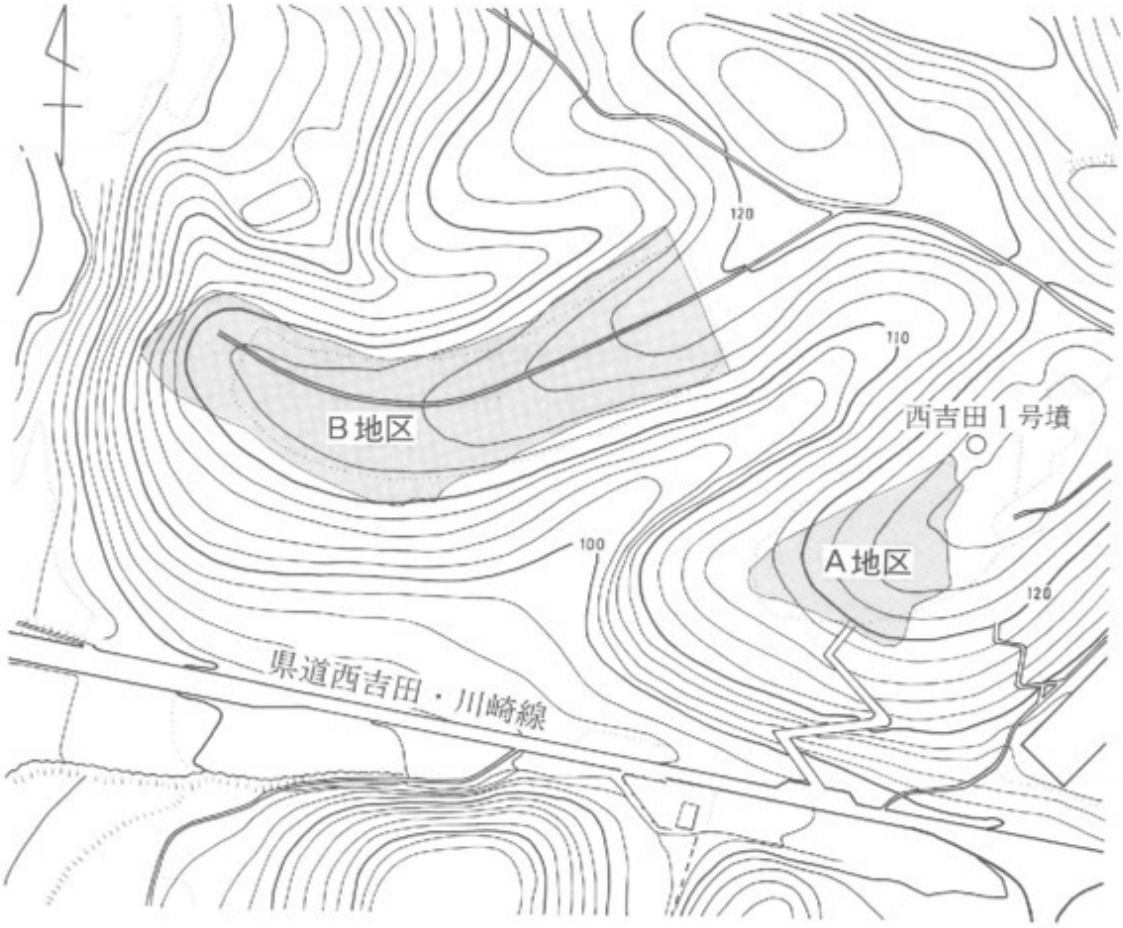
1　遺跡の位置と立地（第２・４図）

西吉田遺跡は岡山県津山市西吉田字成幸 580 -1番地他に所在する。津山市街地を東西に流れる吉井川は津山市川崎付近で流路を大きく変え南下する。この流れに沿って国道53号線から分岐するのが県道西吉田・川崎線である。加茂川を渡り、日上の集落に入る手前を東に進むと畝山古墳群、天王山古墳の位置する独立丘陵を経て、美作国分尼寺跡の位置する人神へと出る。そして、美作国分寺跡の位置する国分寺へと通ずる。さらに、観音山から南に派生した低丘陵を横断し広戸川を通過すると北側にかなり急傾斜の丘陵が位置する。遺跡はこの丘陵上に立地する。この丘陵は頂部から樹枝状に派生した丘陵に相当し、遺跡はその先端部に位置する。この傾向は、他の丘陵遺跡にも同様の事が指摘できるようであり、あまり奥まった場所には立地しないようである。丘陵間の谷部には奥深くまで谷水田が開拓されている。遺跡はＡ地区とＢ地区の２丘陵に分かれる。両者とも県道から望むとかなり急傾斜の丘陵に感じられるが、頂部に立つとなだらかな地形を呈している。平野部との比高差はＡ地区約30m 、Ｂ地区約20m を測る。

2　西吉田遺跡と周辺の遺跡（第３図）

津山市内における集落遺跡の歴史的環境にふれる際、今日までの所見によると弥生時代中期後半以降という時期区分が妥当であるようである。それ以前に目を向けても遺物だけの断片的資料であり、多くを語れるものではない。例えば、先土器時代では天神原遺跡（註１）、押入西遺跡（註２）でそれぞれナイフ形石器が１点ずつ出土しているだけである。縄文時代についても同様である。東蔵坊遺跡（註３）、京免遺跡（註４）、その他若干の遺跡（註５）で土器片が出土しているだけである。弥生時代前期、中期前半についても遺物の量としては先土器、縄文時代に比

第１図　西吉田遺跡位置図



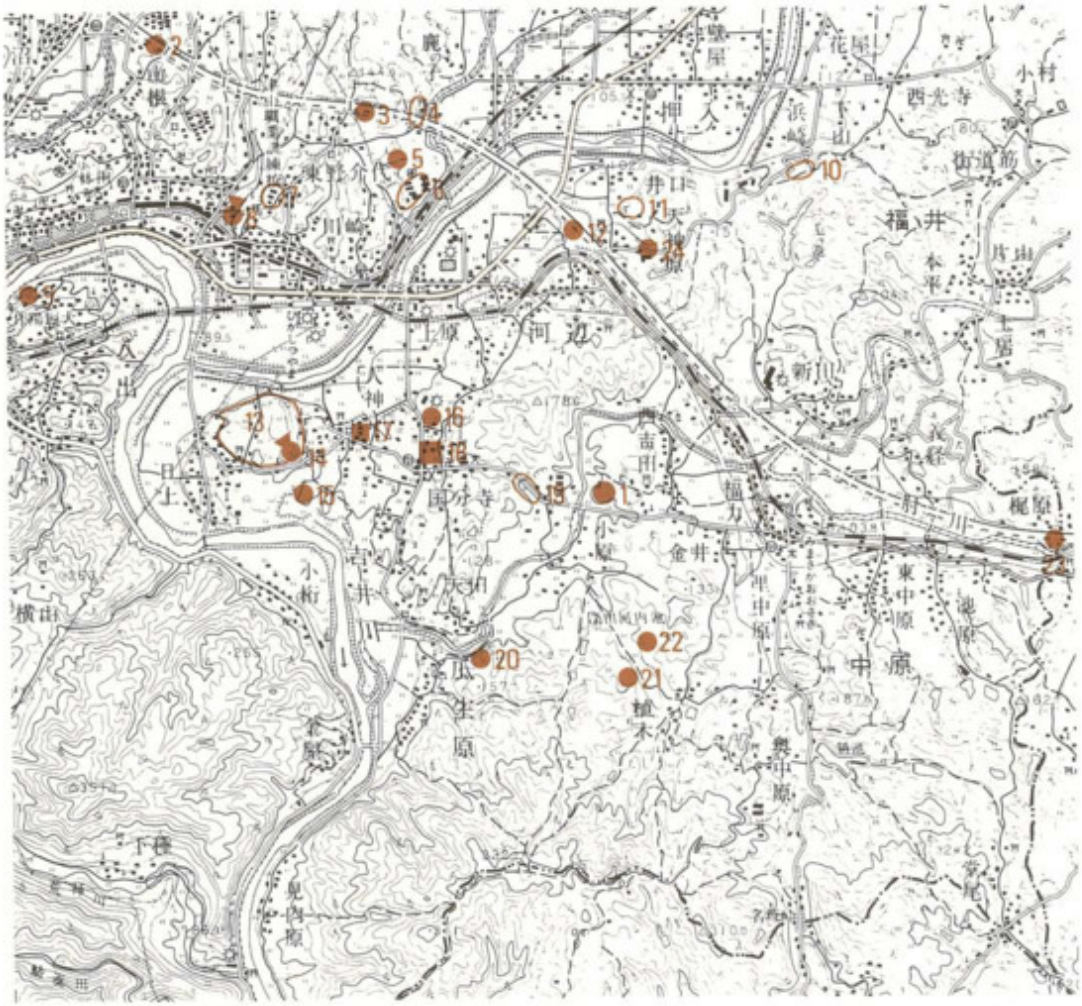
第２図　西吉田遺跡周辺地形図（S＝1：2,500）

べて増加はするものの、生活痕跡としての遺構は今だ明らかでない。弥生時代中期後半になると遺跡数は急激に増加し（註６）、その立地は西吉田遺跡にみられるように丘陵部に位置することが多い。後期には中期後半から継続して営なまれる遺跡（註７）と新しく後期になって営なまれる遺跡（註８）の２類型が認められるようである。古墳時代には多数の古墳が築造され、奈良時代に入ると国分寺、国分尼寺が創建されるものの集落の実態についてはほとんど把握されていないのが現状である。

さて、西吉田遺跡周辺の弥生時代遺跡を概観しよう。加茂川、吉井川以東の弥生時代遺跡は現在までのところ非常に少ない。これは開発に伴なう発掘調査件数の密度にもよるものと考えられるが、発掘調査例としては前述の天神原遺跡、金井別所遺跡（註９）、岡田遺跡（註10）など数例があげられるにすぎない。他に、近々津山中核工業団地建設が予定されている西吉田遺跡のすぐ南の丘陵からも中期から後期にかけての遺跡が確認されており、その数は除々に増加するものと考えられる。

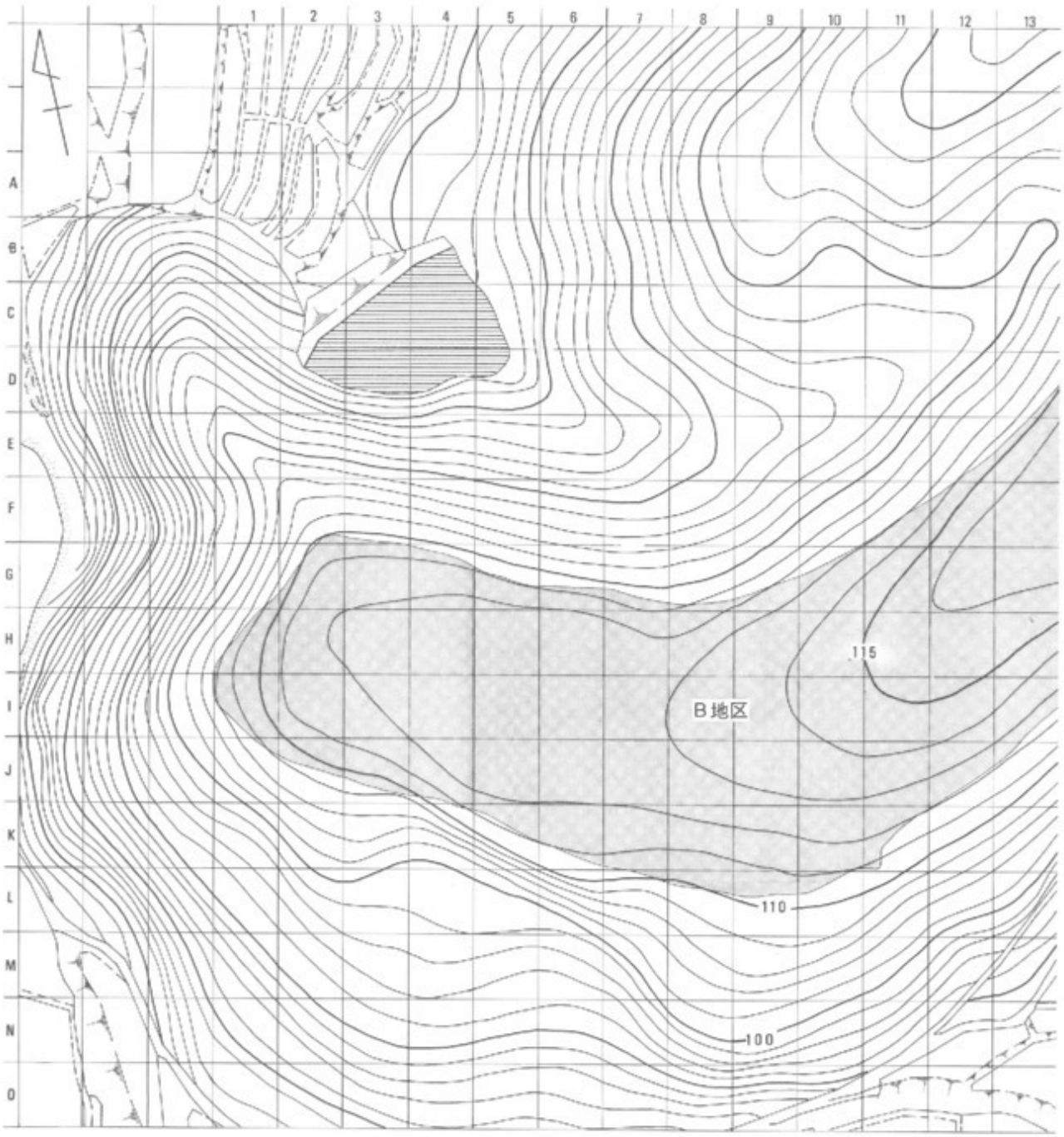
（註１）　河本　清、橋本惣司、下沢公明、柳瀬昭彦　「天神原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告７』岡山県教育委員会1975年

（註２）　湊　哲夫、安川豊史、行田裕美　『押入西遺跡』『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第14集』津山市教育委員会1983年
（註３）　安川豊史　『東蔵坊遺跡Ｂ地区発掘調査報告』『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第９集』津山市教育委員会1981年
（註４）　中山俊紀　『京免・竹ノ下遺跡』『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第11集』津山市教育委員会1982年
（註５）　六田遺跡、北山遺跡などがある。
（註６）　沼遺跡、沼Ｅ遺跡、野介代遺跡、押入西遺跡、紫保井遺跡、東蔵坊遺跡、鮒込遺跡、ビシャコ谷遺跡などがある。
（註７）　京免遺跡、竹ノ下遺跡に代表される。
（註８）　大田十二社遺跡、天神原遺跡に代表される。
（註９）　1975年～76年にかけて中国電力㈱新津山変電所文化財発掘調査委員会が発掘調査を実施。報告書未完
（註10）　1971年津山市教育委員会が発掘調査を実施。報告書未完



1　西吉田遺跡
2　野介代遺跡
3　押入西遺跡
4　押入飯網神社古墳群
5　狐塚遺跡
6　能満寺古墳群
7　六ツ塚古墳群
8　玉淋大塚古墳
9　覗山遺跡
10　三毛ケ池古墳群
11　車塚古墳群
12　天神原遺跡
13　畝山古墳群
14　天王山古墳
15　和田古墳
16　飯塚古墳
17　美作国分尼寺跡
18　美作国分寺跡
19　長畝山古墳群
20　隠里古墳
21　クズレ塚古墳
22　金井別所遺跡
23　梶原遺跡
24　岡田遺跡

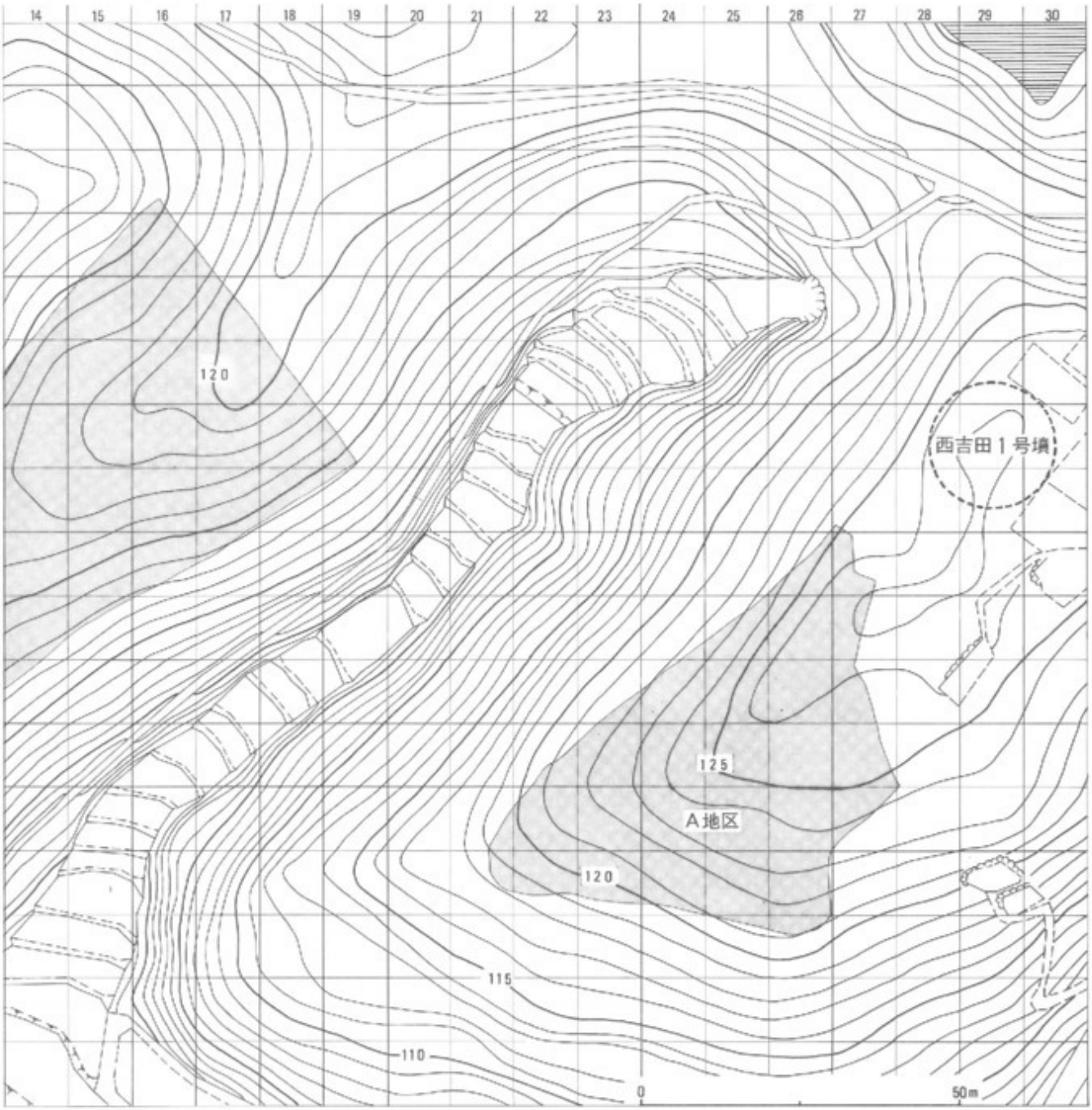
第３図　西吉田遺跡と周辺主要遺跡分布図（Ｓ＝１:50,000）



Ⅱ　調査の経過

1　調査に至る経過

昭和56年８月11日付津山開発公社第28号により津山市土地開発公社から津山市教育委員会あ



第４図　西吉田遺跡地形測量図及びグリッド配置図（Ｓ＝１：1,000）

てに津山市西吉田地内に宅地造成事業を計画している旨、埋蔵文化財有無の確認調査を実施してほしいとの内容の依頼書が提出された。これを受け教育委員会としてはまず分布調査を実施することにした。この時、弥生土器数点を採集し、また同時に古墳１基の存在も確認した。このことから確認調査は遺跡の有無の確認調査から遺跡の規模、範囲の確認調査へと必然的に変

わった。従って、確認調査の費用も津山市土地開発公社が負担することになった。

2　調査経過

確認調査は昭和56年10月19日～11月４日まで実施した。調査は幅約２ｍのトレンチを丘陵稜線に直交するように約10m間隔で実施した。トレンチの総面積は614㎡である。この結果遺跡は２つの丘陵にまたがることが確認され、東側の丘陵をＡ地区、西側の丘陵をＢ地区と呼称することにした。確認調査で確認した遺構はＡ地区では溝１、ピット３、Ｂ地区では住居址６、溝１、ピット59である。遺物は弥生時代中期～平安時代にまでわたる広い時期を示していた。

本調査は造成工事の工程上Ａ地区から実施することになり、昭和57年１月18日から着手した。尚、表土剥ぎは事前にユンボを借り上げＡ地区Ｂ地区とも終了させておいたので直接遺構検出作業から入ることができた。グリッドは地形測量用基準クイを基準に10mグリットを設定した。Ａ地区は当初予想していたより遺構が少なく、３月30日に調査を終了した。この間分布調査で確認した古墳（西吉田１号墳と命名）の地形測量図を作製した。この古墳は工事主体者である津山市土地開発公社と協議した結果、設計変更し現状保存することに決定した。

Ｂ地区は昭和57年４月５日から着手した。グリットはＡ地区と共有するグリッドを設定した。調査は丘陵の奥部より着手し、漸次先端部へと進む工程をとった。やはり、造成工事の工程上の考慮からである。本遺跡は地山の土色と埋土の土色が非常に類似しており、遺構の検出には非常に悩まされた。このため遺構検出の見落しがあることを危惧する。すなわち、弥生時代建物址柱穴内には土器を投棄したような状況が再々確認されている。このような土器を包含した柱穴が数個検出されたにもかかわらず、前述の理由により建物址にならなかったことが指摘されるのである。従って、建物址が１ないし２軒増加する可能性のあることを指摘しておきたい。調査期間中比較的天候に恵まれ９月23日には現場作業を終了した。

この間７月10日には勝北町文化財保護委員会、８月20日には地元西吉田地区子供会、９月８日には河辺小学校生徒の案内をすると共に、９月４日には現地説明会を開催している。

3　調査体制

発掘調査は津山市教育委員会が主体となり実施した。調査体制は下記の通りである。

発掘調査主体　津山市教育委員会	教育長	福島祐一
	教育次長	尾島正敏→山本峯雄→藤田公男
	社会教育課長	須江尚志→内田康雄
	文化係長	森元弘之→親山三千穂
	嘱　託	杉山紀子
調査担当	主　事	安川豊史（Ａ地区担当）

調査担当	主　事	行田裕美（B地区担当）
	補助員	光延稲造
整理担当	主　事	行田裕美
	整理技術員	H笠月子・杉山紀子・飯田和江
	整理員	斉藤純子

調査作業員　安藤悦子・安藤敬子・安藤美雪・稲垣　東・稲垣俊之・稲垣光男・稲垣幹子
金崎　正・神崎君江・神崎千鶴・近藤　悟・須江春夫・中矢　立・早瀬友宏
村瀬　隆・山本須磨子

なお、発掘調査及び報告書の作成にあたっては、下記の方々の御協力、御教示をいただいた。記してあつく感謝の意を表したい。

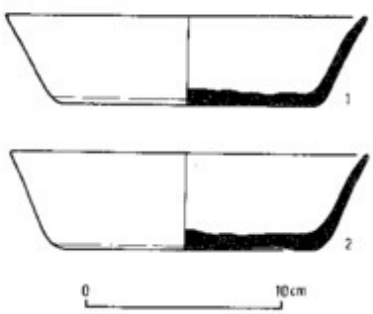
浅野克己・伊藤　晃・岩本正二・植月荘介・鎌木義昌・神原英郎・国貞圭也・葛原克人・河本　清・小谷善守・近藤義郎・高畑知功・竹久順一・田中　琢・土居　徹・中山俊紀・平井勝・湊　哲夫・宮本祥郎・宗森英之・本村豪章・森田友子・藤田憲司・柳瀬昭彦

Ⅲ　調査の記録

A地区の記録

確認調査出土土器（第5図）

確認調査で出土した土器は図示した須恵器2点だけである。両者とも完形で底部を下に向け並んだ状態で出土した。伴出遺物は全くない。灰白色を呈す軟質土器であり、底部はいずれも回転ヘラ切りである。単独で出土し、遺構不明である。



第5図　確認調査出土土器（S＝1：3）

西吉田1号墳（第6図）

A地区の丘陵頂部に位置する径20mを測る円墳である。高さは約1.5mを測る。頂部には径約4mの盗掘孔が認められる。伴出遺物は全くなく時期不明。尚、本古墳は現状保存されている。

1　建物址

建物址1（第8図）

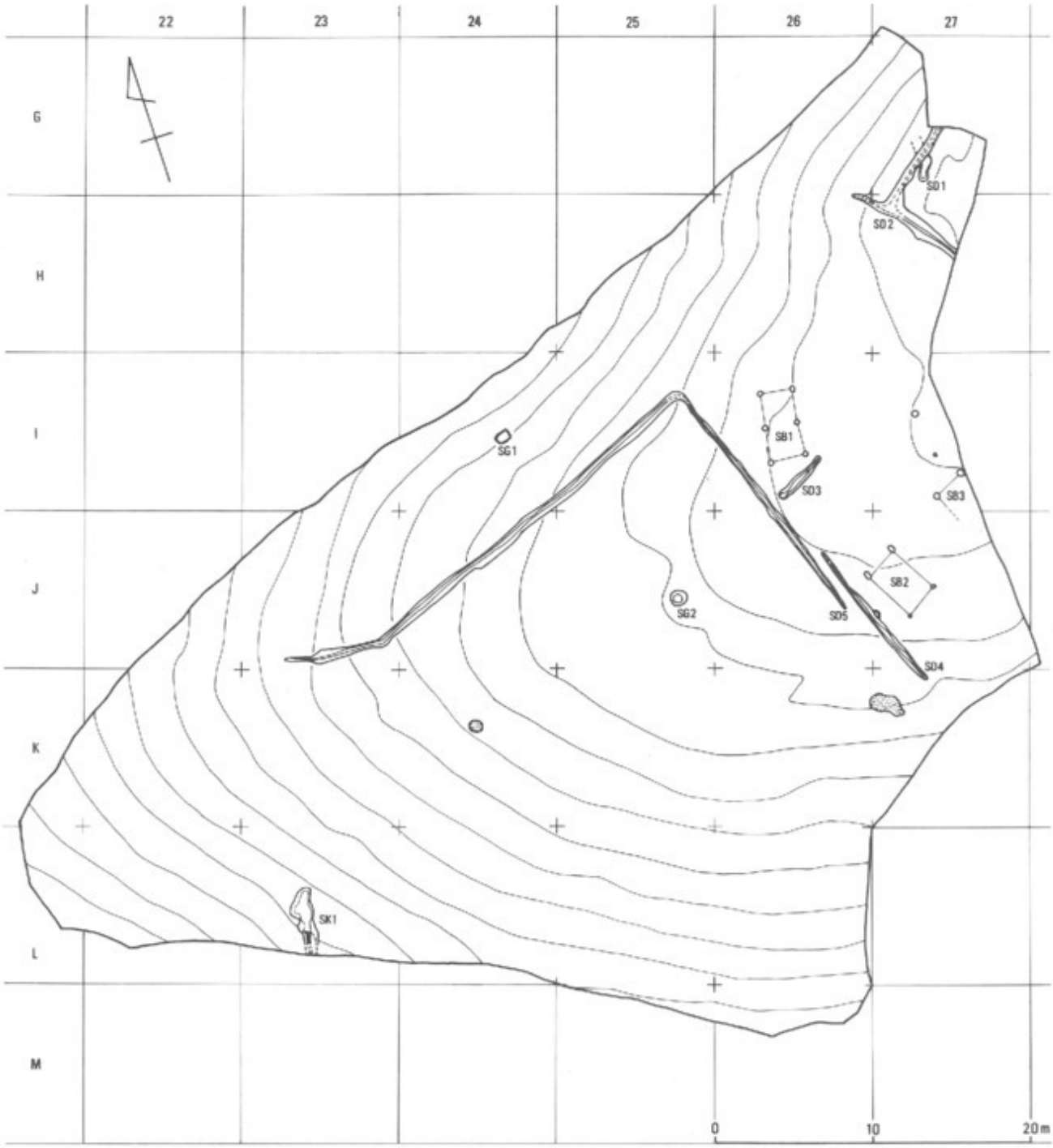
調査区頂部中央に位置する1間×2間の建物である。柱穴の規模・底面のレベルはほぼ同一

第6図　西吉田1号墳地形測量図（S＝1：200）

である。掘行方向はほぼ等高線走向に平行する。P-1、P-2より若干の土器片が出土した。

建物址1出土土器（第9図）

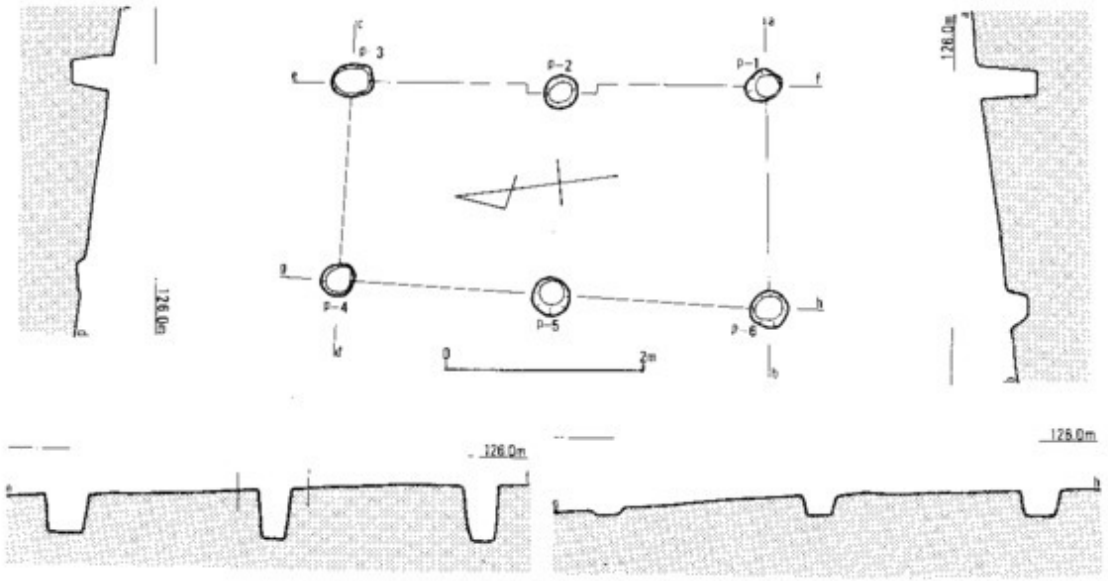
1・2はP-1、3～5はP-2から出土した。1は壺形土器、2は甕形土器口縁部である。3は鉢形土器である。台付の可能性もある。外面は縦方向のハケ目、内面はヘラ削り仕上げである。4・5は高杯形土器である。いずれも遺存状態が極めて悪い。弥生時代中期の土器の混入が認められるが、建物の時期は後期であると考えられる。



第7図　A地区遺構配置図（S＝1：400）

建物址2（第10図）

調査区頂部南側に位置する1間×1間の建物である。桁行3.5m、梁間2.3mを測る。P-1はP-5、P-2はP-6とそれぞれ重複している。切り合いの新旧関係はP-1の柱痕跡が示すようにP-1、P-2が新しい。P-5、P-6をP-1、P-2に新設したものと考えられる。遺物は出土し

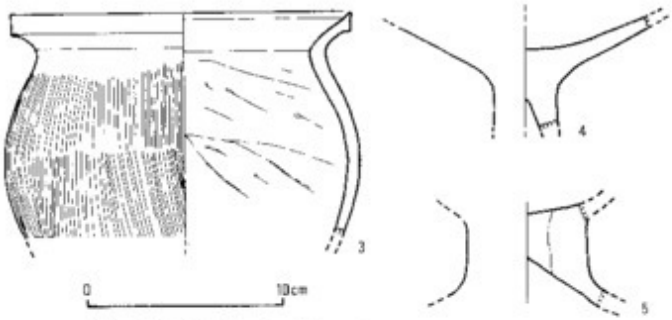


第８図　建物址１平面・断面図（S＝1:80）

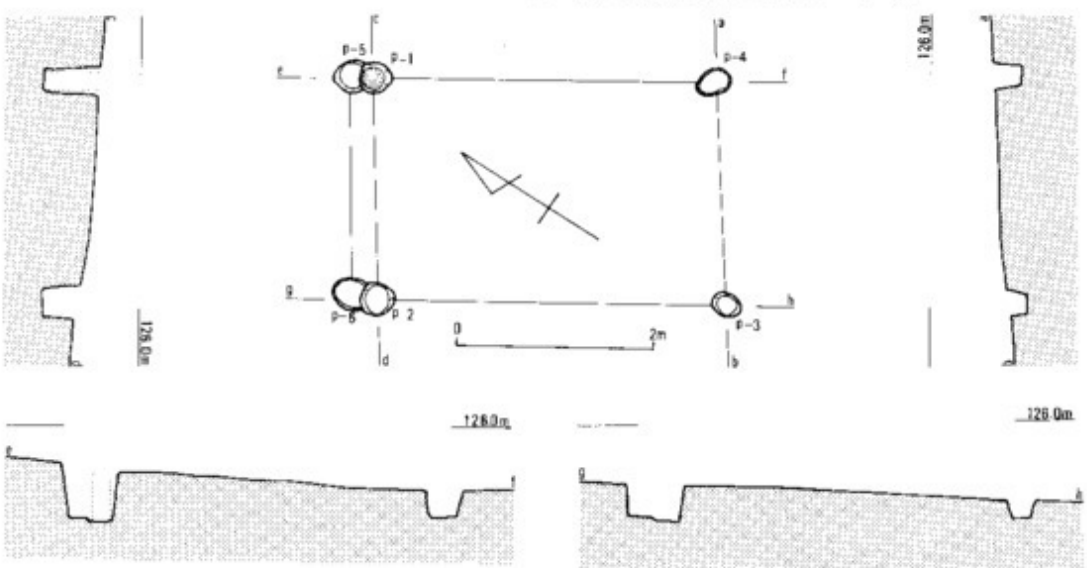
なかった。

建物址３（第11図）

調査区東端に位置する。東半は調査区域外にあたる。P-1、P-2の2個の柱穴しか検出できなかったが、建物址になると考えられる。P-1には柱痕跡が認められた。P-1

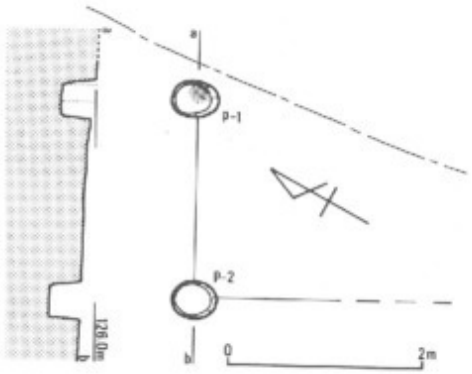


第９図　建物址１出土土器（S＝1:4）



第10図　建物址２平面・断面図（S＝1:80）

P－2間は2.1ｍを測る。遺物は出土しなかった。

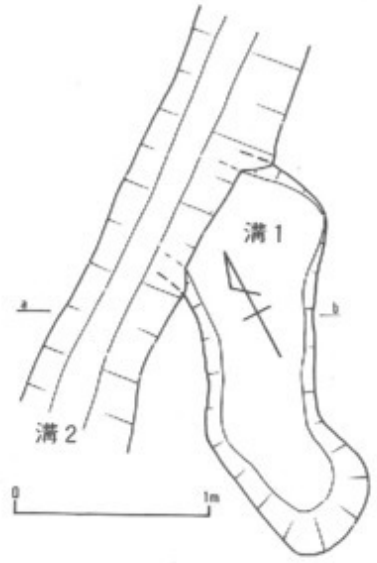


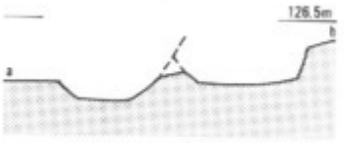
第11図　建物址３平面・断面図（Ｓ＝1：80）

2　溝

溝１（第12図）

調査区北東部に位置する。北側は溝２に切られている。現存部長さ約４ｍ、幅約1.1ｍを測る。深さは約30cmを測る。埋土中より若干量の土器が出土した。

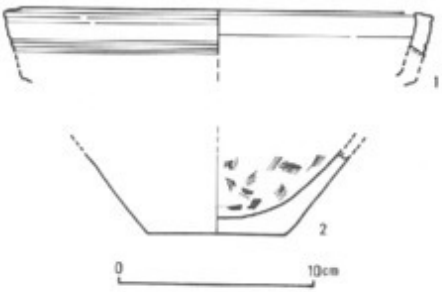




第12図　溝１平面・断面図（Ｓ＝1：40）

溝１出土土器（第13図）

１は高杯形土器口縁部である。外面残存部には２条の凹線文がめぐる。暗赤褐色を呈し、遺存状態は極めて悪い。２は壺形土器底部と考えられる。内面には多方向にわたりハケ目が観察される。弥生時代中期と考えられる。



第13図　溝１出土土器（Ｓ＝1：4）

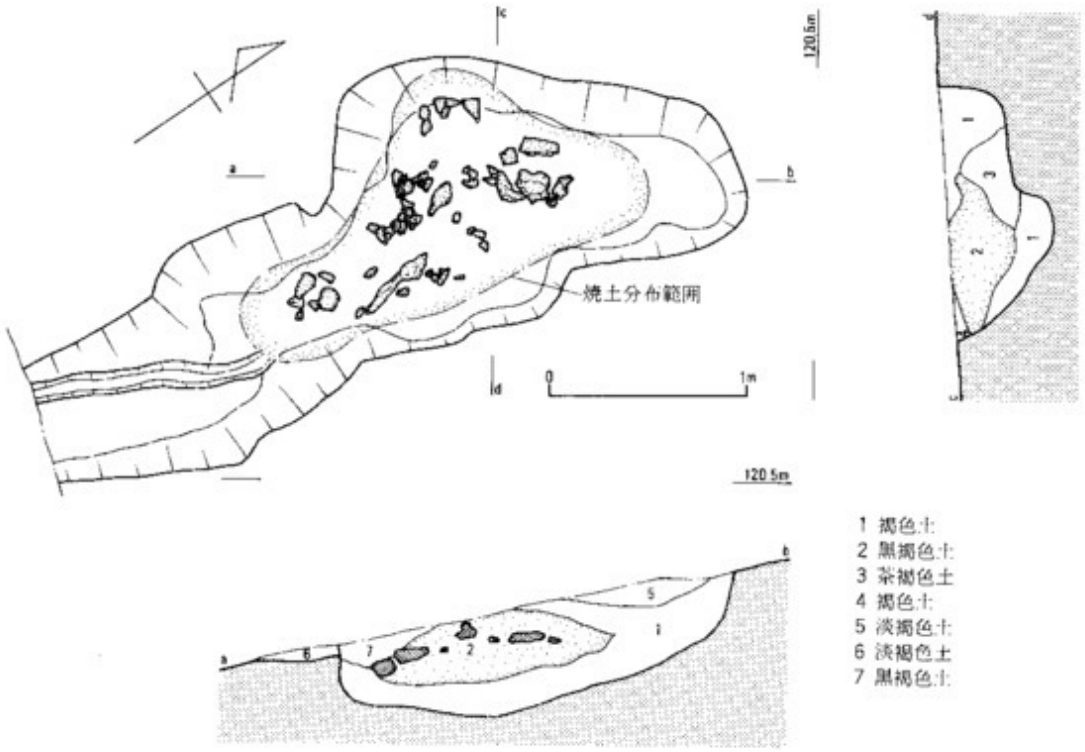
溝２～５（第７図）

溝２は溝１を切り、「Ｔ」字形を呈す。東端、南端は調査区域外に延びている。溝３は建物址１の南に位置する。長さは約3.5ｍを測る。溝４は建物址２の西側に平行して位置する。長さは10.5ｍを測る。溝５は溝４に平行して位置し、Ⅰ-25区で直角に西に曲がる。総延長は47.5ｍを測る。いずれの溝も幅約50cmを測り、現地表面から掘り込まれている。埋土中には弥生土器が数点含まれているが、埋土はボソボソの土であり現代の溝と考えられる。

3　土壙

焼土壙（第14図）

調査区南西部斜面に位置する。不整形のピットを掘り込みその中に厚さ約20cm程度土を敷き炉状の遺構を構築したものと考えられる。焼土及び炭の分布範囲はそのピット内２×11ｍの広がりをもち、焼土層中には炉壁状のものが存在する。炉壁状のものはいずれも挙大に破壊されており、原位置をとどめると考えられるものはない。炉壁状の焼土塊は厚さ4～5cmで壁面はか



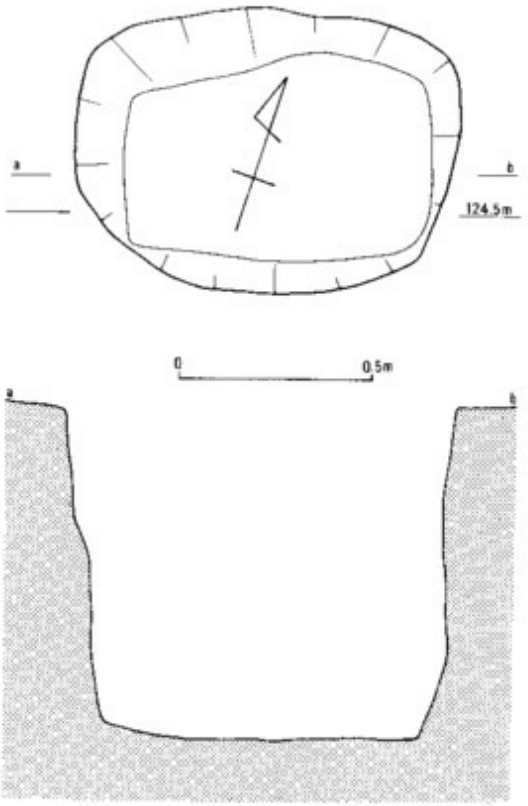
第14図　焼土壙平面・断面図（S＝1：40）

たく焼けしまり、灰～淡黄色を呈す。その外側は黒く、またその外は赤褐色に焼けている。これらの状況から粘土を張って構築したものと考えられる。壁面がかなりカーブをもつものとみられるが、構造は不明である。ピット底部から斜面下方に延びる溝状の落ち込みが認められるが排湿装置と考えられる。木炭片以外には遺物は全く出土しなかった。従って時期は不明である。本遺構は炉の可能性もあるが、壁面が全く焼けてないことから土壙に分類した。

4　土壙墓

土壙墓1（第15図）

調査区北側斜面部に位置する。長辺約1m、短辺約70cm、深さ約80cmを測る方形の土壙である。遺物は出土しなかった。



第15図　土壙墓1平面・断面図（S＝1：20）

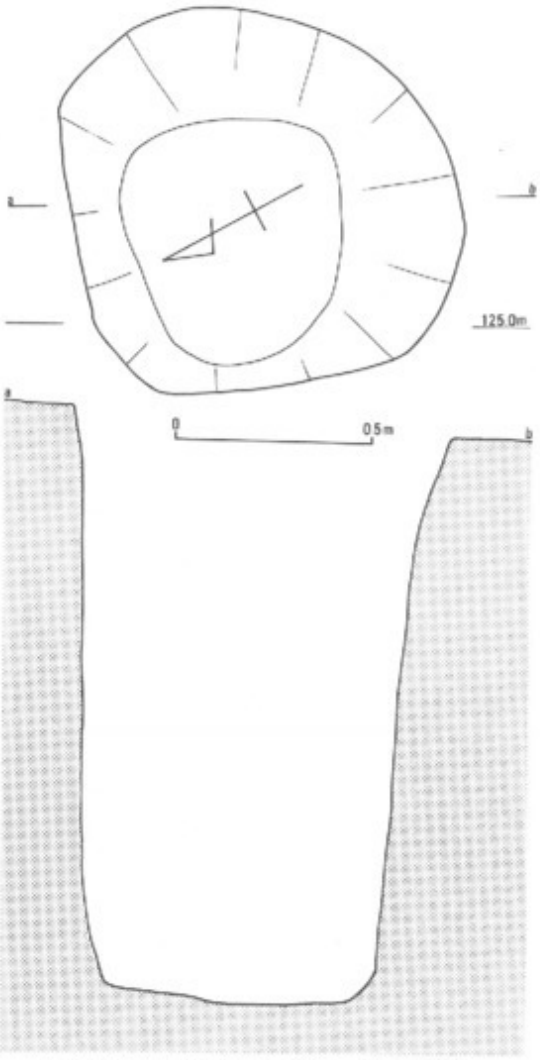
土壙墓２（第16図）

調査区ほぼ中央部に位置する。径約１ｍ、深さ約1.5ｍを測る円形土壙である。サヌカイト製石鏃１点（第18図３）が出土しただけである。凹基式石鏃で先端部を欠失している。風化がやや進行している。土壙墓１・２とも時期は不明である。形態からみて、土壙墓に分類した。

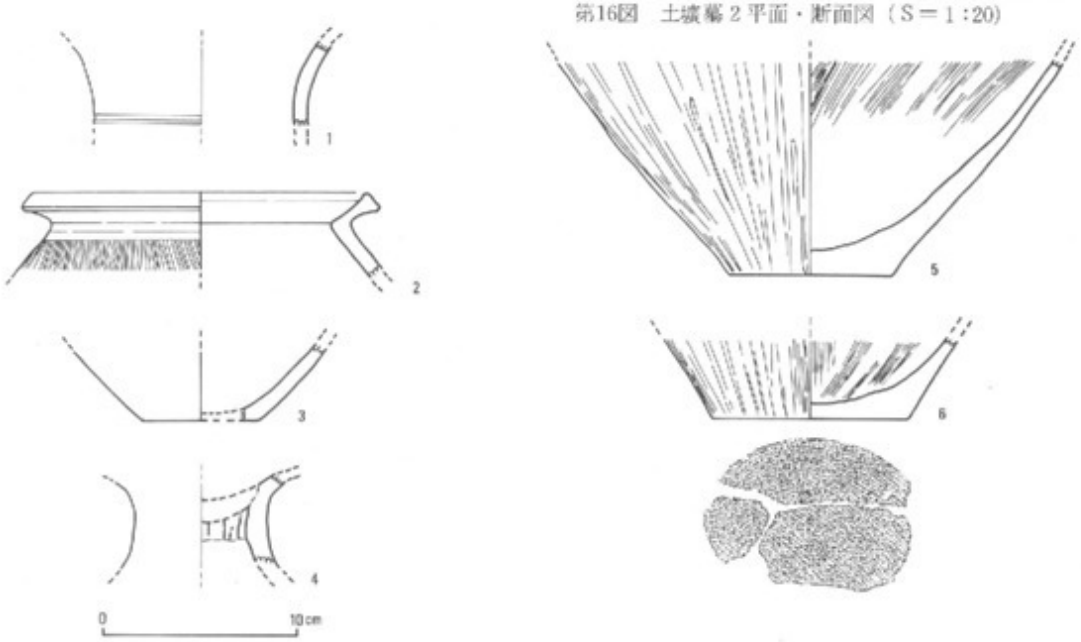
5　遺構に伴なわない遺物

土器（第17図）

遺構に伴なわない遺物が若干量出土している。完形品はなくいずれも破片である。１は壺形土器頸部である。残存部には１条の凹線文が観察される。２は甕形土器口縁部である。３・５・６は壺形土器、あるいは甕形土器の底部である。６の底面はハケ目仕上げであり、珍しい資料である。４は高杯形土器脚部上位である。内面にはしぼり痕跡が認められる。



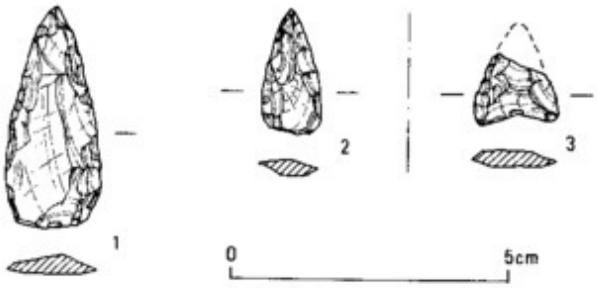
第16図　土壙墓２平面・断面図（Ｓ＝１:20）



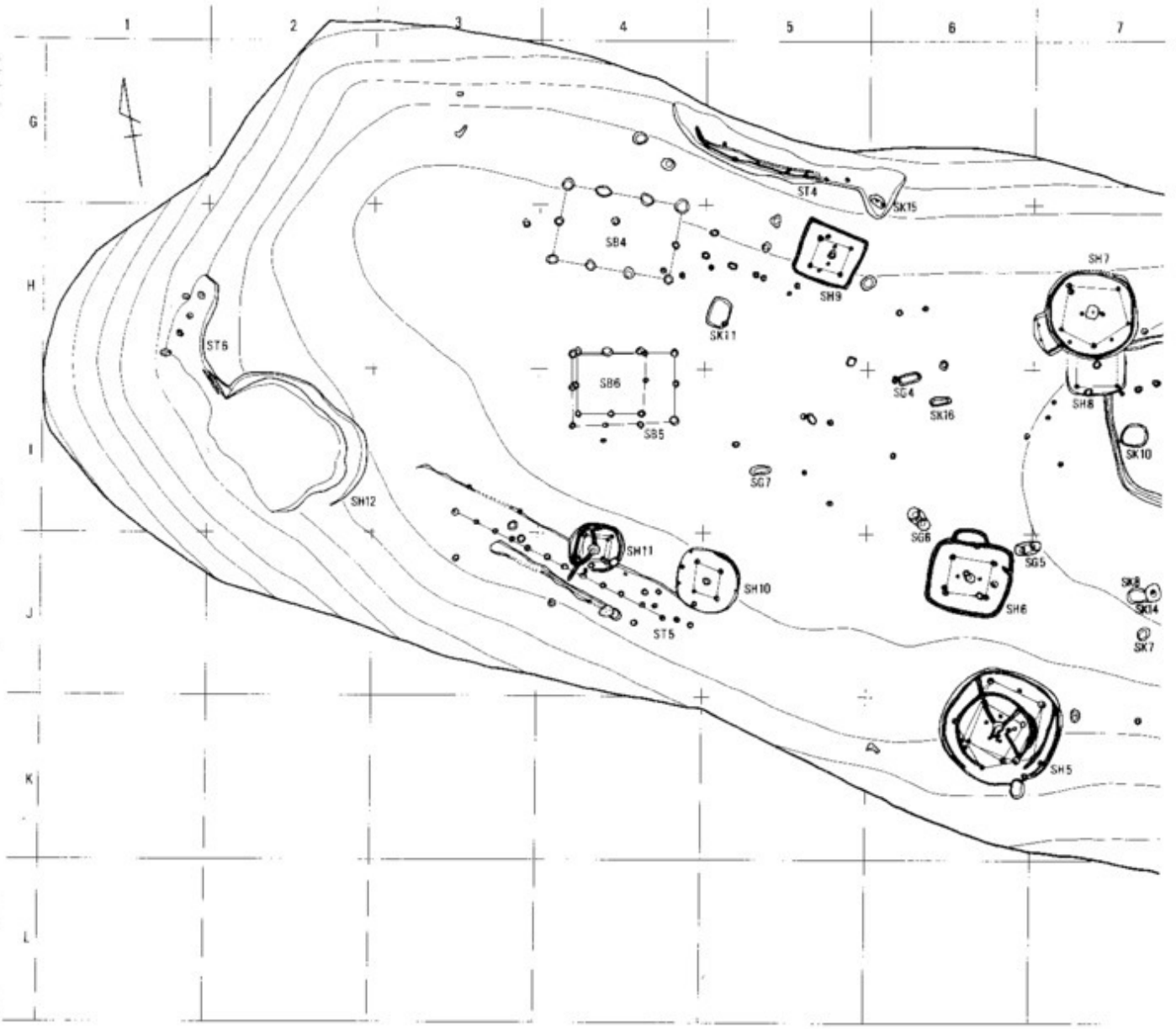
第17図　遺構に伴なわない遺物(1)（Ｓ＝１：４）

石器（第18図）

遺構に伴なわない石器としては、1・2の2点の平基式サヌカイト製石鏃だけである。いずれもJ—27区から遊離した状態で出土した。3は土壙墓2埋土中の出土である。



第18図　遺構に伴なわない遺物(2)（S＝2：3）

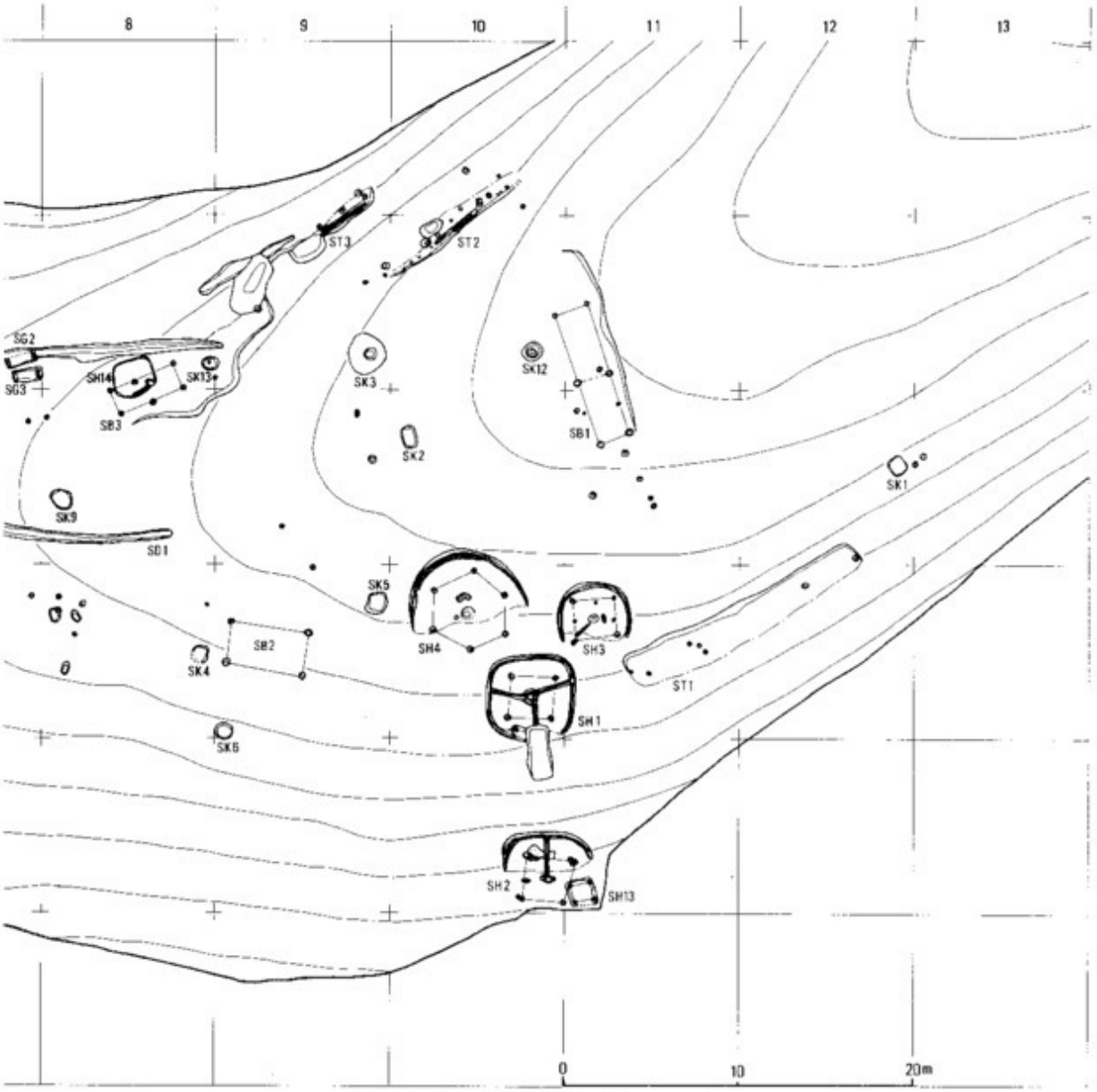


B地区の記録

確認調査時にすでに住居址6軒を確認していたのでかなりの密度で遺構が存在することが予測された。ユンボによる表土剥ぎを終了した段階で再度遺構を踏査した結果若干の遺物を採集した。図示したものの他に、若干の土器片と寛永通宝1枚がある。

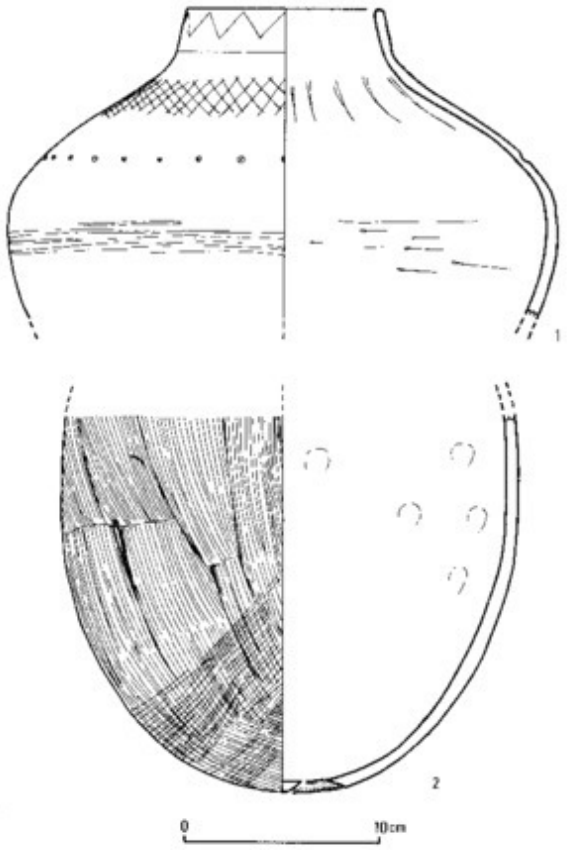
表面採集土器（第20図）

1は短頸壺である。口縁外面直下には鋸歯文、肩部には斜格子目文がめぐる。胴部上位には



第19図　B地区遺構配置図（S＝1：400）

円形刺突文がめぐる。遺存状態が極めて悪いが内面にはヘラ削り痕跡がわずかに認められる。外面には横方向のヘラ磨きが施されている。2は底部穿孔土師器である。穿孔は焼成後に内面から外面にむけて行なわれている。外面上位は縦方向、下位から底部にかけてはド方から上方へ斜方向にハケ目が施されている。内面はナデ仕上げである。



第20図　表面採集土器（S＝1：4）

1　住居址

住居址1（第21図）

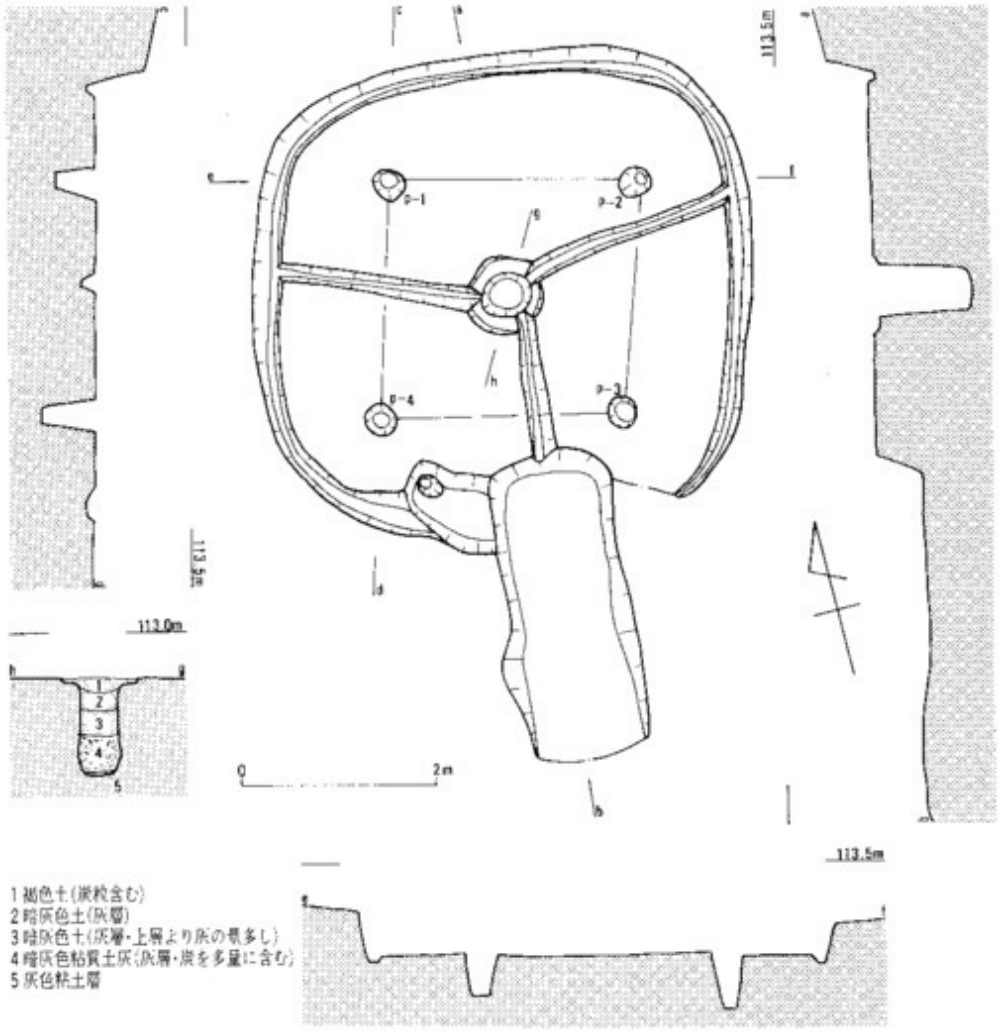
調査区中央部南斜面に位置する径約5mを測る隅丸方形住居である。住居南辺は斜面下方に位置するためか、壁、壁溝とも残存しない。床面中央部には2段に掘り込まれた中央穴が位置する。中央穴の深さは約1mを測り非常に深い。中央穴の堆土は5層に分かれ、いずれも炭粒、灰を多量に含む。中央穴から東、西、南の3方向に壁溝まで達する床溝が検出された。南方向の床溝は壁溝付近で幅約1.2m、長さ約3.2mを測る土壙に取り付く。この土壙の機能は明らかでないが本住居址に付設する遺構であり、床溝との有機的関係が考えられる。柱穴は中央穴を中心にほぼ等距離に各コーナーに配置されている。遺物は埋土中より数点の土器片が出土しただけである。

住居址1出土土器（第22図）

図示できるものは2点だけである。共に高杯形土器杯部である。両者とも斜め上方に延びた杯部にやや屈曲して口縁部が作り出されている。2は口縁端部が水平に外方に張り出す。端面には数条の凹線文がめぐる。1は非常に大粒砂粒を含むのに対し、2は緻密な胎土を用いている。弥生時代後期初頭と考えられる。

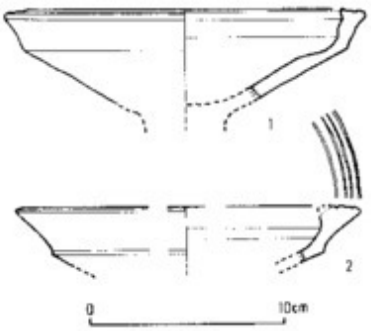
住居址2（第23図）

住居址1の真南斜面下方に位置する。南半は壁、壁溝、床面ともに残存しない。本住居は火災住居であり、床面には炭化材が散乱していた。床面残存部中央には約1.5m×0.5mの範囲



第21図　住居址１平面・断面図（S＝1：80）

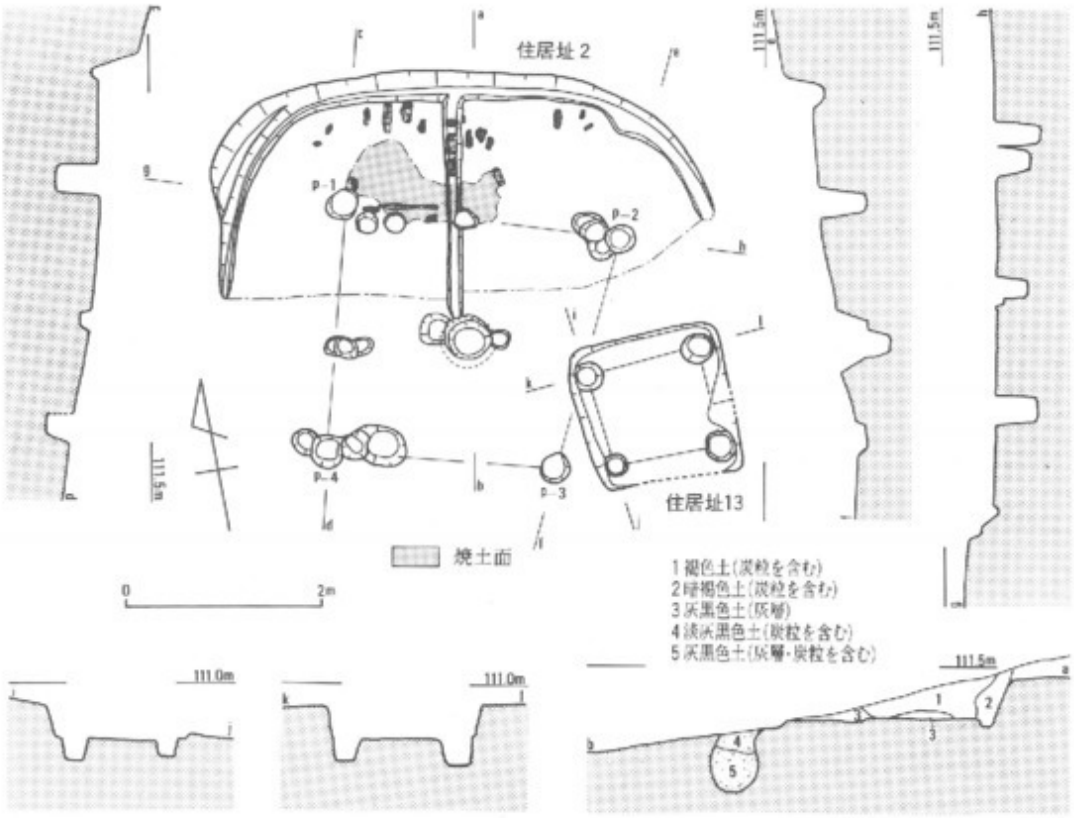
に焼土面が観察された。壁溝中央部から中央穴にかけて床溝が検出された。中央穴は袋状を呈し、床面からの深さ約70cmを測る。埋土には炭粒・灰が多量に含まれていた。柱穴は中央を取り囲むように４ケ所に認められた。遺物はほとんどなく、図示できるものは土器、石器ともに１点だけである。本住居址に重複して小型の４本柱方形プランを呈す住居址が検出されたが、新旧関係は不明である。



第22図　住居址１出土土器（S＝1：4）

住居址２出土土器（第24図）

床面より出土した。丸味をおびやや内傾した口縁端面には凹線文をもたない。内面口縁部より下位は横方向のヘラ削りである。弥生時代後期と考えられる。

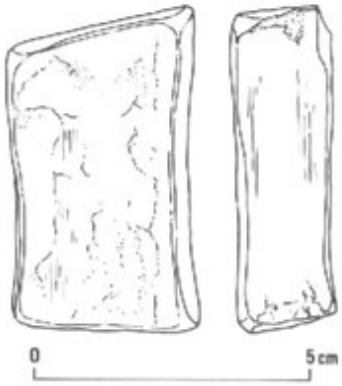


第23図　住居址２・13平面・断面図（Ｓ＝１:80）

住居址２出土石器（第25図）

長さ約5.5cm、幅約３cm、厚さ約1.5cmを測る角礫を素材とした砥石である。砥面は図示した２面だけであり、他の面は砥面として使用されていない。石質不明。

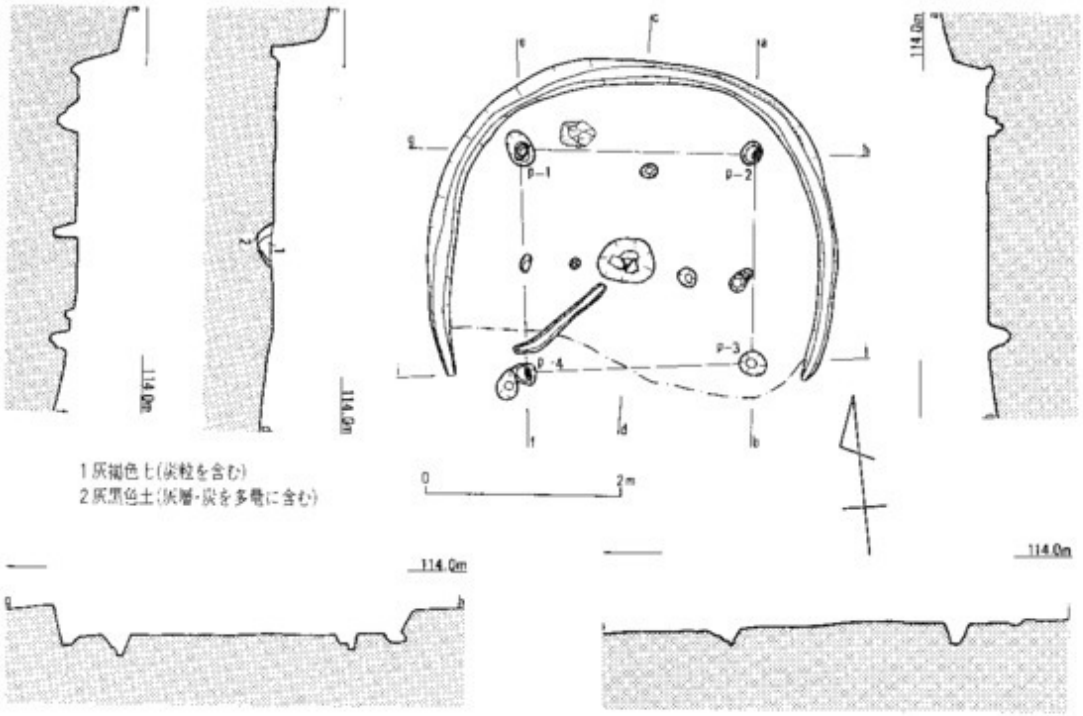
第24図 住居址2出土土器（S＝1:4）



第25図 住居址2出土石器（S＝2:3）

住居址３（第26図）

住居址１の北東斜面上方に位置する４本柱円形住居である。斜面下方南側は壁・壁溝・床面いずれも流失している。径約4.2mを測る円形壁直下には、幅約15cmの壁溝がめぐる。壁溝北東部はオーバーハングした状態である。床面の中央には楕円形を呈す非常に浅い中央穴が位置する。中央穴内埋土には炭粒・灰が多量に認められた。また数点の土器片も出土した。中央穴から南西方向に延びている浅い溝はボソボソの土が入っていたことから木の根による攪乱と考えられる。柱穴は等間隔に４ケ所に検出された。柱穴はいずれも浅く、底面もＰ-３を除き平らではなく尖がっている。遺物は埋土中と床面上より出土した。



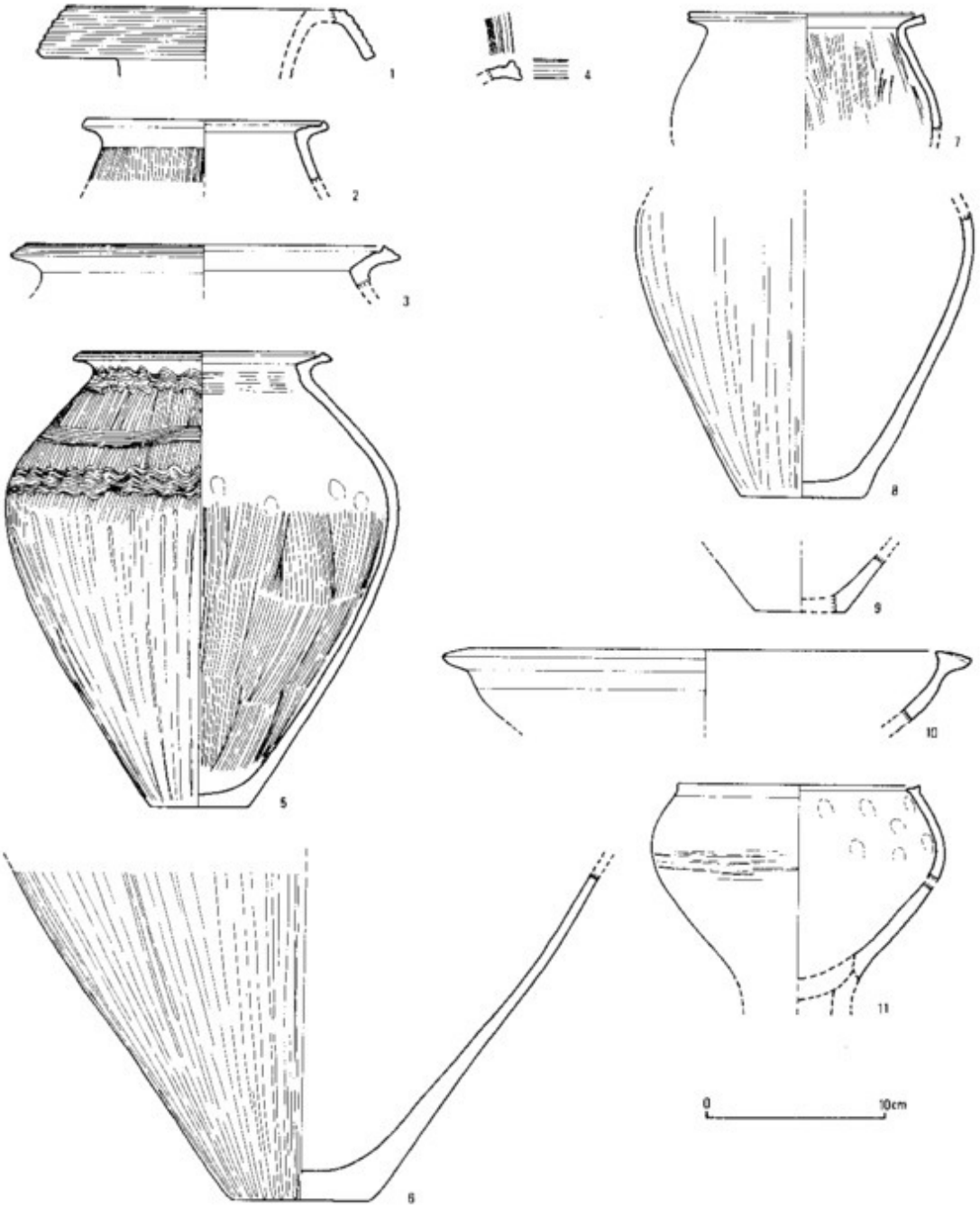
第26図　住居址３平面・断面図（S＝1:80）

住居址３出土土器（第27図）

８は中央穴、５・６は床面上より出土した。他はいずれも埋土中の出土である。１・４・６は壺形土器、２・３・５・７は甕形土器、10・11は高杯形土器である。１・４とも口縁部端面には凹線文をもつ。甕形土器はいずれも頸部から「L」字状に外方に張り出し、端面はやや内傾する。端面は拡張せず幅が狭い。端面には凹線文を持つもの、持たないものの２者がある。５は異質の土器である。外面の文様構成は壺形土器のそれと類似するが、器形は甕形土器の器形である。外面には胴下半にススが付着していることから甕形土器に分類した。７の甕形土器内面はヘラ削りの上からハケ目を施しており、部分的にヘラ削り痕跡が認められる。高杯形土器には皿状の杯部に水平方向に拡張した口縁部をもつものと、椀状の杯部に内傾した口縁部をもち端面がそのまま終わるものの２種が認められる。

住居址４（第28図）

住居址１の北西斜面上方、住居址３の西方に位置する６本柱円形プランの住居である。南半は斜面下方に位置するため、壁、壁溝、床面は残存せず柱穴だけ検出された。壁溝北側は部分的に２本が重複している。これは拡張というより、壁の崩壊に伴なう補強と考えた方が妥当であろう。径約6.7mを測る住居址中央部には中央穴が位置する。中央穴は木の根によるものと考えられる大きな攪乱を受けている。中央穴埋土には多量の炭粒が認められた。中央穴の北側床面には焼土面が検出された。柱穴は中央穴を中心に等間隔に配置されている。床面からの深

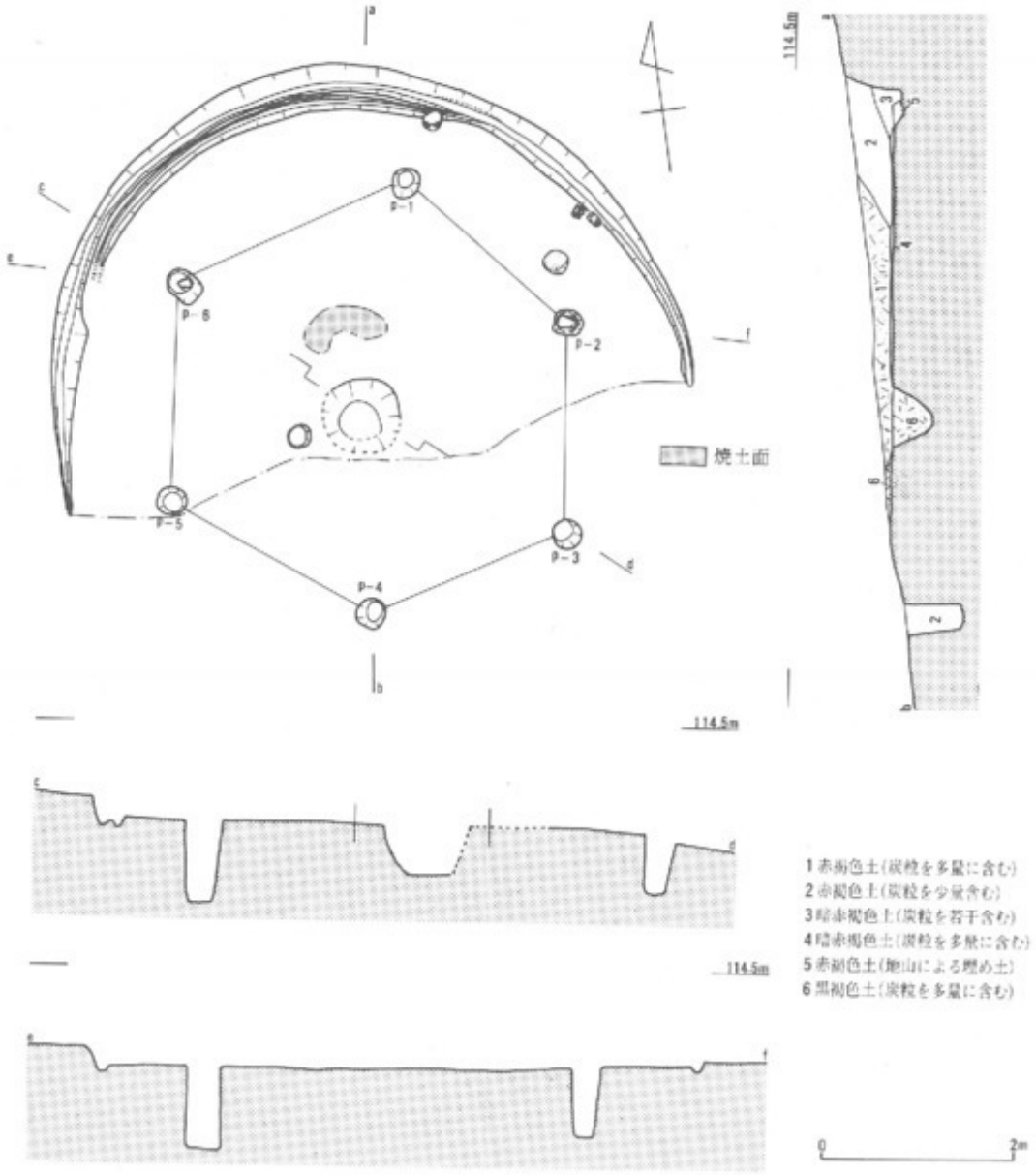


第27図　住居址３出土土器（S＝1：4）

さは平均約90cmを測り非常に深い。埋土下層から床面にかけて多量のサヌカイト片、石鏃、土器が出土した。石器製作が行なわれた住居である。

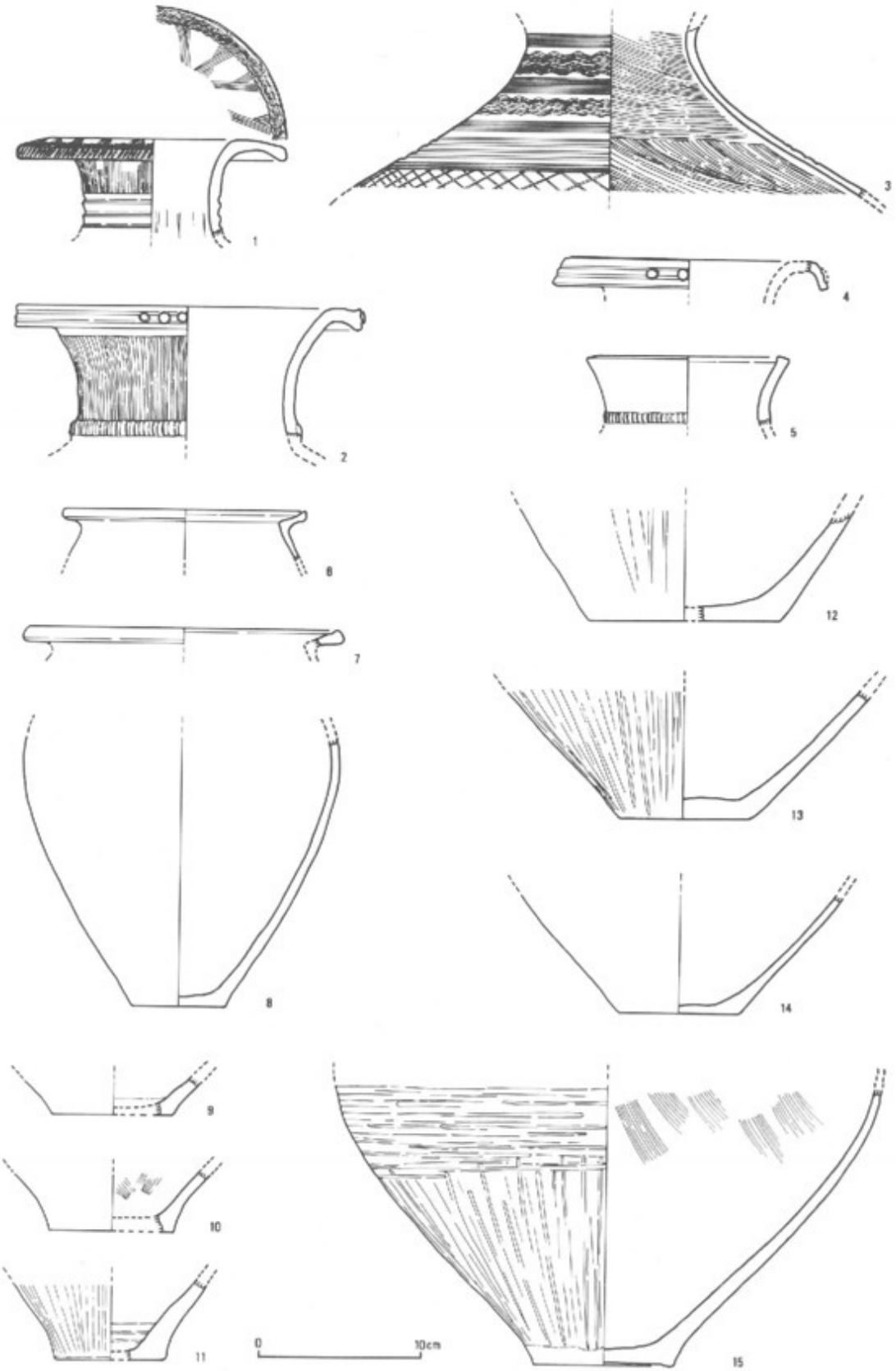
住居址４出土土器（第29・30図）

1～5は壺形土器である。1は筒状の頸部から直角に水平方向に開く口縁部をもつ。端部は

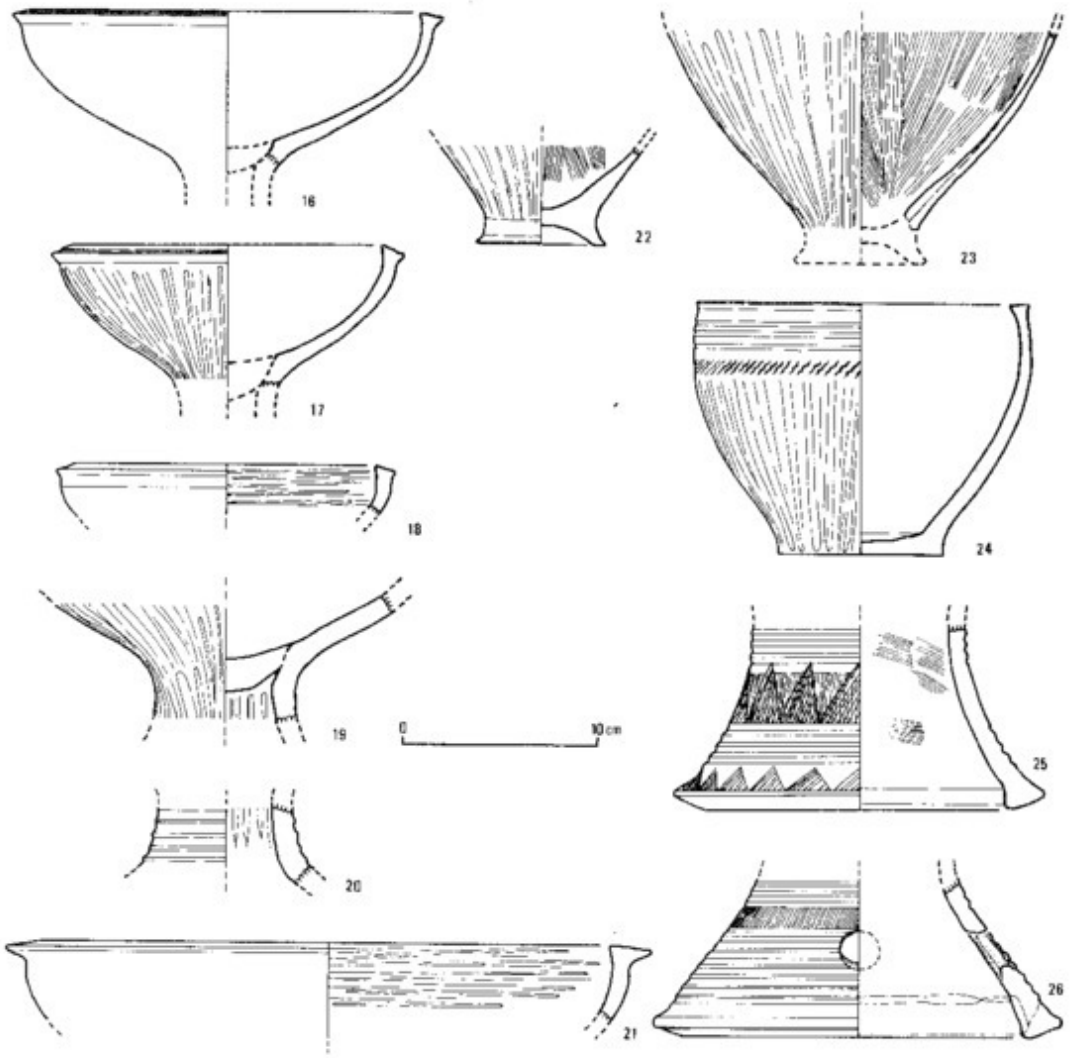


第28図　住居址４平面・断面図（S＝1:80）

連続刺突文がめぐらされている。水平面には外側に櫛描波状文、内側には交差した櫛描直線文が施されている。直線文が波状文に切られている。頸部には凹線文がめぐるが凹線文は鋭角に施されており稜を形成している。２は凹線文をもたず貼り付け突帯の上に刺突をめぐらせている。頸部から大きく外方に開く口縁部をもつ。端面には２条の凹線文をめぐらし、その上を円形浮文で加飾している。３は胴部最大径に対して、非常に径の小さい頸部を有す壺形土器で、全く類似した土器が段状遺構４から出土している。残存部外面の文様構成は櫛描直線文、櫛描波状文を交互に施文した後さらに櫛描直線文を施す。下位には４条の凹線文、斜格子目文と続



第29図　住居址４出土土器(1)（S＝1：4）



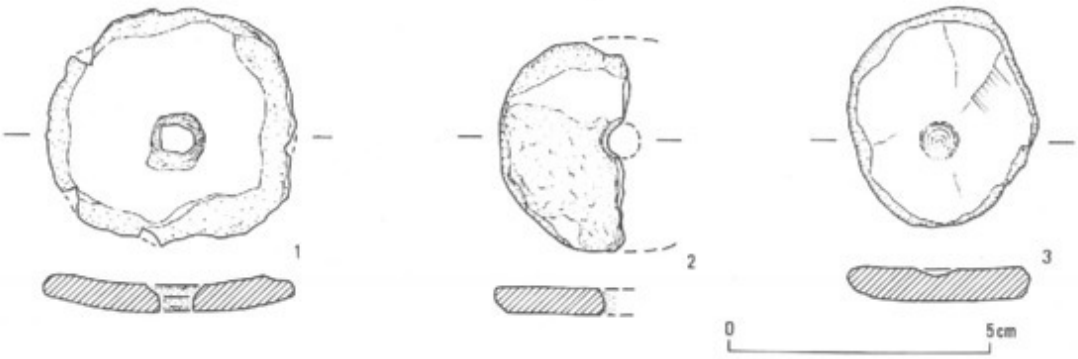
第30図　住居址4出土土器2)（S＝1：4）

く。内面はハケ目仕上げである。5は頸部からやや外方に開く口縁部をもち、端部は拡張せず、内側につまみ上げているだけである。頸部には連続刺突文がめぐらされている。6・7は甕形土器口縁部である。いずれも「L」字状に外反する口縁部をもち、端部はやや肥厚する。15は床面から出土した。壺形土器底部である。外面は下位が縦方向、上位が横方向のヘラ磨き仕上げである。8の甕形土器外面にはススがかなり付着している。16～21は高杯形土器である。16～18・21は椀状の杯部をもち、端面はやや内傾し外方向にやや拡張する。21はとくに拡張が顕著である。脚部との接合は円盤充塡により行なわれている。20は脚部に鋭角に施された凹線文をもつ。22・23はいずれも破片であり器形の全容は明らかでない。ただ外面にはススの付着が著しいことから、台付の甕形土器と考えられる。24はほぼ完形の鉢形土器である。口径に対して大きい底部をもつ。その比率はちょうど2：1である。底部からゆるやかに外反し最大径でや

や内傾し口縁部にいたる。端面は水平でやや外方に張り出す。外面口縁直下には3条の凹線文がめぐり、その下位には貝殻による連続刺突文が施されている。さらに下位は縦方向のヘラ磨き仕上げである。この土器は非常に珍しい土器であり本地域では類例をみないが類似例として神戸市新方遺跡例（註1）をあげることができる。25は高杯形土器である。肥厚した脚端部から内傾して胴部へといたる。外面は脚部から上位にかけて斜線で埋めた鋸歯文、凹線文を交互に施文した文様構成である。26の外面は原則として凹線文をめぐらすが、一部無文帯を設けている。無文帯の地文はハケ目である。無文帯下位には円形透し孔を穿つている。穿孔は焼成後に外面から内面方向に行なわれている。まだ大型化してないこと、穿孔も焼成後に行なわれていることから器台形土器の初源的形態と考えられる。

住居址4出土紡錘車（第31図）

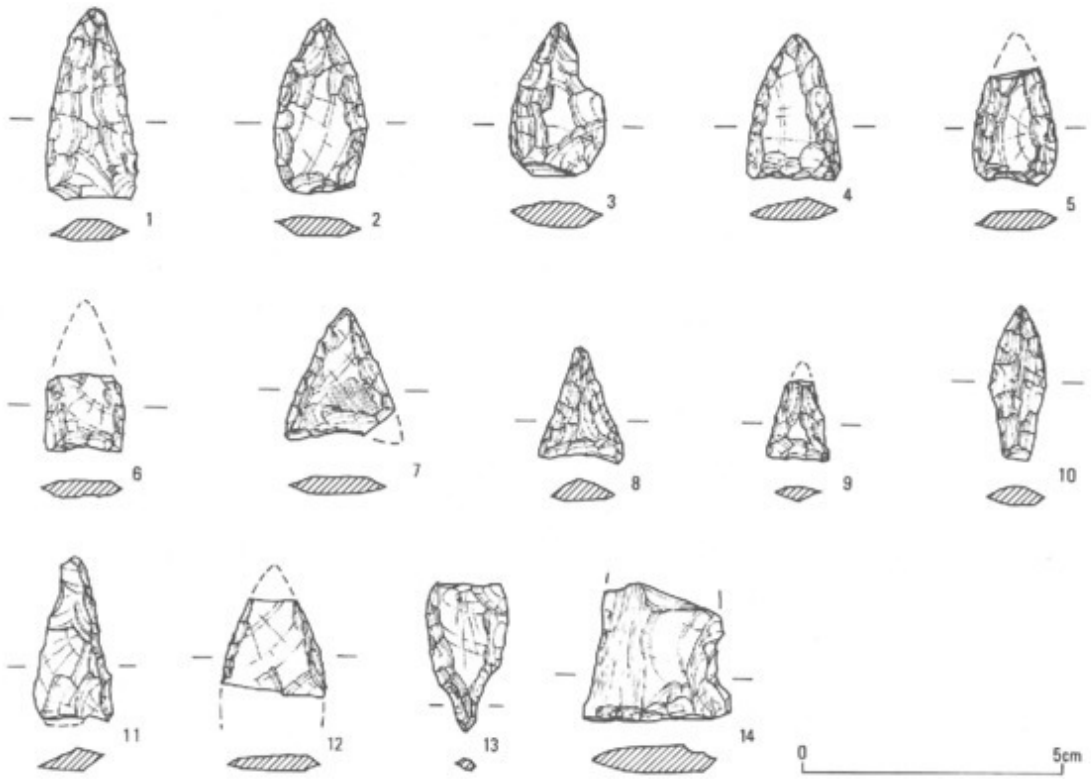
いずれも土器片を利用したものである。1は外面から内面方向に穿孔が行なわれている。2は半分しか残存しない。内外面ともススの付着が顕著である。3は穿孔途中のものであり中央部に凹みが認められる。いずれも埋土中の出土である。



第31図　住居址4出土紡錘車（S＝2：3）

住居址4出土石器（第32図）

石器製作が行なわれた住居址であり、床面から埋土下層にかけて多量のサヌカイト片、石鏃が出土した。サヌカイトはいずれも小さく打ち砕かれており、砕片がほとんどである。最も大きい剥片でも長さ5cm前後である。さらに厚さとなると1cmをこえるものはない。1～10、12は石鏃である。2・4などのように扁平な剥片を素材に、縁辺部だけ表裏両面に剥離を施し、主要剥離面を大きく残すものと、1・8などのように縁辺部からの剥離が中心部で切り合い、稜を形成するものの2者が認められ、前者が多数を占める。10だけが凸基式の石鏃である。7は表面を部分的に磨いている。11は未成品、13は石錘と考えられる。14は表面が研磨されている。下端は礫面である。器種不明。



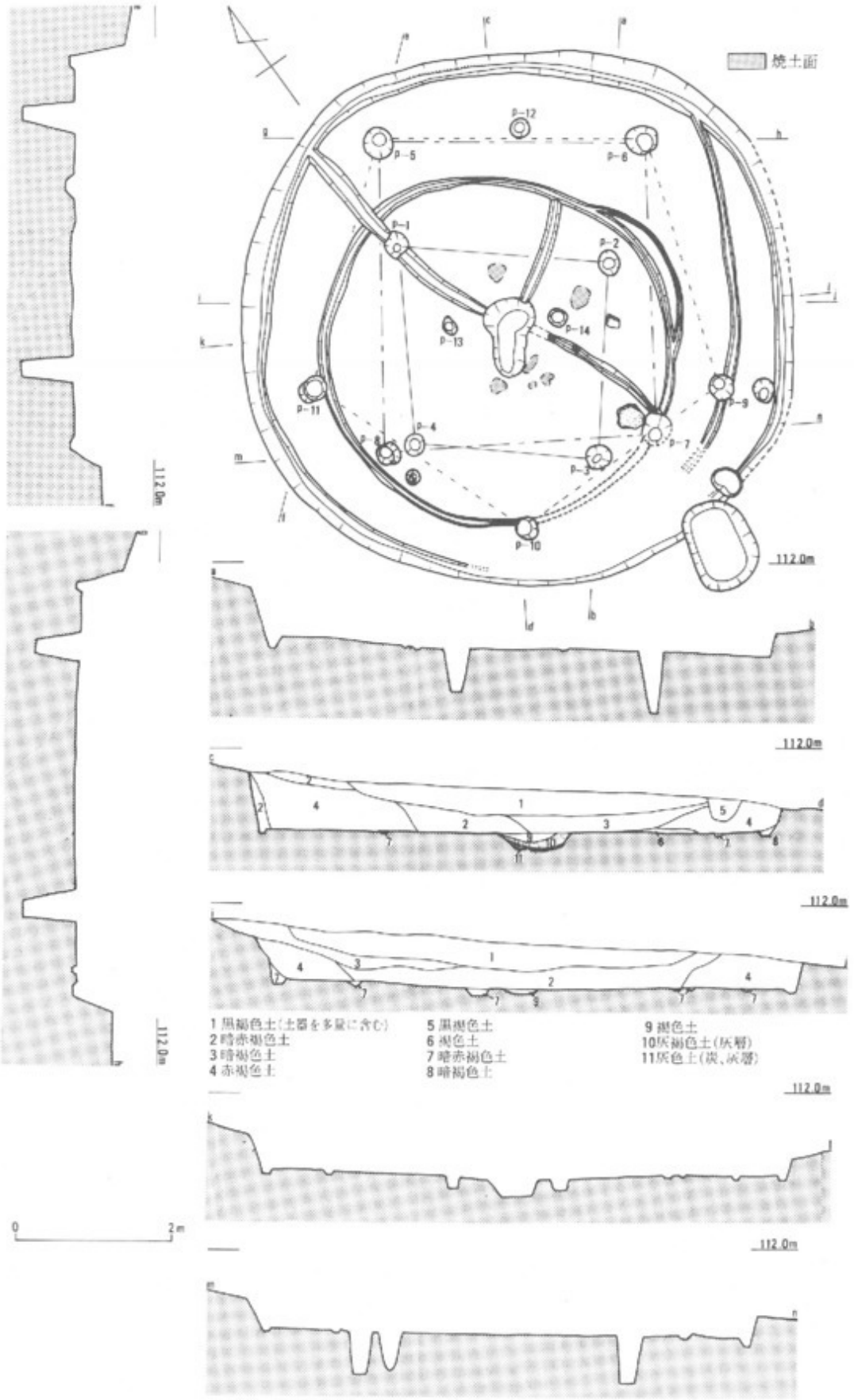
第32図　住居址４出土石器（S＝2：3）

住居址５（第33図）

調査区南斜面に位置する。２度にわたる拡張が行なわれた結果３軒が重複した状況である。最初の住居は径約4.5ｍを測る円形プラン４本柱の住居である。柱穴はP-1～P-4の４本である。床面の中央部には浅い中央穴が位置する。中央穴から壁溝にかけて東方向と南方向に床溝が走る。壁溝は底面近くしか残存せず幅約10cm、深さ約５cmと非常に小規模なものである。

壁溝東側部分には弧を描くように幅約２ｍの範囲に、別の幅約10cm未満の浅い溝の重複が認められた。両者の溝の新旧関係は不明である。また、外側の溝の意味についてもこの部分だけの拡張とは考え難く明らかにしえない。

最初の拡張は中央穴を中心に70cm～1.5ｍ外方に壁を新設することにより行なわれている。柱穴はやはり４ケ所に認められP-5～P-8がそれに相当する。この時の住居の平面プランは円形というよりむしろ隅丸方形に近いプランのように考えられる。次の拡張は南半部だけを約70cm外方に壁を新設することにより行なわれている。北半は最初の拡張時の壁をそのまま共有している。径約７ｍを測る円形プランの住居である。この時の柱穴は５ケ所に認められ、P-5・P-6・P-9～P-11がそれである。P-5・P-6は最初の拡張時のものと共有している。中央穴は全て共有している。最終住居の埋土下層には灰層が顕著に認められた。中央穴から北方向にP-1を径て壁溝まで床溝が走るが、これはいずれの拡張に伴なうものか否か不明である。中央穴の周辺には数ケ所の焼土面、中央穴をはさんで両サイドに小柱穴が検出されたが最初の住居の

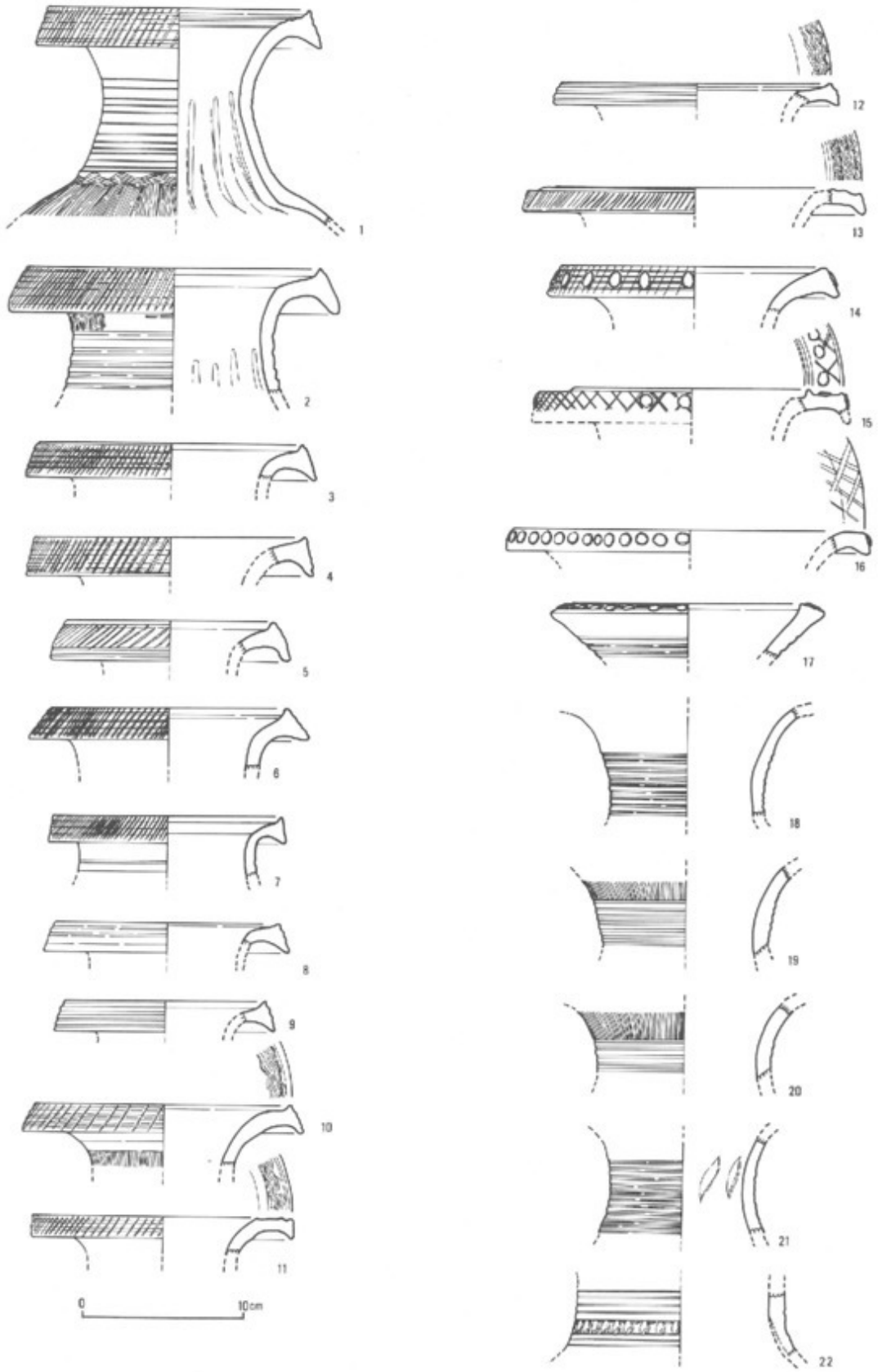


第33図　住居址5平面・断面図（S＝1：80）

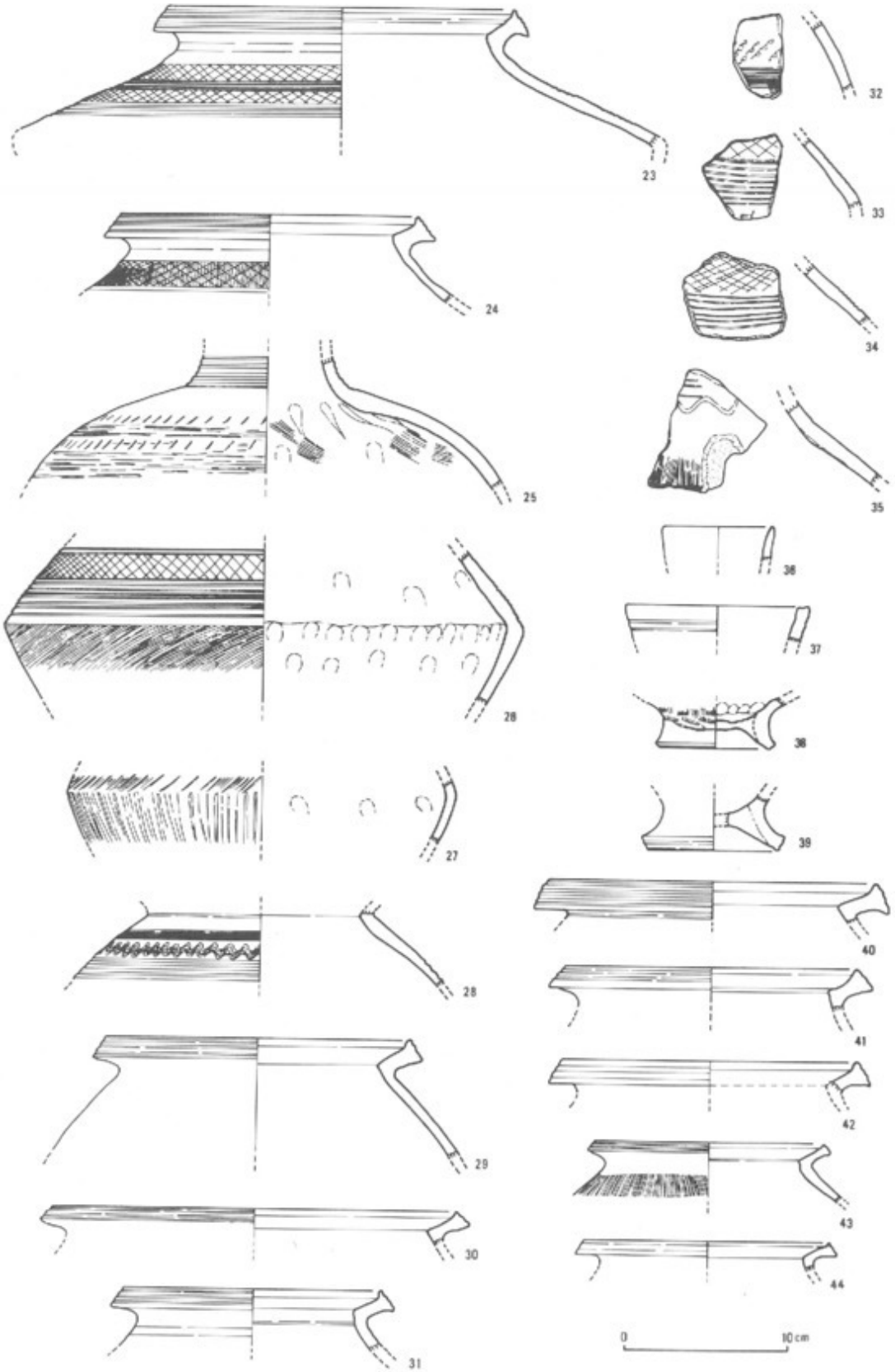
床面を共有して拡張が行なわれているため、どの時期の住居に伴なうものであるか不明である。遺物は大量に出土したがいずれも埋土中の出土であり、床面上のものは砥石を除きほとんどない。

住居址５出土土器（第34～37図）

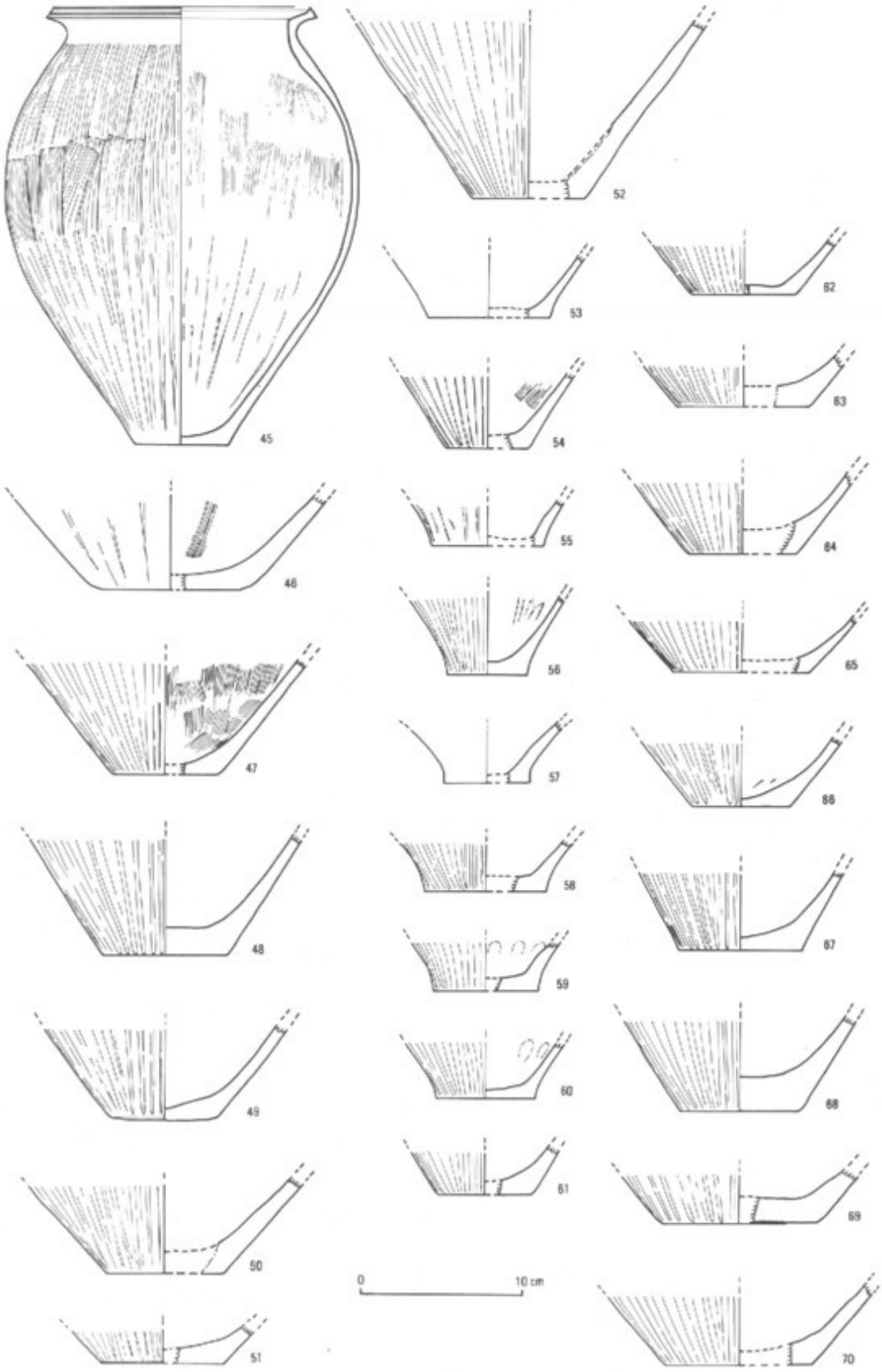
１～27、32～35は壺形土器である。１～10はほぼ同様の器形である。すなわち筒状の頸部に数条の凹線文をもち、頸部からゆるやかに外反して口縁部を形成する。口縁端面はやや内傾し上下に拡張するものである。端面には全て凹線文をもつ。８・９のようにそれだけで終了するものもあるが、他は全て凹線文の上をハケ状工具の板目を斜方向に連続して刺突した刻目文を有す。１は凹線文より沈線に近いものである。10だけには口縁部内面に櫛描波状文がめぐらされている。14はさらに円形浮文で加飾している。11～13は口縁部は水平に外方に張り出し端部はあまり大きく肥厚しないものである。端面はやはり凹線文、斜方向の刻目文で加飾する。水平面にはいずれも櫛描波状文が施される。15・16の口縁部端面、水平面は斜格子目文、円形浮文で加飾される。17はやや異質の口縁部で端部を少し内側につまみ上げただけであり、端面は凹線文、円形浮文で飾られる。18～22は頸部に凹線文をもつものである。22は下位に連続刺突文がめぐる。25は径の小さい頸部から大きく張り出す肩部をもつものであり、肩部には２列の刺突文がめぐらされている。23・24・26・33・34は肩部がそろばん玉状に鋭角に張り出す器形の壺形土器である。やや肥厚し、上下に拡張した口縁部端面には凹線文をもつ。外面の文様構成は上位からヘラ書き斜格子目文、凹線文が交互にくり返され、最大径上位は原則として凹線文でおわる。27はやはり肩部がそろばん玉状に張り出す器形であるが、肩部上位は刺突文がめぐり、前者と文様構成において異なる。36・37は直口壺である。28～31、40～45は甕形土器である。28は外面頸部下位に櫛描直線文、櫛描波状文、凹線文が順に施されている。この文様構成は壺形土器に見られるものであるが、住居址３出土土器例（第27図５）に見られるように器形は甕形土器を呈す。このことから甕形土器に分類した。29～31、40～42は器形の大小の差はあれ、頸部から「L」字状に外反し肥厚する口縁部をもつ。端部は上方向、あるいは下方向、両方向に拡張し、端面は内傾する。端面には２～３条の凹線文をもつ。30、43～45もやはり頸部から「L」字状に外反する口縁部をもつが肥厚しないものである。端部は上方向にわずかにつまみ上げている。内傾した端面にはわずかに凹線文が施されるものがある。45内面には下半にヘラ削り痕跡が観察される。38・39は台付の器形である。住居址４出土土器例（第30図22・23）に見られるように甕形土器になると考えられる。脚部端面は凹線文で加飾される。71～87は高杯形土器である。器形、大きさ、文様構成共に非常にバラエティーに富む。71は皿状の杯部にやや内傾して真っすぐ上方に延びる口縁部をもつ。端部は肥厚しない。外面の文様構成は上位と下位に凹線文、中位に斜格子目文を施す。72・73は椀状の杯部にやや内傾した口縁部をもつ。端部は肥厚し、外方に張り出す。外面には凹線文がめぐる。74は椀状の杯部に水平方向に大きく張



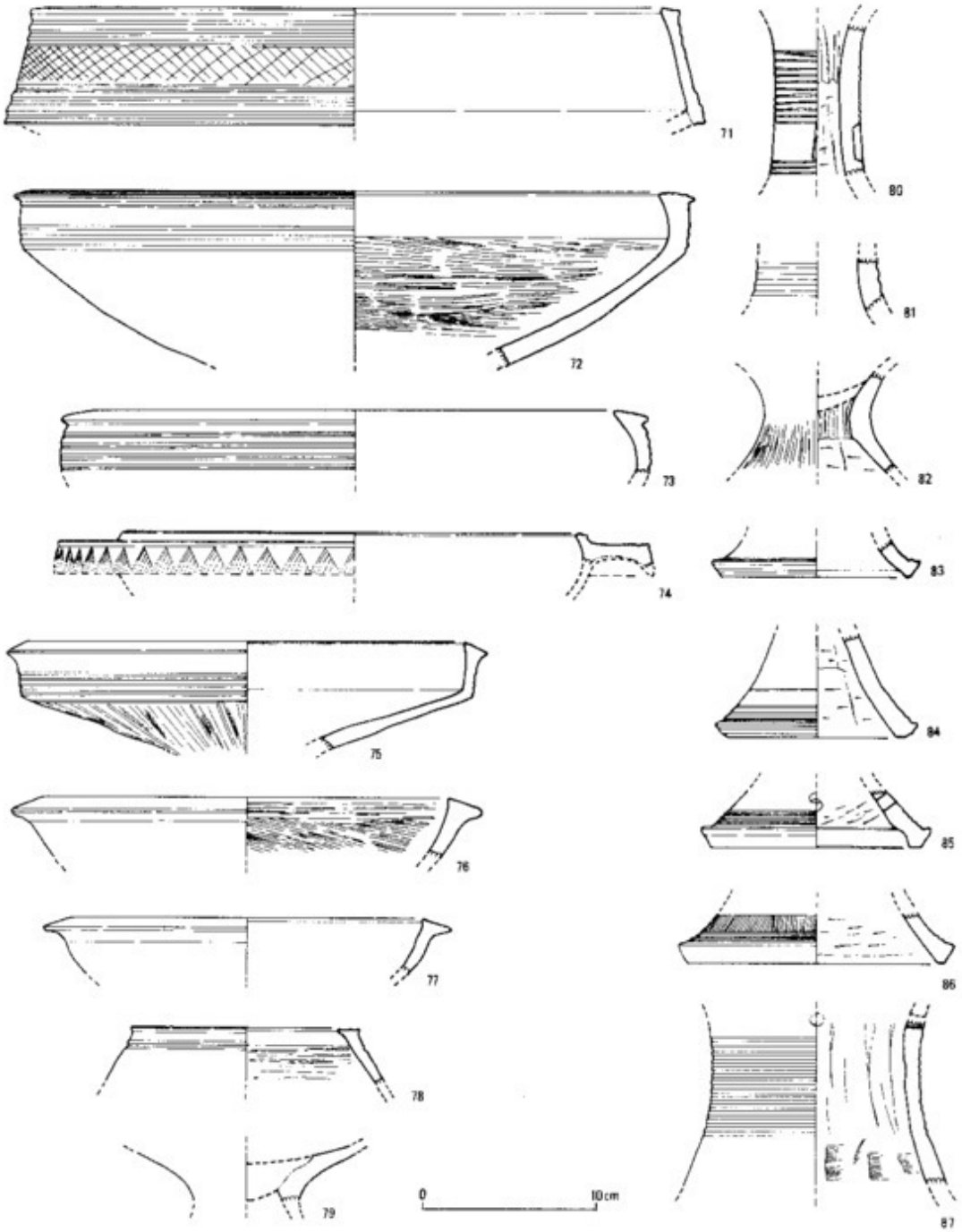
第34図　住居址５出土土器(1)（S＝1：4）



第35図　住居址5出土土器(2)（S＝1：4）



第36図　住居址５出土土器(3)（S＝1：4）



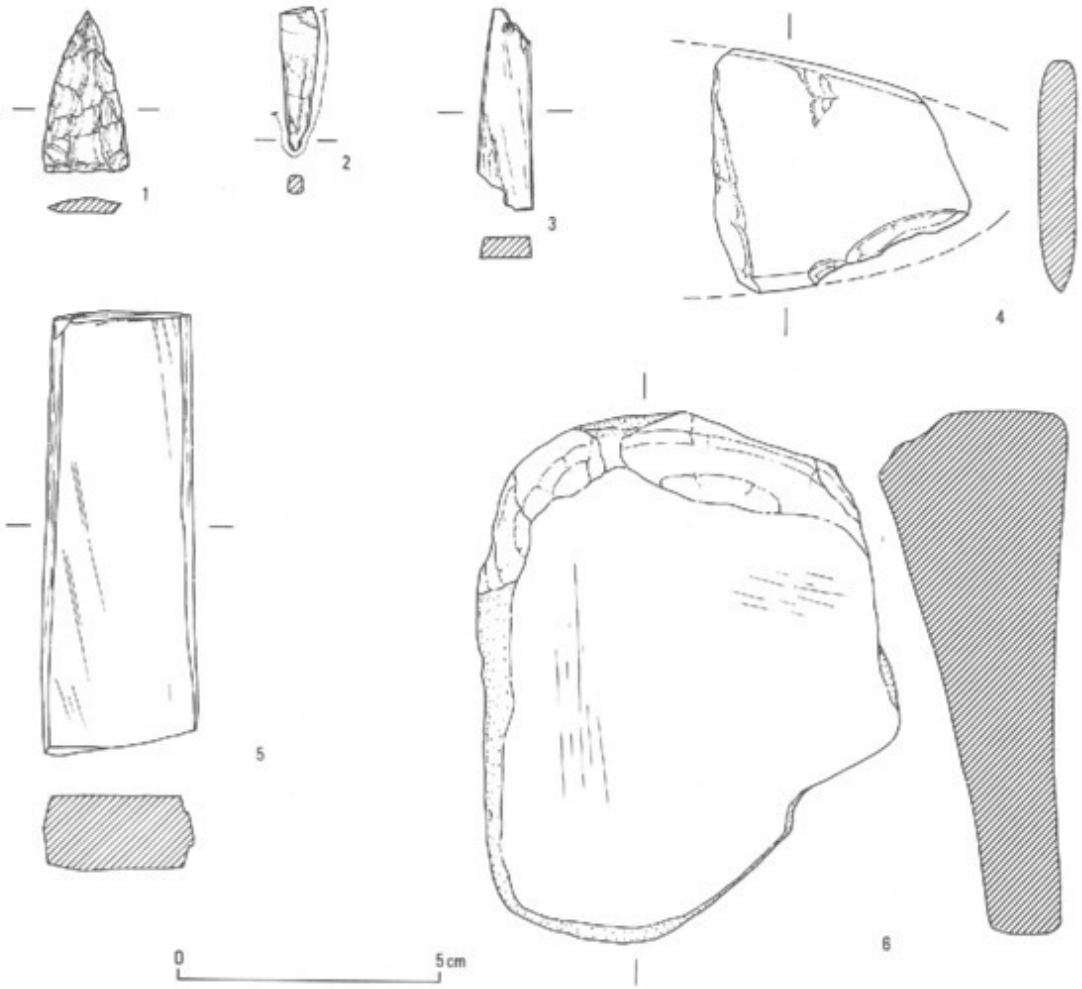
第37図　住居址５出土土器(4)（S＝1：4）

り出した口縁部をもつ。端部は下方に垂れ下がり、端面には斜線で埋めた鋸歯文がめぐる。75は皿状の杯部に垂直方向上方に延びた口縁部をもつ。端面は内傾し、端部は外方へ張り出す。口縁部外面下位には凹線文がめぐる。76・77は椀状の杯部に端部が肥厚し、外方に張り出しただけの口縁部をもつ。78は内傾した口縁部で端面は水平面をもち、端部は内外方向に拡張する。80

の脚部は凹線文ではなく沈線でらせん状に施されている。87は71・72などの大型高杯の脚部である。なお埋土中出土土器と同一個体の土器がⅠ－9区より遊離した状態で出土している。

住居址5出土石器（第38図）

1・2・4は埋土、3はP-1、5・6は床面より出土した。1はサヌカイト製の平基式石鏃である。2はサヌカイトを素材とした石器であり、図示した部分が非常に良く摩滅している。用途不明。3は準片岩製の砥石である。上端には穿孔途中の凹みが認められる。4面とも砥面として使用されている。4は白雲母石英片岩製石庖丁である。5は準片岩製の砥石である。4面とも使用している。特に石側面には使用による段が顕著に見られる。5は砂岩製の砥石であ

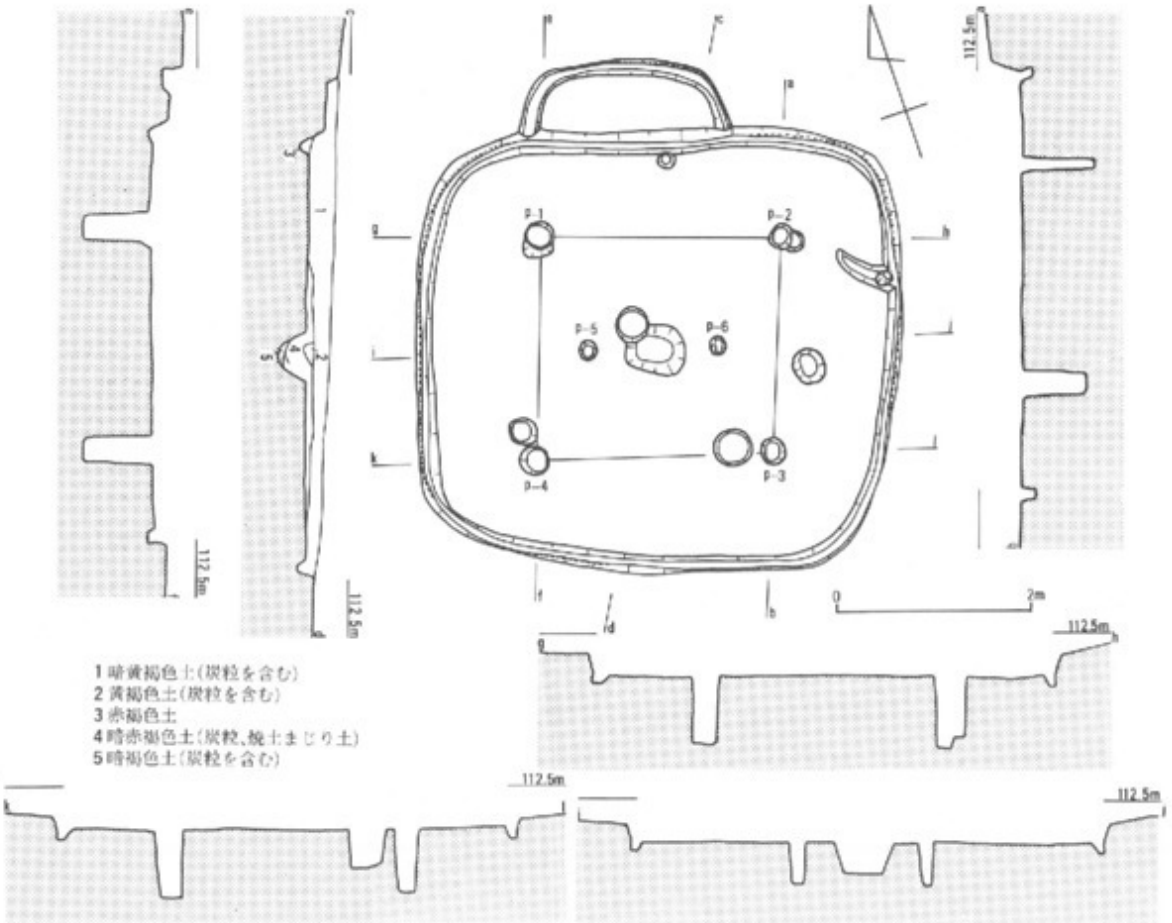


第38図　住居址5出土石器（S＝2：3）

る。砥面には表裏両面が使用されており、使用を物語るわずかな湾曲が観察される。

住居址6（第39図）

住居址5の北方斜面上部に位置する。長辺約5m、短辺約4.5mを測る隅丸方形プランを呈す4本柱の住居址である。床面の周囲には壁溝がめぐる。壁溝はオーバーハングした状態で壁面上位より下位の方が奥に掘り込まれている。床面の中央部には中央穴が位置する。中央穴は楕円形を呈し、深さ約30cmを測る。中央穴埋土には多量の炭粒を含む。中央穴をはさんで長軸方向に等間隔の距離をおいて柱穴が検出された。深さは約45cmを測り、非常にしっかりした柱穴である。住居北辺には幅約2m、奥行き約60cmを測る張り出し部が検出された。張り出し部は床面より約15cm程高いテラス状になっている。張り出し部の周囲には壁溝がめぐる。この張り出し部は住居内と埋土を共有していること、テラス床面出土土器片と埋土中の土器片とが同一個体であることから同時併存が考えられ、住居の付属施設とすることができる。さて、この張り出し部の持つ意味であるが、出入口、物置き、さらには祭祀的空間等考えられるのであるが、あくまでも推測の域を出るものではない。この種の張り出し部をもつ住居址例として本遺

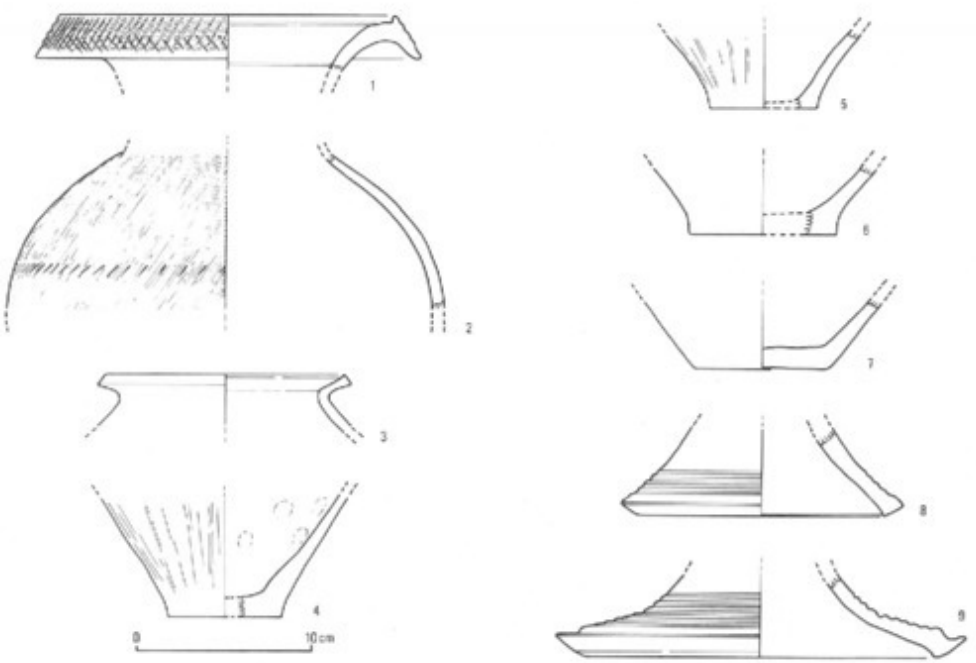


第39図　住居址6平面・断面図（S＝1:80）

跡住居址７（第42図）、押入西遺跡Ａ地区住居址５例（註２）がある。

住居址６出土土器（第40図）

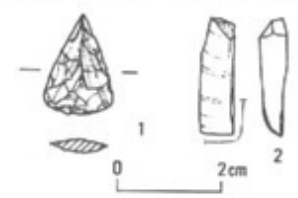
図示しえたもの全てである。１・２は壺形土器である。１の口縁端面は内傾し、上下に強く拡張する。端面には凹線文をめぐらせた後、斜方向の刻目文を連続して施す。さらに下位には交差するように刻目文を施し、加飾している。２は球形状の胴部をもつ壺形土器である。外面は斜方向のハケ目を全体に施し、最大径付近には１例の刺突文をめぐらす。11は中央穴と切り合っているピット、２は中央穴より出土した。３は頸部から「L」字状に外反する口縁部をもつ甕形土器である。端面は内傾し端部はあまり拡張しない。８・９は高杯形土器脚部である。両者とも下位には数条の凹線文をめぐらす。９は８に比べて端部に近づくにつれ大きく外方へ開く。また、端部は外方へ大きく張り出す。８は埋土中、９は床面より出土した。



第40図　住居址６出土土器（Ｓ＝１：４）

住居址６出土石器（第41図）

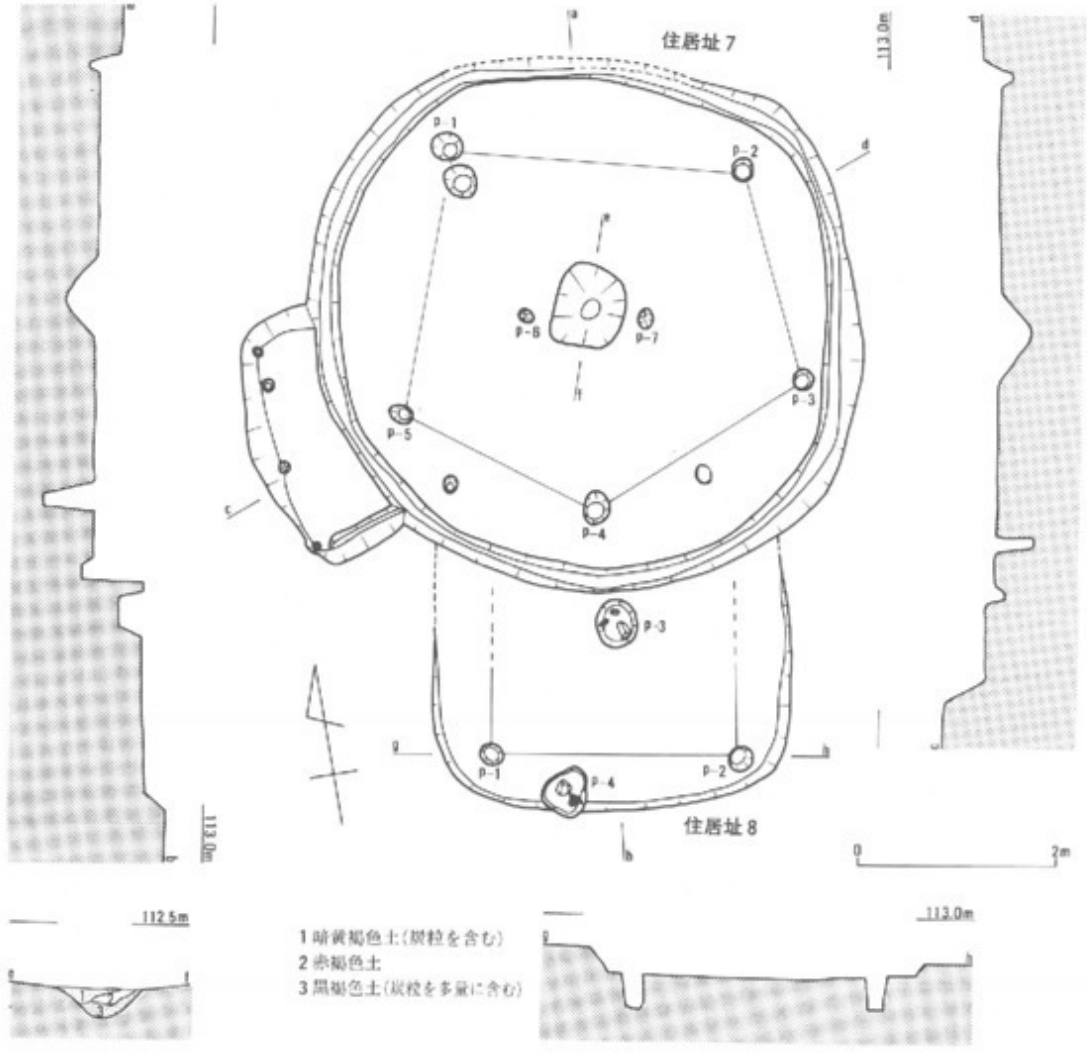
１はサヌカイト製石鏃である。両側辺からの剝離は中央稜線にまで及んでおり、ていねいなつくりである。２は剝片をそのまま使用し、研磨することにより、片刃の刃部を形成し、ノミ状の石器に仕上げている。サヌカイト製である。両者とも埋土中の出土である。



第41図　住居址６出土石器（Ｓ＝２：３）

住居址７（第42図）

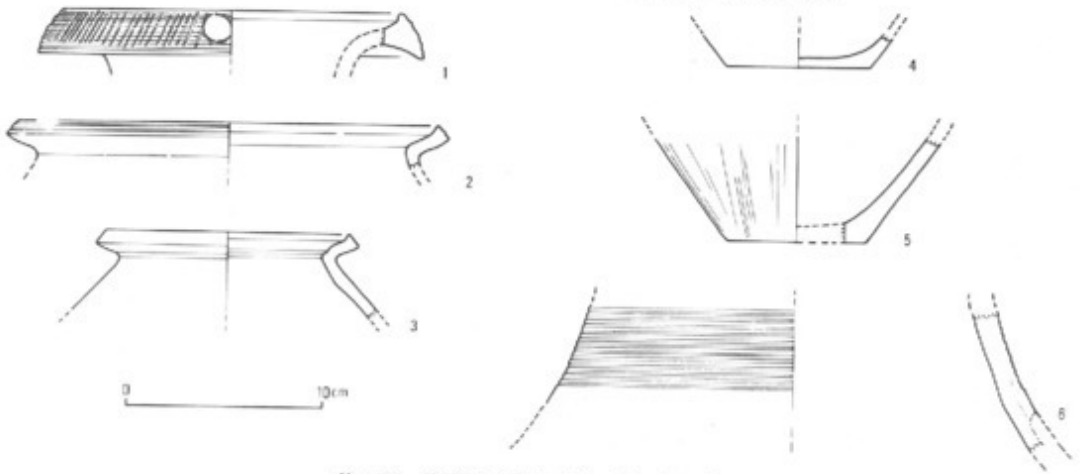
丘陵北斜面に位置する径約5.5ｍを測る円形プラン５本柱の住居址である。床面周囲には壁に沿って幅約20cmの溝がめぐる。床面の中央には底面の小さい中央穴が位置する。中央穴の埋土には多量の炭粒が含まれていた。中央穴の両サイドには小柱穴がそれぞれ１ケ所ずつ位置する。この柱穴はＰ－１～Ｐ－５の主柱穴に対して著しく小規模なものであり主柱穴にはならないと考えられる。住居西側には幅約２ｍ、奥行約60cmの張り出し部が付設する。床面は平担で奥壁直下には杭状の小柱穴が４ケ所に検出された。また南壁直下には壁溝が認められた。前述の住居址６例（第39図）と同様のものである。本住居址例では張り出し部の正面中央部に柱穴Ｐ－５が位置することから、出入り口にするには不適当なように考えられる。遺物としては埋土中より若干量の土器、石器が出土した。



第42図　住居址７・８平面・断面図（Ｓ＝１:80）

住居址７出土土器（第43図）

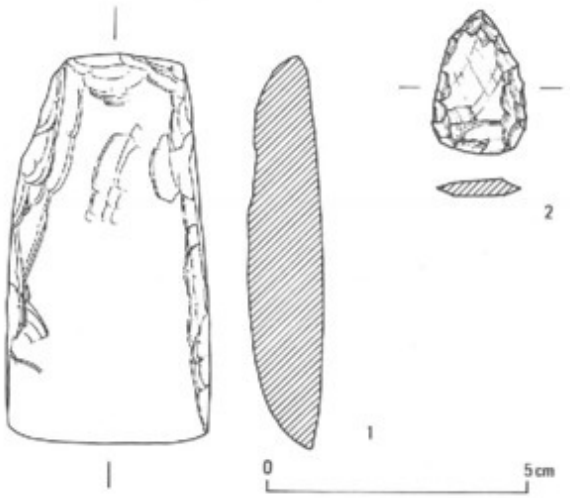
１は壺形土器である。やや内傾し上下に拡張した口縁部をもつ。端面には凹線文をめぐらせた後、斜方向の刻目文を連続して施し、さらにその上を円形浮文で加飾している。２・３は甕形土器である。頸部から「L」字状に外反した口縁部をもち、端部を上方につまみ上げている。２は端面に凹線文をもつのに対し、３はもたない。６は器台形土器である。



第43図　住居址７出土土器（S＝1：4）

住居址７出土石器（第44図）

１は緑色片岩製片刃石斧である。表裏両面は研磨により仕上げられているが、両側面と頭部付近には研磨が及ばず、剝離痕がそのまま残されている。２はサヌカイト製石鏃である。



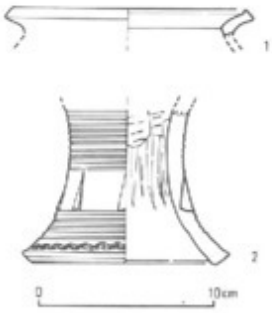
第44図　住居址７出土石器（S＝2：3）

住居址８（第42図）

北半を住居址７に切られて位置する。南側丘陵部に竪穴の壁が認められた。南壁に沿って東西のコーナー部に柱穴がそれぞれ位置する。しかしながら、通常の住居址に見られる壁溝はついに認められなかった。また、P－３も中央穴の位置にはあるものの、通常の住居址のものとは異なった。すなわち、平面、断面形が柱穴そのものであること、埋土に炭、灰、焼土を伴なわないことなどからP－３は中央穴ではないと断定した。従って、本遺構は住居址に分類はしたものの、住居址としての即断は避けたい。

住居址８出土土器（第45図）

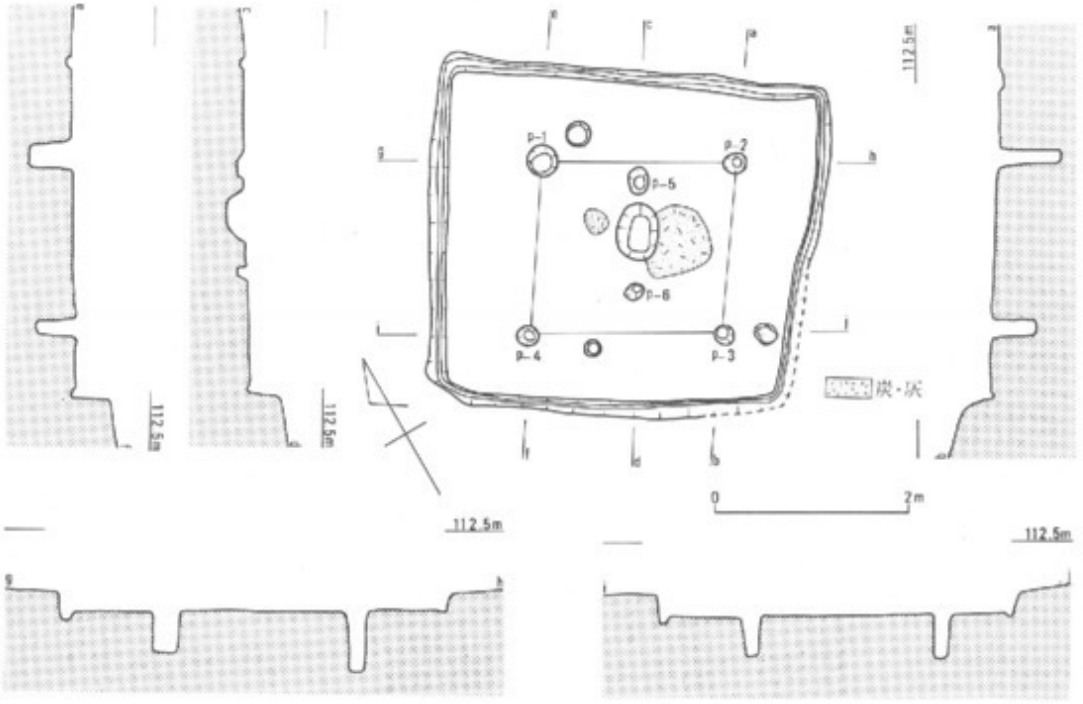
埋土中からの出土は皆無である。１はＰ－３、２はＰ－４からの出土である。Ｐ－３が本遺構に伴なうものであるか否かは不明である。Ｐ－４は本遺構を切って位置しており、直接本遺構に伴なうものではない。しかし便宜上に本遺構に関連して掲載した。１は頸部から「Ｌ」字状に外反した口縁部をもつ甕形土器である。内傾した端部は上方につまみ上げている。２は高杯形土器脚部である。下位から上位へかけて櫛描波状文、凹線文、無文帯、凹線文という文様構成である。無文帯には三角形の透し孔を穿つが、貫通はしない。内面にはしぼりの痕跡が良く観察される。



第45図 住居址8出土土器(S＝1:4)

住居址９（第46図）

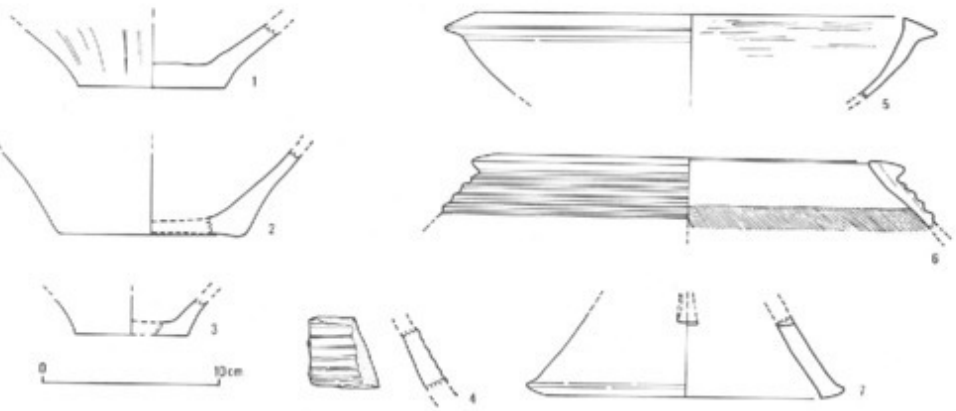
住居址７の西方丘陵北斜面上位に位置する。弥生時代には珍しい方形プランを呈す住居である。床面の周囲には壁に沿って壁溝がめぐる。床面の中央には楕円形を呈す深さ約15cmの中央穴が位置する。中央穴の長軸方向には両サイドに小柱穴が位置する。また、短軸方向には炭粒と灰の分布が認められた。柱穴は中央穴と各コーナーを結んだ直線上に位置する。長辺約４ｍ、短辺約3.5ｍを測る。遺物は床面及び埋土中より若干の土器片が出土した。



第46図　住居址９平面・断面図（Ｓ＝１:80）

住居址９出土土器（第47図）

４・５・７は高杯形土器である。５は椀状の杯部にやや肥厚し大きく外方へ張り出した口縁部をもつ。端面は内傾し平坦である。平坦面には文様をもたない。内面はヘラ磨き仕上げである。６は胴部最大径から内傾してそのまま口縁部にいたる器形のものと推定される。端面は水平に近く、端部は外方へ張り出す。外面には非常に鋭角に凹線文が施され、稜を形成する。内面はハケ目仕上げであるが、口縁直下はナデにより消されている。胎土は緻密で焼成も堅緻である。台付無頸壺と考えられる。７は脚部である。長方形の透し孔を有す。



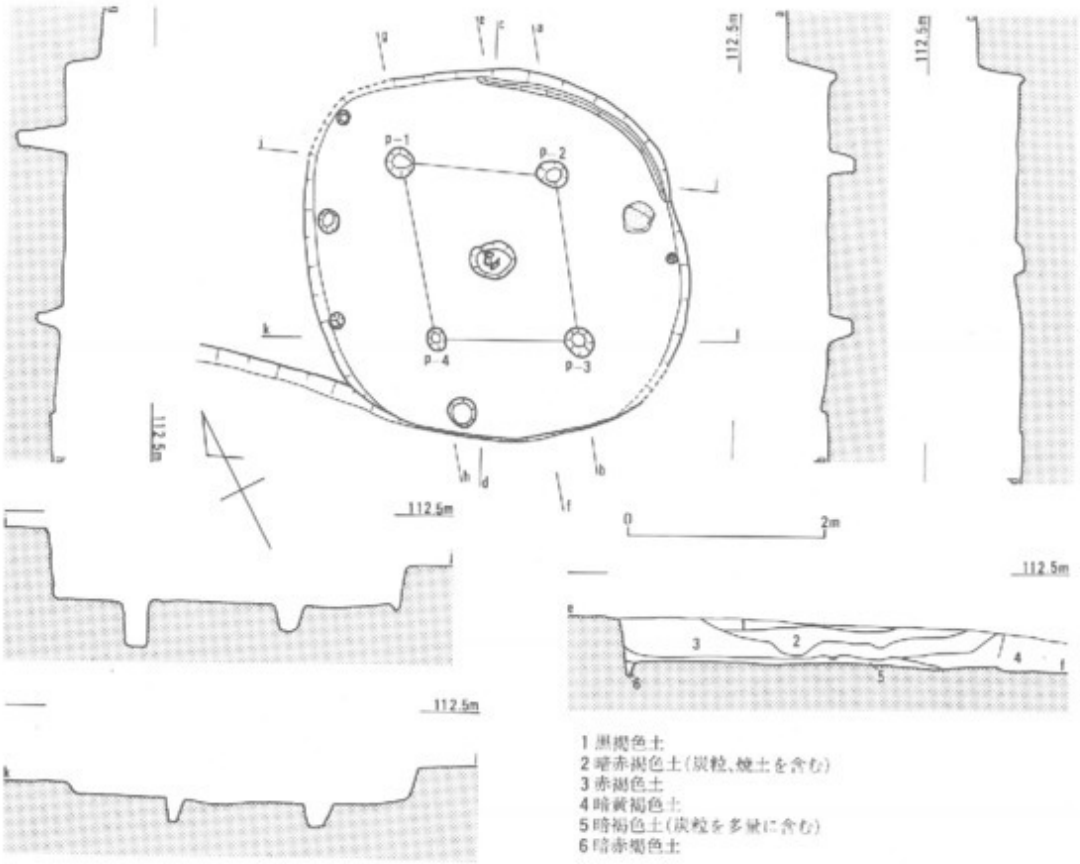
第47図　住居址９出土土器（S＝1：4）

住居址10（第48図）

住居址６の西方南斜面上位に位置する。長径約4.4ｍ、短径約４ｍを測る楕円形プラン４本柱の住居址である。南西側は段状遺構５と重複する。段状遺構５が埋まった後に本住居を掘り込んでる。このため地山の壁は存在しない。壁溝は全周には及ばず東側に部分的に認められるにすぎない。床面中央部には中央穴が位置する。中央穴は深さ約10cmと非常に浅い。主柱穴はプランに沿うように長軸方向、短軸方向に等間隔に配されている。遺物は中央穴内、床面上より数点の土器片が出土したが、大半が埋土中の出土である。P－３埋土中からは鉄斧と考えられる鉄製品が出土した。

住居址10出土土器（第49図）

１～４は壺形土器である。１・２とも筒状の頸部からゆるやかに外反する口縁部をもつ。端部はやや肥厚し、上下に拡張する。内傾する端面には凹線文をめぐらせた後、斜方向に刻目文を連続して施している。２は口縁内面に櫛描波状文をめぐらす。３・４は胴部がそろばん玉状に張り出す器形である。頸部から「L」字状に鋭く外反する口縁部をもつ。端部は肥厚し上下に拡張する。内傾する端面には凹線文をもつ。外面頸部下位の文様構成は斜格子目文、凹線文、斜

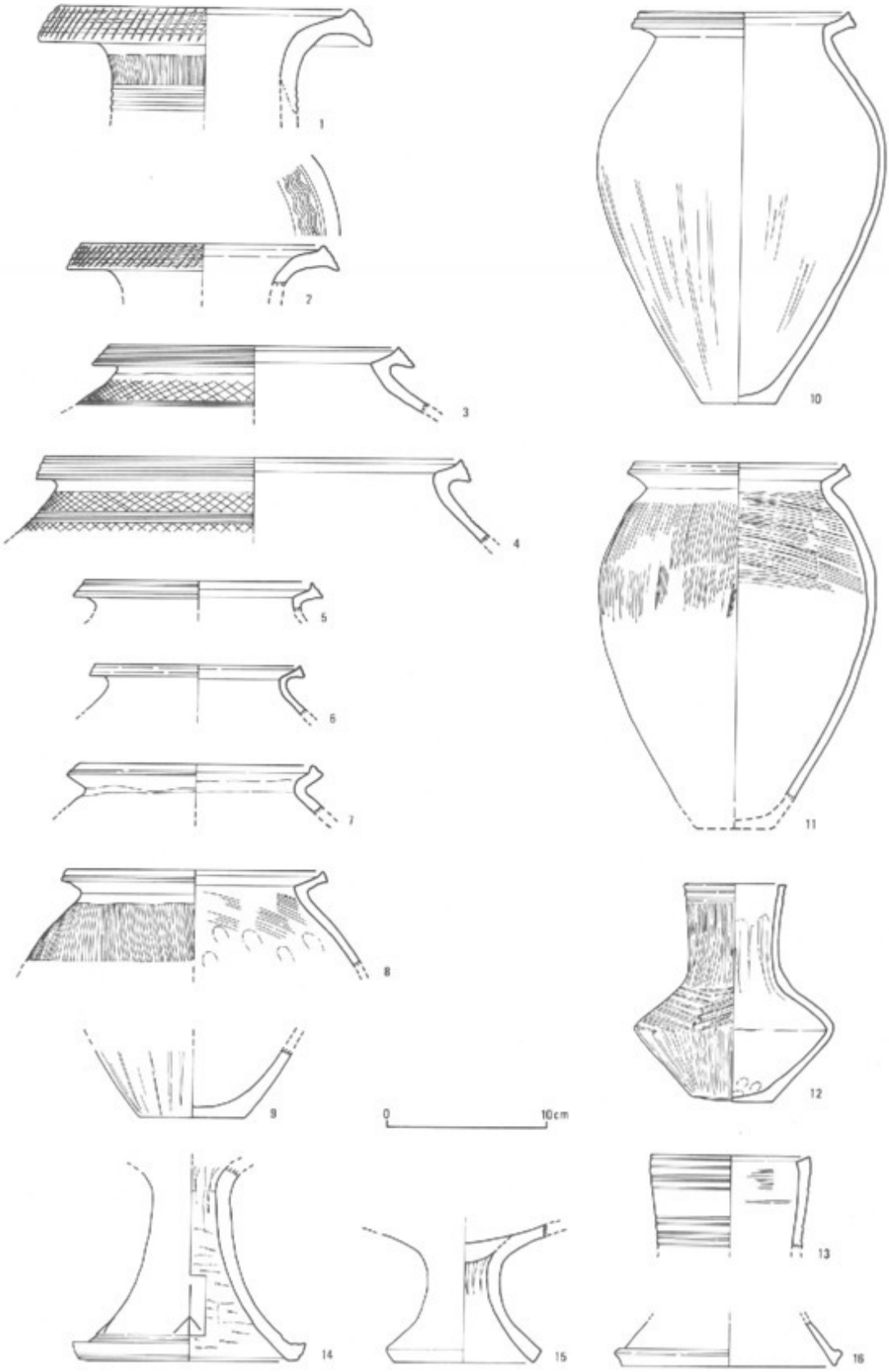


第48図　住居址10平面・断面図（S＝1：80）

格子目文の順となる。5～8、10・11は甕形土器である。いずれも小型のもので端部が肥厚し、拡張する大型のものはない。頸部から「L」字状に外反する口縁部をもち、端部は拡張せずせまい端面を呈す。端面には基本的には凹線文をもつ。10・11は一見類似しているようであるが、10は口縁部端面に明瞭な凹線文をもつのに対し、11は不明瞭である。胴部最大径が10は中位にあるのに対し、11は上位にくるなどよく観察すると異なる点がよく理解できる。10は内面にヘラ削り痕を認めることができる。両者とも多量にススが付着している。12・13は直口壺である。12は完形品で埋土からの出土である。そろばん玉状に張り出した胴部に直っすぐ上方に延びた口縁部をもつ。口縁直下外面には2条の凹線文をもつ。精製した胎土で胴部のヘラ磨きもていねいに行なわれている。丹塗り土器である。13はやや大型であるが同様の器形と考えられる。14～16は高杯形土器である。14の脚部下半外面には4ケ所にヘラ描きの鳥の足状の文様が施されている。

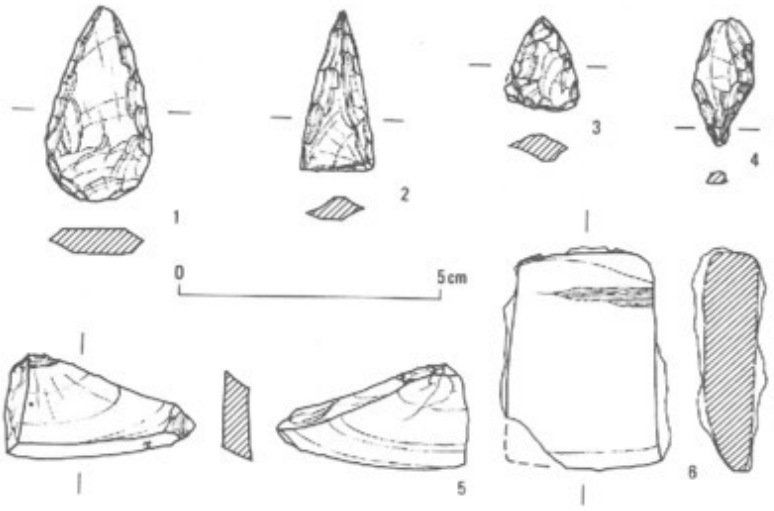
住居址10出土石器、鉄器（第50図）

図示したものの他に数点のサヌカイト片が出土している。1～3はサヌカイト製の石鏃であ



第49図　住居址10出土土器（S＝1：4）

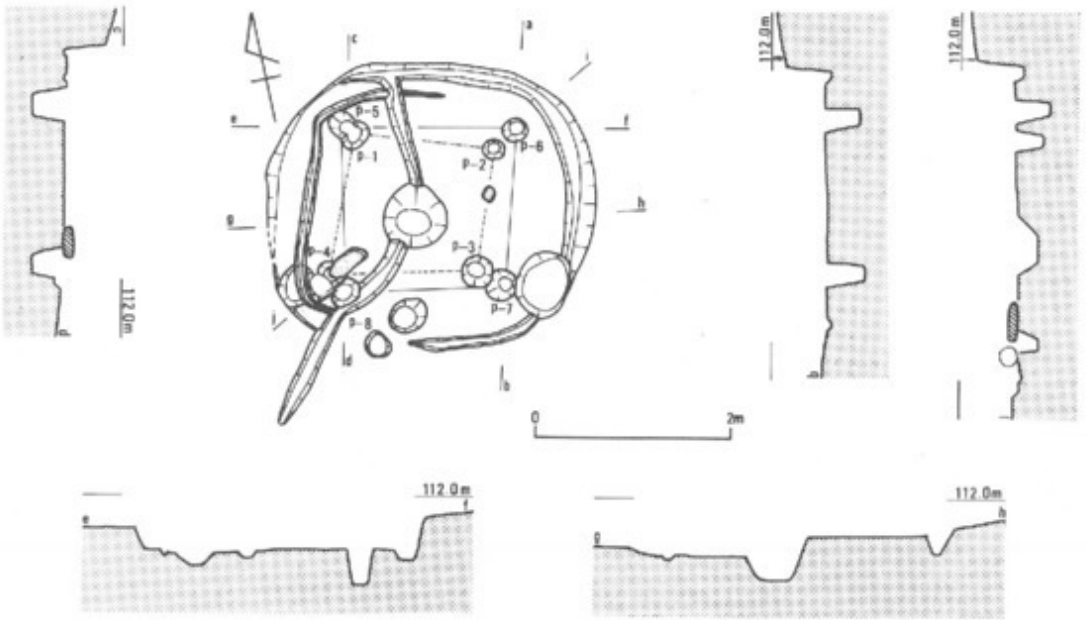
る。1・2は中央穴、3は埋土中より出土した。4はサヌカイト製石錐である。P－3より出土した。5は瀬戸内技法によって作出される翼状剝片に類似するので図示した。欠損品であり半分しか残存しない。風化は進行していないので先土器時代のものではないかも知れない。埋土中の出土である。サヌカイト製。6はP－3から出土した鉄斧と考えられる鉄製品である。一部欠損する。錆化がかなり進んでおり、錆ぶくれが目立つ。このため刃部と思われる先端部は鋭角にならず面をもっている。長さ5.3cm、刃部幅推定3cm、頭部幅2.6cm、最大厚1.3cmを測る。頭部がせまく刃部が開く形態である。表面頭部側に横位の木質痕が観察される。



第50図　住居址10出土石器、鉄器（S＝2：3）

住居址11（第51図）

住居址10の西方丘陵南斜面上位に位置する。段状遺構5と重複する。段状遺構5が廃棄された後に本住居を新設している。1度拡張が行なわれている。最初の住居はP－1～P－4の4

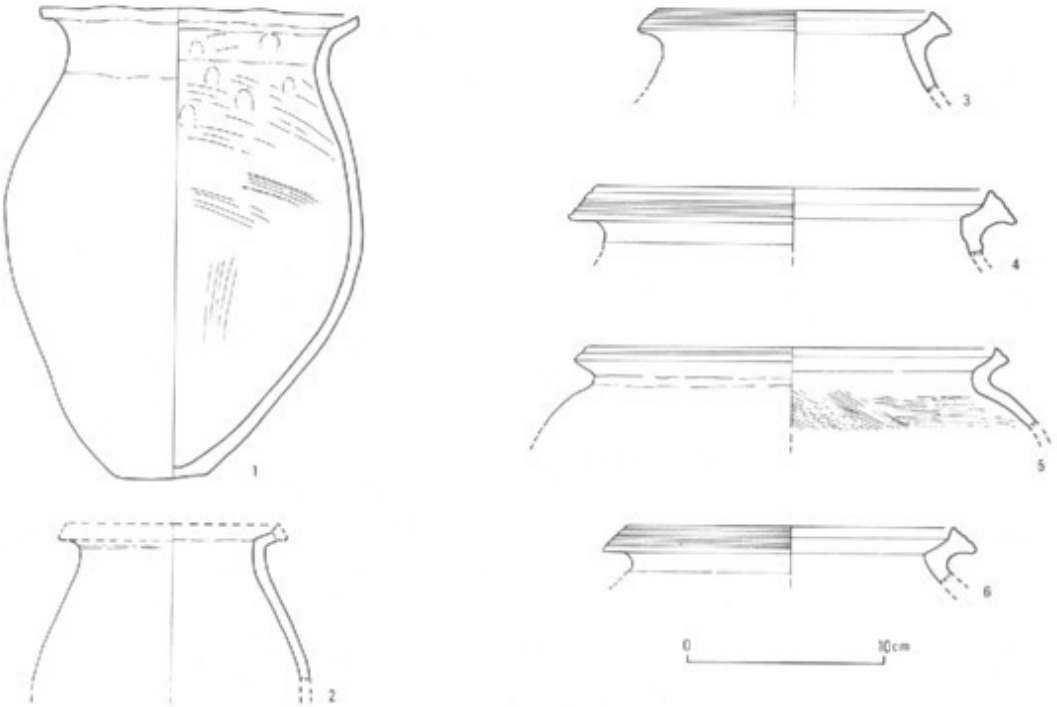


第51図　住居址11平面・断面図（S＝1：80）

本柱の小規模な住居である。西半に壁溝がわずかに残存し、推定復元すると一辺約2.5m程の隅丸方形プランを呈す住居と考えられる。床面の中央部には中央穴が位置する。拡張は中央穴を中心に約30cm外方に壁を新設することにより行なわれている。これに伴ない4本の柱穴も外方に新設されている。壁溝は西辺には付設されず、北、東、南辺にだけめぐる。中央穴から北方向へ壁溝まで、また南西方向には住居外方にまで溝が延びている。P-4付近からは完形の甕形土器1点が出土した。他に床面より石庖丁1点が出土した。

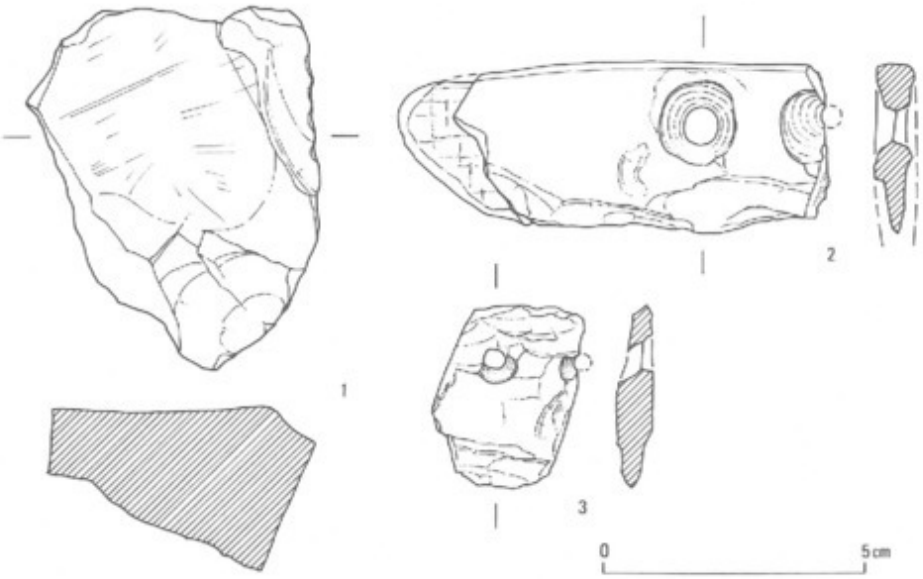
住居址11出土土器（第52図）

1～6いずれも甕形土器である。1は床面から出土した完形の甕形土器である。非常にいびつな土器であり、特に口縁部は波うったようにうねっている。全くの手づくりという感じで、回転台の使用は考えられない。外面は恐らくナデ仕上げと考えられる。内面も指によるナデ上げと考えられる。外面胴部、口縁部直下には多量のススの付着が認められる。3・4・6は肥厚し上下に拡張した口縁端部をもち、内傾した端面には凹線文をもつ器形である。5もやや異質な感じを受ける土器である。頸部から急に張り出す胴部をもち、最大径はかなり上位にくる器形である。頸部から「L」字状に外方に開く口縁部をもち、端部は上方につまみ上げている。端面には1条の凹線文がめぐる。



第52図　住居址11出土土器（S＝1：4）

住居址11出土石器（第53図）



第53図　住居址11出土石器（S＝2：3）

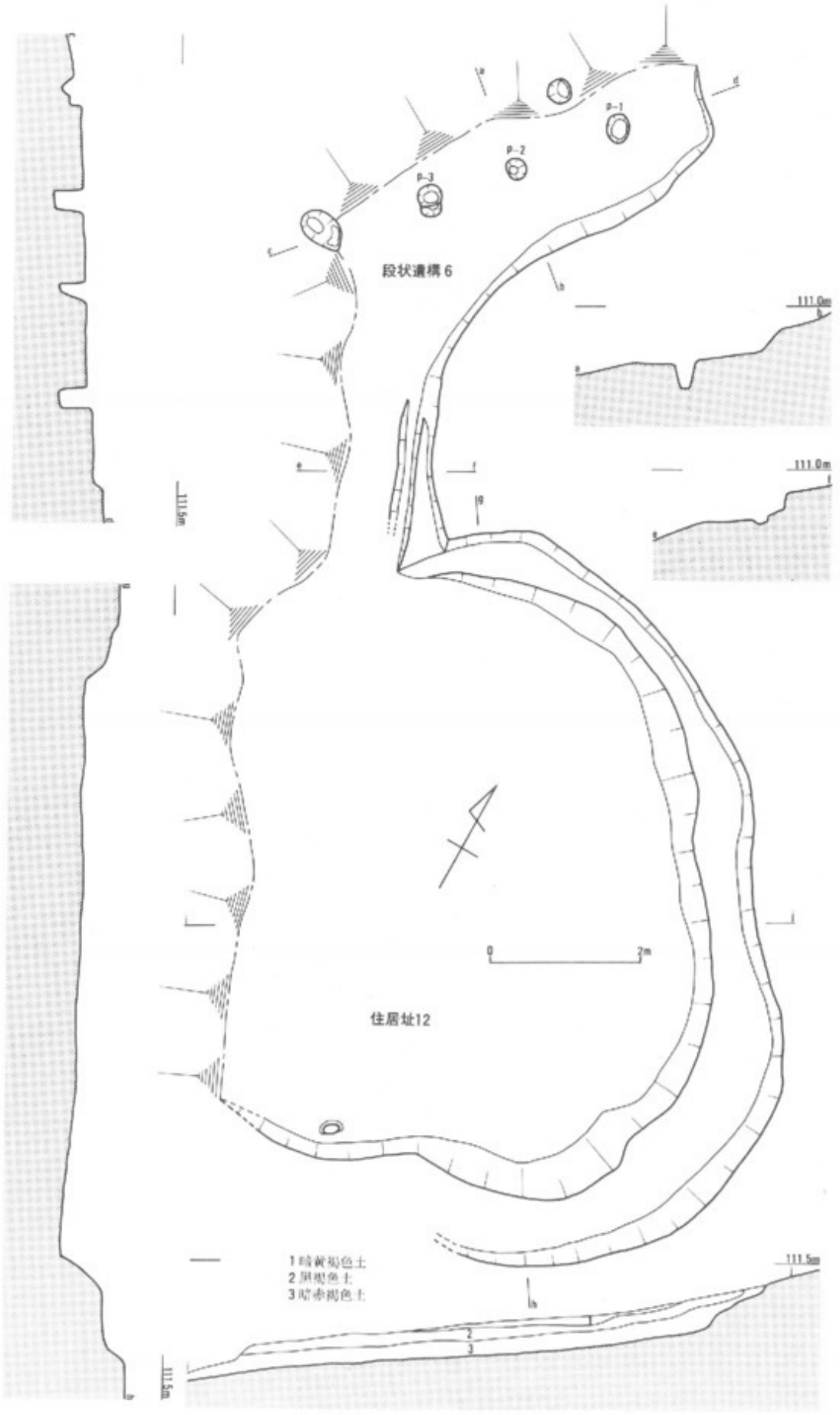
1は埋土中出土の砥石である。砥面は表面1面だけの使用である。凝灰岩製。2・3は磨製石庖丁である。2は床面からの出土であり、緑色片岩製である。欠損品であり、刃部は欠けている。3は埋土中の出土である。粘板岩製である。大きく欠損しており、残存部はわずかである。

住居址12（第54図）

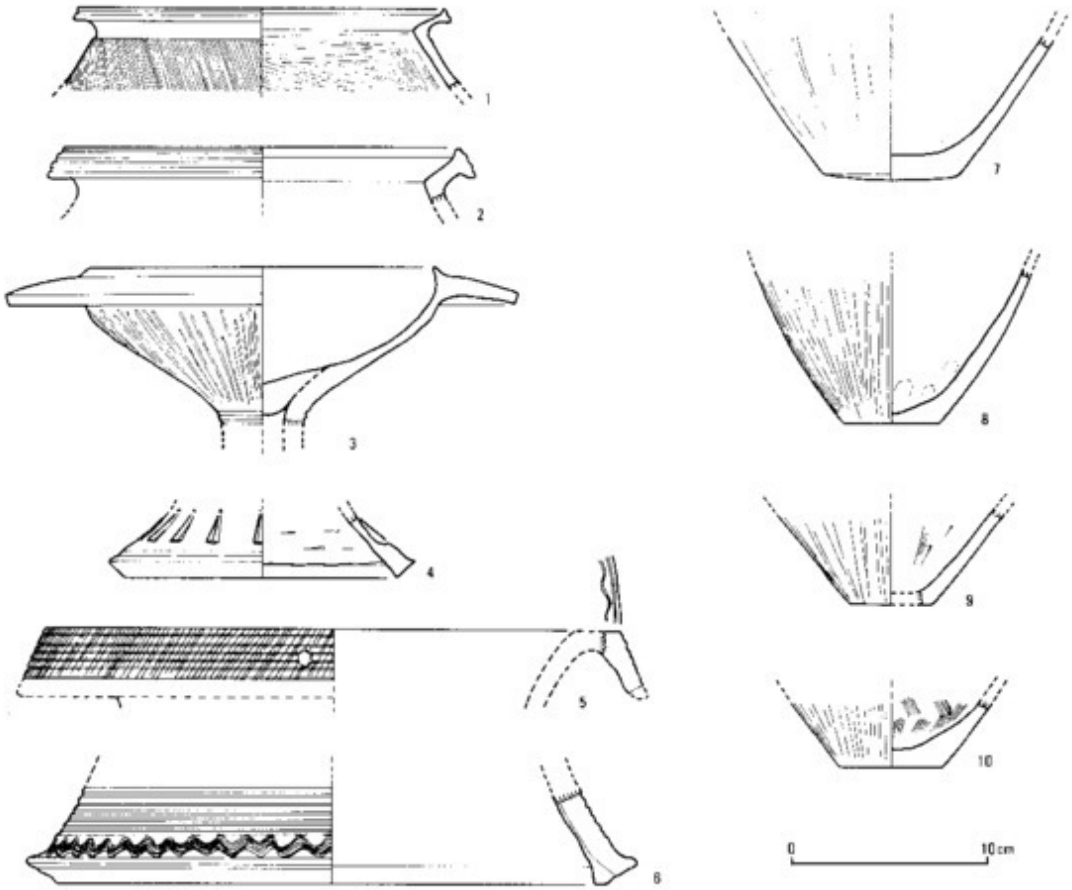
調査区西端、丘陵西斜面に位置する。北側に位置する段状遺構6と重複する。両者の先後関係は不明である。斜面下方側は流失しており壁は残存しない。本遺構は通常の住居址そのものとは異なるが、住居構築途上の状態のものであると考えられ、住居址に分類した。径約8mの竪穴を掘り下げただけの状態である。床面は凹凸がはげしく、斜面下方にむけかなり傾斜している。床面には壁溝、中央穴、柱穴、床溝など住居構成要素である全ての付属施設をもたない。従って、床面も完成していない状態と考えることができる。遺物としては住居址内南側壁よりに床面よりやや浮いた状態で高杯形土器杯部が完形で出土した他は、埋土中に若干量の土器が出土しただけである。

住居址12出土土器（第55図）

1・2は甕形土器である。ともに頸部から「L」字状に外反する口縁部をもつ。1は端部が拡張しないのに対し、2は上下方向に大きく拡張する。内傾した端面には両者とも凹線文をもつ。3・4は高杯形土器である。3は椀状の杯部に水平よりやや下方に張り出す口縁部をもつ。上端部は上方につまみ上げている。脚部付近には凹線文がめぐる。脚部との接合は円盤充塡により行なわれている。4は脚部下端である。外面には三角形透し孔が位置する。器壁厚の半分しか穿たれず貫通しない。5・6は器台形土器である。5のやや内傾した端面には凹線文をめぐら



第54図　住居址12、段状遺構6　平面・断面図（S＝1：80）



第55図　住居址12出土土器（S＝1：4）

せた後、斜方向の刻目文を連続して施し、さらにその上を円形浮文で加飾している。口縁部水平面には櫛描波状文が観察される。6は脚部である。残存部外面上位には凹線文をめぐらし、最下位は櫛描波状文という文様構成である。端部は外方に拡張している。

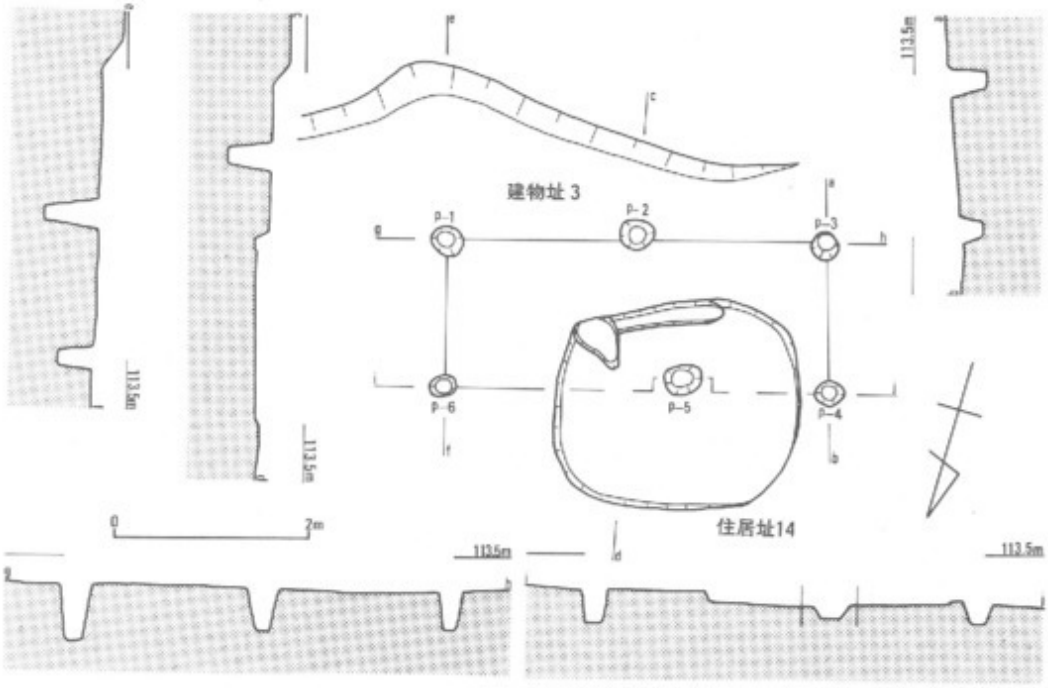
住居址13（第23図）

住居址2と重複して検出された。新旧関係は把握できなかった。1辺約1.5mを測る隅丸方形プランを呈す非常に小型の竪穴遺構である。柱穴は各コーナーに1ケ所ずつ壁に接して検出された。各柱穴間は約1mを測る。中央穴、壁溝は検出されなかった。遺物は全く出土せず時期不明である。住居址に分類したが、あまりにも小規模なため別の機能を考えた方が妥当であるかも知れない。類例として門前池遺跡土壙3（註3）をあげることができる。

住居址14（第56図）

調査区中央北斜面上位に位置する。建物址3と重複して位置する。P-5との切り合いから建物址の方が古く、本遺構の方が新しい。長軸約2.5m、短軸約2mを測る不整円形の竪穴遺構

である。南壁部分だけに壁溝が検出された。深さは約15cmを測り非常に浅い。遺物は出土しなかったため時期不明である。本遺構も通常の住居址とは異なるが便宜上住居址に分類した。



第56図　住居址14、建物址3平面・断面図（S＝1:80）

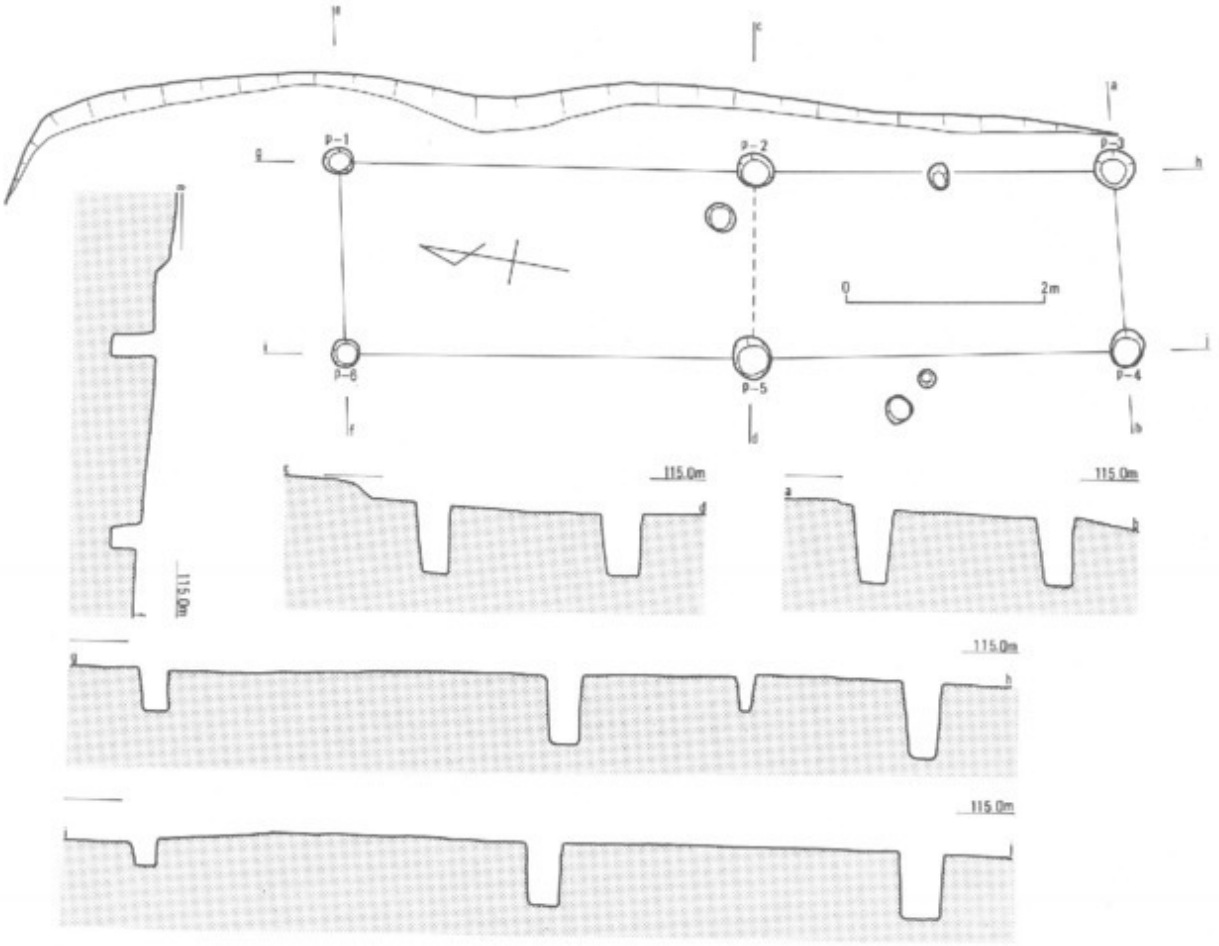
2　建物址

建物址1（第57図）

調査区東側丘陵頂部に桁行方向がほぼ南北方向に重なるように位置する。すなわち、桁行方向が丘陵稜線に直交する。本遺構を境に西側から先端部にかけて遺構が密集する。東側には古墳時代の土壙墓1基が存在するだけである。丘陵の山側を断面「L」字状に削平し、平坦面を形成する。この平坦面上に桁行2間、梁間1間の建物が位置する。梁間はP-1～P-6間2m、P-3～P-4間1.9mを測る。桁行はP-1～P-2間4.2m、P-2～P-3間3.7m、P-4～P-5間3.8m、P-5～P-6間4.2mを測る。P-1、P-6は他の柱穴に比べてやや浅く径も小さい。また、1間×2間の建物にしてはあまりにも桁行が長いことから、P-2、P-3、P-4、P-5の4本柱で構成される1間×1間の建物になることが考えられる。遺物は造成面埋土中より出土し、柱穴内からは出土しなかった。

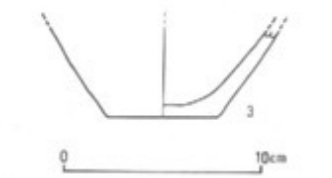
建物址1出土土器（第58図）

いずれも造成面埋土中より出土した。柱穴内の出土でないため時期を考えるのに不確定な要因ともなるが、本遺構との関連で取り扱うことにする。1は壺形土器口縁部である。内傾する端面には凹線文をめぐらしその上を斜方向の刻目文で加飾している。2は甕形土器である。口



第57図　建物址１平面・断面図（S＝1:80）

縁端部は肥厚し、やや拡張する。端面は内傾し凹線文をめぐらせている。



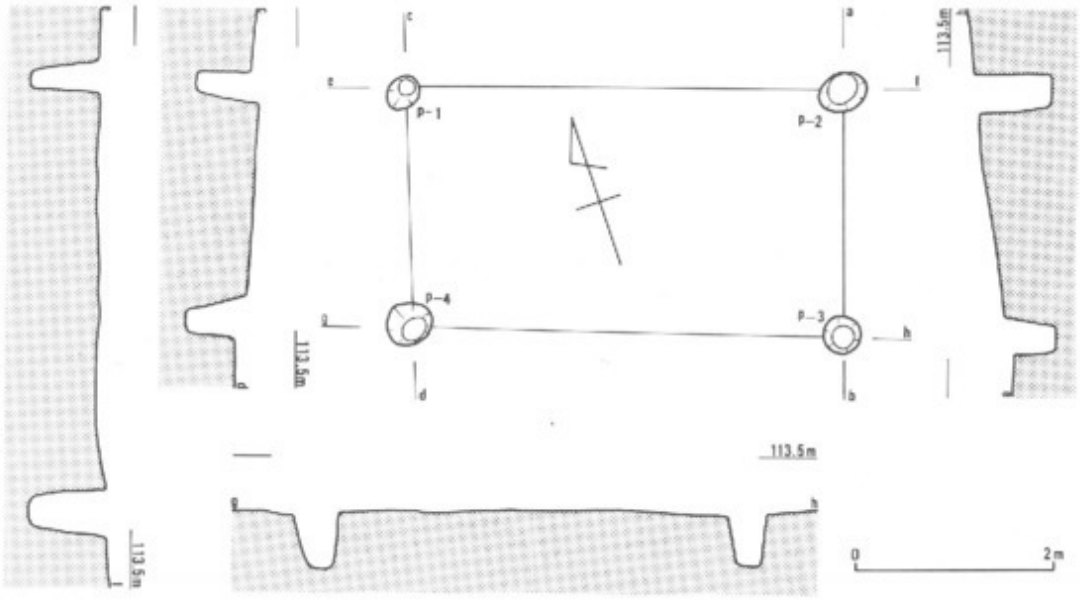
第58図 建物址１出土土器（S＝1:4）

建物址２（第59図）

住居址４の西方、丘陵南斜面に位置する桁行１間、梁間１間の建物である。桁行方向は等高線走向に平行する。P-1～P-2間4.5m、P-3～P-4間4.4m、P-1～P-4間、P-2～P-3間は2.5mを測る。各柱穴とも底面のレベルはほぼ同一である。P-1埋土中より唯一土器片が出土した。

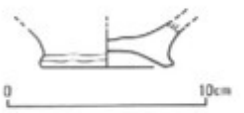
建物址２出土土器（第60図）

底部だけであり器種を識別するまでには及ばない。底部は上げ底状を呈す。端部はやや張り



第59図　建物址２平面・断面図（Ｓ＝１:80）

出し高台状をなすが、明確な高台を呈すにはいたらない。胎土は密で、焼成良好である。黄灰色を呈す。



第60図 建物址２出土土器（Ｓ＝1:4）

建物址３（第56図）

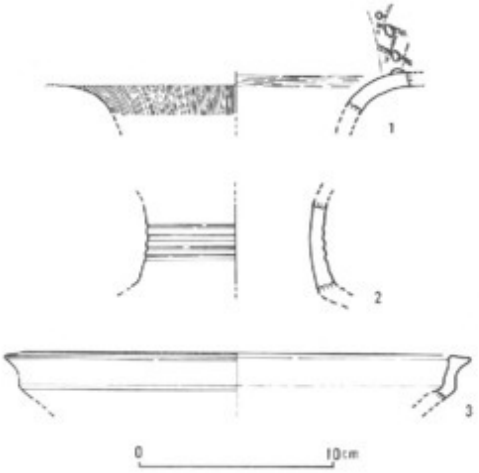
丘陵北斜面上位、住居址14と重複して位置する。新旧関係は本遺構の方が古い。桁行２間、梁間１間の建物である。桁行方向は等高線走向に平行する。南側丘陵上位には段が認められるが、これは本建物址建設に先立つ平坦面形成に伴なうものである。このことにより斜面部に平坦面を確保し、建物の平面を保障しているのである。Ｐ－５はやや西よりにずれて位置する。Ｐ－１～Ｐ－２間２ｍ、Ｐ－２～Ｐ－３間1.9ｍ、Ｐ－３～Ｐ－４間、Ｐ－１～Ｐ－６間は1.5ｍを測り、小規模な建物址である。遺物は柱穴内からの出土はなく、造成面埋土中の出土である。

建物址３出土土器（第61図）

１・２は壺形土器である。１は頸部から大きく外反し、水平方向に張り出した口縁部をもつ。水平面には複数の条線による斜格子目文を施し、その上を円形浮文で加飾している。２は筒状の頸部に凹線文をもつものである。３は高杯形土器である。皿状の杯部から上方にのびた口縁部をもつ。口縁端部は外方へ水平方向に張り出す。

建物址４（第62図）

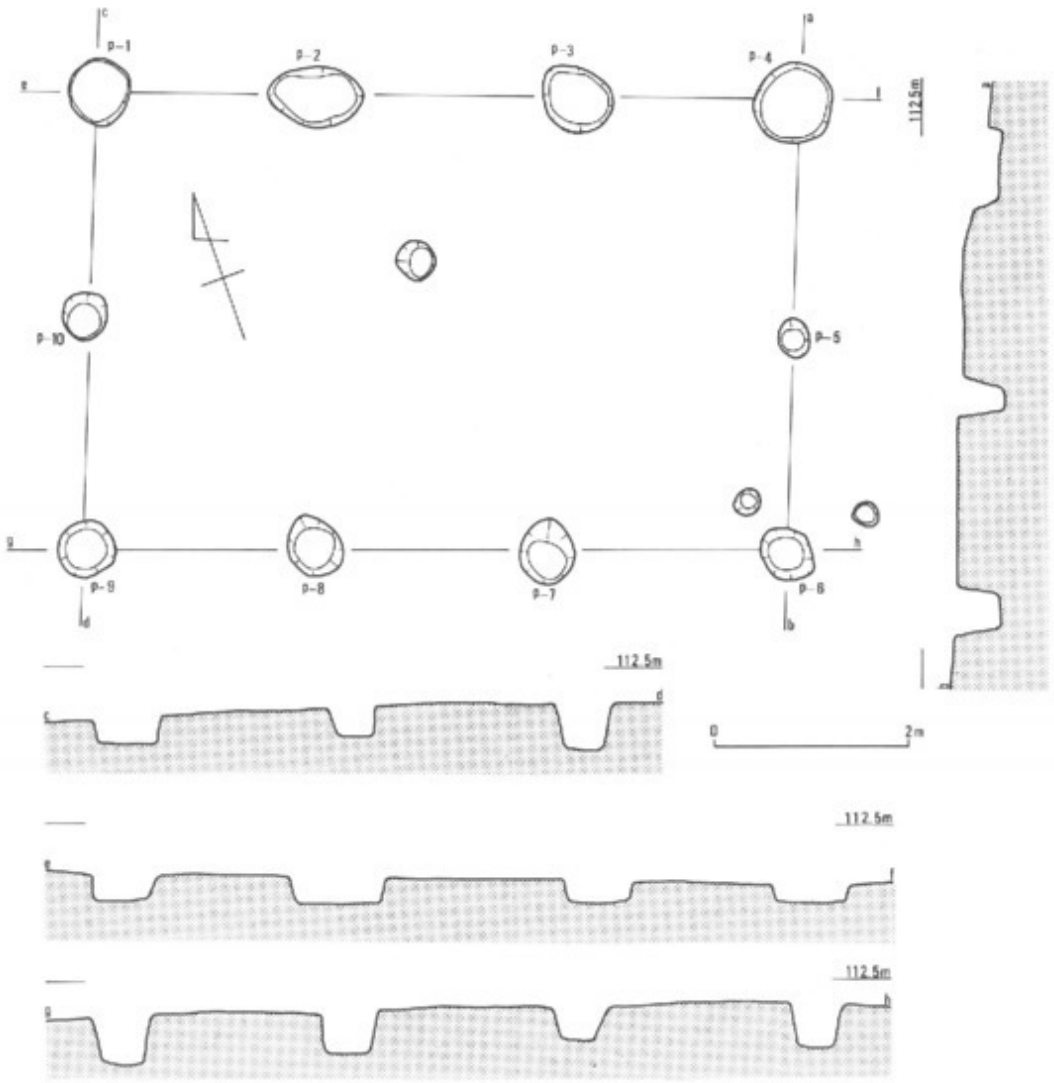
調査区西側丘陵頂部の平坦な場所に位置する。桁行３間、梁間２間の建物址である。桁行方向はほぼ等高線走向に平行して位置する。桁行Ｐ－１～Ｐ－４間、Ｐ－６～Ｐ－９間ともに7.2ｍ、梁間Ｐ－４～Ｐ－６間4.6ｍ、Ｐ－１～Ｐ－９間4.7ｍを測り非常に大規模な建物址である。両妻側中央柱穴は他の柱穴に比べ、径も小さく浅い。いずれの柱穴からも遺物は出土しなかった。



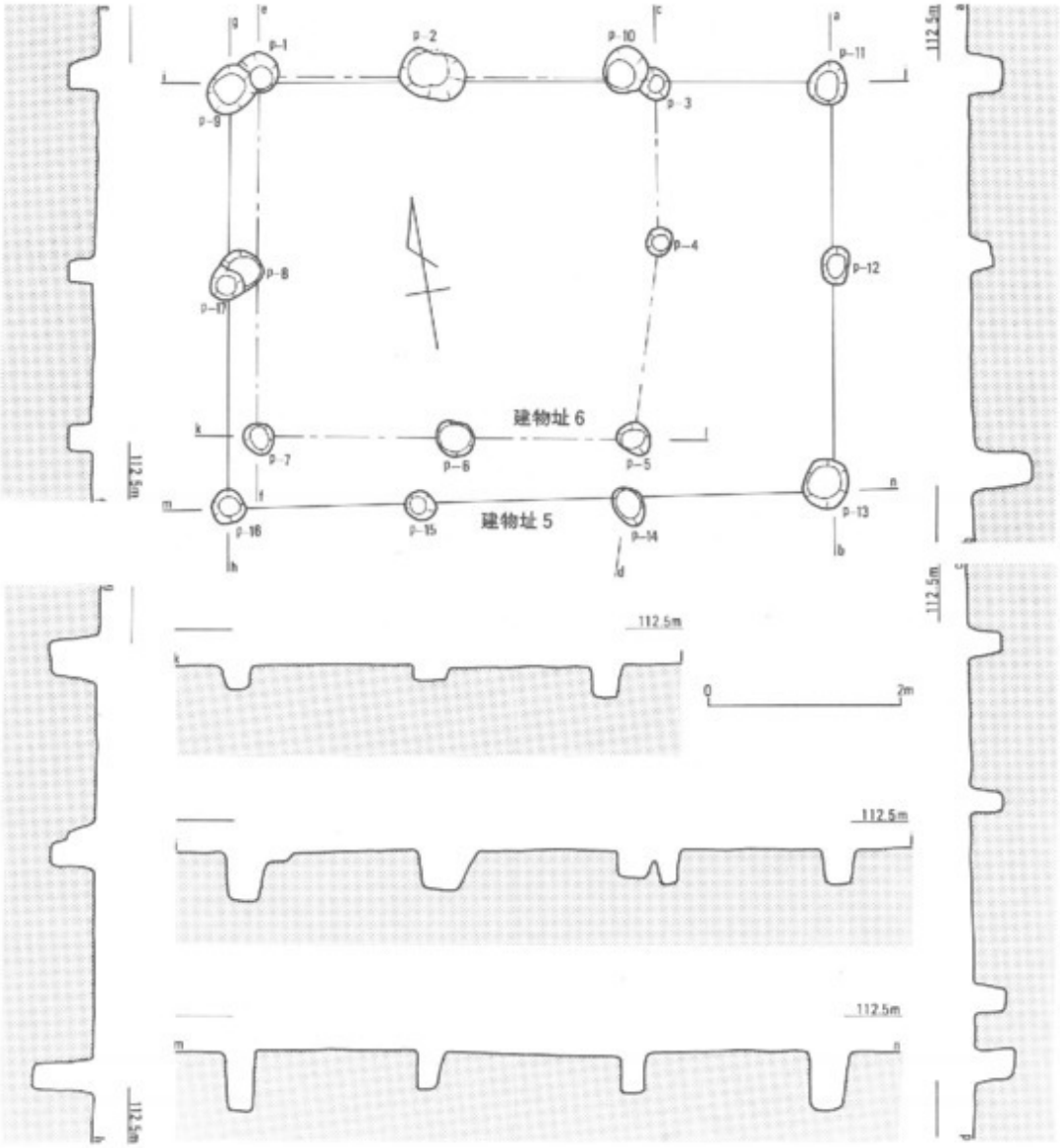
第61図　建物址３出土土器（Ｓ＝１：４）

建物址５（第63図）

建物址４の南、丘陵頂部に位置する桁行３間、



第62図　建物址４平面・断面図（Ｓ＝１：80）



第63図　建物址５・６平面・断面図（S＝1:80）

梁間２間の建物である。建物址６と重複する。柱穴の切り合い関係により建物址６の方が古く、建物址５の方が新しい。建物址４と同一の構造であるが、規模の点において建物址５の方がやや小規模である。桁行P-９～P-11間、P-13～P-16間ともに6.2m、梁間P-９～P-16間4.4m、P-11～P-13間4.2mを測る。両妻側中央柱穴は他の柱に比べ、径も小さく浅い。P-11、P-16より須恵器細片が出土した。

建物址６（第63図）

建物址５と重複して位置する。桁行２間、梁間２間の建物である。本建物址の方が古く、建

物址５の方が新しい。P－１～P－３、P－８は建物址６の柱穴とほぼ同一の場所に位置することから、建て替えの際に拡張したものと考えられる。P－４、P－８はやや外側に張り出す傾向にある。P－１～P－３間4.1ｍ、P－３～P－５間3.7ｍ、P－５～P－７間3.9ｍ、P－１～P－７間3.8ｍを測る。P－３より須恵器片が出土した。

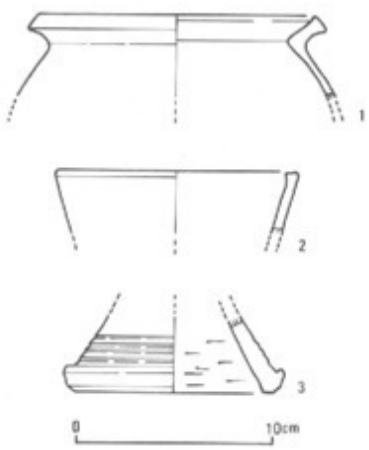
３　段状遺構

段状遺構１（第64図）

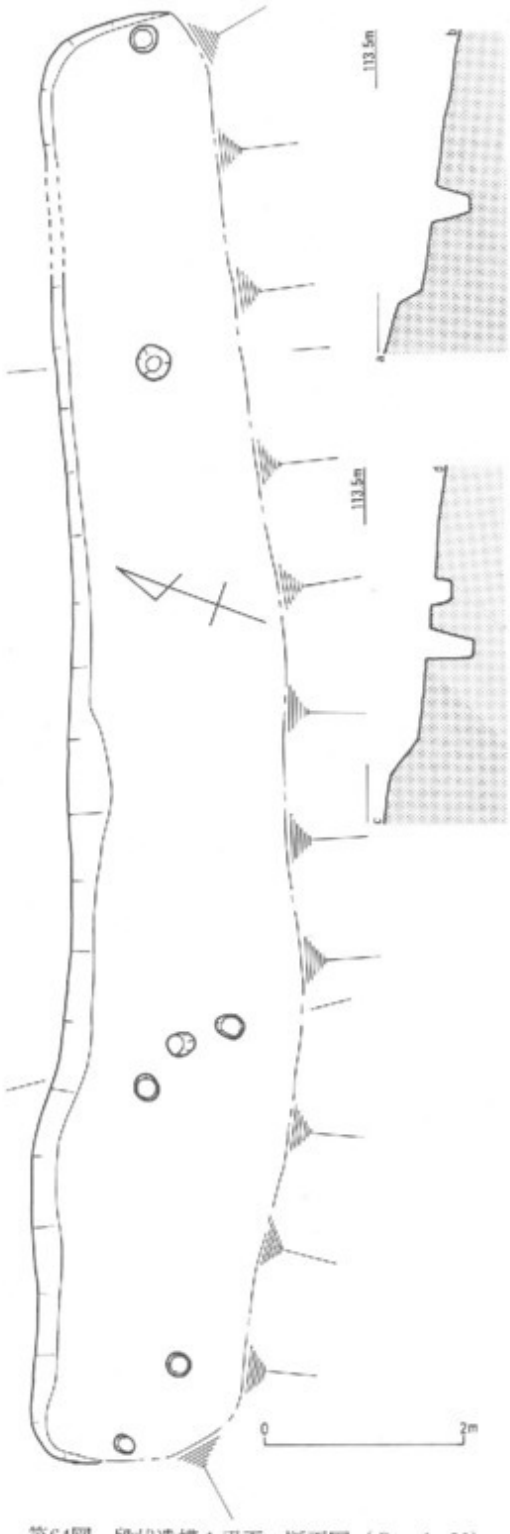
調査区東側南斜面、等高線走向に沿って位置する。丘陵斜面を断面「L」字状に削り出し、長さ約14.5m、幅約２ｍの平坦面を形成している。平坦面には数個のピットが検出されたが、建物の柱穴配置を示すものはない。壁面直下には溝をもたず、平坦面にも焼土面をもたない。遺物としては埋土中より若干の土器片が出土しただけである。

段状遺構１出土土器（第65図）

１は甕形土器である。頸部から「L」字状に外反した口縁部をもつ。端部は拡張せず内傾し、つまみ上げているだけである。２は直口壺と考えられる。ほぼ上方に延びた口縁部をもち、端面は水平で、端部は内側につまみ出している。３は高杯形土器脚部である。外面下位には凹線文をめぐらす。内面は横位のヘラ削り仕上げである。



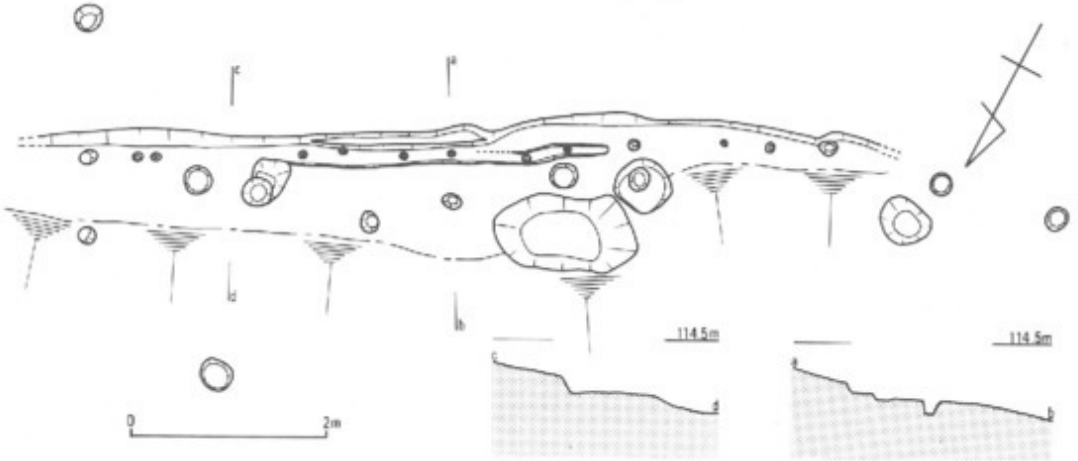
第65図 段状遺構１出土土器（S＝1:4）



第64図　段状遺構１平面・断面図（S＝1:80）

段状遺構２（第66図）

調査区東側北斜面、等高線走向に沿って位置する。丘陵斜面を断面「Ｌ」字状に削平し、長さ約９ｍ、幅約１ｍの平坦面を形成している。壁面直下には杭状ものを打ち込んだと考えられる小柱穴が一列に並んだ状態で検出された。また、中央部には幅約15cmを測る浅い溝が部分的に検出された。平坦面には柱穴と考えられるピットが数個検出されたが建物配置になるものはない。遺物は埋土中より若干の土器片が出土しただけである。



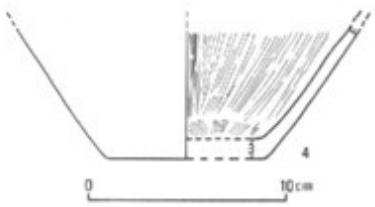
第66図　段状遺構２平面・断面図（Ｓ＝１:80）

段状遺構２出土土器（第67図）

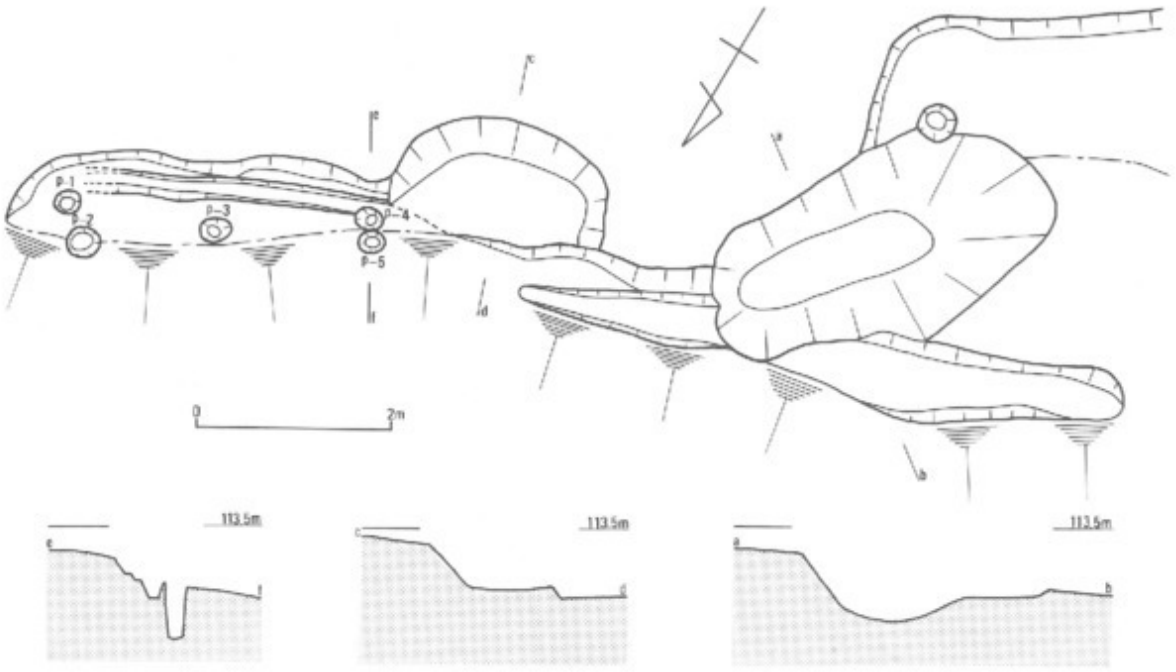
１は内傾した口縁端面に凹線文をめぐらす壺形土器である。２は頸部から「Ｌ」字状に外反した口縁部をもつ甕形土器である。端部は上方にややつまみ上げている。３は壺形土器底部である。

段状遺構３（第68図）

段状遺構２の北側、斜面下方等高線走向に平行して位置する。西半は土壙状の落ち込み、あるいは溝状の落ち込みにより削平を受けており、本遺構の全体像は不明である。従って、東半について記述する。丘陵斜面を断面「Ｌ」字状に削り出し、幅約80cm程の平坦面を形成する。壁面直下には幅約20cmの浅い溝を掘り込む。平坦面にはＰ－１、Ｐ－３、Ｐ－５の柱穴が壁に平行するよう等間隔で配されている。Ｐ－２、Ｐ－４はやや浅く、別の柱穴と考えられる。平坦面埋土中より石鏃１点、若干の土器が出土した。



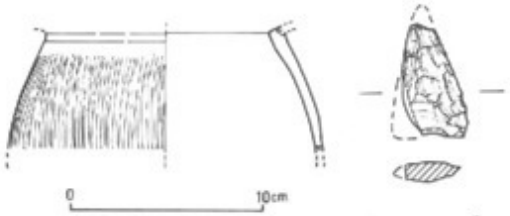
第67図 段状遺構２出土土器（Ｓ＝1:4）



第68図　段状遺構３平面・断面図（Ｓ＝１:80)

段状遺構３出土土器（第69図）

図示できるものは唯一である。甕形土器である。外面は縦方向のハケ目仕上げである。



第69図 段状遺構３出土土器(Ｓ=1:4)

段状遺構３出土石器（第70図）

サヌカイト製石鏃である。先端部と脚部左位を欠く。

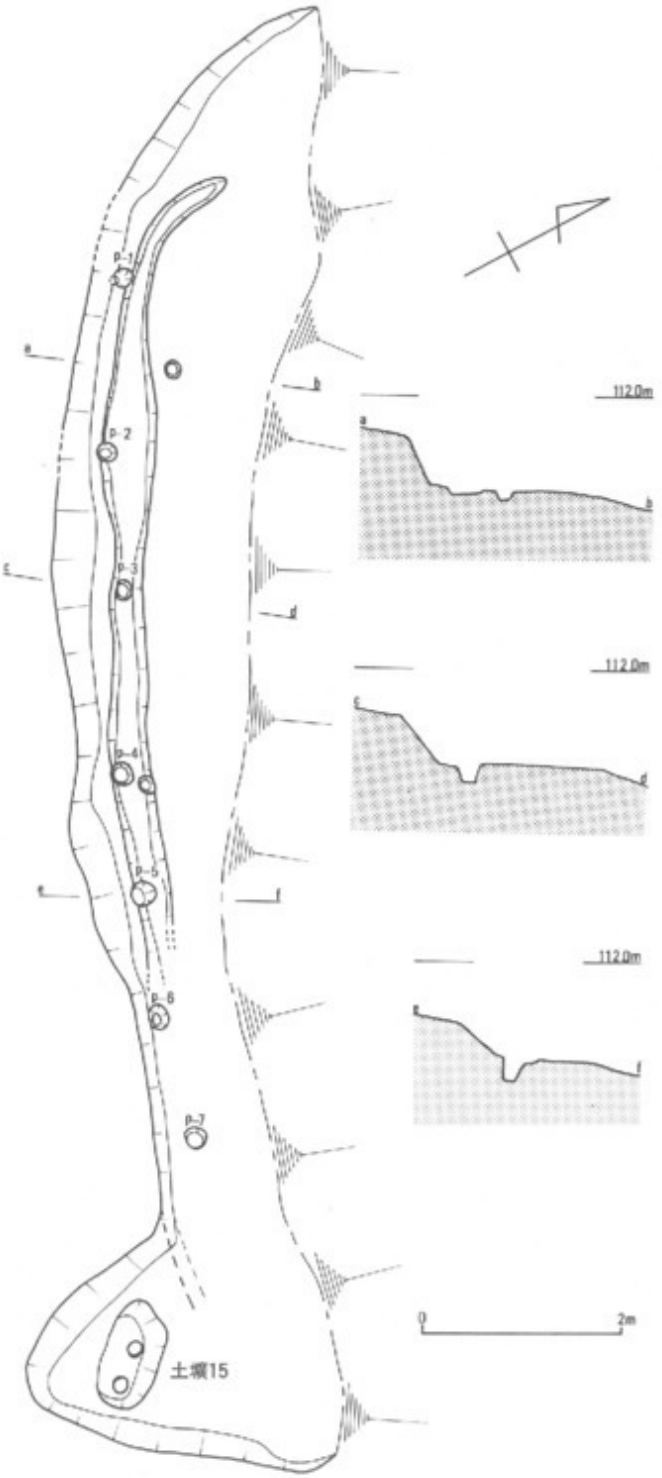
第70図 段状遺構３出土石器(Ｓ=2:3)

段状遺構４（第71図）

住居址４の北側、北斜面等高線走向に沿って位置する。斜面を断面「Ｌ」字状に削平し、長さ約13cm、幅約１.５ｍを測る平坦面を形成している。東端は土壙15と重複している。壁は直線ではなく、ゆるやかにカーブを描いている。このカーブに沿うように溝が位置する。また、壁に沿って杭状のものを打ち込んだような小柱穴がＰ-１～Ｐ-７の７ケ所に検出された。焼土面は確認できなかった。遺物は埋土中と床面より若干量が出土した。

段状遺構４出土土器（第72図）

１・４・６は壺形土器である。１は筒状の頸部に回線文をもつものである。４はあまり類例の知られていないものであり、本遺跡住居址４出土土器例（第29図３）が類似土器としてあげられるだけである。この土器の特徴としては、胴最大径に対して非常に小さい頸部をもつこと。



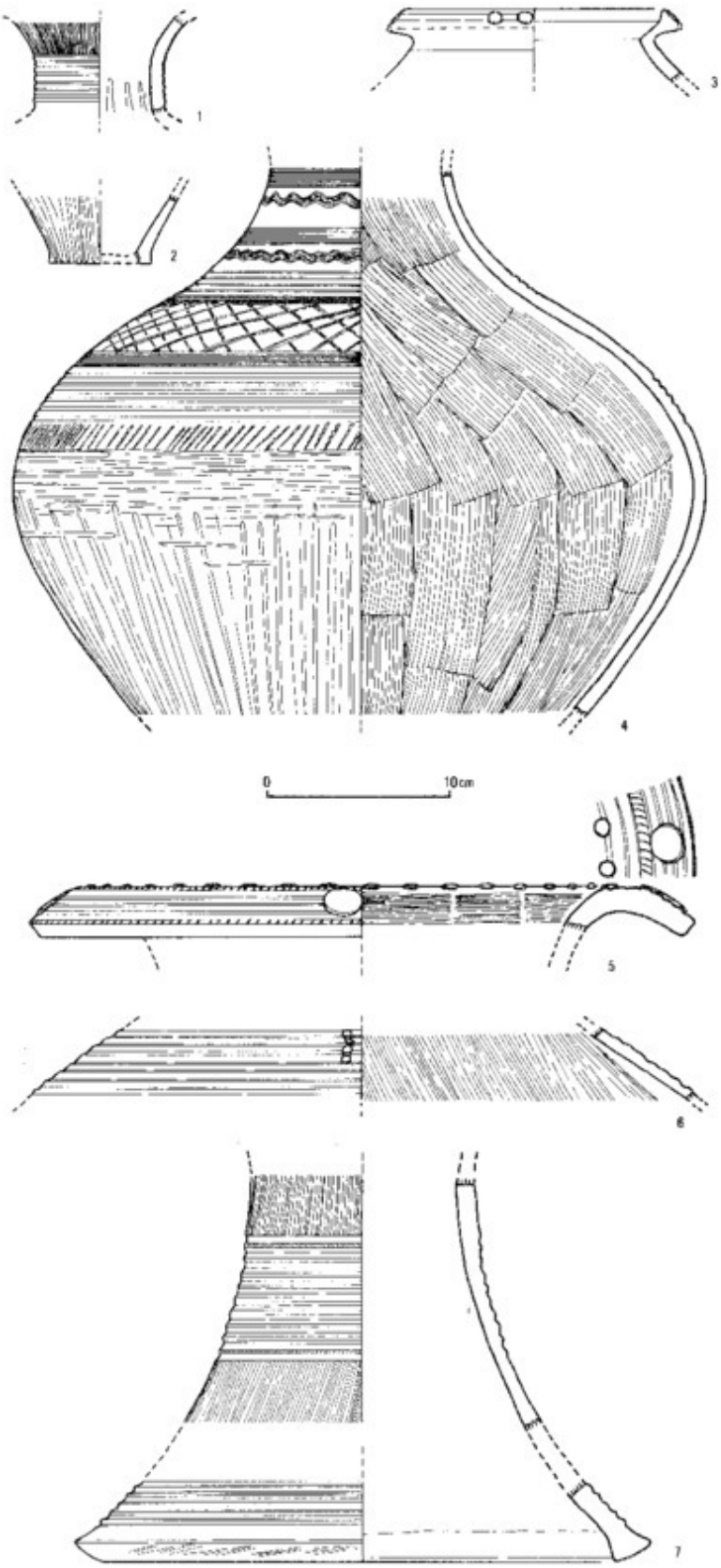
第71図　段状遺構４平面・断面図（S＝1：80）

またこの種の土器の頸部に普遍的にみられる凹線文をもたず、代わりに櫛描文を用いていること。頸部に斜格子目文を用いていることなどがあげられる。外面の文様構成は上位から櫛描直線文、櫛描波状文を交互にくり返し、５条の沈線文をめぐらす。凹線文ではなく明確な沈線文である。さらに櫛描直線文、複数条線の斜格子目文、櫛描直線文、６条の沈線文、貝殻腹縁による連続刺突文と続く。さらに下位は横位のヘラ磨き、縦位のヘラ磨き仕上げとなる。ヘラ磨きは非常にていねいである。床面より出土した。６は小破片であるが、壺形土器肩部付近と考えられる。外面は凹線文の上に円形浮文の加飾がみられる。３は端面に円形浮文をもつが、器形から甕形土器に分類した。頸部から「L」字状に外反し、端部に近づくにつれて肥厚する口縁部をもつ。端部はやや上下に拡張する。５・７は器台形土器である。５はゆるやかに弧を描いて斜め下方に外反した口縁部をもつ。明確な水平面は形成せず、内面から端面にかけて連続している。上面、端面はともに凹線文をめぐらせた後に円形浮文で加飾している。上面と端面との境界は爪状の刺突文を連続することによりうめている。７は胴部下半から脚部にかけての破片である。外面は縦方向のハケ目を施した後、凹線文をめぐらせている。このため上位の凹線文帯の上端と

下端にはハケ目痕跡がわずかに観察される。端部はあまり拡張しない。端面は平坦でハケ目痕跡が残る。床面より出土した。

段状遺構5（第73図）

丘陵西側南斜面等高線走向に沿って位置する。中央部で住居址11、東端で住居址10と重複する。新旧関係は本遺構が古く廃棄後2軒の住居址が新設されている。丘陵斜面を断面「L」字状に削平し長さ約20m、幅約2.5mの平坦面を形成している。平坦面には壁から約1.5mの距離をおいて壁に平行するように12個の柱穴が並ぶ。P－1～P－12間は14.2mを測る。柱穴の深さはP－10だけが約1mを測り非常に深い。他は約50cmを測りほぼ均一である。平坦面から斜面に移行する位置に長さ約9m、幅約25～70cm、深さ約20cmを測る浅い溝が柱穴列に沿って位置する。溝の東端には不整円形の焼土面が検出された。段状遺構に伴なうものと

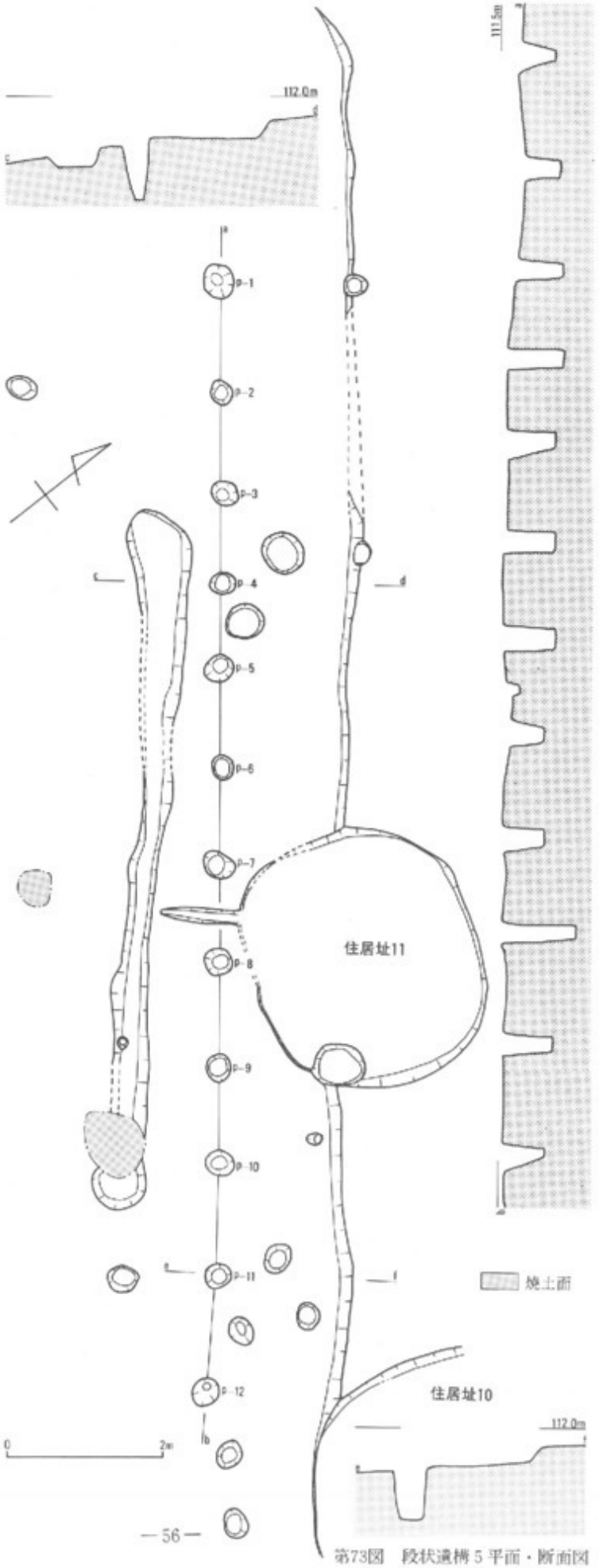


第72図　段状遺構4出土土器（S＝1：4）

考えられるこの焼土面は溝埋土上面を覆っていた。このことから、溝は段状遺構に直接付設していたものではなく一時期古い段階のものと考えることができよう。さらに溝中央部斜面下位にも小規模の焼土面が検出された。遺物は平坦面埋土中及びP－4、P－6、P－7P－11、P－12より若干量の土器と埋土中より2点のサヌカイト片が出土した。

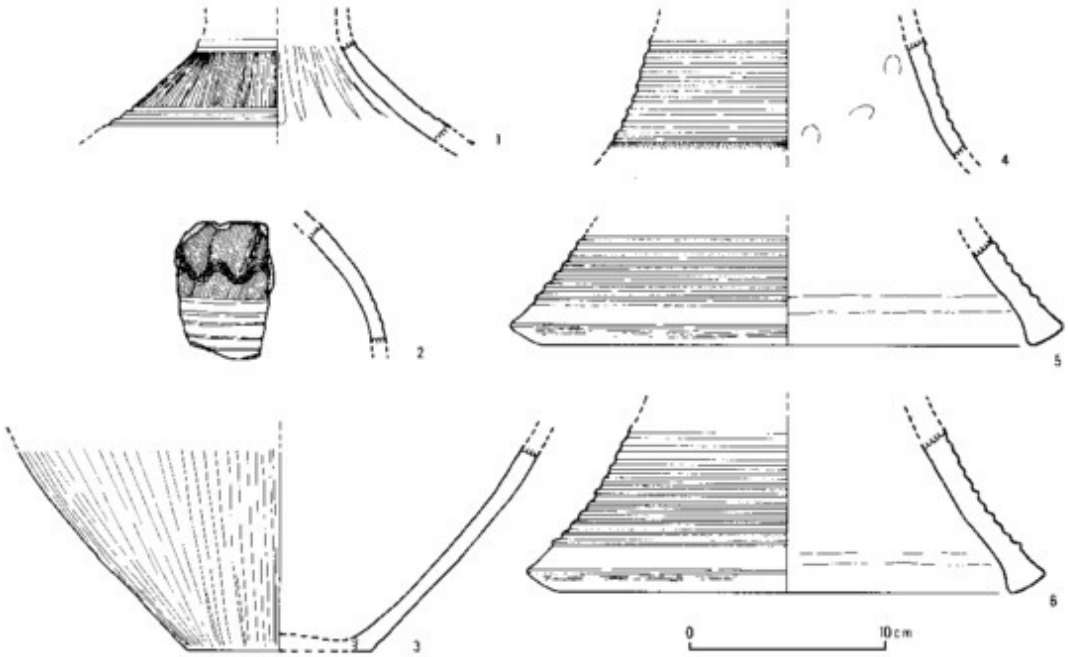
段状遺構5出土土器（第74図）

1～3は壺形土器である。1は頸部に凹線文をもつものである。頸部から肩部にかけても凹線文がみられる。2は胴部上位に凹線文をめぐらし、さらに上位に櫛描波状文を施している。両者とも地文は縦方向のハケ目である。2はP－6より出土した。3は壺形土器底部である。P－12から出土したが、同一個体の破片がP－6からも出土している。4～6の器台形



第73図　段状遺構5平面・断面図（S＝1:80）

土器である。4はP－12から出土した。凹線文の下位にはわずかにハケ目が観察される。5・6は埋土中の出土である。両者とも凹線文は鋭角に施されており稜を形成する。脚端面にはハケ目が部分的に残る。



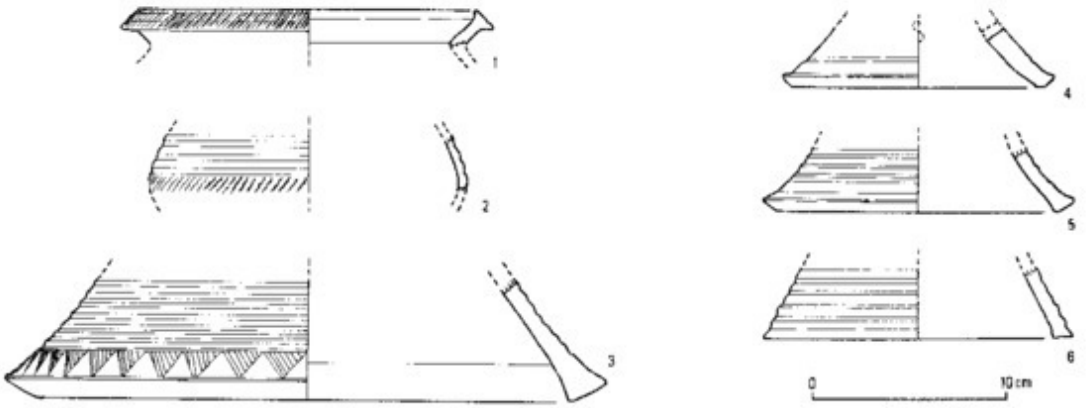
第74図　段状遺構5出土土器（S＝1：4）

段状遺構6（第54図）

丘陵西端斜面部に孤を描くように等高線走向に沿って位置する。南端は住居址12と重複する。等高線走向に沿って丘陵を削平し、平坦面を形成する。平坦面には3個の柱穴が直線上に並ぶ。南側には壁に沿って長さ約2m、幅約20cmの溝が部分的に検出された。遺物は埋土中より若干の土器が出土した。

段状遺構6出土土器（第75図）

1は甕形土器である。口縁端部は上下に拡張し内傾する端面にはわずかに凹線文をめぐらせた後、斜方向の連続刻目文で加飾している。2は小型の壺形土器胴部である。外面上位は凹線文、下位は貝殻腹縁による連続刺突文を用いている。3は器台形土器である。外面端部上位は鋸歯文を施し、平行する斜線文で間を埋めている。通常の施文方法と異なる点は鋸歯文を施す際にできる上下の三角形の上位の三角形部分に斜線文を用いていることである。4～6は高杯形土器脚部である。4・5は下方にいくにつれて、ゆるやかに外反し端部にいたるのに対し、6は直線的である。6は端部が肥厚せず下端まで凹線文がめぐるなどやや異質な感じをうける土器である。



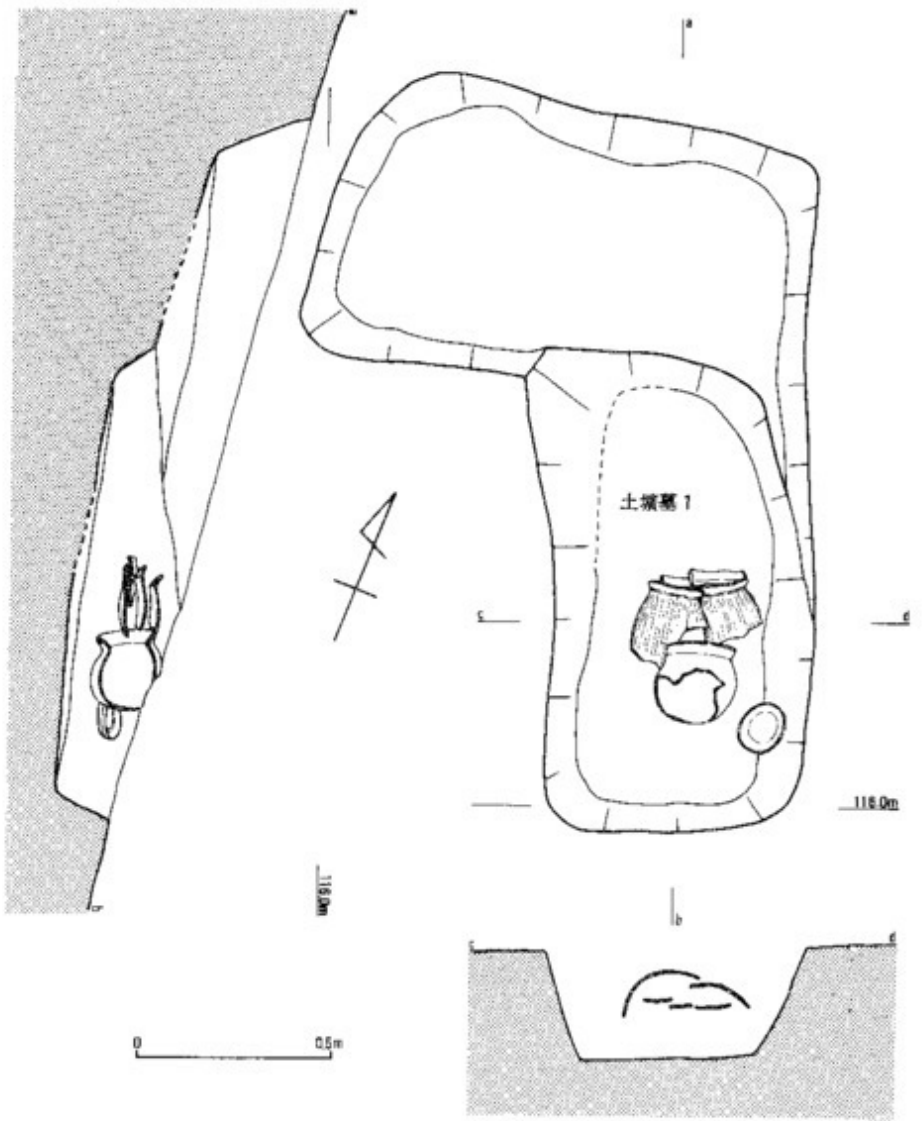
第75図　段状遺構６出土土器（Ｓ＝１：４）

４　土壙墓

土壙墓１

（第76図）

調査区東端南斜面下方、Ｆ－17区に単独で位置する。掘形長辺約1.2ｍ、短辺約65cmを測る方形プランを呈す。長辺は等高線走向に直交する。ほぼ中央部からは床面からやや浮いた状態で土師器２個体が出土した。また隣接して東側から

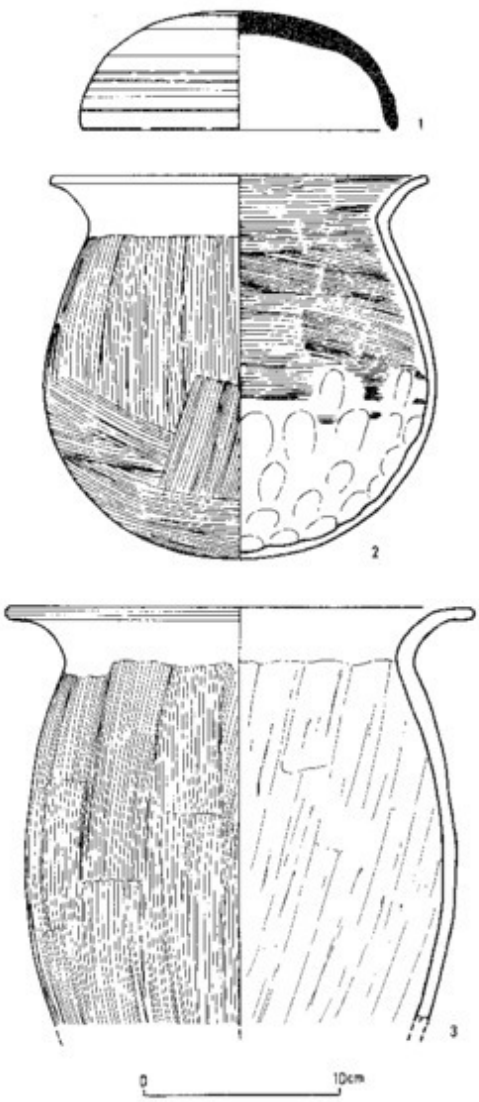


第76図　土壙墓１遺物出土状態平面・断面図（Ｓ＝１：20）

は須恵器杯蓋が出土した。土師器は底部を欠くものと完形のものが、底部と口縁部を合わせるようにして出土した。このことから甕棺として使用されていたことが想定される。本遺構の北側上位に方形の土壙が重複するが、これは埋土がボソボソの土であること、壁がしっかりしてないことから遺構として認定しない方が妥当かも知れない。

土壙墓１出土土器（第77図）

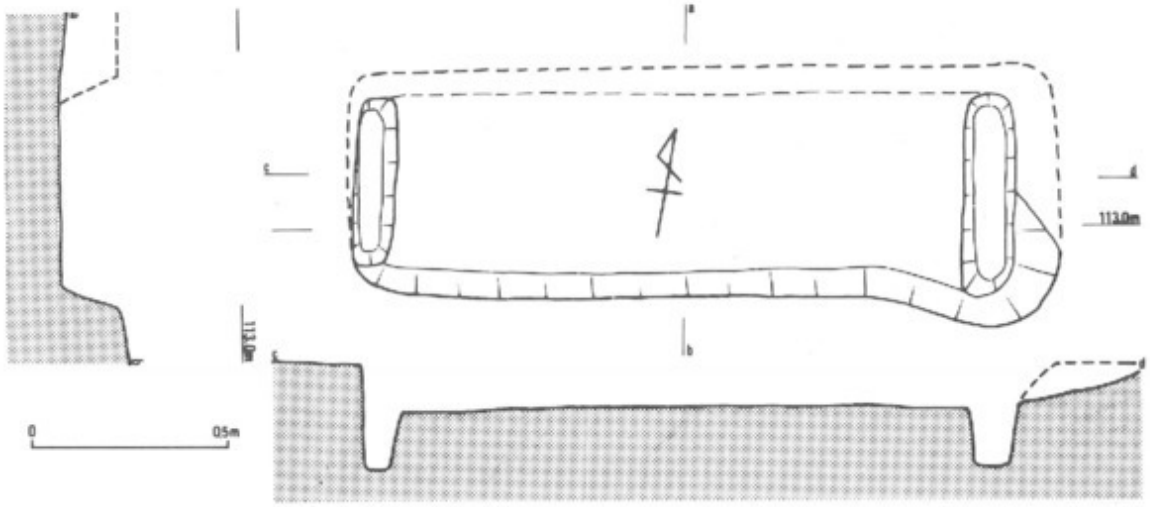
１は須恵器である。非常に歪みが大きく、口縁部は楕円形を呈している。実測図は歪みを修正して図化した。天井部と口縁部を画する沈線がわずかに観察される。胎土には大粒砂粒を多量に含む。色調は暗青灰色を呈す。２・３は甕棺として使用されていた土師器である。２は口径19.2cm、器高19.7cmを測る。外面は頸部から胴部にかけて縦方向のハケ目を施した後、これを消すかのように底部付近では横位のハケ目を施している。内面は胴部下半は指頭圧痕かナデ、上半は横位のハケ目仕上げである。赤褐色を呈し、胎土には２～３mm大の大粒砂粒を多量に含む。３は底部を欠く。焼成後意識的に打ち割られている。口径は24.1cmを測る。丸味をおびた２の器形に比べ細長くすんなりした器形である。外面は縦方向のハケ目、内面は頸部より下位は下から上方向へのヘラ削り仕上げである。色調は黄褐色を呈し、胎土には精製土を用いている。



第77図　土壙墓１出土土器（１S＝1：3）
（2·3S＝1：4）

土壙墓２（第78図）

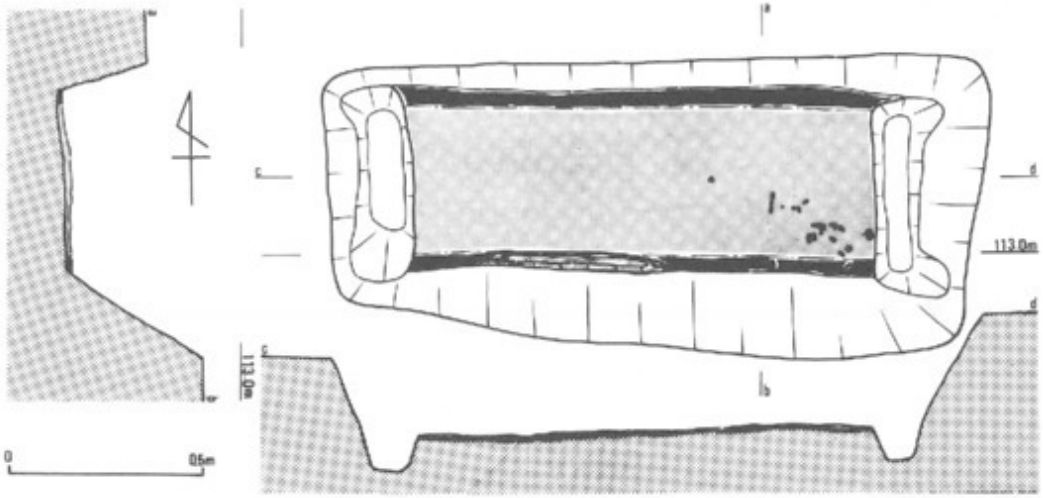
住居址７の東側、溝１と重複して位置する。南にはほぼ平行して土壙墓３が位置する。溝１によって切られており残存するのは南壁と東西両小口溝だけである。復元推定掘形は長辺約1.8m、短辺約60cmを測る。西小口溝は東小口溝に比べやや幅が狭い。従って西小口溝を基準に考えると木棺幅は約35cmということになる。両小口溝間の心々距離は1.6mを測り、木棺内の大きさは160×35cmという計測値が得られる。長軸はほぼ東西方向に一致する。遺物は出土しなかった。



第78図　土壙墓２平面・断面図（S＝1：20）

土壙墓３（第79図）

土壙墓２の南に平行して位置する。長辺約1.7ｍ、短辺約60～75cmの掘形を掘り込み、東西の壁直下には小口溝をさらに掘り込んでいる。ほぼ床面上でわずかに木棺の側板痕跡を認めた。側板の厚さは約４cmを測る。両小口溝間の心々距離は1.3ｍを測り、木棺内の計測値は130×37cmということになる。遺物としては床面上より石鏃１点、多量の玉類が出土した。他に埋土中より数点の土器片が出土した。床面上の遺物出土状態は第80図に示す通りであり、東小口溝付近に集中した。従って頭位は東方向と考えられる。長軸方向は磁北東西方向と全く一致している。尚、本遺構は残存脂肪酸分析を依頼した。分析結果は後述の通りである。



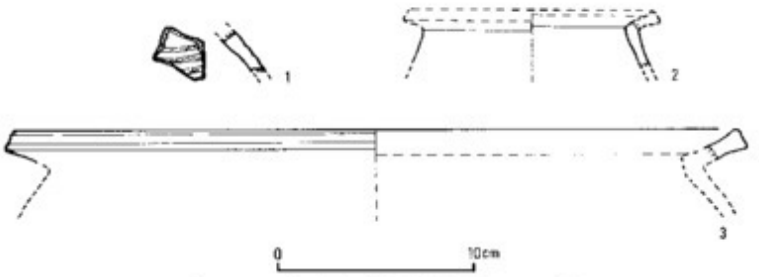
第79図　土壙墓３平面・断面図（S＝1：20）

土壙墓3出土土器

（第81図）

埋土中より数点の小破片が出土した。図示できるものは3点だけである。1は外面に凹線文をもつ器形である。小型の壺形土器の肩部付近に相当するものと考えられる。2は小型の甕形土器である。頸部から「L」字状に外反する口縁部で端部は拡張しないものと考えられる。3は大型の甕形土器口縁部である。やはり頸部から「L」字状に開く口縁部で端部は拡張しない。

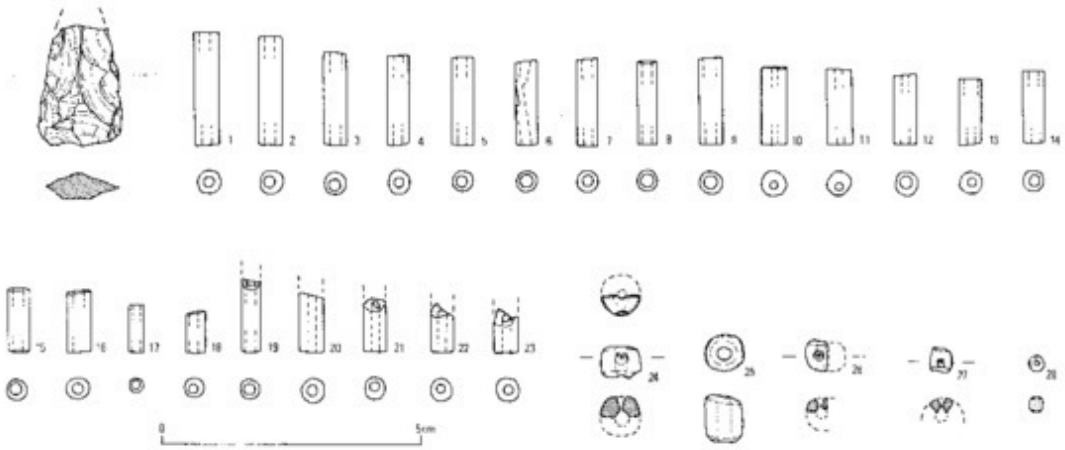
第80図　土壙墓3遺物出土状態（S＝1：4）
（番号は実測図番号と同一である）



第81図　土壙墓3出土土器（S＝1：4）

土壙墓3出土石器（第82図）

先端部を欠く石鏃である。現存長2.4cm、最大幅1.6cm、最大厚0.5cmを測る。東小口溝肩部床面より出土した。風化はほとんど進んでなく濃紺色を呈す。サヌカイト製。



第82図　土壙墓3出土石器・玉類（S＝2：3）

土壙墓３出土玉類（第82図）

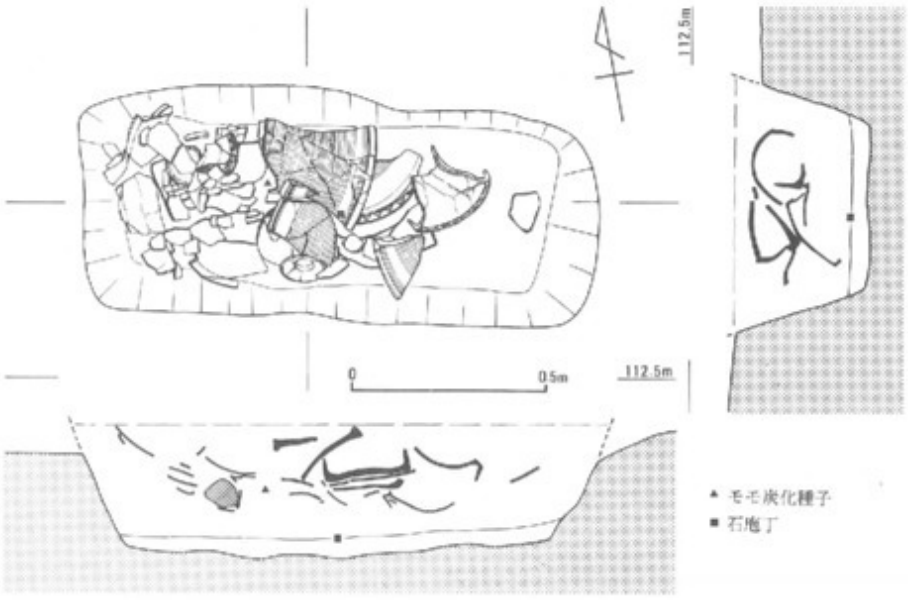
玉類は床面東側20×20cmの範囲に集中して出土した。図示した碧玉製管玉23点、ガラス製小玉５点の計28点の他に、図示し得ない若干の碧玉製管玉破片が出土していることから、数点の増加が予測される。玉類はほとんどが床面から出土したが、中には床面から約20cm近くも浮いて出土したものもある。碧玉製管玉は非常に軟質でもろい。管玉の径は３～５mmを測りほぼ均一であるが、長さは0.9～2.2cmを測りバラエティーに富む。ガラス製小玉25・28は完形であるが、24・26・27は破損品を再利用している。すなわち、最初の穿孔方向に直交して内外面両面から再び穿孔している。このことから、特にガラス玉は貴重なものであったであろうことが予測できる。以下詳細は一覧表に記す。

土壙墓３出土玉類一覧表　（単位mm）

No.	径	長さ	色調	材質	備考
1	5	22	淡緑色	碧玉	両面から穿孔
2	4.5	21.5	〃	〃	〃
3	4	18	明緑色	〃	〃
4	4.5	17	淡緑色	〃	〃
5	4.5	17	〃	〃	〃
6	4	17	〃	〃	両面からの穿孔が大きくずれており外面に突きぬけている
7	4	17	〃	〃	〃
8	4	15.5	〃	〃	〃
9	4	17	〃	〃	〃
10	5	15	〃	〃	〃
11	5	15	〃	〃	〃
12	4.5	14	〃	〃	〃
13	4	12.5	明緑色	〃	片面から穿孔
14	4	13.5	淡緑色	〃	両面から穿孔
15	4	12	〃	〃	〃
16	4.5	12.5	〃	〃	〃
17	3	10	〃	〃	〃
18	3.5	8	〃	〃	片面から穿孔
19	4	—	〃	〃	両面から穿孔
20	4	—	〃	〃	欠損
21	4	—	〃	〃	〃
22	4.5	—	〃	〃	〃
23	4	—	〃	〃	〃
24	推定8	6	青色	ガラス	２分割し、その面に直交してさらに両面から穿孔している
25	7	9	〃	〃	
26	推定7	6	淡青色	〃	４分割し、その面に直交してさらに両面から穿孔している
27	推定7	—	緑色	〃	〃
28	3	3	紫色	〃	

土壙墓４（第83図）

丘陵頂部の平坦面Ⅰ－６区に位置する。掘形上面は長辺約1.3m、短辺約60cm、床面では長辺約1.1m、短辺約40cmを測る。遺構確認面からの深さは約35cmを測る。埋土は上層と下層の２層に分かれる。上層は暗黄褐色土、下層は黄褐色土である。床面中央部上層と下層の境界からは石庖丁１点が出土した。遺物はすべて上層に包含され、下層は無遺物層である。上層に包含されている遺物は１点の炭化したモモ



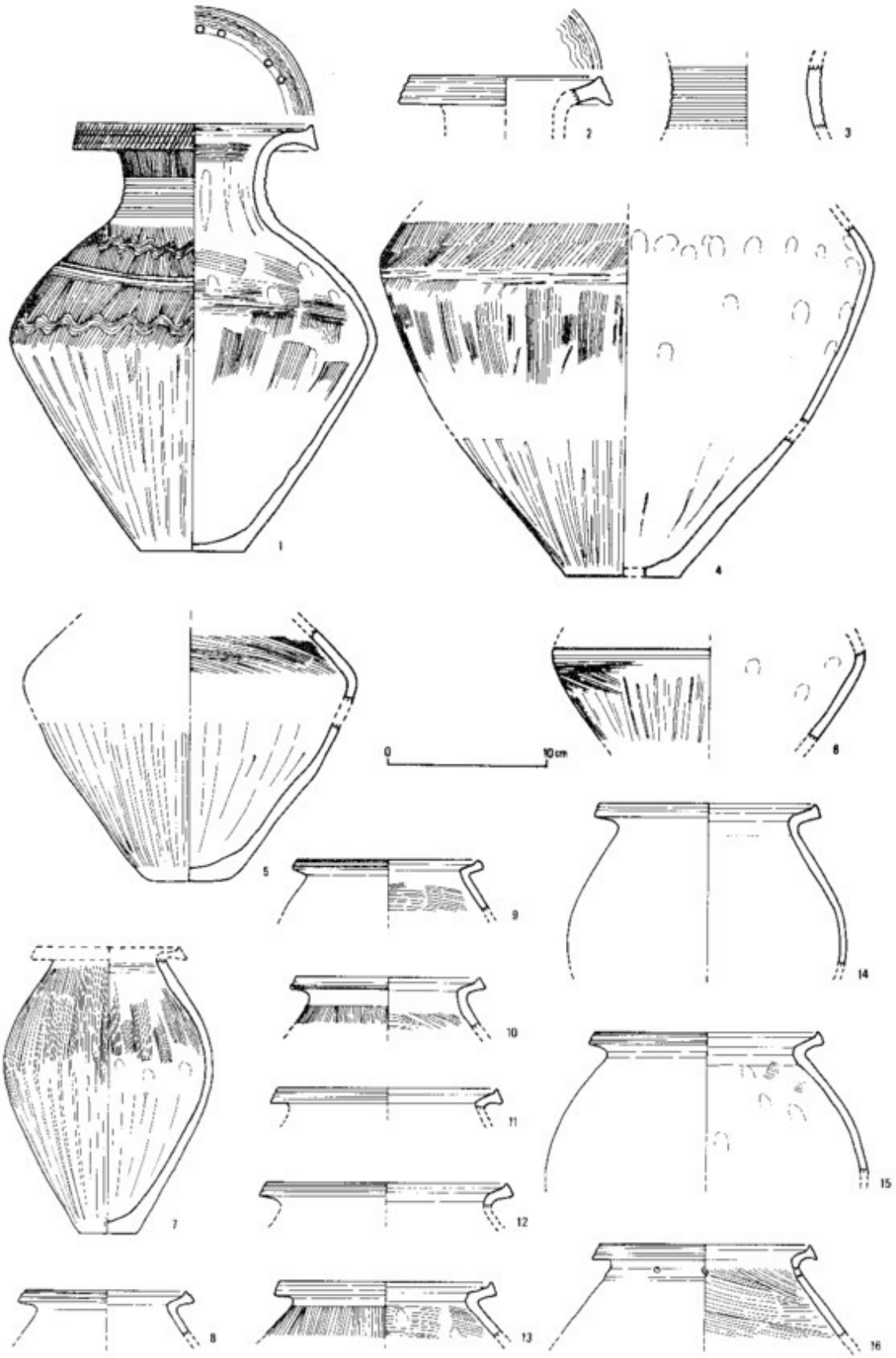
第83図　土壙墓４遺物出土状態 平面・断面図（S＝1：20）

の種子を除き他は全て土器である。土器は落ち込んだような状況が観察され上層の下半には包含されない。土器は後世の削平を受けているものと考えられ、遺構確認面で上部が切られているかのようである。土器の組成は壺形土器６点、高杯形土器２点、器台形土器３点、甕形土器23点、器種不明土器１点の計35点である。従来の知見によると、墓に供献される土器としては壺形土器、器台形土器、高杯形土器など飾られた土器が多いのに対し、甕形土器は案外少ないのであるが、ここでは甕形土器が最も多く、大半を占める事実が指摘される。

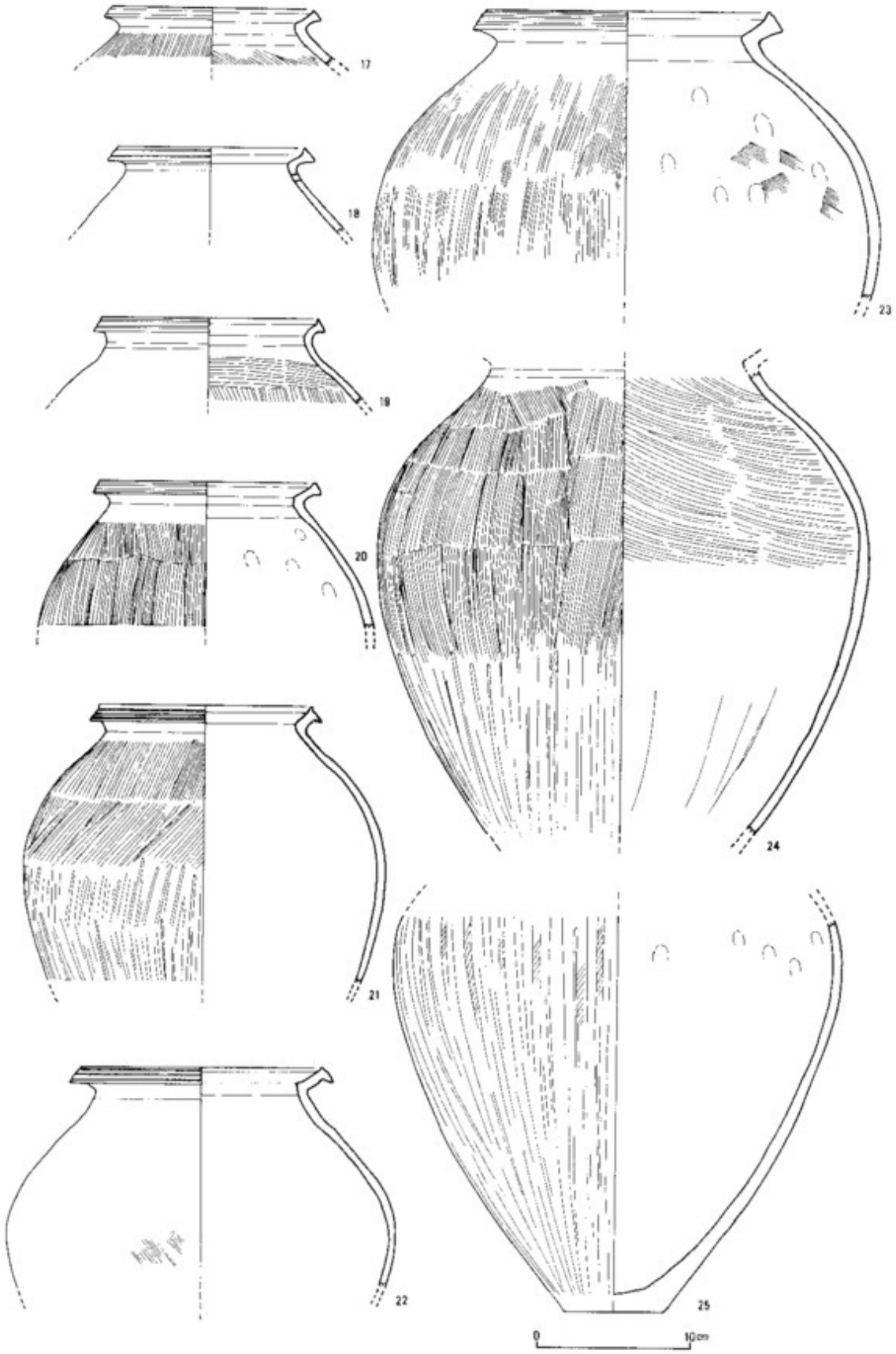
本遺構も土壙墓３同様残存脂肪酸分析を依頼した。分析結果は後述の通りである。

土壙墓４出土土器（第84～86図）

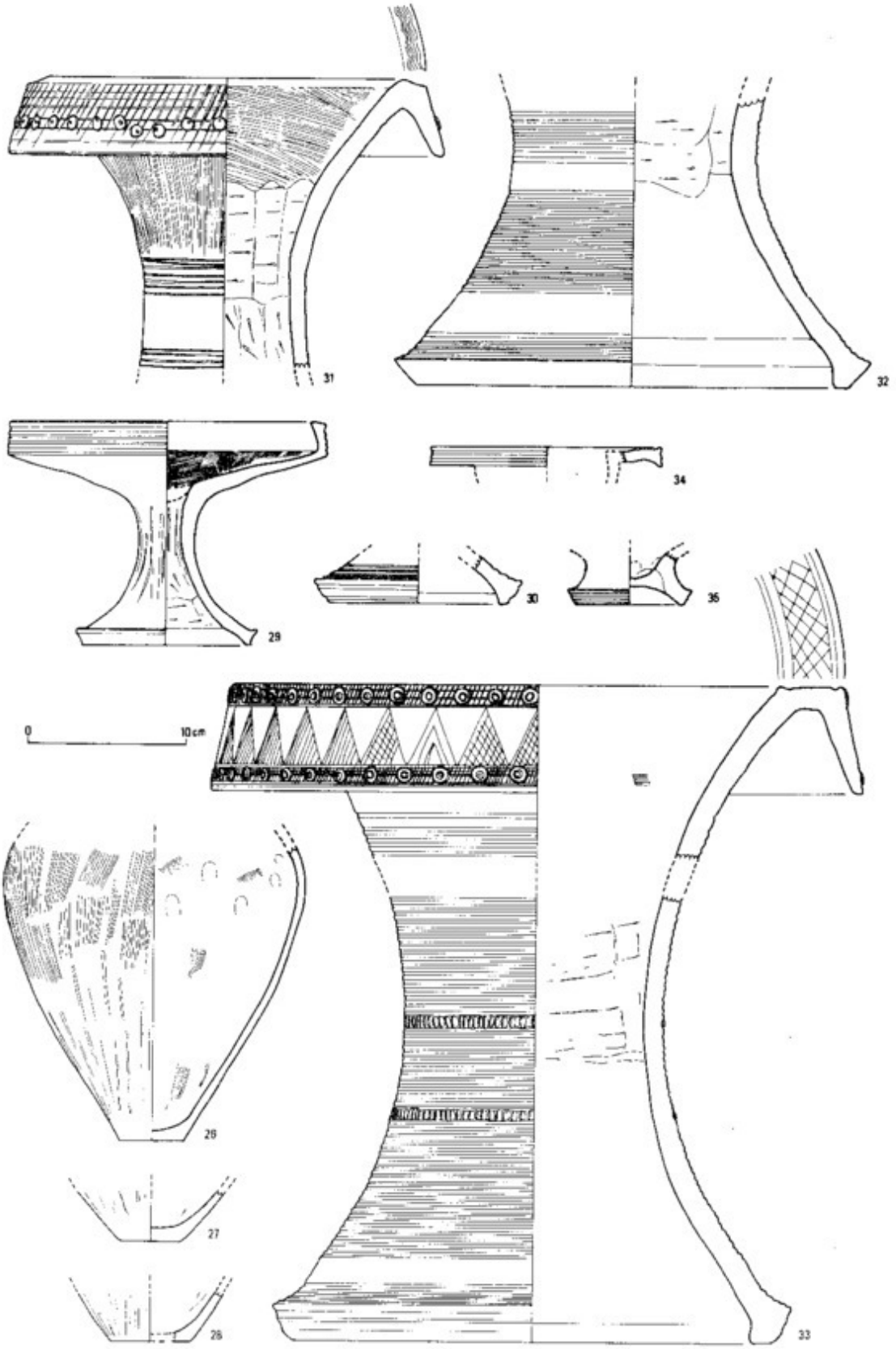
１～６は壺形土器である。１はほぼ完形である。凹線文をめぐらせた筒状の頸部からするどく外反する口縁部をもつ。端面はやや内傾し端部は上下に少し拡張する。端面にはわずかに沈線をめぐらせた後、斜方向の連続刻目文を施している。口縁部上面には外側に櫛描波状文をめぐらし、内側は２個１単位の円形浮文で加飾している。胴部は鋭角に張り出す。外面頸部から胴部にかけては櫛描波状文、櫛描直線文、櫛描波状文という文様構成である。地文は縦方向のハケ目である。胴下半は縦方向のヘラ磨き仕上げである。２は口縁端面に凹線文をもつものである。４～６は大小の差はあれ、胴部がそろばん玉状に鋭角に張り出す器形である。６は胴部最大径付近に凹線文をもつ。いずれも外面胴部下半は縦方向のヘラ磨き仕上げである。７～28は甕形土器と考えられる。小型、中型、大型の３種が認められる。いずれも頸部から「L」字状にするどく外反する口縁部をもち、端部は肥厚しない。端部は16・18・19・21・22のように拡張するものと他のように上方につまみ上げただけで拡張しないものの２種が認められる。内傾する端面には原則として凹線文をもつが、中には10・13・17などのように稜線がわずかに観察されるだけのものもある。外面は基本的に上半が縦方向のハケ目、下半が縦方向のヘラ磨き仕上げである。29・30は高杯形土器である。皿状の杯部に垂直に立つ口縁部をもつ。端面には４条の凹線文をもつ。杯部内面はハケ目仕上げである。脚部は端部に近づくにつれ、ゆるやかにラッパ状に開く。内面下半はヘラ削り仕上げである。30は脚端部が肥厚し上方に拡張する。外面には凹線文がめぐる。31～33は器台形土器である。31は小型のものである。２単位の数条の沈線文をもつ細い胴部からラッパ状に開く口縁部をもつ。端部は下方に大きく垂れ下がる。上面には櫛描波状文がめぐる。端面にはわずかに数条の沈線文を施した後、斜方向の連続刻目文をめぐらし、さらに中位には刺突文を施した円形浮文を張り付けることにより加飾している。２・３は大型の器台形土器である。３は胴部からゆるやかに外反した口縁部をもつ。口縁部は水平方向に外方に張り出し、端部は下方に大きく垂れ下がる。水平面にはヘラ描斜格子目文を施している。端面は上位、中位、下位の３文様帯より構成される。上、下位は同一の文様構成であり、凹線文をめぐらせた後、斜方向の連続刻目文を施し、さらに円形刺突を施した円形浮文



第84図　土壙墓4出土土器(1)（S＝1：4）



第85図　土壙墓4出土土器(2)（S＝1：4）

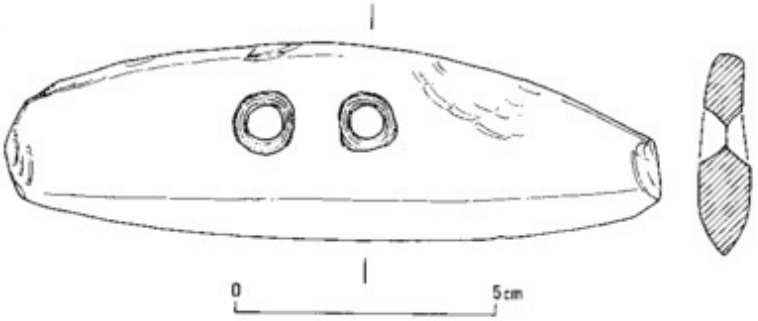


第86図　土壙墓4出土土器(3)（S＝1：4）

で加飾している。中位は鋸歯文でうめている。鋸歯文は原則として平行線文でうめるが、中には斜格子目文、山形文でうめるものもある。外面は両者とも凹線文でうめるが32は下位と中位、33は下位に無文帯を有す。33は胴部外面には2条の刺突文がめぐる。内面は中位に横方向のヘラ削り痕跡が認められるが、他はすべてナデ仕上げである。34はほぼ水平に張り出した口縁部をもつ。端部は上下にやや拡張する。ほぼ水垂に立つ端面には2条の凹線文がめぐる。器種不明。35は住居址4出土例（第30図22・23）、住居址5出土例（第35図38・39）と同一の器形と考えられる台付甕形土器である。

土壙墓4出土石器（第87図）

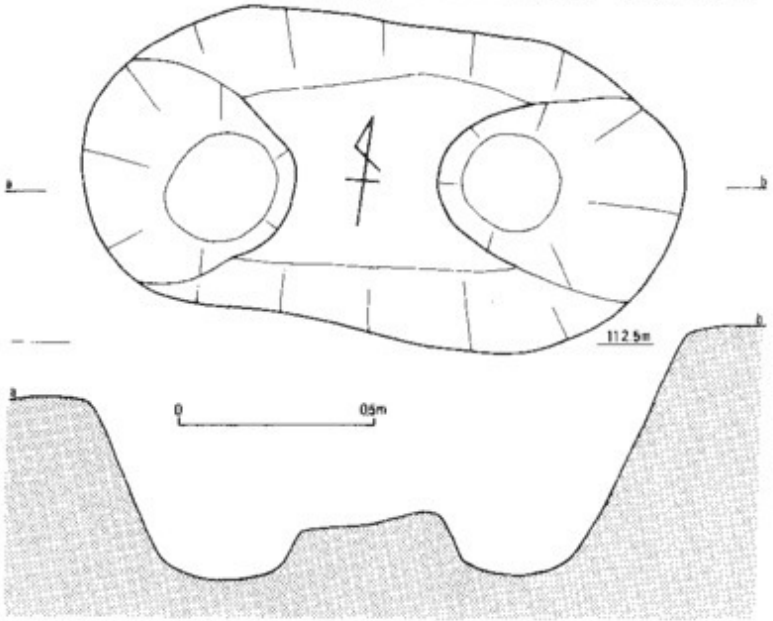
最大長12.6cm、最大幅3.8cm、最大厚1cmを測る白雲母石英片岩製磨製石庖丁である。研磨は全面には及ばず、部々的に剥離痕を残す。紐孔は2個所にあり、穿孔は表裏両面から行なわれている。この結果ほぼ中央部で切り合い稜を形成する。埋土上層と下層の境界より出土した。



第87図　土壙墓4出土石器（S＝2：3）

土壙墓5（第88図）

住居址6の東側に隣接する。長径約1.5m、短径約80cm、深さ約50cmを測る長楕円形の土壙を掘り込み、さらに東西両壁に沿って上面径約50cm、底面径約25～30cm、床面からの深さ約10～15cmの円形土壙を掘り込んでいる。埋土は1層であり、遺物は出土しなかった。どういった性格の遺構であるか不明であるが全く同様の遺構が土壙墓6で確認されている。土壙墓6では一方の円形土壙から勝間田焼の甕形土器ほぼ1個体が打ち欠いて、並べたような状態で出土した。これが何を意

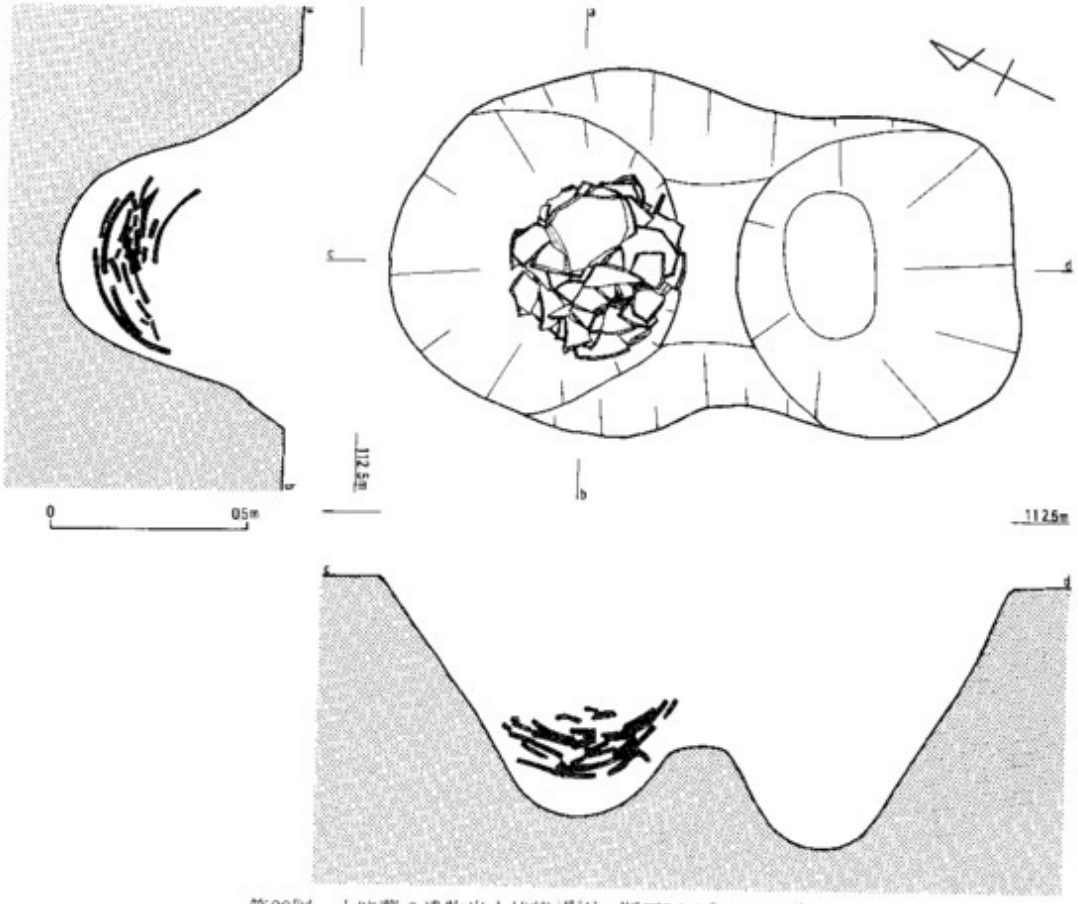


第88図　土壙墓5平面・断面図（S＝1：20）

味するものかは推測の域を出ないのではあるが、一応墓と考え、本遺構もあえて土壙から分離し土壙墓に分類した。

土壙墓6（第89図）

丘陵頂部住居址6の北西に隣接する。土壙墓5同様長径約1.6m、短径約80cm、深さ約40cmを測る土壙の南北両端に上面径約40cm、底面径約25～40cm、深さ約60cmを測る円形土壙をもつものである。北側円形土壙からは大型の勝間田焼甕形土器が打ち欠かれ、敷き並べたような状態で出土した。南側からは何も出土しなかった。埋土は1層である。勝間田焼は部分的に欠ける個所もあるが、ほぼ完形に復元できる。本遺構の機能については類例が全くなく不明であるが、土壙墓と考えておきたい。本遺構も残存脂肪酸分析を依頼した。分析結果は後述の通りである。

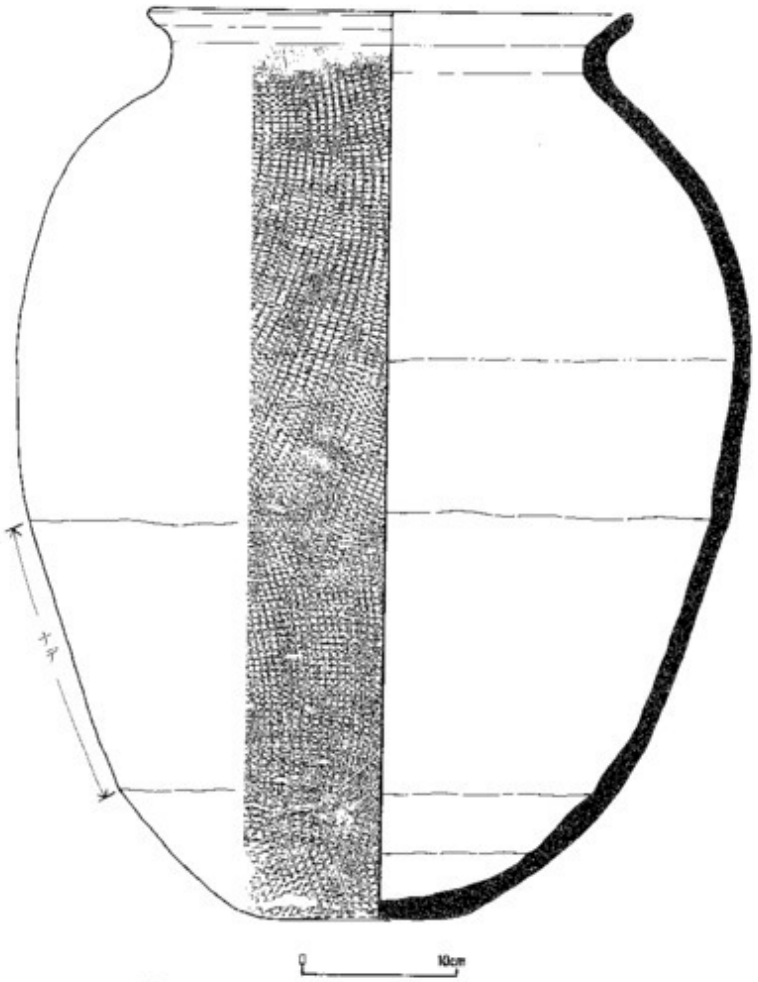


第89図　土壙墓6遺物出土状態平面・断面図（S＝1：20）

土壙墓6出土土器（第90図）

器高58.3cm、胴部最大径46.5cm、口径30.9cmを測る勝間田焼大型甕形土器である。外面は頸部下位は全て格子目のタタキ手法であり底面にまで及ぶ。底面はやや上げ底となっている。頸部から口縁部にかけては横ナデ仕上げである。外面中位から下位にかけて図示した範囲は格子

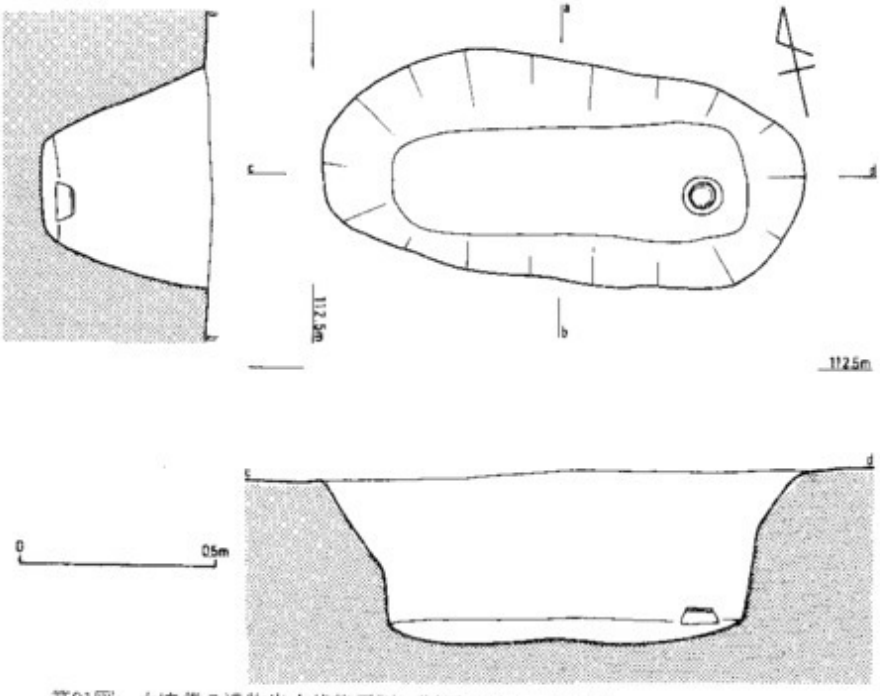
目のタタキを施した後ナデている。しかし、ナデは凸面だけで、格子目の凹面までには及んでいない。本甕形土器は口縁部から胴部中位、底部及び両者を接合する胴部下半の3つの部位からなり、それぞれの接合が顕著にみられる。外面のナデの範囲は両者を接合する胴部下半の部位に相当する。



第90図　土壙墓6出土土器（S＝1：5）

土壙墓7（第91図）

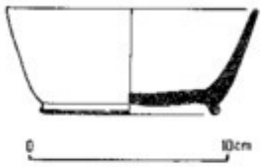
丘陵頂部Ⅰ－5区に位置する。上面長軸約1.2m、短軸約55cm、深さ約40～45cm、底面長軸約90cm、短軸約25～30cmを測る長方形土壙である。東端部から床面より約5cm程浮いた状態で須恵器杯が出土した。須恵器は高台付杯で伏せた状態で出土した。埋土は1層である。他に遺物は出土しなかった。土壙墓と考えられる。



第91図　土壙墓7遺物出土状態平面・断面図（S＝1：20）

土壙墓７出土土器（第92図）

灰白色を呈し、非常に堅緻な須恵器高台付杯である。器高4.1cm口径9.5cmを測る。

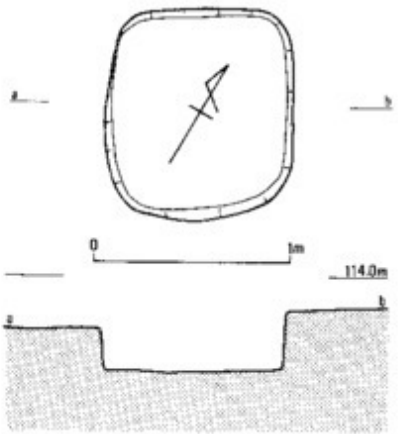


第92図 土壙墓７出土土器(S＝1:3)

5　土壙

土壙１（第93図）

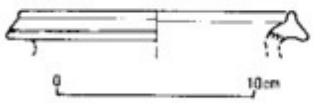
調査区東側南斜面に位置する。長辺約1.1m、短辺約95cmを測る方形土壙である。斜面に位置するが、中央部での深さは約30cmである。壁はほぼ垂直に立つ。埋土は１層であり、土器片１点が出土した。



第93図 土壙１平面・断面図(S＝1:40)

土壙１出土土器（第94図）

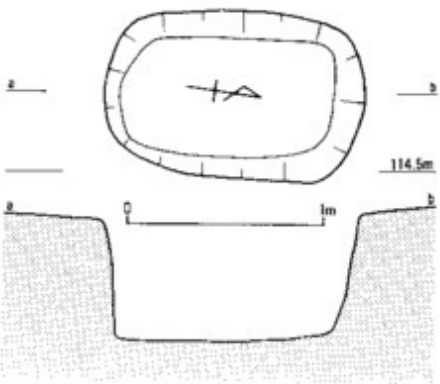
埋土中より出土した。甕形土器口縁部である。端部は上下に拡張し丸味を帯びる。端面はゆるやかにカーブを描き内傾する。弥生時代後期と考えられる。



第94図 土壙１出土土器(S＝1:4)

土壙２（第95図）

丘陵頂部Ⅰ－10区に位置する。長辺約1.3m、短辺約85cm、深さ約65cmを測る隅丸方形土壙である。長辺方向はほぼ南北方向に一致する。埋土は１層であり、若干の土器片が出土した。



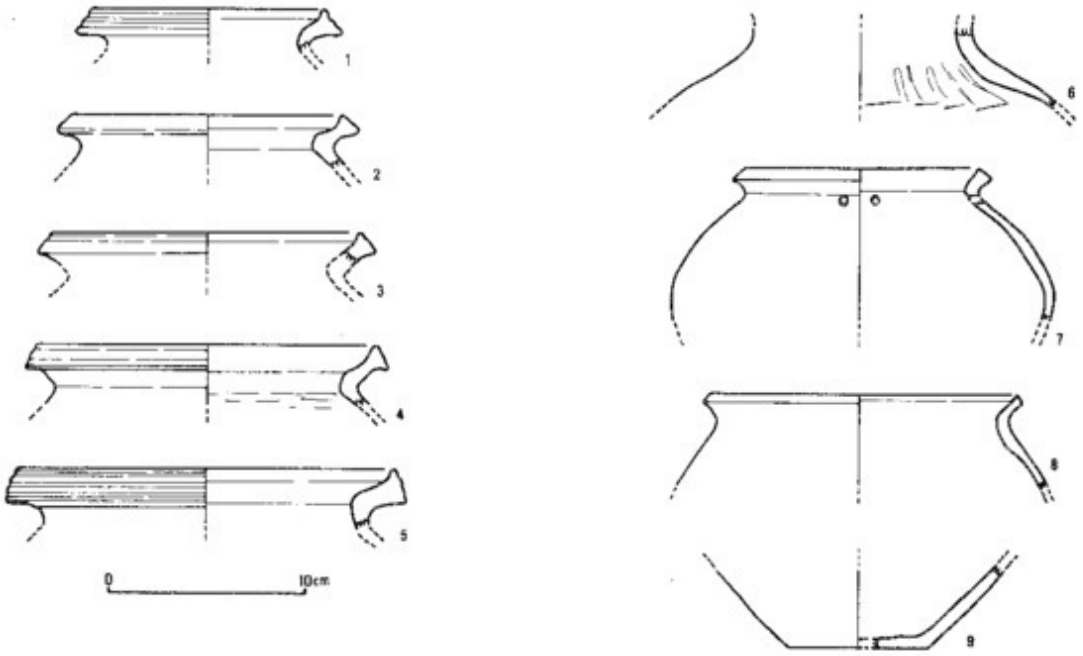
第95図　土壙２平面・断面図（S＝1:40）

土壙２出土土器（第96図）

いずれも埋土中の出土である。１～５は甕形土器である。いずれも口縁端部は上下方向にやや拡張するが、５だけは上方向だけで、下方には拡張しない。内傾する端面には１・５のように凹線文をもつものと、２～４のようにもたないものの２種がある。４の内面は頸部下位が横方向のヘラ削り仕上げである。６は壺形土器肩部、７・８は端部が肥厚しない形態の甕形土器である。いずれも遺存状態が極めて悪い。若干の時期差は認められるが、弥生時代後期と考えられる。

土壙３（第97図）

丘陵頂部北側Ｈ－９区に位置する。長径約2.4m、短径約2.1mを測る不整円形の皿状の落

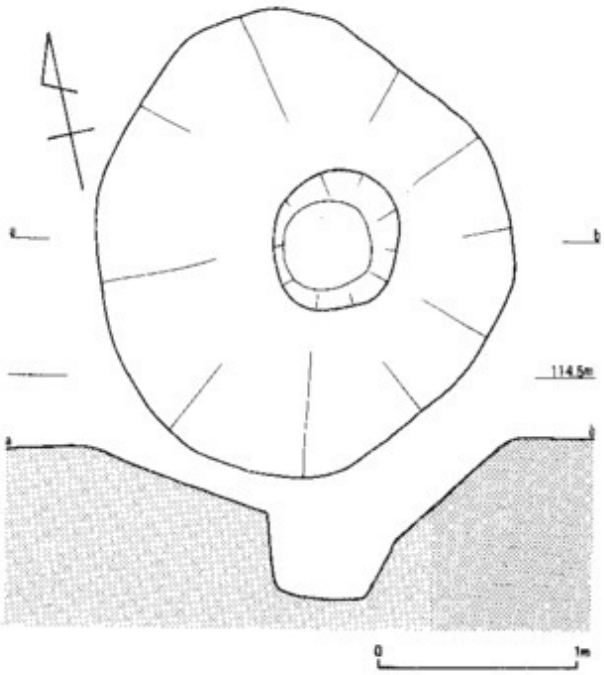


第96図　土壙２出土土器（S＝1：4）

ち込みに、さらに中央部に径約55～70cm、深さ約45cmを測る円形土壙が位置する。埋土は１層であり、サヌカイト製石器１点が出土した。

土壙３出土石器（第98図）

最大長7.5cm、最大幅4.7cm、最大厚1cmを測るサヌカイト製石器である。礫面を残した不定形剥片を素材とし、打面側から表裏両面に剥離を施すことにより刃部を作出している。掻器と考えられる。



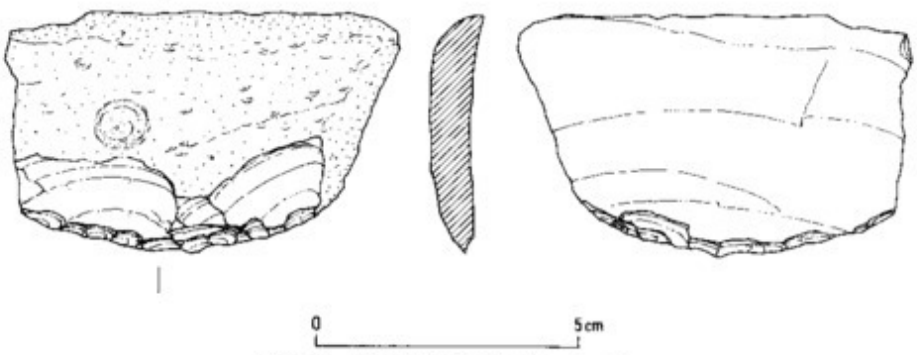
第97図　土壙３平面・断面図（S＝1：40）

土壙４（第99図）

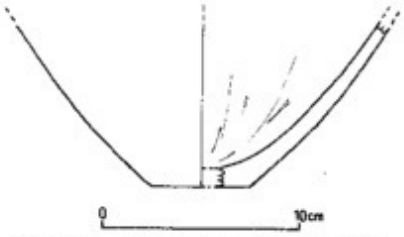
建物址２の西側Ｊ－８区に位置する。西側コーナー部は木の根の攪乱により遺存しない。長辺約１m、短辺約80cm、中央部での深さ約20cmを測る隅丸方形土壙である。埋土は１層であり、埋土中より土器片１点が出土した。

土壙4出土土器（第100図）

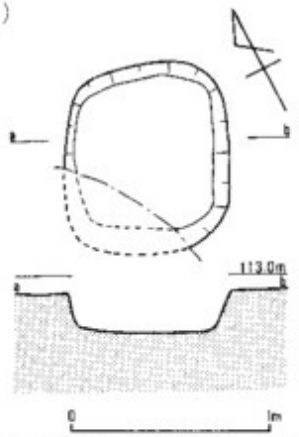
甕形土器底部と考えられる。外面にはススの付着が観察される。内面は縦方向のヘラ削り仕上げである。外面は暗赤褐色、内面は暗灰褐色を呈す。胎土には非常に大粒の砂粒を多量に含む。弥生時代後期と考えられる。



第98図　土壙3出土石器（S＝2：3）



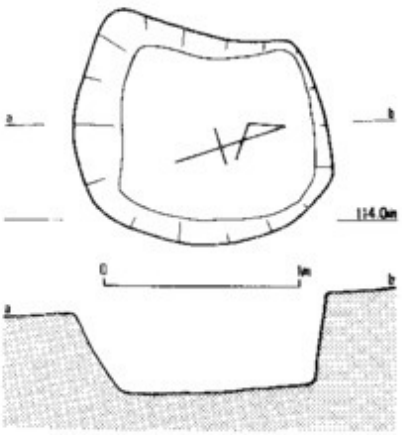
第100図　土壙4出土土器（S＝1：4）



第99図 土壙4平面・断面図（S＝1:40）

土壙5（第101図）

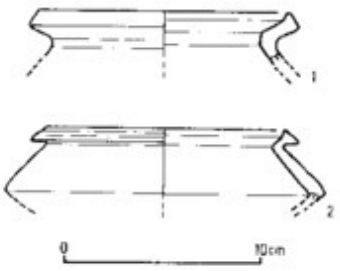
住居址4の西方J－9区に位置する。掘形上面では長辺約1.3m、短辺約1.1m、中央部での深さ約50cmを測る。埋土は1層であり、埋土中より若干の土器片、石庖丁1点が出土した。



第101図 土壙5平面・断面図（S＝1:40）

土壙5出土土器（第102図）

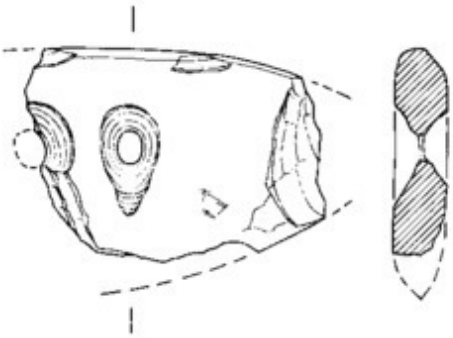
1は頸部から「L」字状に外反する口縁部をもつ甕形土器である。端部は肥厚せず上方にわずかにつまみ上げただけである。2は胴部が鋭角にそろばん玉状に張り出す器形の小型の壺形土器である。上下に拡張した短かい口縁部をもつ。胎土には精製土を用い、砂粒を含まない。赤褐色を呈す。



第102図　土壙5出土土器（S＝1:4）

土壙5出土石器（第103図）

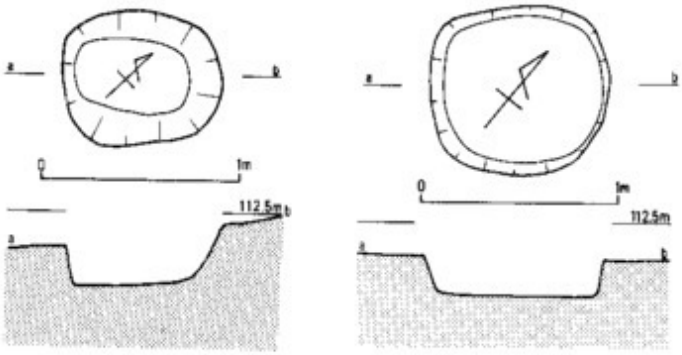
白雲母石英片岩製磨製石庖丁である。約半分を欠く。紐孔を2ケ所にもつ。穿孔は表裏両面から行なわれており、中央部に稜を形成する。最大厚約1cmを測る。



第103図　土壙5出土石器（S＝2：3）

土壙6（第104図）

建物址1の南側J－9区に位置する。径約85～90cmを測る円形土壙である。中央部での深さは約20cmを測る。埋土は1層であり、遺物は出土しなかった。



第104図　土壙6平面・断面図（S＝1:40）

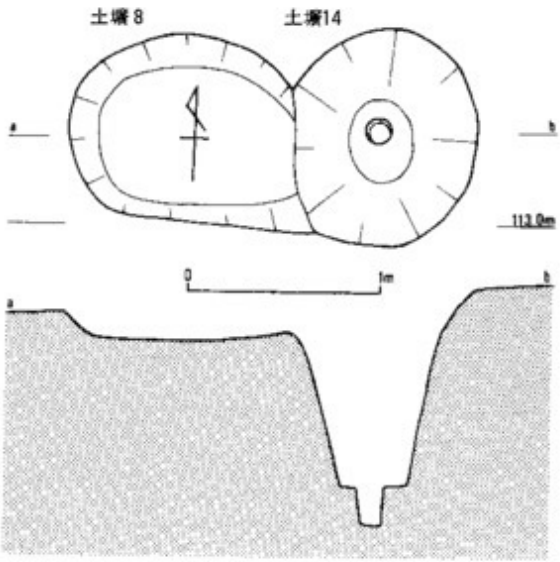
土壙7（第105図）

調査区ほぼ中央部丘陵南斜面頂部J－7区に位置する。長径約80cm、短径約70cm、中央部での深さ約30cmを測る不整円形の土壙である。埋土は1層であり遺物は出土しなかった。

第105図　土壙7平面・断面図（S＝1:40）

土壙8（第106図）

土壙7の北側丘陵上位J－7区に位置する。東端は土壙14と重複する。埋土は両者とも同一土層であり、埋土での新旧関係は把握できなかった。掘形上面での推定復元長径は約1.2m、短径は約95cm、中央部での深さは約15cmを測る。埋土は1層であり遺物は出土しなかった。



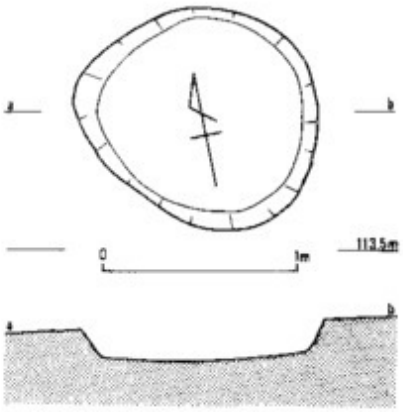
第106図　土壙8・14平面・断面図（S＝1:40）

土壙9（第107図）

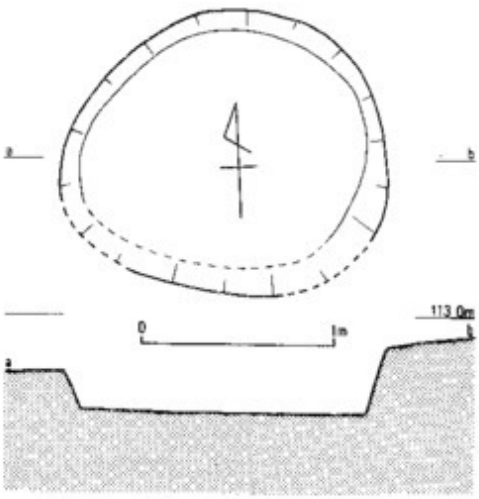
調査区中央部丘陵部I－8区に位置する。掘形上面径約1.1～1.3mを測る円形土壙である。中央部での深さ約15cmを測る。埋土は1層であり、遺物は出土しなかった。

土壙10（第108図）

丘陵頂部Ｉ－７区に位置する。径約1.5～1.7ｍを測る円形土壙である。中央部での深さは約35cmを測る。埋土は１層であり、遺物は出土しなかった。



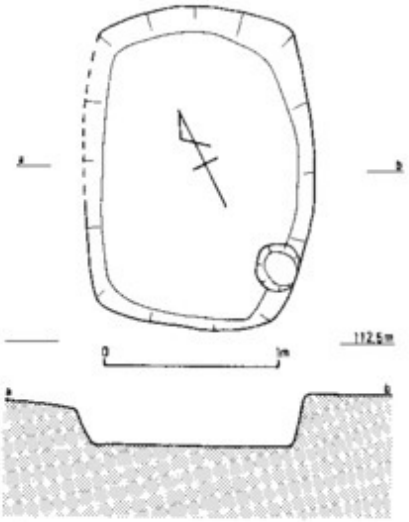
第107図　土壙９平面・断面図（Ｓ＝１:40）



第108図　土壙10平面・断面図（Ｓ＝1:40）

土壙11（第109図）

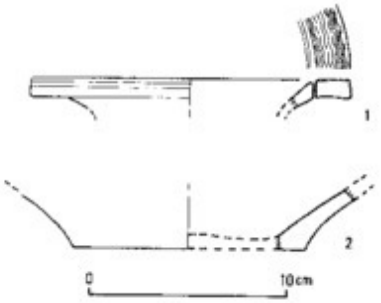
調査区西側丘陵頂部Ｈ－５区に位置する。長辺約1.8ｍ、短辺約1.3ｍ、中央部での深さ約30cmを測る方形土壙である。南側壁面にはピットが重複する。埋土は１層であり、若干の土器片が出土した。



第109図　土壙11平面・断面図（Ｓ＝1:40）

土壙11出土土器（第110図）

１は水平方向に外方へ張り出す口縁部をもつ壺形土器である。水平面には櫛描波状文がめぐる。端面はほぼ垂直であり、１条の凹線文を有す。水平面の内側には小円孔が位置する。２は壺形土器底部である。



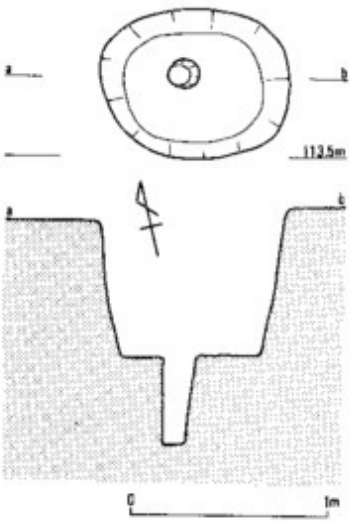
第110図　土壙11出土土器（Ｓ＝1:4）

土壙12（第111図）

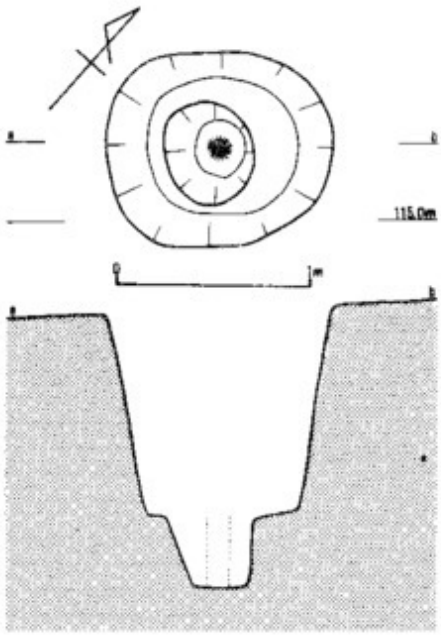
調査区東側丘陵頂部建物址１の西側に位置する。径約1.0～1.15m、深さ約1.1ｍを測る円形土壙を掘り込み、さらに床面中央部に深さ約35cmの柱穴を掘り込んでいる。柱穴中央部には柱痕跡と考えられる土色の変化が認められた。埋土は１層であり遺物は出土しなかった。陥し穴と考えられる。

土壙13（第112図）

調査区中央部北斜面上位H－8区に位置する。径約80～95cm、深さ約75cmを測る円形土壙床面に径約15cm、深さ約45cmを測る柱穴が位置する。埋土は1層であり、遺物は出土しなかった。陥し穴と考えられる。



第112図 土壙13平面・断面図（S＝1:40）



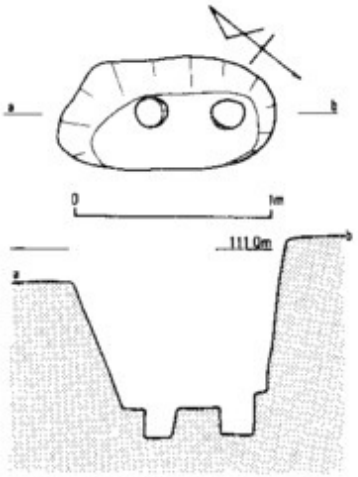
第111図　土壙12平面・断面図（S＝1:40）

土壙14（第106図）

調査区中央南斜面上位J－7区に土壙8と重複して位置する。西側壁面上位は土壙8と重複するため遺存しない。復元掘形上面径約1m、深さ約1mを測る。床面径は約30～40cmを測り他のこの種の土壙と比べて床面積が非常に小さい。床面には径約10cm、深さ約20cmを測る柱穴が位置する。埋土は1層であり、遺物は出土しなかった。陥し穴と考えられる。

土壙15（第113図）

丘陵北斜面段状遺構4東側に隣接して位置する。本遺構の周囲は木の根によるものと考えられる攪乱が著しい。掘形上面では長径約1.1m、短径約55cmを測る。深さは中央部で約85cmを測る。西側の壁はほぼ垂直に立つのに対し、東側壁は法面をもつ。床面には2ケ所に柱穴が検出された。共に径約15cm、深さ約15cmを測る。埋土は1層であり、埋土中位より土器片が出土した。陥し穴と考えられる。

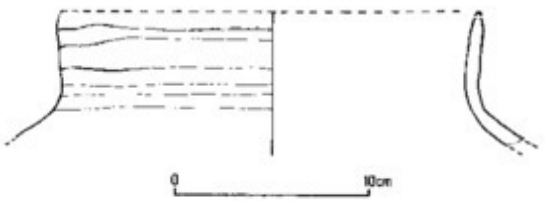


第113図 土壙15平面・断面図（S＝1:40）

土壙15出土土器（第114図）

埋土中位より出土した。口縁部から一部頸部までの破片であるが、全周の3分の2遺存する。色調は赤褐色を呈し、胎土には砂粒を多量に含む。口縁部外面にはススの付着が観察される。遺存状態は極めて悪くボロボロである。口径21.5cmを測る。所属時期は明らかでないが縄文土

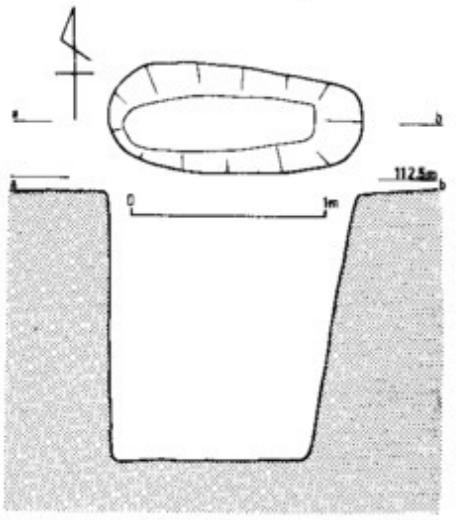
器と考えられる。



第114図　土壙15出土土器（S＝1：4）

土壙16（第115図）

丘陵頂部平坦面Ⅰ－6区に位置する。長径約1.3m、短径約55cmを測る長楕円形を呈す土壙である。深さは約1.4mを測り非常に深い。埋土は1層であり、遺物は出土しなかった。床面には柱穴は確認されなかった。前述の土壙12～15のように床面に柱穴をもたないことから性格の異なるものかも知れない。



第115図　土壙16平面・断面図（S＝1：40）

6　溝

溝1（第19図）

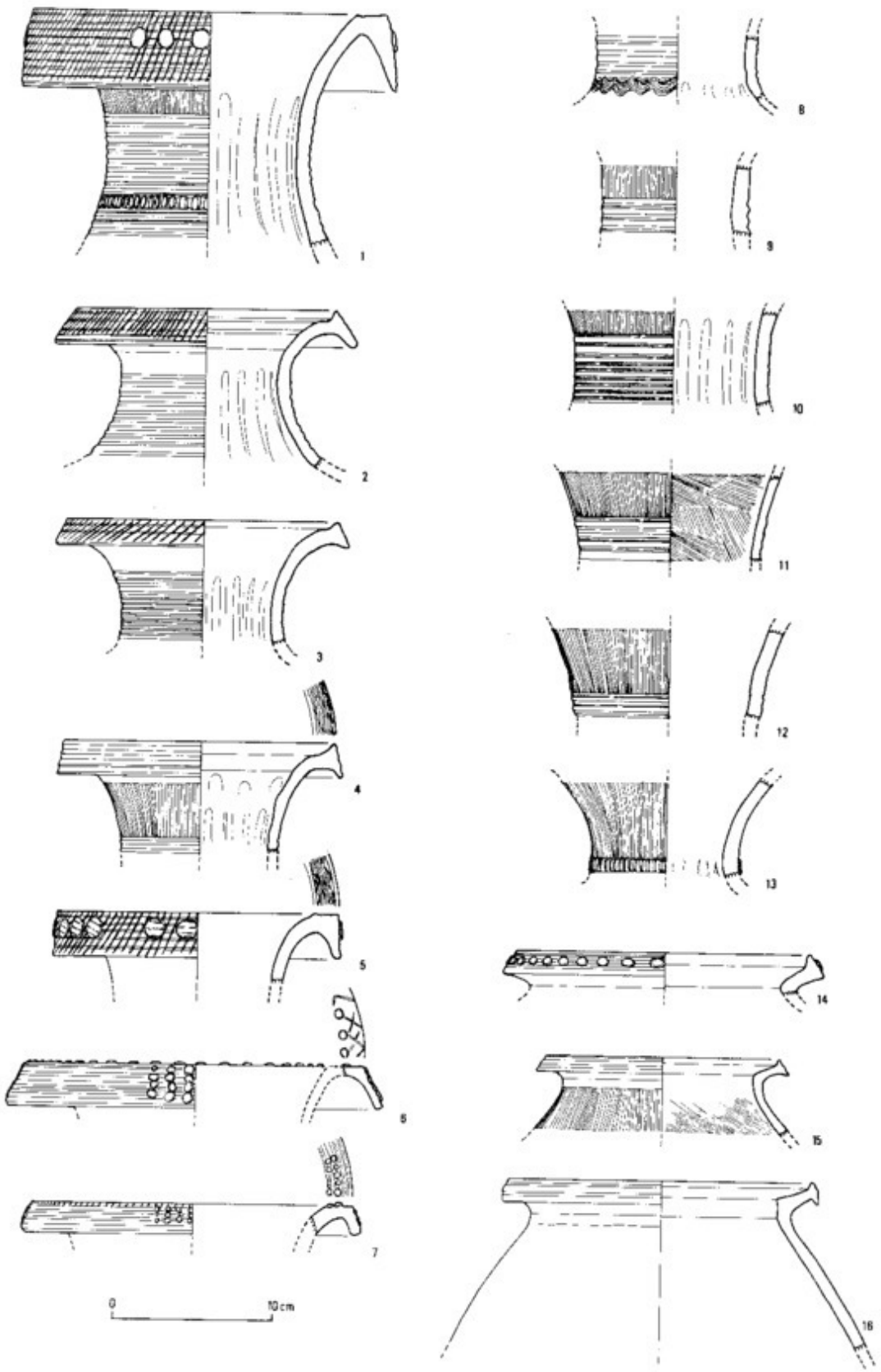
調査区中央部丘陵頂部に位置する。総延長約36m、深さ約5～20cmを測る「コ」の字形を呈す溝である。土壙墓2、住居址7・8と重複して位置する。新旧関係は土壙墓2、住居址7・8が古く、溝1が新しい。それも各遺構が完全に埋没した後に溝1が築かれており、両者の埋土の識別は容易である。すなわち、土壙墓2、住居址7・8の埋土はかなり締まっているのに対し、溝1の埋土は締まりなくボソボソの土である。このことからA地区同様新しい時期の溝と考えられる。遺物は出土しなかった。

7　遺構に伴なわない遺物

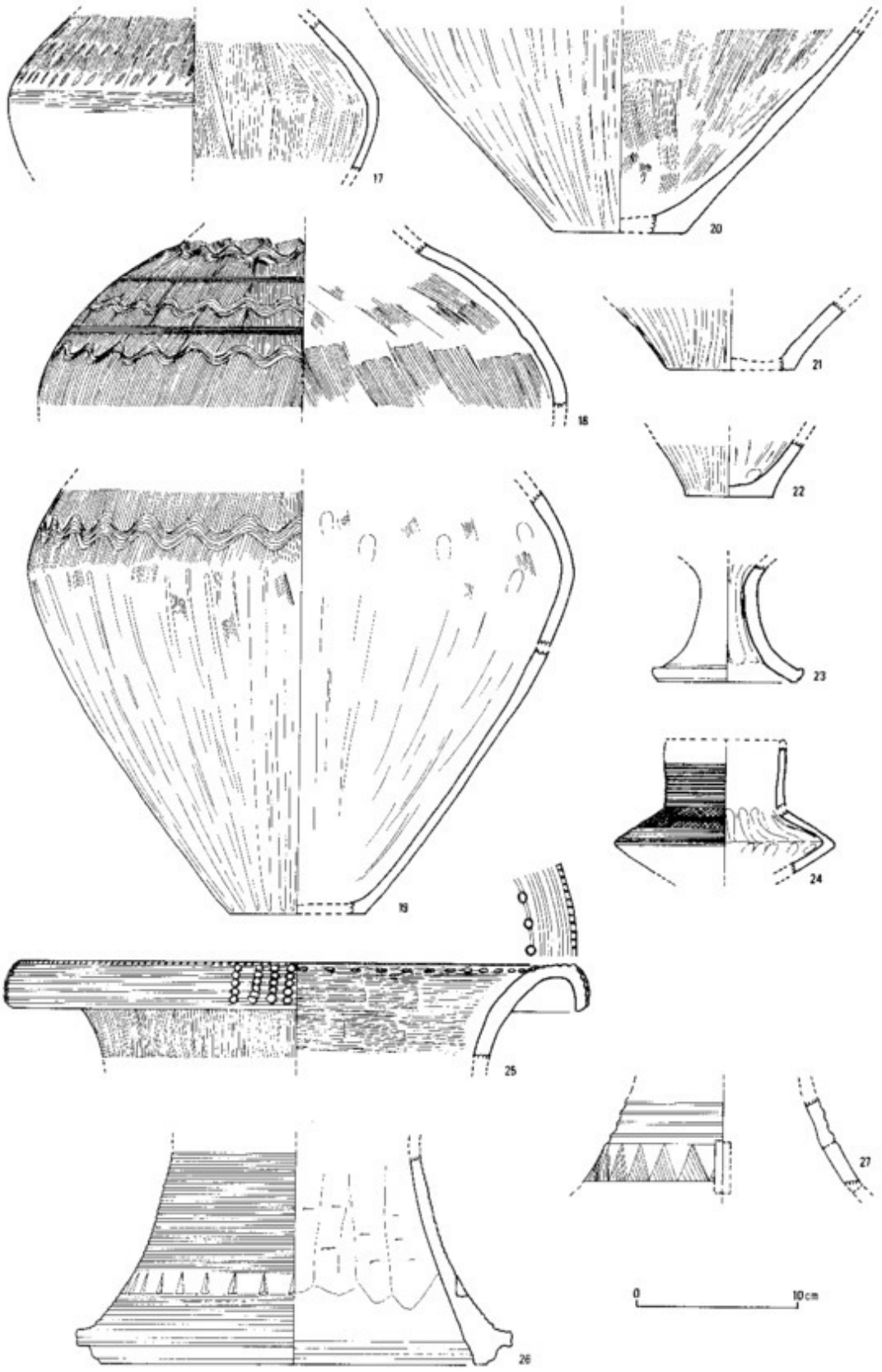
頂部では表土層の下が直接地山の自然層であるが、斜面部には表土層と地山との間に、1層二次堆積土層が認められる。遺物は北斜面、南斜面を中心にこの二次堆積土層中に多量に包含される。頂部では若干量が点在する程度である。

土器（第116～119図）

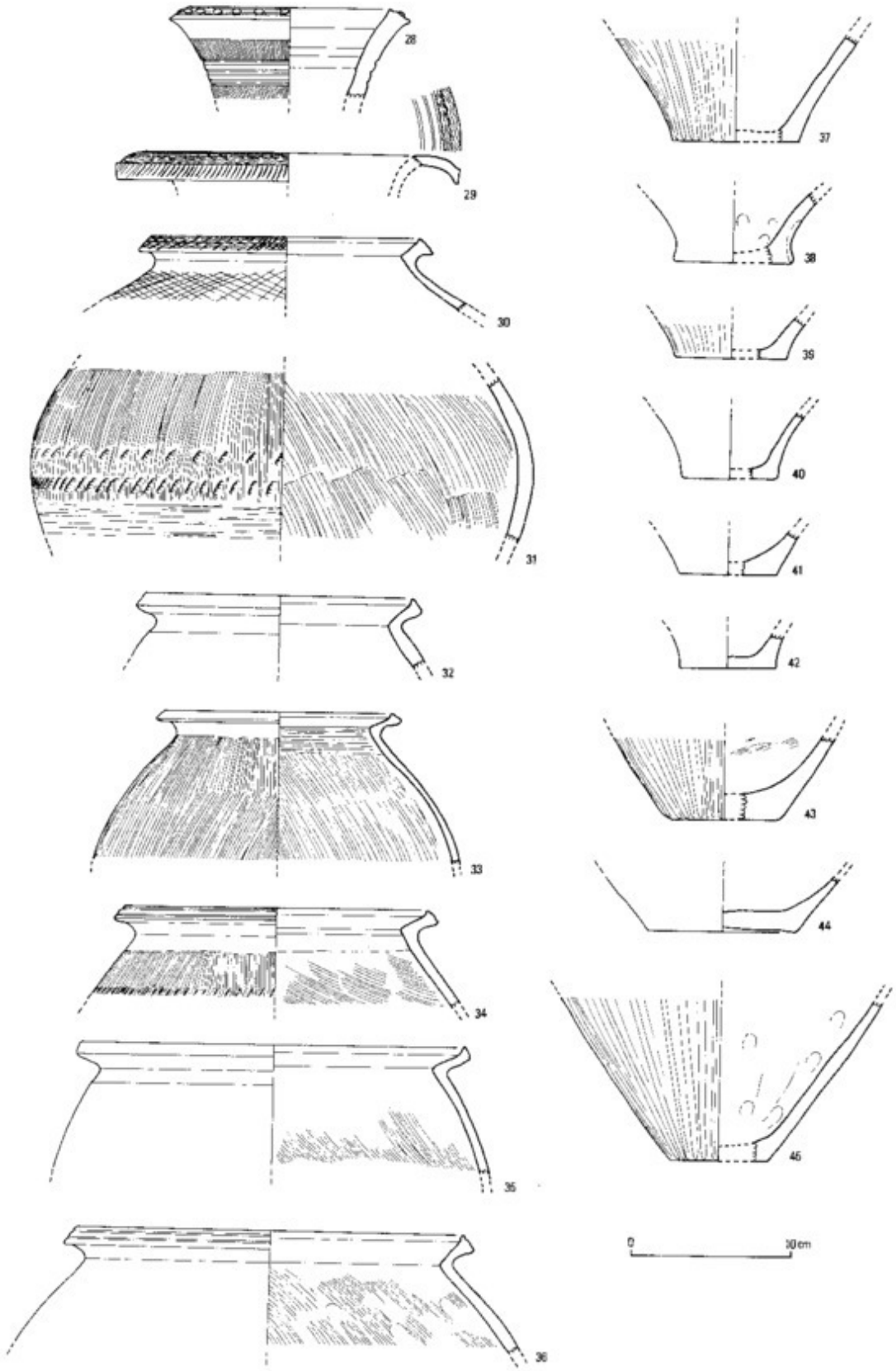
図示できるものはほぼ全てである。第116・117図にはグリット6ライン以西のものを一括した。1～13は壺形土器である。13を除き頸部に凹線文をもつものである。13は凹線文土器に先行するものと考えられるもので、貼り付け突帯の上を指による刺突文で加飾している。1は非常に大型のもので、口縁端部が大きく下方に垂れ下がる。2の口縁端部は上下に強く拡張する。4・5は口縁部内面、及び水平面に櫛描波状文をめぐらす。6・7は口縁部端面に凹線文



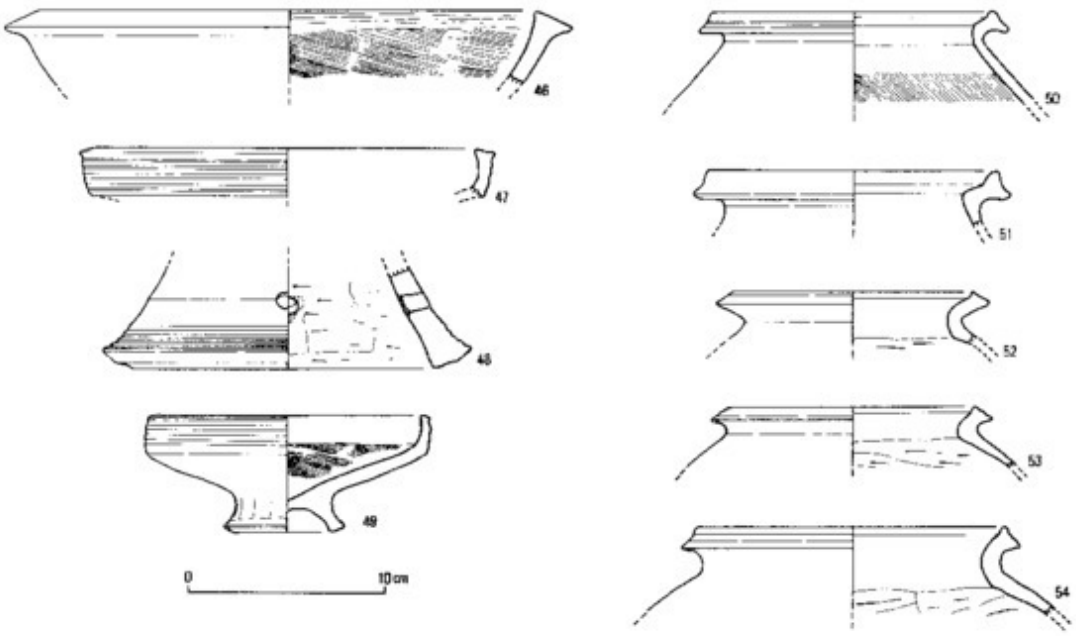
第116図　遺構に伴なわない遺物(1)（S＝1：4）



第117図　遺構に伴なわない遺物(2)（S＝1：4）



第118図　遺構に伴なわない遺物(3)（S＝1：4）



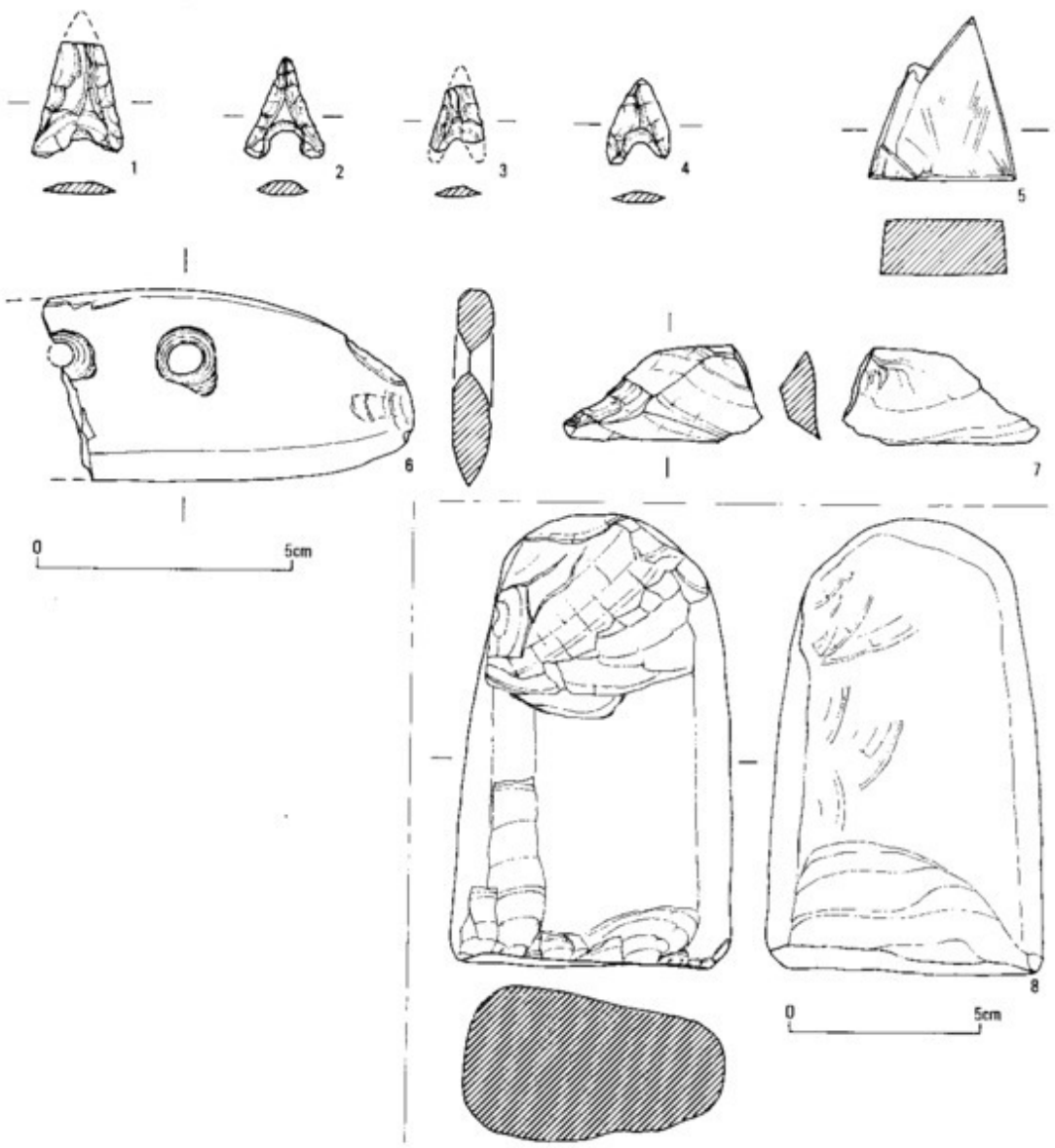
第119図　遺構に伴なわない遺物(4)(S＝1：4)

を施した後にさらに円形浮文で加飾するなど様々の器形がある。14～16は甕形土器である。いずれも頸部から「L」字状に外反した口縁部をもつ。14の口縁端部は上方にのみ拡張し、端面には凹線文の上に円形浮文が貼付される。15・16の口縁端部は上下に鋭く拡張する。17～19は肩部から底部にかけての壺形土器である。17はやや小型のものでハケ目の原体と考えられる板状工具を2列に連続して刺突している。18・19は肩部から胴部にかけて櫛描波状文、直線文を施している。いずれも地文はハケ目である。19の内面胴部下半にはヘラ削り手法が認められる。24は胴部がそろばん玉状に鋭く張り出した直口壺である。直口部外面は凹線文、肩部から胴部にかけては凹線文と斜格子目文で加飾している。25・26は器台形土器である。25の口縁部の文様構成は7の壺形土器のそれと全く同様である。また胎土、色調も非常に類似していることからセットになるものと考えられる。26は外面に原則として凹線文をめぐらすが、1帯の無文帯をもつ。無文帯には等間隔に三角形の透し孔を穿つが、貫通はせず、器壁中位までしか達していない。27は高杯形土器脚部である。上位に凹線文、下位に鋸歯文帯をもつ。鋸歯文は平行線文で埋められている。鋸歯文帯を中心に長方形の透し孔をもつ。

第118・119図にはグリット6ライン以東のものを一括した。しかし、大半は北斜面部のものである。28～31は壺形土器である。28はJ－9区より遊離した状態で出土したが、同一個体の破片が住居址5埋土中より出土している。頸部は筒状ではなくラッパ状に開き口縁端部へといたる。端部は肥厚せず、端面には凹線文を施した後に円形浮文で加飾している。29は28とは対照的に大きく外方へ張り出す口縁部をもつ。30は胴部がそろばん玉状に張り出す器形のもので肩部にはヘラ描きによる斜格子目文を有す。32～36は甕形土器である。34・36のように口縁

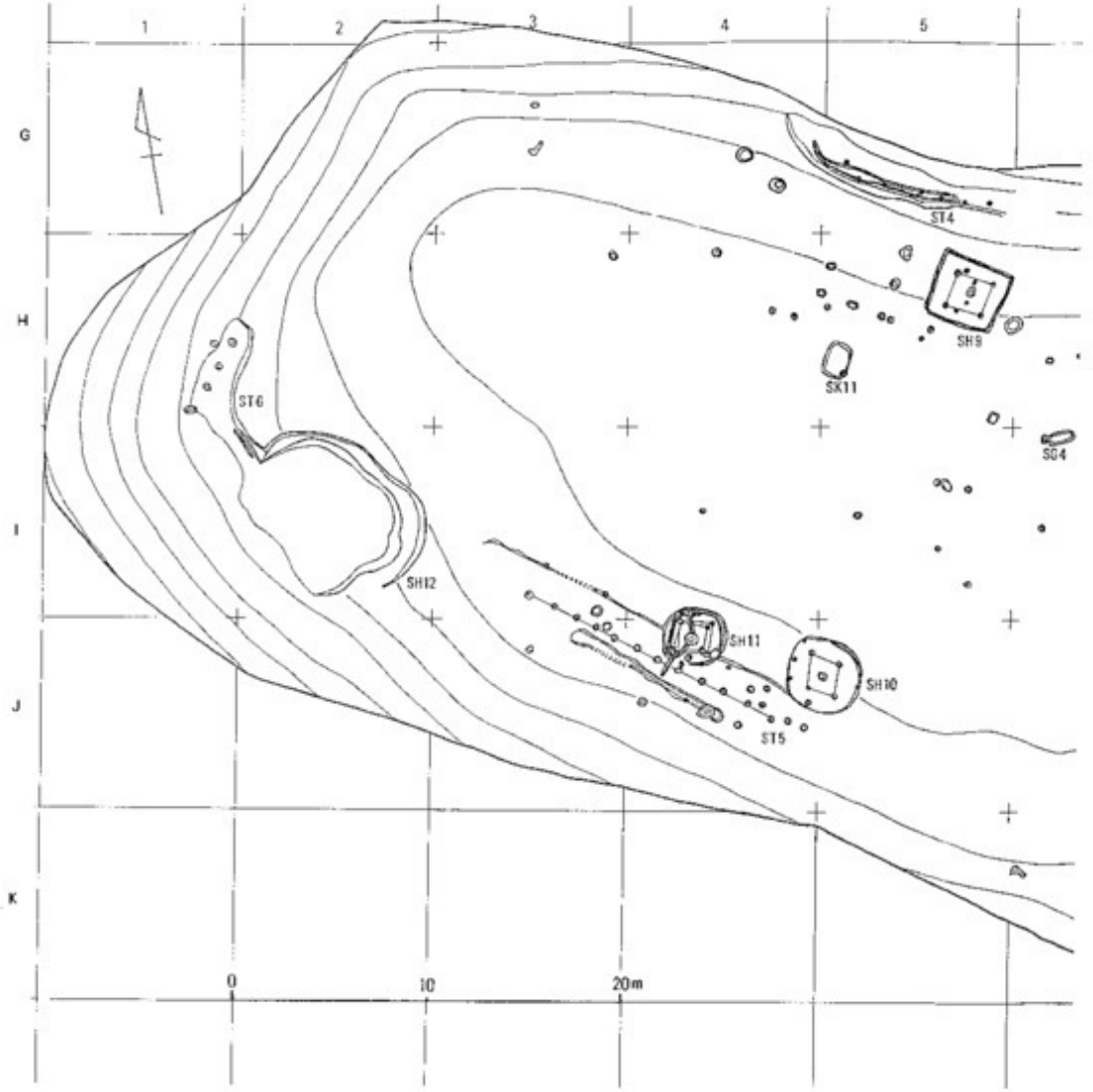
端面に凹線文をもつものと、32・33・35のようにもたないものの両者が認められるが、いずれも端部は拡張せず幅の狭い端面となっている。46～48は高杯形土器である。46は椀状の杯部に斜め外方に張り出した口縁端部をもつ。内面はハケ目仕上げである。47は垂直に立つ口縁部をもつ。外面には凹線文帯がめぐる。48は脚部で円形の透し孔をもつ。49は特異な器形である。低脚高杯あるいは高台付杯か椀か器種の命名に苦慮するところである。皿状の杯部に垂直に立つ口縁部をもつ。外面には凹線文がめぐる。内面はハケ目仕上げである。50～54は甕形土器である。51を除き他は全てⅠ－12区より出土した。52～54は内面頸部下位にまでヘラ削り手法が及んでいる。さらに端面には明瞭な凹線文をもたないなどの点から前述の土器群よりも後出のものと考えられ、弥生時代後期に比定されよう。遺構の存在は確認されなかった。

石器（第120図）



第120図　遺構に伴なわない遺物(5)（1～7　S＝2：3、8　S＝1：2）

1～4は石鏃である。それぞれ大小の差はあれ、凹基式石鏃に分類されるものである。1は安山岩製、2～4はサヌカイト製である。いずれも非常に風化が進んでおり、細かい剥離の観察は困難である。また、形態からみても弥生時代の石鏃とは異なるものであり、縄文時代に属するものと考えられる。1はJ－9区、2・3はH－6区、4はH－9区より出土した。5は石灰質頁岩製砥石である。三角形状を呈し、表裏両面及び側面の全ての面を砥面として使用している。H－6区より出土した。6は白雲母石英片岩製磨製石庖丁である。左位半分を欠く。K－12区より出土した。7はサヌカイト製横長剥片に二次加工を施したものである。I－4区より出土した。8は用途不明石器である。棒状礫を切断し、切断面から表裏両面に剥離を施している。表面及び両側辺は磨かれている。緑色片岩製。大田十二社遺跡4号住居址出土例（註4）と酷似する。大田十二社例ではスタンプ状石器という名称を用いたが、本遺構もこれに準ずることにする。

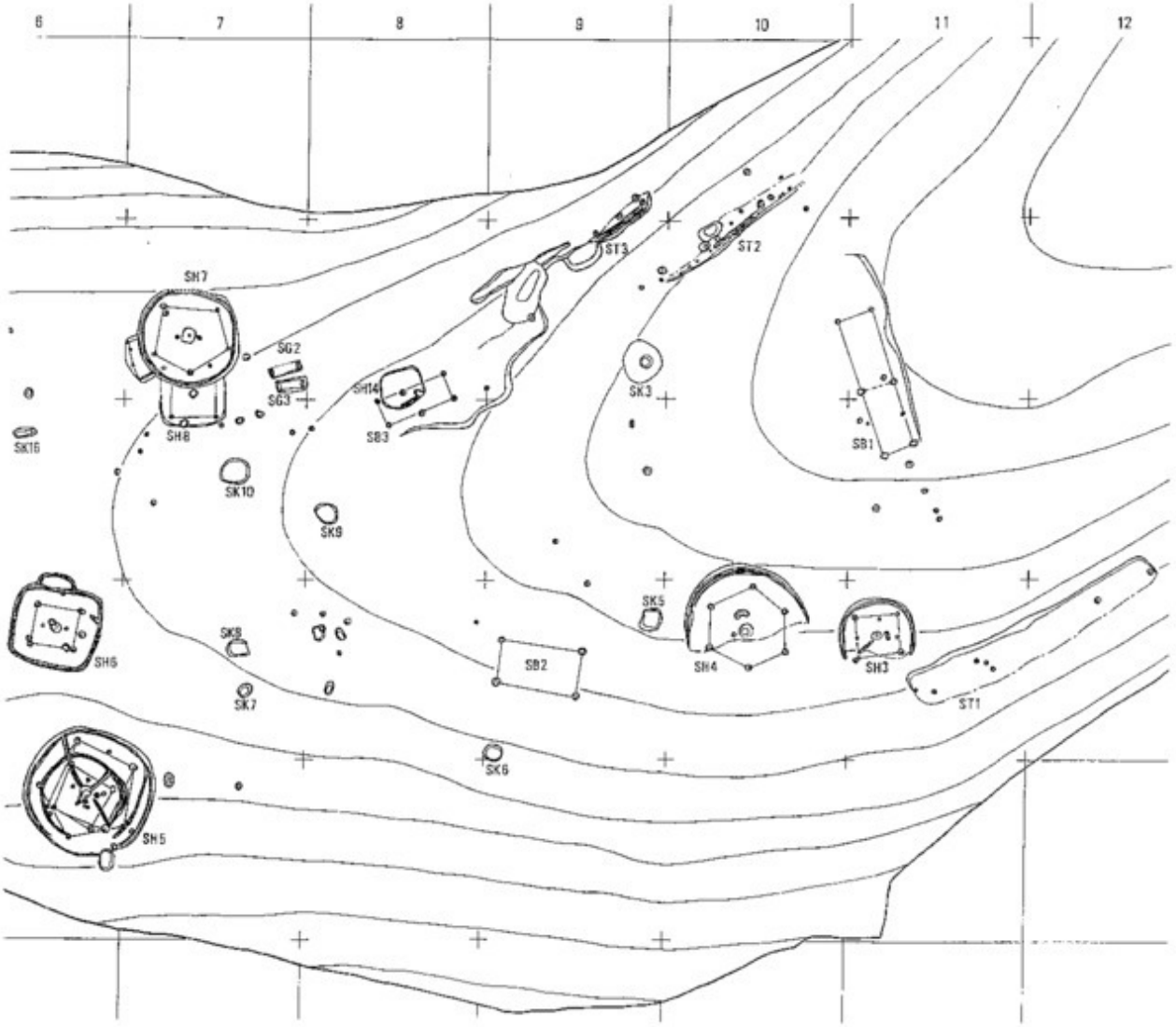


（註１）　丸山　潔「新方遺跡」『新方遺跡発掘調査概要・居住遺跡発掘調査概要』神戸市教育委員会1984年
（註２）　湊　哲夫、安川豊史、行田裕美『押入西遺跡』『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第14集』津山市教育委員会1983年
（註３）　松本和男、池畑耕一、新東晃一、枝川　陽、『門前池遺跡』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告９』岡山県教育委員会1975年
（註４）　河本　清、中山俊紀、安川豊史、行田裕美『大田十二社遺跡』『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第10集』津山市教育委員会1981年

Ⅳ　まとめ

1　各遺構の時期について

Ａ地区は、調査面積に比べ遺構総数が非常に少ない。中でも時期のわかるものは２遺構にすぎない。建物址１は柱穴より出土した土器から弥生時代後期、溝１は埋土中より出土した土器から弥生時代中期と考えられる。他の遺構は伴出遺物がないため時期不明である。Ａ地区の集



第121図　Ｂ地区弥生時代中期遺構配置図（Ｓ＝１:400）

落の中心主体は丘陵頂部調査区域外東側に位置するものと考えられ、調査区は集落西端の一部と考えられる。A地区は資料的に多くを語れるものはなく、以下記述はB地区を対象とする。

B地区は、縄文時代から鎌倉時代初頭にかけての長期間にわたる複合遺跡である。大半を占めるのは弥生時代中期の時期であり、この時期を前後する時期の遺構はわずかである。弥生時代中期については後で詳述することにし、ここでは弥生時代中期以外の遺構について時期的検討を加えることにする。

まず、縄文時代に属すると考えられるものは、土壙12～15である。この種の土壙は円形あるいは楕円形のプランを呈し、深さは1m前後を測る非常に深いもので、底面には1～2の柱穴をもつ。通常「陥し穴」と呼ばれているものである。遺物はほとんど出土しないのが通例であるが、土壙15からは所属時期区分は不明であるが、縄文土器と考えられる口縁部が出土している。このことから土壙12～14も同時期と考えられる。

弥生時代後期に属するものとしては、住居址1、住居址2、土壙1、土壙2、土壙4があげられる。これらはいずれもほぼ同時期であり、後期前半に比定されるものである。

古墳時代に属するものには、建物址4、建物址5、建物址6、土壙墓1がある。建物址5、建物址6の柱穴からは小片ではあるが、須恵器が出土している。建物址4からは遺物は出土していないが、規模、構造が建物址5とほぼ同一であることから同時期と考えて間違いはなさそうである。土壙墓1は出土した須恵器からみて6世紀後半頃と考えられる。

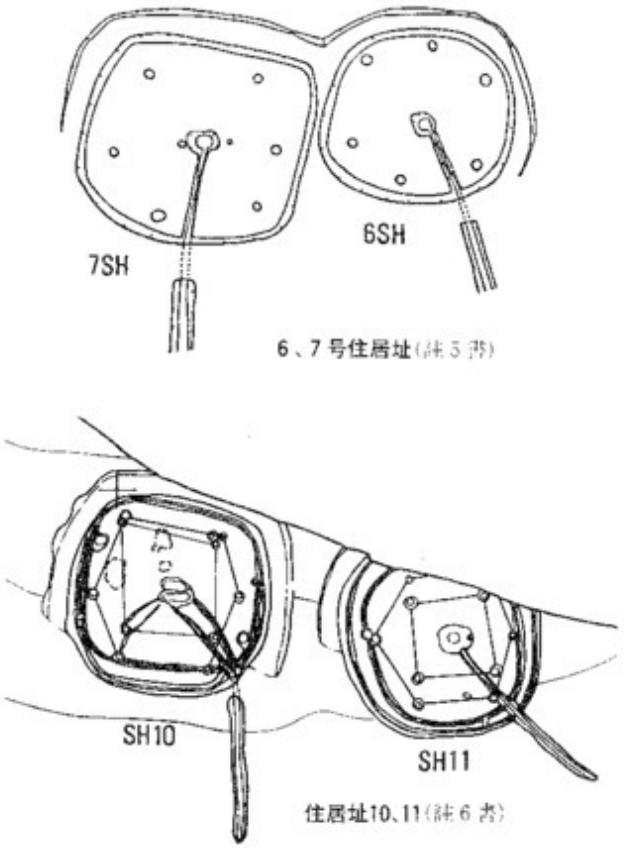
次に、土壙墓7出土須恵器の類例は美作国府跡下層出土土器（註1）の中に見い出され、平安時代前半に比定される。土壙墓6からは勝間田焼の大型甕形土器が出土している。唯一本格的な発掘調査が実施された勝田郡勝央町進上谷窯址出土例に類例を求めることができることから12世紀代に比定されよう（註2）。土壙墓5も同様の形態の遺構であることから、土壙墓6と同時期と考えたい。

以上遺物を伴出しているもの、あるいは類似遺構についての所属時期を明らかにしたが、記述のない他の遺構は遺物を伴なわないものを除きすべて弥生時代中期に属するものである（第121図）。

2　西吉田遺跡中期弥生土器編年について

美作地方における中期弥生土器の編年は前葉、中葉、後葉という大まかな流れは把握できるものの、細部にわたっての編年研究は、ここ10数年来の開発に伴なう発掘調査件数の増加による資料の蓄積で、やっと視点が注がれるようになったというのが現状であろう（註3）。例えば、ビシャコ谷遺跡（註4）でもそうであったように、住居址どうしが切り合い、明らかに同時併存はあり得ないという事実がありながらも、この時期差が土器の変化として把握しきれていないという状況にある。また、別の例もある。押入西遺跡6号住居址・7号住居址（註5）

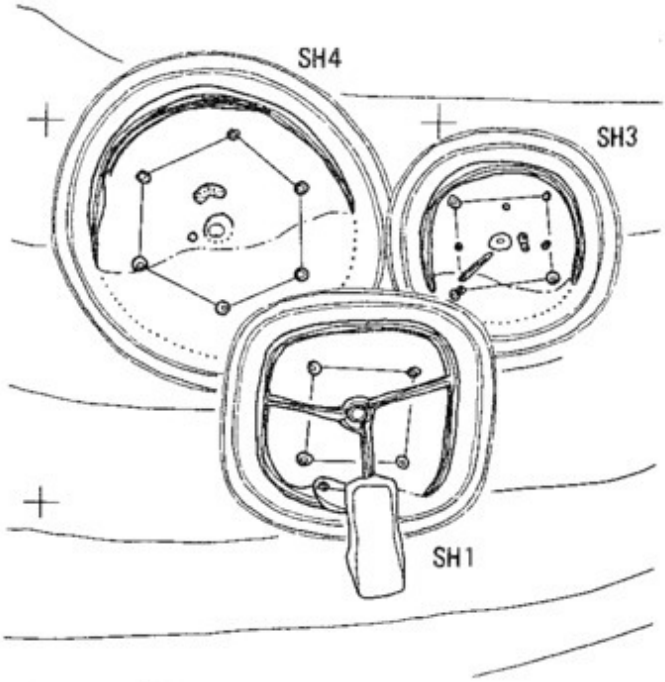
住居址10、住居址11（註６）の関係のように直接竪穴どうしが切り合っていない場合である。この場合も上屋を復元した場合同時併存は考えられない。切り合いがない場合でも時期差を認めなくてはならないという好例であろう（第122図）。これらのように時期差のある住居址であるにもかかわらず、土器の変化として把握されないという事実は、同一土器型式の存続期間内の住居の切り合い、あるいは隣接と考えれば問題は解消されるかのようであるが、逆に当然のことながら、遺構の切り合い関係が土器の変化としてとらえられることも少なくないのである。そこで編年作業にあたっては遺物だけを上導させるのではなく、極力遺構、とくに住居址の切り合い関係、拡張の回数、あるいは立地状況すなわち前述の押入西遺跡例のような隣接住居の同時併存の問題等を考慮しなければならない。住居の構築は竪穴の掘削、屋根材の代採、運搬等大変な労働力を必要とする。従って、火事などの特別な理由がない限り住居使用耐用年数内に住居を放棄することはまず考えられないであろう。さいわい西吉田遺跡の中期住居址には火災住居が１軒もなく、住居の建て替えはすべて老朽化によるものとの観点から論を進めることにする（註７）。



第122図　押入西遺跡6・7号住居址、住居址10・11平面図
（S＝1：200）

第123図は住居址１・３・４の居住空間を推定した平面模式図である。竪穴住居の掘形外方に平坦面を設定し、さらにその外周に土堤を復元したものである。上屋の垂木はこの土堤の上面に位置するものと考えると、土堤を含めた範囲までが居住空間となる。竪穴住居の掘形外方にめぐる平坦面は「段状施設」（註８）、あるいは「棚」（註９）と呼称されているもので、丘陵部に立地する住居址にはしばしば検出されるものである。美作地方でも押入西遺跡、稼山遺跡群（註10）、ビシャコ谷遺跡等で検出されており、幅は平均して50cm前後という数値が妥当である。次に土堤の幅であるが、これについては遺存例が全くなく不明と言わざるを得ない。ただ、藤田氏も指摘されているように（註11）、登呂遺跡例（註12）、京免遺跡外周溝例（註

13）などは土堤幅を考える上で大いに参考になるものである。しかしながら、あくまでも推測の域を出ないため、本稿では具体的数値は示さず土堤の存在を認めるにとどめておきたい。こうしてみると住居址１・３・４の３軒はいずれも同時併存はあり得ないことが明確に理解される。ただし、住居址１は後期初頭に位置づけられることから、中期の編年の対象にならず、住居址３・４の２時期が設定される。次に、住居址５に目をむけると、住居址５は２度拡張が行なわれている。ということは、３時期にわたって使用されたことを物語るものである。最終段階の住居址埋土中には多量の中期の土器を包含していた。このことから西吉田遺跡Ｂ地区の弥生時代中期住居址は少なくとも３時期に分類されることがわかる。従って、土器編年についても同様の事が言えるのである。



第123図　住居址１・３・４居住空間復元平面模式図（Ｓ＝１：200）

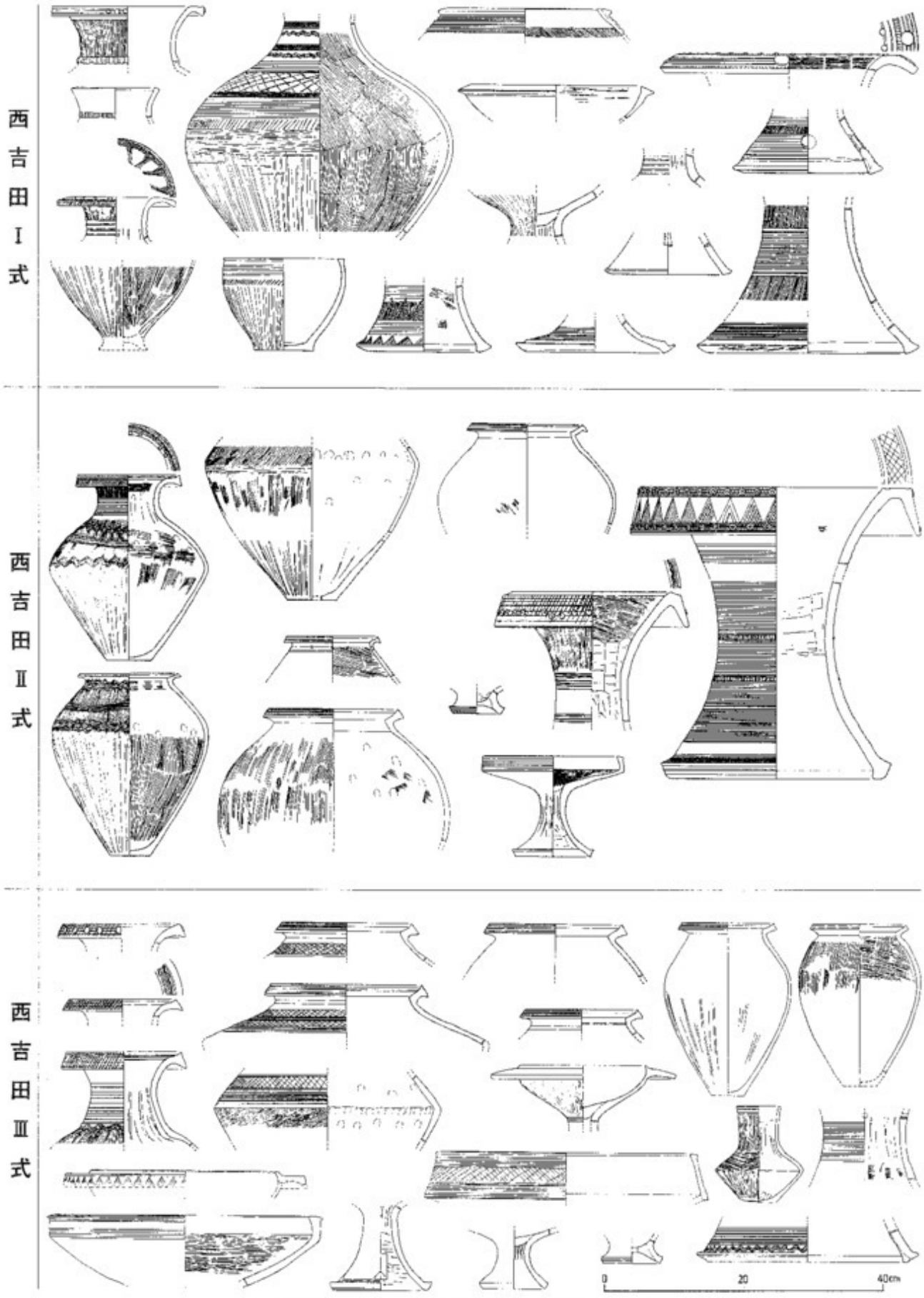
以下、土器編年について検討することにしよう。本遺跡の出土土器には一括遺物が少なく、また完形品もほとんどないなど、良好な資料とは言い難い。従って、床面出土土器を中心にしながら、多くは型式学的方法に頼らざるを得ないことを前提に述べておきたい。

住居址３・４出土土器を検討すると、古く位置づけられるのが住居址４出土土器であり、新しく位置づけられるのが住居址３出土土器である。そしてさらに新しく位置づけられるのが住居址５出土土器である。古い方から順にそれぞれ西吉田Ⅰ式、Ⅱ式、Ⅲ式と命名する。

西吉田Ⅰ式土器（第124図上段）

住居址４、住居址９、段状遺構４出土土器を標式とする。

壺形土器には、大きく分類して３種が認められる。頸部に凹線文をもつもの、凹線文をもたず貼り付け突帯をめぐらし、その上に刺突文を施すもの、凹線文をもたず櫛描直線文、櫛描波状文を交互にめぐらし肩部から胴部にかけて凹線文、斜格子目文を施すものの３種である。いずれも口縁端部は拡張しない。頸部の凹線文は間隔が広く鋭角に施されており、稜線を形成するのが特徴である。外面胴部下半は下位に縦方向のヘラ磨きを施した後、上位を横方向のヘラ磨きで仕上げている。



第124図　西吉田遺跡中期弥生土器編年表（S＝1：8）

甕形土器には台付甕形土器を除き、良好な資料は見当らない。

高杯形土器は椀状の杯部をもち、口縁端部は外方にだけ拡張する。端面は内傾し凹線文をもつものともたないものの2種がある。脚部に凹線文をもつものは、壺形土器同様間隔が広く、鋭角に施されており、稜線を形成する。

器台形土器も同様、鋭角に凹線文が施されており、稜線を形成する。口縁部は外反する程度で下方に垂れ下がらない。全器種を通して間隔の広い鋭角な凹線文が特徴である。

他に鉢形土器、台付無頸壺が組成に加わる。

西吉田Ⅱ式土器（第124図中段）

住居址3、土壙墓4出土土器を標式とする。

壺形土器には頸部に凹線文をもち、肩部から胴部にかけて櫛描波状文、直線文をもつものと、胴部が鋭角に張り出すものの2種が認められる。後者の胴部最大径上位には凹線文、斜格子目文が施されず、ハケ目仕上げとなっている。

甕形土器は大、中、小、台付の4種が認められる。小型のものには、壺形土器と同じ文様構成、すなわち櫛描波状文、直線文をもつものもある。

高杯形土器は唯一である。口縁部はほぼ垂直に立ち、外面には凹線文をもつ。

器台形土器口縁部は下方に大きく垂れ下がる。この結果、水平面が形成され、水平面には櫛描波状文、格子目文が施される。脚端部は肥厚し、外方へやや拡張する。

西吉田Ⅲ式土器（第124図下段）

住居址5、住居址10、住居址11、住居址12出土土器を標式とする。

壺形土器には頸部に凹線文をもち、肩部から胴部にかけて櫛描文をもつものと、胴部がそろばん玉状に鋭角に張り出し、その上位を斜格子目文、凹線文あるいは櫛描直線文で飾るものの2種がある。後者の出現をこの時期の特徴とする。いずれの口縁部も端面には数条の凹線文をもち、やや内傾し拡張する。

甕形土器も大、中、小、台付の4種が認められる。内面には部分的にヘラ削り痕跡の認められるものもある。

高杯形土器は杯部、脚部とも非常にバラエティーに富む。大型のものには、湾曲して立ち上がるものと、鋭角に真っすぐ立ち上がる口縁部をもつものの2種がある。前者の外面は凹線文で飾るのに対し、後者は中位を斜格子目文で加飾している。小型のものは、椀状の杯部に鍔状の張り出しがめぐるものであり、端部がそのまま終わるものと、下方に拡張し端面を平行線文で埋めた鋸歯文で加飾するものの2種がある。

器台形土器は基本的に外面は凹線文で飾るが、最下端はさらに櫛描波状文で加飾するのが特

徴である。端部は外方に張り出す。

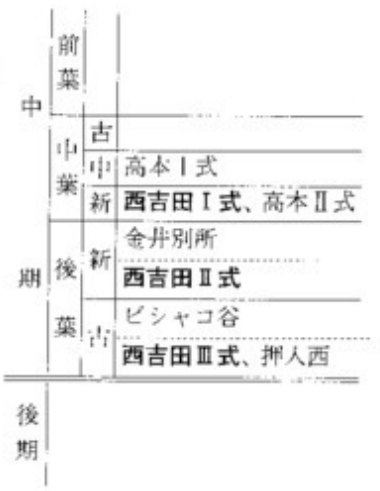
他に直口壺が組成に加わる。

さて、次に以上述べてきた西吉田Ⅰ式～Ⅲ式土器の他遺跡との併行関係、編年的位置について考えてみたい。

西吉田Ⅰ式土器に含まれる住居址4出土壺形土器（第29図3）、段状遺構4出土壺形土器（第72図4）の類例は岡山市百間川今谷遺跡（註14）溝－12出土遺物の中に類例を求めることができる（註14書第385図1594）。溝－12出土遺物は一括遺物であり、ほぼ併行関係にあるものと考えられる。そしてその時期は百間川中期Ⅱの新相に比定されている。百間川中期Ⅱの新相は雄町4類（註15）、高橋護氏のⅣ期C（註16）に相当するものである。美作地方では、英田郡作東町高本遺跡高本Ⅱ式土器（註17）がこの時期に相当するものと考えられる。

西吉田Ⅲ式土器の最も特徴的なことは、肩部に斜格子目文を有す壺形土器の出現ということができる。津山市押入西遺跡（註18）がまさにこの時期に相当する。高本遺跡報告書では、「高本Ⅲ式は押入西遺跡出土にほぼ相当する時期」との指摘があるが、高本Ⅲ式土器の実態はやや不明確であり、本稿では高本Ⅲ式土器は取り上げないことにする。また、壺形土器の頸部に凹線文の代わりに刺突文をめぐらすものが残るなど、若干古い様相を呈すものにビシャコ谷遺跡5号長方形住居状遺構出土の一括遺物（註19）があげられる。現在までのところ、Ⅲ式土器に続く土器群としては、後期初頭までドらなければならない。Ⅲ式と後期との間には土器の上でかなりのギャップがあるように考えられるが、実際にこの空白を埋める明確な資料は見当らない。Ⅲ式が直接後期につながるのか、あるいは別の土器群が存在するのか今後の成果を待ちたい。現段階では、西吉田Ⅲ式をもって中期の終わりと考えたい。

西吉田Ⅱ式土器はⅠ式とⅢ式土器の間に位置づけられる。Ⅱ式土器にやや先行すると考えられるものに津山市金井別所遺跡2号住居址出土の一括遺物（註20）があげられる。壺形土器は頸部の凹線文条数が少なく、外面胴部下半の調整はⅠ式土器のそれと同様下位に縦方向のヘラ磨きを施した後、上位を横方向のヘラ磨きで仕上げている。数個体の完形品が出土しているが、いずれもこの手法が用いられている。Ⅱ式土器の胴部が鋭く張り出す器形の壺形土器（第84図4）には、わずかにこの手法が認められる。



以上の関係を美作地方の遺跡で整理すると右のようになる。

3　西吉田遺跡の集落について

前項で中期弥生土器を3時期に分類したが、これに後期前半の1時期を加えると西吉田遺跡

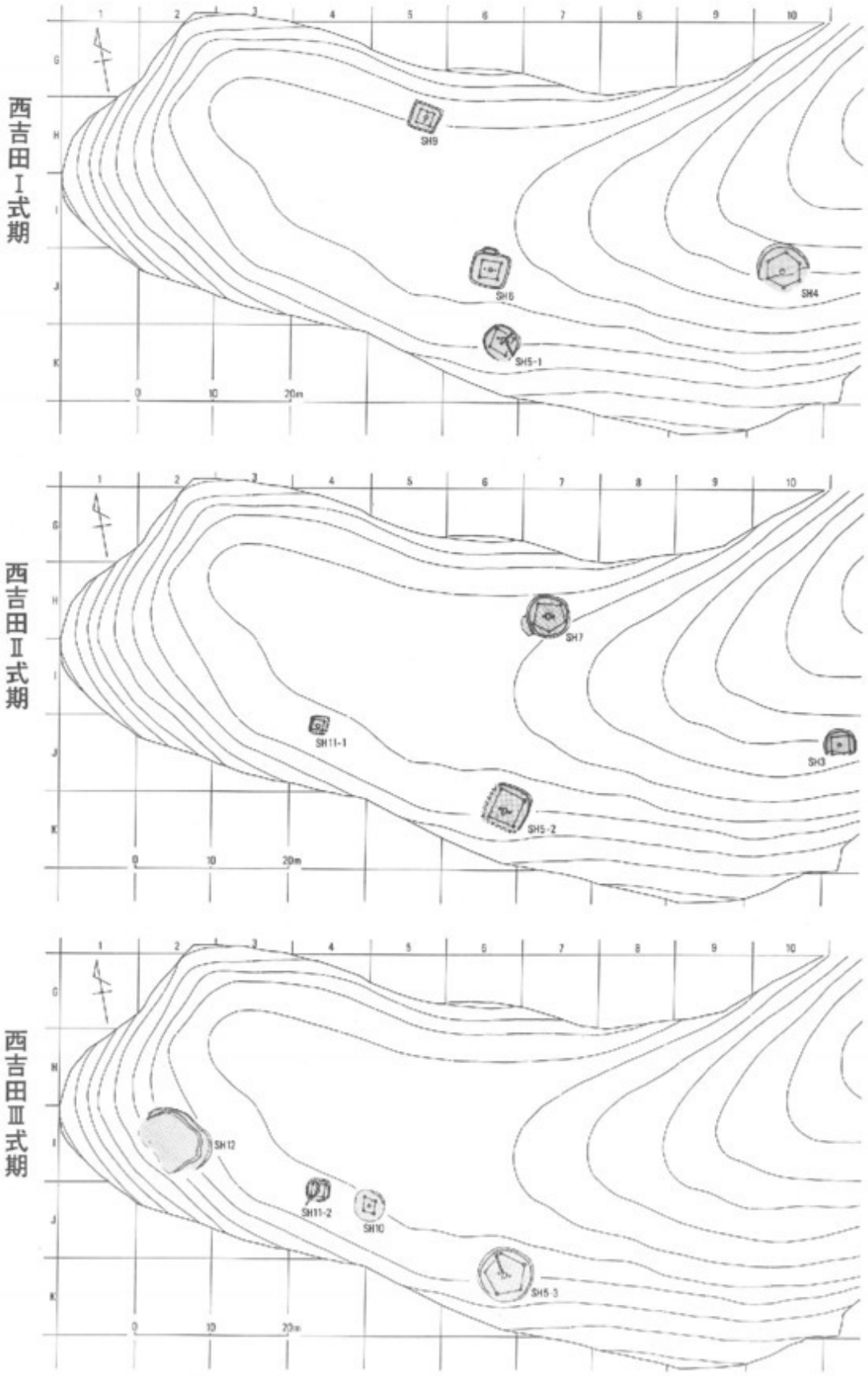
の弥生土器は4時期に編年される。このことは同時に集落も4時期にわたることを物語るものである。B地区で確実に住居址と考えられるものは、住居址1～7、9～11の10軒である。ただし、住居址5は2回、住居址11は1回の拡張がそれぞれ行なわれており、これらを加え計13軒の住居が時期を異にして存在したことになる。調査範囲は集落のほぼ全域に相当し、この他に住居数の大きな変動はないと考えられる。ただ、調査区域外に住居の存在が予測されるとするならば、住居址2の南斜面側に可能性が求められる程度である。これら13軒と住居構築途上と考えられる住居址12を各時期別に分類したのが第125・126図である。以下、各時期ごとに検討することにする。

西吉田Ⅰ式期（第125図上段）

住居址4、住居址5の最初の円形住居（以下住居址5－1と記述）、住居址6、住居址9の4軒より構成される集落である。住居址5－1はその後2度にわたる拡張で遺物は残存しないが最終段階の円形大型住居（以下住居址5－3と記述）埋土に包含される土器が西吉田Ⅲ式であることから、最初の住居址5－1を西吉田Ⅰ式期に考えた。住居群は大型円形住居1軒(住居址4）、小型円形住居1軒（住居址5－1）、隅丸方形住居1軒（住居址6）、方形住居1軒（住居址9）という構成である。住居址4は6本柱、他はいずれも4本柱の住居である。住居址5－1と住居址6の壁体間距離は最も近い所で約4.5mを測る。藤田氏の指摘によると（註21）同時併存は在り得ない距離である。しかし、段状施設を約50cmと考え、両者を合わせて差し引いても3.5mの間隔となる。この空間に土堤と屋根を設定することは可能なように考えられるのである。最も遠い住居址4と住居址9の壁体間距離は約45mを測る。住居の立地は西方先端部には及ばない。

西吉田Ⅱ式期（第125図中段）

住居址3、住居址5の1度目の拡張住居（以下住居址5－2と記述）、住居址7、住居址11の最初の段階の住居（以下住居址11－1と記述）の4軒より構成される集落である。住居群は大型円形住居1軒（住居址7）、円形住居1軒（住居址3）、隅丸方形住居2軒（住居址5－2、11－1）という構成である。住居址7は5本柱、他はいずれも4本柱の住居である。最も近い距離にあるのは、住居址7と住居址5－2で、壁体間約19.5mを測る。最も遠い関係にあるのは、住居址3と住居址11－1で壁体間約64.5mを測る。住居の立地は北斜面、南斜面、東西方向とほぼ均一に配されている。Ⅰ式期との立地の相異は丘陵西方に住居址11－1が占地したことである。



第125図　B地区弥生時代中期住居址時期別配置図（S＝1：800）

西吉田Ⅲ式期（第125図下段）

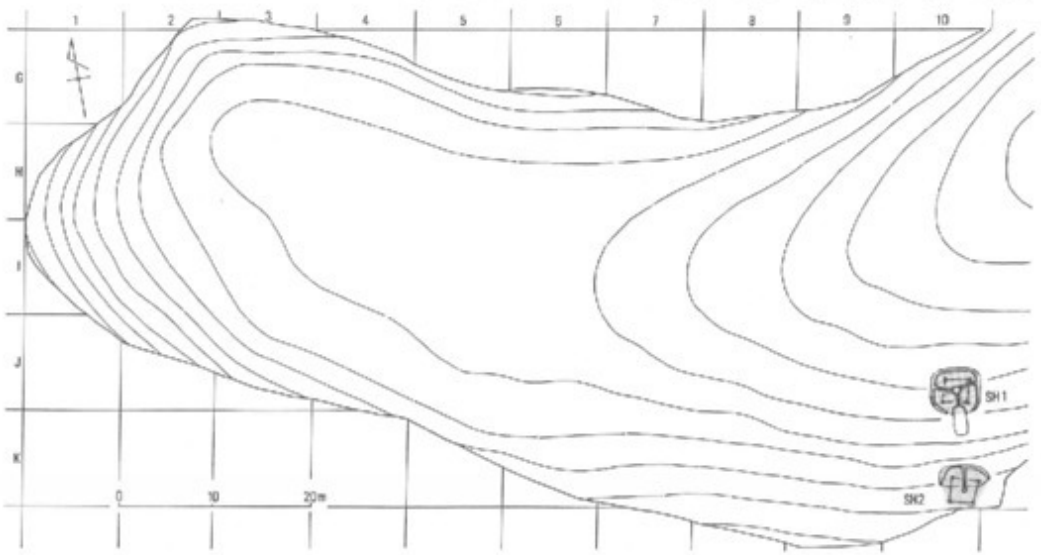
住居址５－３、住居址10、住居址11の拡張段階の住居（以下住居址11－２と記述）の３軒より構成される集落である。住居構築途上と考えられる住居址12は時期的には本期に比定されるが、明確な住居址ではないため対象から除外する。住居群は円形大型住居１軒（住居址５－３）円形住居１軒（住居址10）、隅丸方形住居１軒（住居址11－２）という構成である。住居址５－３が５本柱、他の２軒は４本柱住居である。住居址10と住居址11－２の壁体間距離は最も近い場所で約3.5ｍを測る。前述の西吉田Ⅰ式期の住居址５－１と住居址６の関係同様同時併存を考えたい。住居の立地は全て南斜面に位置することが特徴である。

後期前半期（第126図）

住居址１、住居址２の２軒より構成される。共に隅丸方形プラン４本柱住居である。両者の間には出土土器からみてやや時期差があるように考えられる。すなわち、住居址２の方がやや古く、前半の中でもより初頭に近い時期と考えられる。しかし、遺物の量が少ないことから明確な根拠とはならない。従って、初頭をも加味した広義の後期前半期という時期を設定した。この期の中央穴は中期の中央穴に比べ、非常に深くなるのが特徴である。壁体間距離は約5.5ｍを測る。立地は南斜面に位置する。

以上、各時期ごとにみてきたが、中期の段階の集落は各期とも５～６本柱の大型円形住居に対して２～３軒の円形ないし隅丸方形の４本柱住居で構成されていることが理解できる。これと全く同様の関係は押入西遺跡Ａ地区（註22）においても窺うことができる。

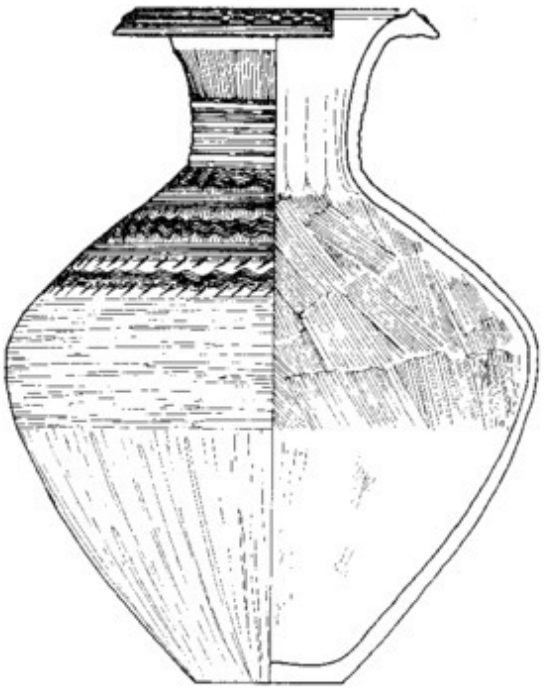
さて、次に以上４期の集落が連続して営なまれたのか、あるいは間欠的に営なまれたのかが問題となってくる。これの解決はやはり土器編年に頼らざるを得ない。西吉田Ⅰ式～後期前半までの各土器型式の連続性の問題である。冒頭述べたように、美作地方の中期弥生土器の編年は



第126図　Ｂ地区弥生時代後期住居址配置図（Ｓ＝1：800）

やっと研究の視点が注がれるようになったというのが現状であり、各土器型式の連続性、時間幅の問題などあくまでも推測の域を出ない。しかし、あえて考えてみよう。

西吉田Ⅰ式と西吉田Ⅱ式とは一見時期差があるように考えられるが、間に金井別所遺跡を介在させると案外すんなりいくようである。金井別所遺跡出土壺形土器（第127図）に例をとると（註23）胴部外面の横方向のヘラ磨き調整、頸部凹線文断面が丸味を帯びるなど西吉田Ⅰ式とⅡ式、すなわち古い要素と新しい要素の両方を兼ね備えているようである。そして、どちらかといえばより西吉田Ⅱ式に近いように考えられる。



第127図　金井別遺跡2号住居址出土土器（S＝1:4）

西吉田Ⅱ式と西吉田Ⅲ式の関係も西吉田Ⅰ式と西吉田Ⅱ式の関係同様間にビシャコ谷遺跡を介在させることにより、より鮮明になる。ビシャコ谷遺跡は頸部に刺突文を有す壺形土器が残るなど西吉田Ⅲ式より若干古い様相を呈すものの、西吉田Ⅱ式に比べるとより西吉田Ⅲ式に近い。これらのことから、西吉田Ⅰ式期から西吉田Ⅲ式期までの集落はほぼ連続して営なまれたということができよう。各期の存続期間については全く不明と言わざるを得ない。

次に、西吉田Ⅲ式期と後期前半期の関係について考えてみたい。前項の土器編年の中でも述べたように、中期末と後期初頭に位置づけられる土器群との間にはかなりの差異があるように感じられるが、現在までのところ両者の間を埋める明確な土器群は確認されていないのが実状である。このことは両者が直接つながるのか、あるいは今後新たに発見される可能性があるのかという問題にかかわってくる。この問題については、現段階では不明と言わざるを得ず、今後の成果を待ちたい。次に両者の集落の立地はどうであろうか。津山市内で中期から後期にかけて継続的に営なまれた遺跡としては、京免遺跡、竹ノ下遺跡（註24）などがあげられるが、その数は数遺跡にも満たない。そして、いずれも沖積平野部に立地することが多く、丘陵部に立地する遺跡はほとんどない。丘陵部に集落を営なんだ遺跡としては、代表的なものとして、押入西遺跡、ビシャコ谷遺跡、天神原遺跡（註25）、大田十二社遺跡（註26）などがあげられるが、前二者は中期だけ、後二者は後期だけというように、中期から後期に継続しないのが特徴のようである。これらのことから西吉田Ⅲ式期と後期前半期の集落は間欠的に営なまれたものと考えられよう。

4　弥生時代中期土壙墓について

弥生時代の土壙墓は一定の墓域を設定し、その中に群在するのが通常のあり方である。中期に属するものとして代表的なものにアモウラ遺跡（註27）をあげることができる。アモウラ遺跡の土壙墓群は中期中葉頃に属し、計45基が検出されている。また、これとは対象的にまれな例ではあるが、集落の中に点在する場合もある。押入西遺跡A地区では中期後半の集落の立地する丘陵上に1基だけ単独で位置する。本遺跡の弥生時代中期に属する土壙墓は土壙墓2～4の3基だけであり後者の例に属する。3基の土壙墓の時期について検討してみよう。土壙墓4出土の一括土器群は西吉田Ⅱ式土器の標式としたものである。土壙墓3は時期を決定する資料に乏しいが、西吉田Ⅱ式期と考えたい。土壙墓2は出土遺物がなく時期不明である。しかしながら、立地を考えた場合、土壙墓3と並列関係にあることから同時期のものと考えられよう。そうすると、西吉田Ⅱ式期に属する円形大型住居である住居址7にいずれも近い位置に占地したことが窺える。集団墓地から離れてなぜ集落内に散発的に埋葬されたのであろうか。この問題については今のところ明確な見解を持ち合わせていない。ただ、漠然と考えられることは住居址7と何らかのかたちで非常に深いかかわりをもった人ということができるかも知れない。特に、土壙墓3においては欠損したガラス玉を再利用しているなど重要視された一端が窺えるような遺物を副葬していること、土壙墓4においては多量の土器が供献されていることなど中期の集団墓地にはあまり例がみられないような特異な埋葬方法がとられている。これらのことが解決の糸口を与えてくれるかも知れない。

次に、土壙墓の形態、出土遺物、出土状況について考えてみよう。まず、土壙墓の形態であるが、床面に小口溝をもつものともたないものの2者が認められる。すなわち、土壙墓2・3は小口溝をもち、土壙墓4は小口溝をもたないのである。津山市下道山遺跡(註28)の土壙墓群は後期前半に属するものであり、計123基が検出されている。この内、小口溝をもたないものは18基であり、全体の15%に満たない。残り85%は両側あるいは片側に小口溝を有す。一方、岡山県南部の赤磐郡山陽町四辻土壙墓遺跡（註29）では逆に小口溝をもつものが少なく、小口溝をもたないものが圧倒的に多い。四辻土壙墓遺跡は中期と後期に属する土壙墓群で継続性は認められないものの、台状墓上のものも含め計71基よりなる。この内、小口溝をもつものは15基であり、全体の20%強を占めるだけである。残り80%は小口溝をもたない。下道山遺跡と全く対象的である。以上のように、小口溝をもつものともたないものの両者の土壙墓は同一墓域内に数量的差はあれ同時併存するのが一般的なようである。また、後期に属する例であるが、岡山県北部の真庭郡落合町中山遺跡（註30）のように小口溝を全くもたない土壙墓群もある。従って、小口溝の有無の問題については現段階では地域性、時期差は認めがたく、別に視点を注ぐ必要があるように考えられる。

出土遺物は棺内遺物と棺外遺物に分けられる。棺内遺物には土壙墓3の玉類及び石鏃、土壙

墓4の石庖丁がある。棺外遺物には土壙墓4供献の一括土器群がある。棺内遺物である玉類は岡山県内でも後期になるとかなりの遺跡で確認されているのが、中期に属する例は本遺跡が唯一であると思われる。土壙墓以外に目を向けても中期に属するものは、津山市内では沼遺跡(註31)A住居址のガラス製小玉1点、押入西遺跡A地区住居址4の碧玉製管玉1点を数える程度にすぎない。玉類と伴出した棺内遺物にサヌカイト製石鏃がある。この石鏃は先端部が折損している。先端部を折損した石鏃といえばそれまでであるが、ここに興味引かれる四辻土壙墓遺跡の報告がある。四辻土壙墓遺跡第47土壙では埋土中より36本もの石鏃が一括して出土している。この内、半数の18本が折れているのである。そして、その折れ口は古く、折れた状態で埋納されているのである。これは偶然の一致とは考えがたく、埋葬に際する折損石鏃供献という祭祀行為の結果と考えるのが妥当であろう。棺外遺物である土壙墓4の装飾に富む大型器台形土器を含む供献一括土器群は死者を埋葬後、土器に飲食物を入れお供えするという一連の祭祀行為を証明するものである。土器に混って炭化したモモの種子が出土したこともこれを裏付けるものといえよう。ただ、土器総個体数35中甕形土器が最も多く23個体を数え、全体の66%近くを占め、通常の壺形土器、高杯形土器が多いという例とは異なる。土器群上部の削平を想定してもこの組成はあまり変動はないと考えられ、甕形土器が多量に供献されていたということが指摘できる。

以上、拙稿ではあるがまとめとする。先学諸氏の御叱正をお願いする次第である。

(註1) 安川豊史『美作国府跡発掘調査報告』『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第15集』津山市教育委員会1984年
(註2) 伊藤 晃「山陽路(岡山・広島・山口)の古代中世窯」『日本のやきもの集成9』平凡社1981年
(註3) 安川豊史「美作弥生中期後半の土器様式」考古学研究会1月岡山例会発表レジメ1985年
(註4) 行田裕美「ビシャコ谷遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第16集』津山市教育委員会1984年
(註5) 河本 清、橋本惣司、下沢公明、井上 弘、柳瀬昭彦「押入西遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3』岡山県教育委員会1973年
(註6) 湊 哲夫、安川豊史、行田裕美『押入西遺跡』『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第14集』津山市教育委員会1983年
(註7) 逆の見解として藤田憲司「単位集団の居住領域—集落研究の基礎作業として—」『考古学研究第31巻第2号』1984年がある。藤田氏はこの中で『住居の耐用年数よりも使用年数による建て替え』を強調され、その年数を10年程と指摘されている。
(註8) 註5に同じ
(註9) 村上幸雄『稼山遺跡群I』『久米開発事業に伴なう埋蔵文化財発掘調査報告I』久米開発事業に伴なう文化財調査委員会1979年
(註10) 註9に同じ
(註11) 註7に同じ
(註12) 後藤守一、杉原荘介他『登呂』日本考古学協会編1978年
(註13) 中山俊紀『京免・竹ノ下遺跡』『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第11集』津山市教育委員会1982年
(註14) 高畑知巧、渡辺 光、正岡睦夫、畠崎 東、井上 弘、平井典子、平井泰男、下沢公明他『百間川兼基遺跡1、百間川今谷遺跡1』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告51』岡山県教育委員会1987年
(註15) 高橋 護、正岡睦夫、泉本知秀、高原克人、中力 昭、伊藤 晃、柴野克己「雄町遺跡」『埋蔵文化財発掘調査報告』岡山県教育委員会1972年
(註16) 高橋 護「入門講座、弥生土器—山陽1—」『月刊考古学ジャーナルNo.173』ニュー・サイエンス社1980年

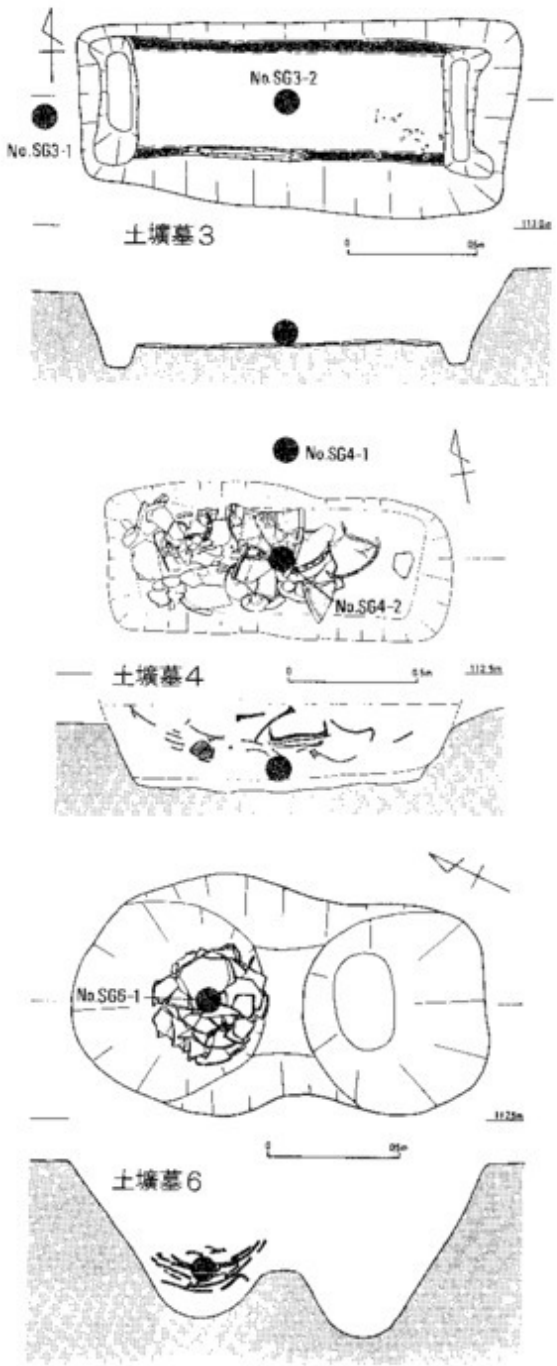
(註17) 井上　弘、松本和男、泉本知秀、岡田　博、山磨康平「高本遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告8』岡山県教育委員会1975年
(註18) 註5、6に同じ
(註19) 註4に同じ
(註20) 1975～76年にかけて中国電力㈱新津山変電所文化財発掘調査委員会が発掘調査を実施。報告書未刊。
(註21) 註7書の中で氏は住居間の距離を約20m程度と考えられている。
(註22) 註6書に同じ
(註23) 河本　清氏の御好意により掲載させていただいた。
(註24) 註13書に同じ
(註25) 河本　清、橋本惣司、下沢公明、柳瀬昭彦「天神原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告7』岡山県教育委員会1975年
(註26) 河本　清、中山俊紀、安川豊史、行田裕美『大田十二社遺跡』『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第10集』津山市教育委員会1981年
(註27) 1981～82年にかけて広域林業構造改善事業文化財発掘調査委員会が発掘調査を実施。報告書未刊。
(註28) 栗野克己、岡本寛久『下道山遺跡緊急発掘調査概報』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告17』岡山県教育委員会1977年
(註29) 神原英郎「四辻土壙墓遺跡」『岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報(3)』山陽町教育委員会1973年
(註30) 山磨康平、橋本惣司、奥　和之『中山遺跡』落合町教育委員会1978年
(註31) 近藤義郎、渋谷泰彦編『津山弥生住居址群の研究』津山市、津山郷土館1957年

V　土壙墓に残存する脂肪の分析

帯広畜産大学畜産環境学科　中野益男・伊賀　啓

動植物を構成している主要な成分はタンパク質、糖質（炭水化物）、脂質（脂肪）である。これらの有機質はいろいろな単純な化学成分が結合して分子量の大きくなった高分子化合物でもある。それは一見強く結ばれた構造をもっているようにみえるが、環境条件の変化にたいしては不安定で、長期間地下に埋蔵されている間に、土のなかに住んでいる微生物の作用を受けて分解していく。これまで、有機質が完全な状態で遺存するのは、地下水位の高い低地遺跡、泥炭遺跡、貝塚などごく限られた場所にすぎないと考えられてきた。しかし最近の研究から、生体成分の一部は微量ながら比較的安定した状態で遺物に残存しているという事実があきらかにされた。その生体成分の一つに脂質がある。

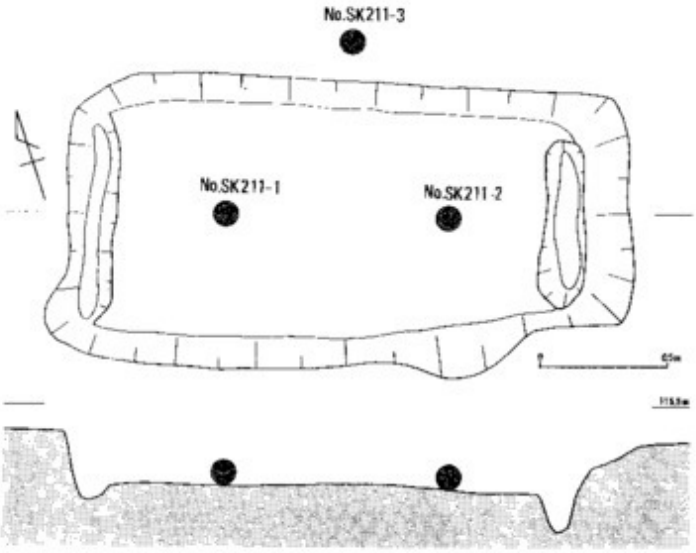
脂質は構造的な違いから誘導脂質、単純脂質および複合脂質に大別される。ひろく一般的には「脂肪」ともよばれているが、学術的には複合脂質をのぞいた脂質を脂肪とよんで区別している。脂肪を構成している主要なクラス（種）が脂肪酸で、その種類、含量も最も多い。これには、炭素の鎖がまっすぐにのびた飽和型と鎖の途中に二重結合をもつ不飽和型があり、動物では炭素の数が多くて飽和型、植物では不飽和型というように動植物は種ごとに固有の脂肪酸をもっている。ステロールについても動物性のものはコレステロール、植物性のものはβ（ベータ）シトステロール、微生物



第128図　西吉川遺跡土壙墓3・4・6土壙試料採取地点（S＝1:30）

はエルゴステロールをもつという特徴がみられる。従って、出土遺物の脂肪の種類およびそれらを構成している脂肪酸組成が判明すれば、現生の動植物の脂肪酸組成と比較して、動植物の種を判別することは可能である（註１）。

この残存脂肪分析法を腐朽分解が進み、考古学的実証が困難な土壙墓に適用し、土壙内の土壌に残存する脂肪を分析することによって墓壙の認定をおこなった。



第129図　アモウラ遺跡土壙墓（SK211）土壌試料採取地点（S＝1:30）

１．土壌試料

西吉田遺跡土壙墓内床面、埋土および土壙墓外の地山５地点、アモウラ遺跡土壙墓内外の３地点から土壌試料をそれぞれ約250g 採取した。試料採取地点を第128、129図、および採取試料名を一覧表に示す。

土壙墓の残存脂肪抽出量一覧表

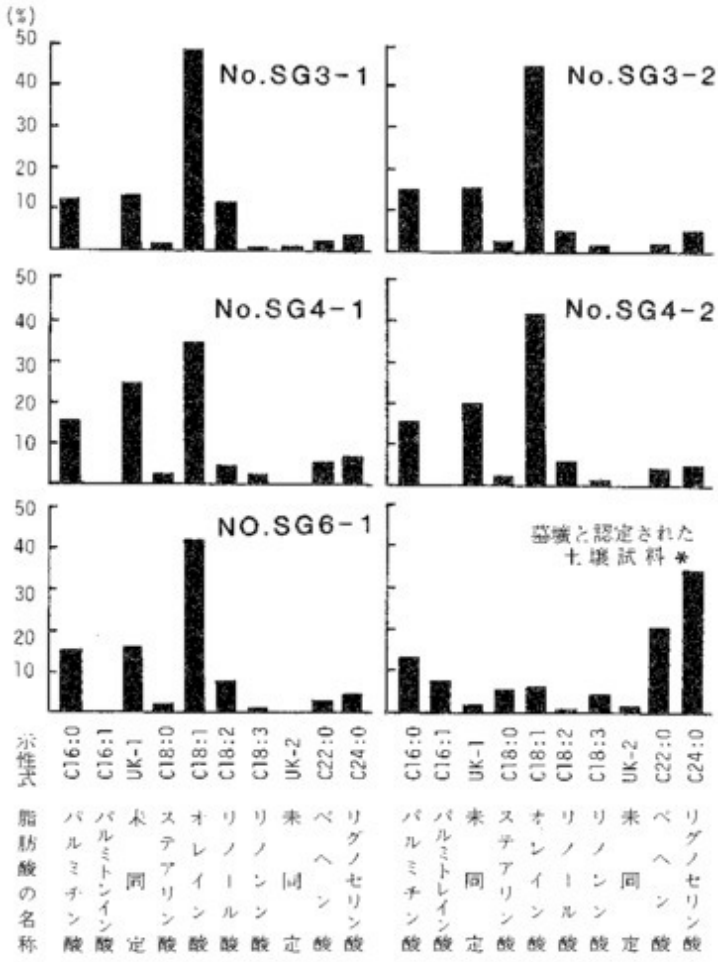
遺跡試料名		土壌試料	残存脂肪抽出量	抽出率
西吉田遺跡		(g)	(mg)	(%)
No.SG3-1	(地山)	250.0	50.7	0.020
No.SG3-2	(床面)	250.0	30.0	0.012
No.SG4-1	(地山)	250.0	50.7	0.020
No.SG4-2	(床面)	250.0	34.3	0.014
No.SG6-1	(埋土)	250.0	43.1	0.017
アモウラ遺跡				
No.SK211-1	(床面)	228.0	28.9	0.013
No.Sk211-2	(床面)	231.5	31.0	0.014
No.Sk211-3	(地山)	236.9	14.1	0.006

２．残存脂肪の抽出

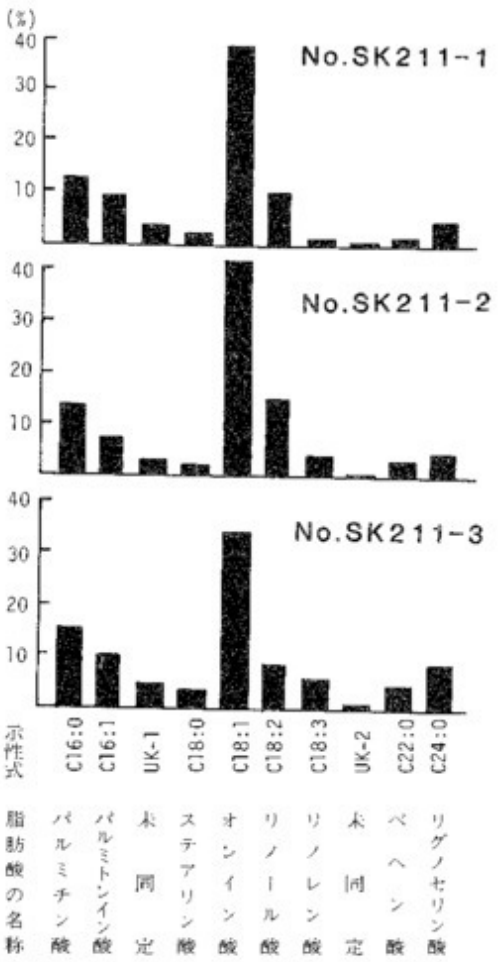
土壌試料にクロロホルム—メタノール（２：１）混液を加え、超音波処理して脂肪を抽出した。この操作を更に２回繰り返して得られた全抽出物に１％塩化バリウムを加え、クロロホルム層と水層に分配し、下層のクロロホルム層を濃縮して残存脂肪を分離した。

残存脂肪の抽出量を一覧表に示す。抽出率は0.006～0.020%、平均0.015%と低かった。残存脂肪抽出量は、西吉田遺跡については土壙墓外の地山、アモウラ遺跡については土壙墓内の床面に高い傾向が認められた。しかしその値は極端な有意差を示すものではない。

残存脂肪をケイ酸薄層クロマトグラフィーで分析した結果、主要な脂肪種は遊離脂肪酸、トリグリセライド、ステロール、ステロールエステルおよび長鎖炭化水素であった。



第130図　西吉田遺跡土壙墓内に残存する脂肪の脂肪酸組成
（＊　墓壙と認定された福岡県十三塚遺跡土壙試料）



第131図　アモウラ遺跡土壙内に残存する脂肪の脂肪酸組成

3．残存脂肪の脂肪酸組成

土壙墓内外の残存脂肪に5％メタノール性塩酸を加え、100℃で2時間反応させて脂肪酸メチルエステルを調製した。この脂肪酸メチルエステルを薄層クロマトグラフィーで精製後、ガスクロマトグラフィーで分析した（註2）。

西吉田遺跡土壙墓に残存する脂肪の脂肪酸組成を第130図に示す。残存脂肪からパルミチン酸、オレイン酸、リノール酸、リノレン酸（アラキジン酸）、ベヘン酸およびリグノセリン酸など10種類の脂肪酸を検出した。土壙墓内床面試料No.SG3-2およびNo.SG4-2、土壙墓外地山試料No.SG3-1およびNo.SG4-1、並びに土壙墓内埋土試料No.SG6-1の残存脂肪酸はいずれもオレイン酸（不飽和脂肪酸）が主成分で、全体的に飽和脂肪酸が少なく、不飽和脂肪酸が多かった。この脂肪酸組成パターンは一般土壌によくみられる植物腐植に由来するそれと類似し、墓壙の認定（註3）に利用する高等動物に特徴的な高級脂肪酸のベヘン酸およびリグノセリン酸はほんの僅かしか検出されなかった。

アモウラ遺跡土壙墓に残存する脂肪の脂肪酸組成を第131図に示す。土壙墓内床面No.SK211-1、およびNo.SK211-2の主要な脂肪酸はオレイン酸で、高等動物に特徴的なベヘン酸およびリグノセリン酸はほんの僅かしか検出されなかった。この脂肪酸パターンは土壙墓外試料No.SK211-3ともよく類似していた。またアモウラ遺跡の脂肪酸パターンは西吉田遺跡の土壙墓内外のそれとも類似していた。

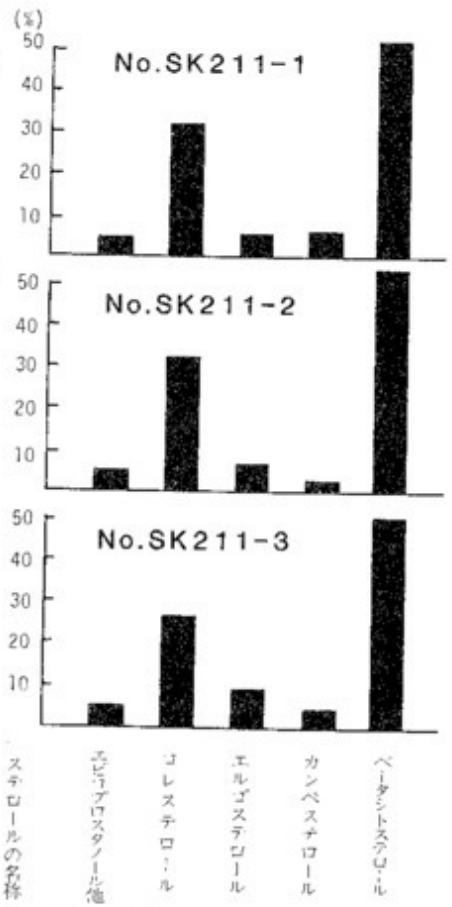
これらの成績から、採取した土壌試料内に明瞭な動物遺体の存在を確認することはできなかった。

4．残存脂肪のステロール組成

アモウラ遺跡の残存脂肪からステロールをケイ酸薄層クロマトグラフィーにより分離・精製し、ガスクロマトグラフィーで分析した。

残存脂肪のステロール組成を第132図に示す。エピコプロスタノール、コレステロール、エルゴステロール、カンペステロールおよびβ－シトステロールなど10種類のステロールが検出された。このうち、動物に固有のコレステロールは約30%近く分布していた。しかし植物に固有のβ－シトステロールとの比は、土壙墓内試料No.SK211-1で0.61および試料No.SK211-2で0.58、土壙墓外試料No.SK211-3で0.56となり、土壙墓内外とも類似した値を示し、いずれもβ－シトステロールが多かった。西吉田遺跡の土壙墓内外試料についてもβ－シトステロールが優位であった。

一般に墓壙と認定された土壌試料ではコレステロールとβ－シトステロールとの比は1.13以上を示す。従って、ステロールの分布状態からは土壙墓内に明瞭な動物遺体の存在を確認できなかった。



第132図　土壙墓内外に残存するステロール組成

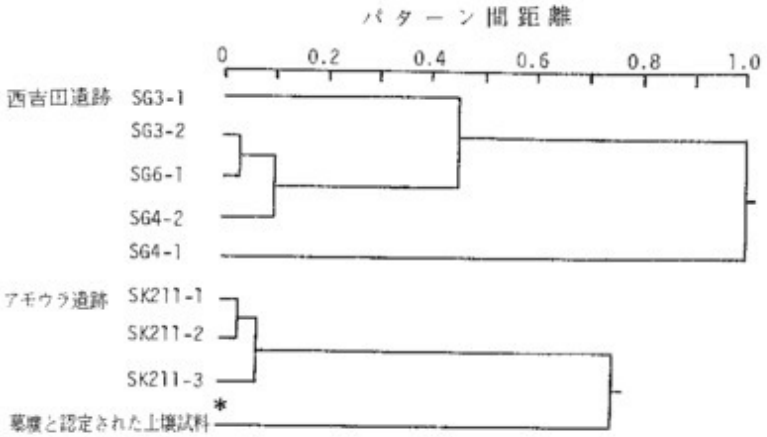
5．脂肪酸組成の数理解析

残存脂肪の脂肪酸組成をパターン化し、重回帰分析により各試料の相関係数を求めてから、クラスター分析による類似度をパターン間距離で示す樹状構造図で表わした（第133図）。

西吉田遺跡については、土壙墓内床面試料No.SG3-2およびNo.SG4-2、土壙墓内埋土試料No.SG6-1は同じパターン間距離にあり、類縁関係の深いコロニーを形成し、土壙墓外試料No.SG3-1およびNo.SG4-1とは明らか

に別の系統に属していた。この成績は土壙墓内にいずれも微量ながら異種、おそらく動物種と推定される脂肪酸が混入していることを示唆している。

アモウラ遺跡については、土壙墓内床面試料No.SK211-1およびNo.SK211-2は同じパターン間距離をもっていた。しかし土壙墓外地山試料No.SK211-3ともパターン間距離は短く、これら3試料はお互いに類縁関係のあるコロニーを形成し、墓壙と認定された土壙試料のパターンとは別の系統に属していた。この成績は墓壙と認定できるほどの明瞭な動物性脂肪酸が分布していないことを示唆している。



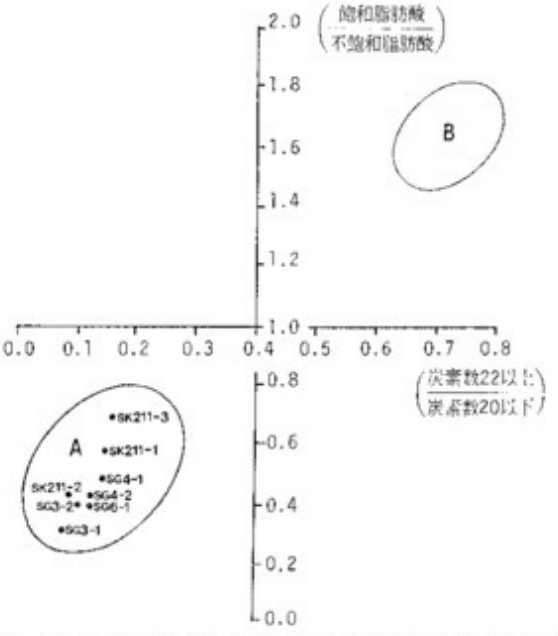
第133図　土壙墓内に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図
（＊　墓壙と認定された福岡県上三塚遺跡土壙試料）

6．脂肪酸組成による種特異性相関

残存脂肪の脂肪酸組成から種を特定するために、中級脂肪酸（炭素数16のパルミチン酸から炭素数20のアラギジン酸まで）と高級脂肪酸（炭素数22のベヘン酸以上）との比をx軸に、飽和脂肪酸と不飽和脂肪酸との比をy軸にとり、種特異性相関を求めた。これにより、第1象限の原点から離れた位置に高等動物が分布し、第2象限から第3象限へ移るに従って、植物、微生物、海産動物へと分類される。

西吉田遺跡およびアモウラ遺跡の土壙墓内外の残存脂肪酸組成から求めた相関図を第134図に示す。土壙試料はいずれも第3象限の植物腐植に由来するA群の位置に集合し、墓壙と認定された土壙試料のB群とは相関が認められなかった。

これらの成績とクラスター分析の結果を総合すると、西吉田遺跡については、動物に特徴的な脂肪酸を多く検出しなかったが、土壙墓内床面および埋土に共通した異種脂肪酸が分布するなど土壙墓内外の脂肪酸パターンは



第134図　土壙墓内外に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関
A：西吉田遺跡およびアモウラ遺跡
B：墓壙と認定された各地遺跡土壙試料

明確に異なり、土壙は墓壙である可能性が高い。しかしアモウラ遺跡については、土壙墓内に明瞭な動物遺体の存在を示す動物種脂肪酸が確認できず、残存脂肪の面からは土壙を墓壙と認定することができなかった。

7．総括

西吉田遺跡土壙墓内から採集した土壌3試料は、高等動物に特徴的な脂肪酸組成とステロール組成が観察されず、明確に土壙を墓壙と認定することは困難であった。しかし、土壙墓内に共通して異種脂肪酸が検出され、かつ多数の副葬品が出土していることを考えると考古学的には墓壙の可能性は高い。

アモウラ遺跡土壙墓内から採取した土壌2試料は、西吉田遺跡と類似した脂肪酸組成を有していたが、土壙墓内外の脂肪酸組成に特徴のある差を認めなかった。従ってアモウラ遺跡については、土壙を墓壙と認定することができなかった。

今回の調査では土壙墓内の土壌試料の採取は床面と推定される部分から数点採取しているにすぎず、実際の遺体の位置していた部分からずれている可能性も十分に考えられる。今後は、土壌試料を平面的に採取するのではなく、垂直分布についても十分留意して試料を採取する必要がある。

(注1) 中野益男：「残存脂肪分析の現状」『歴史公論』第10巻(6)、1984．pp124．
(注2) M.Nakano and W.Fischer：The Glycolipids of *Lactobacillus casei* DSM20021, Hoppe-Seyler's Z.Physiol. Chem., **358**, 1977, pp1439.
(注3) 中野益男、伊賀 啓、根岸 孝、安本教傳、畑 宏明、矢吹俊男、佐原 真、田中 琢：「古代遺跡に残存する脂質の分析」『脂質生化学研究』第26巻、1984．pp40．

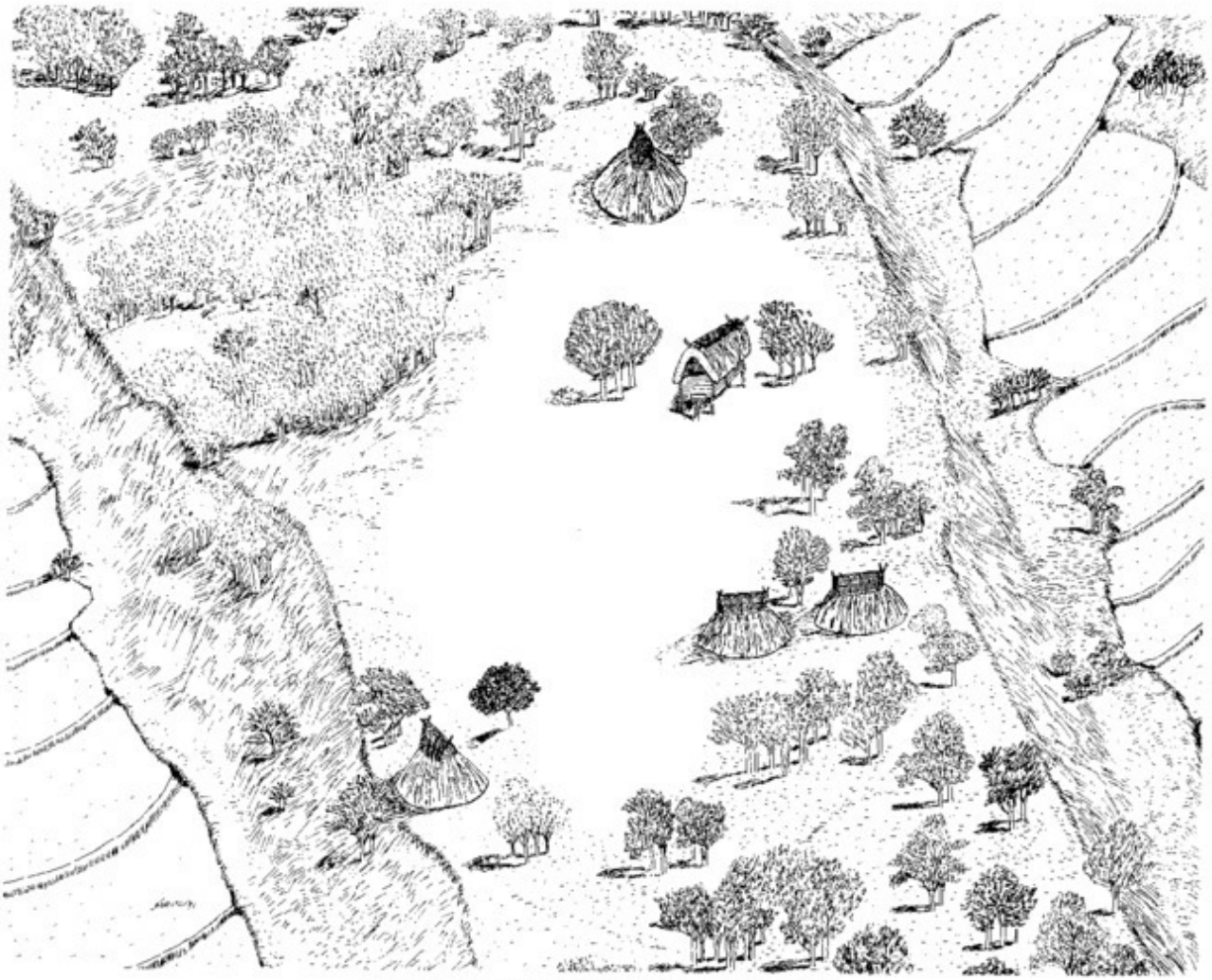
(補記)

奈文研の田中 琢氏が来跡されたのは1982年6月4日のことであった。この時、残存脂肪分析の話をされ、土壙墓の土壌を採取しておくよう助言をいただいた。その時はあまり内容もよく理解できないまま、単に土壌を採取した程度であったと記憶している。その後、マスコミで報道されたり、『歴史公論』誌上に発表されるなど話題をよび、あらためて興味引かれる分析法であることを痛感した。分析は西吉田遺跡の3土壙墓とアモウラ遺跡の1土壙墓試料を対象とした。アモウラ遺跡は報告書が刊行されていないので若干概略を説明しておくことにする。アモウラ遺跡は津山市一宮に所在し、1981～82年にかけて広域林業構造改善事業文化財発掘調査委員会が発掘調査を実施した。遺跡は丘陵上に位置し、ほぼ全域を調査している。弥生時代集落址及び土壙墓群、古墳時代集落址、中近世墓等が検出されている。弥生時代中期の土壙墓群は計45基の土壙墓よりなり、分析の対象としたのはこの中の1基である。

従来の分析結果知見によると、福岡県十三塚遺跡、北海道湯の里遺跡等では明確に土壙墓と認定され、特に、湯の里遺跡の場合には遺体の位置さえ限定されている。しかし、本稿での分析結果では墓壙として絶対視されるものではなく、可能性としての結果である。しかし、考古学的には首飾りと考えられる玉類の出土など土壙墓と考えてさしつかえないものである。これは土壌試料のサンプリングの方法に問題がありそうである。いずれも床面上の土壌だけを採集したものであり、埋土の垂直分布、平面分布の土壌試料を採取していない。今後はこれらのサンプリングが必要と考えられる。西吉田遺跡土壙墓6は今日まで全く類例がなく性格の不明な遺構である。一応、土壙墓と考えたが、分析結果でも土壙墓の可能性が指摘されている。このように、不明遺構についての墓壙認定には非常に有意義な分析法である。

最後に御多忙の中、玉稿をいただいた中野益男先生に心より感謝申し上げる次第である。（行田裕美記）

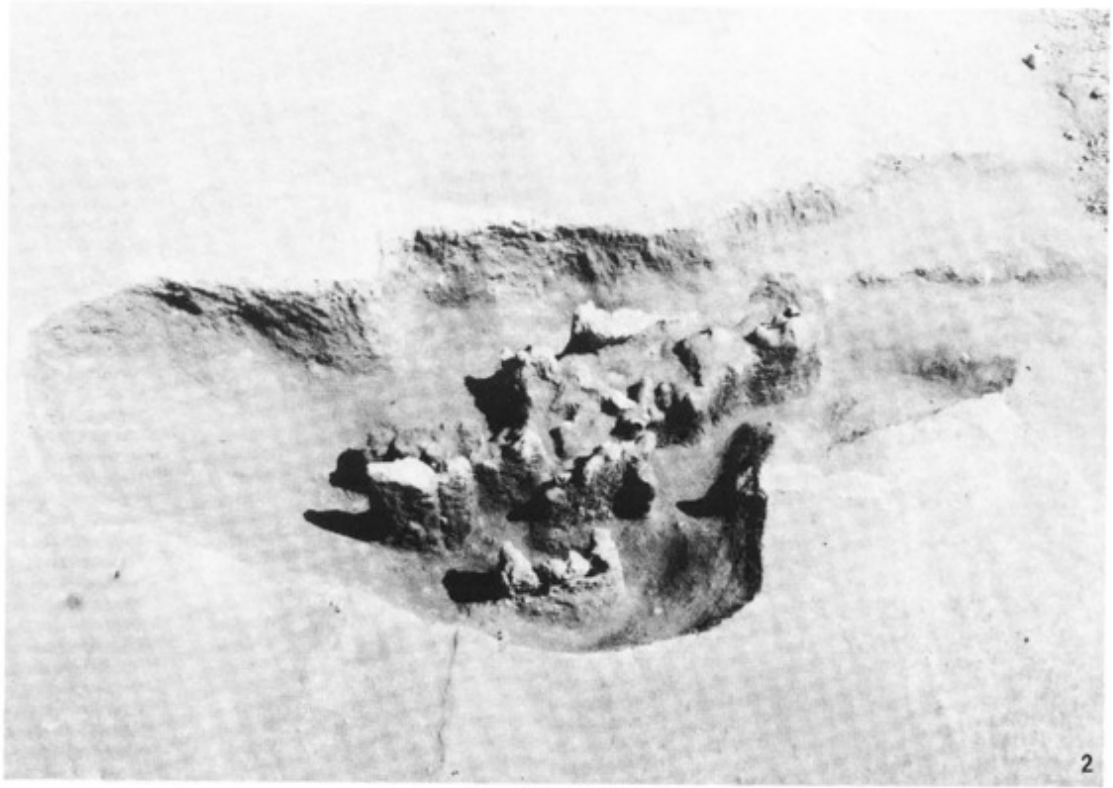
図　版



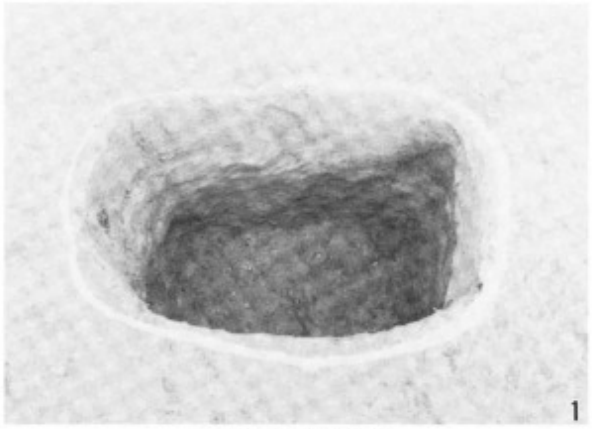
西吉田Ⅰ式期　集落復元想像図（カット：杉山紀子）

図版1
A地区

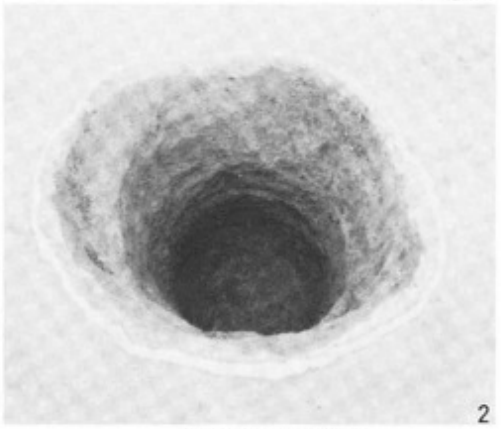
建物址（西から）



焼土壙（西から）



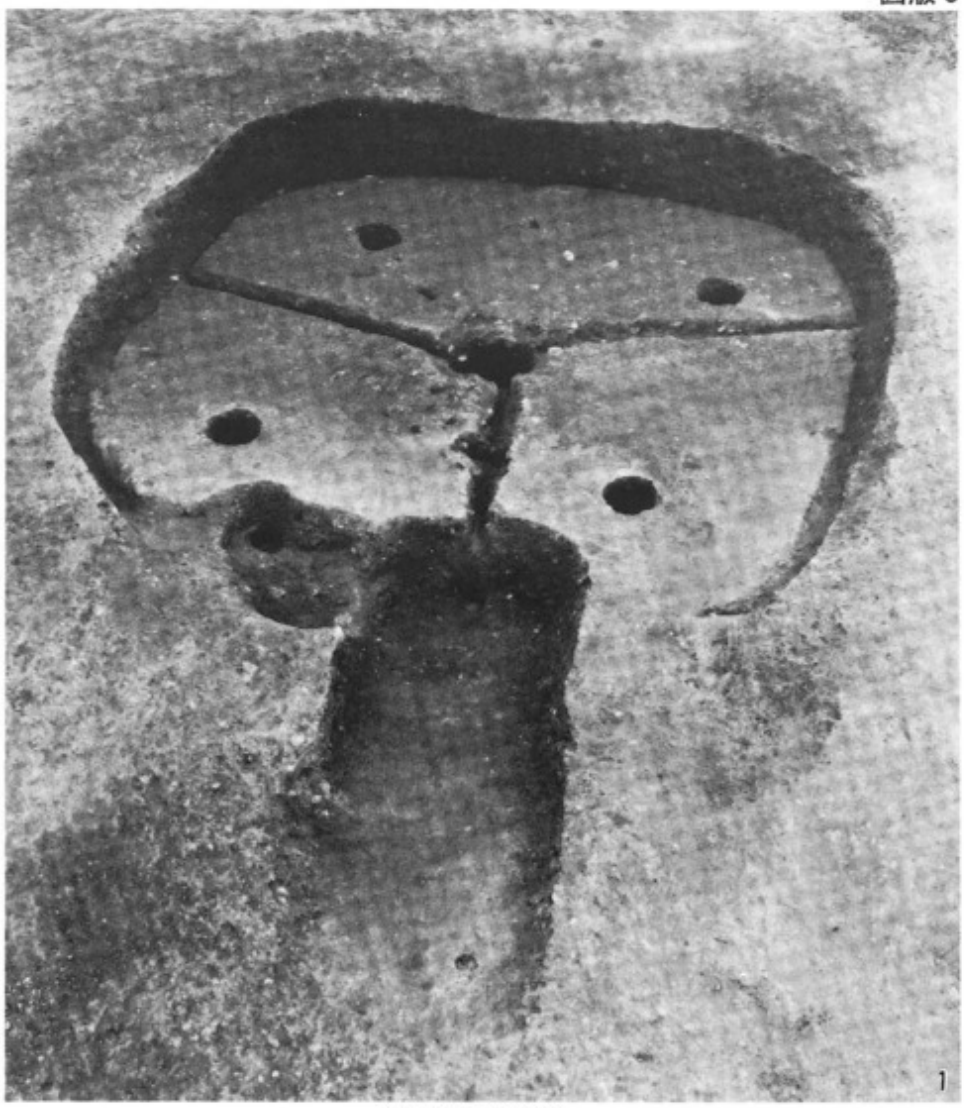
土壙墓 1（南から）



土壙墓 2（南から）

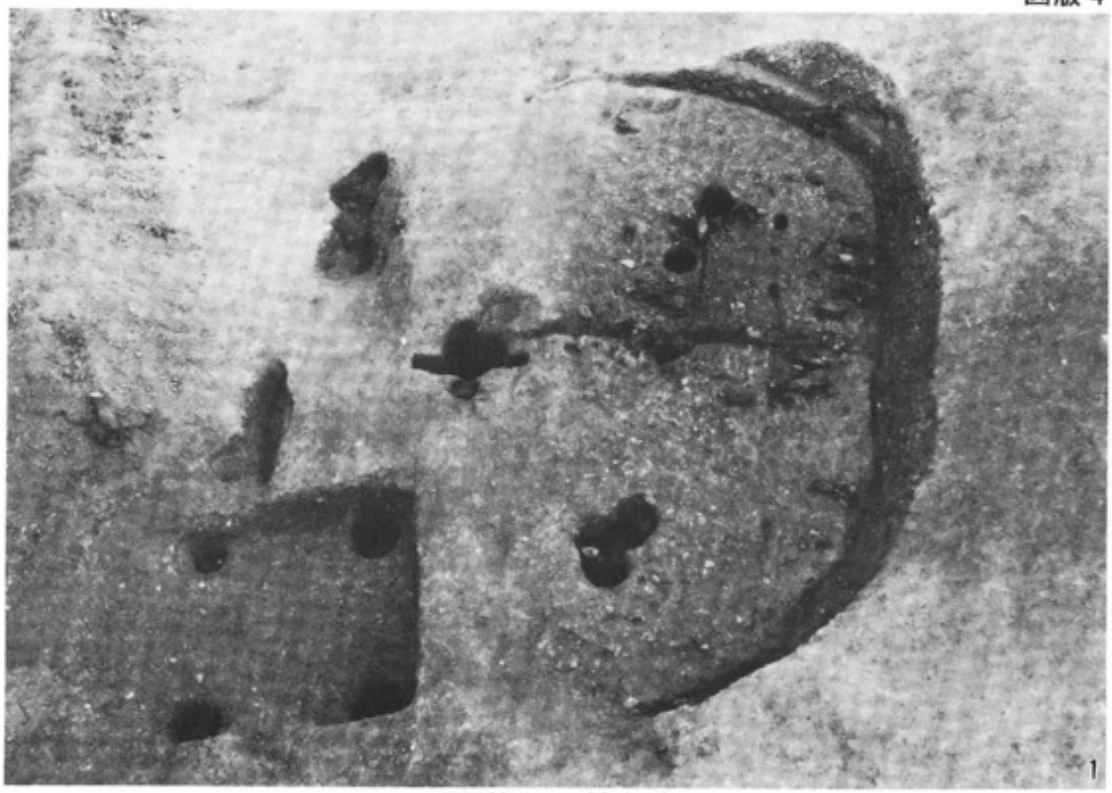
B地区

B地区遠景（A地区から）

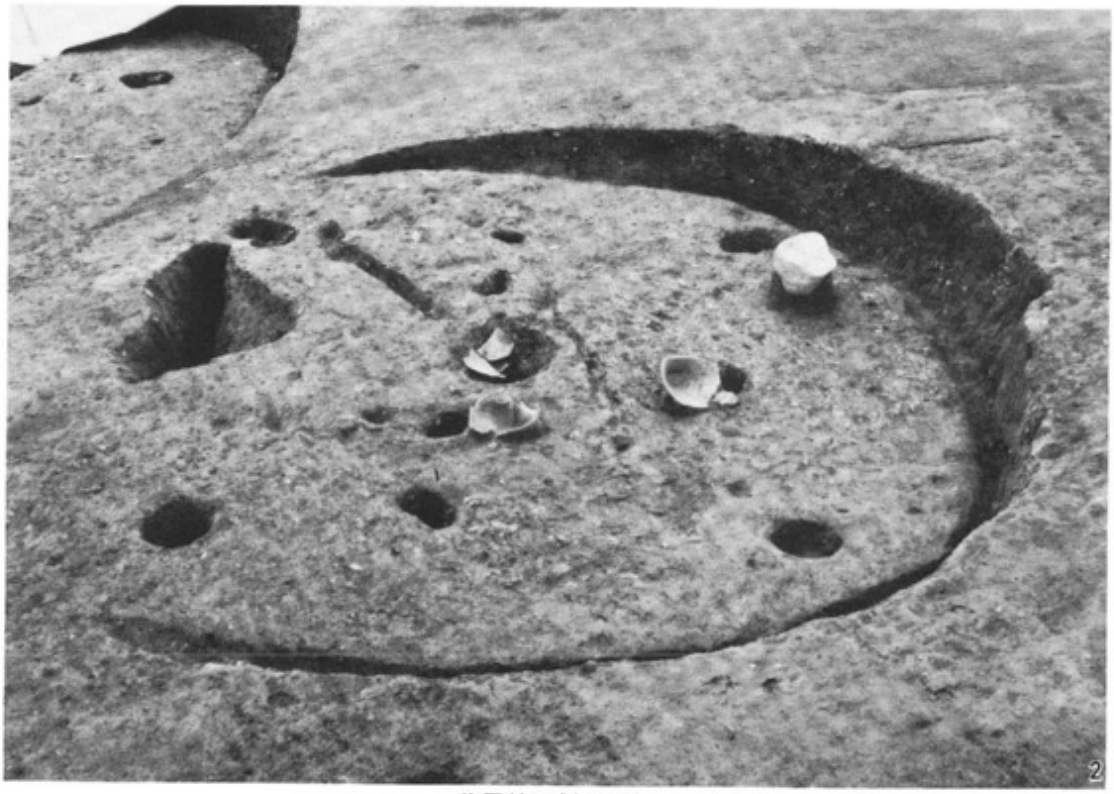


住居址 1（南から）

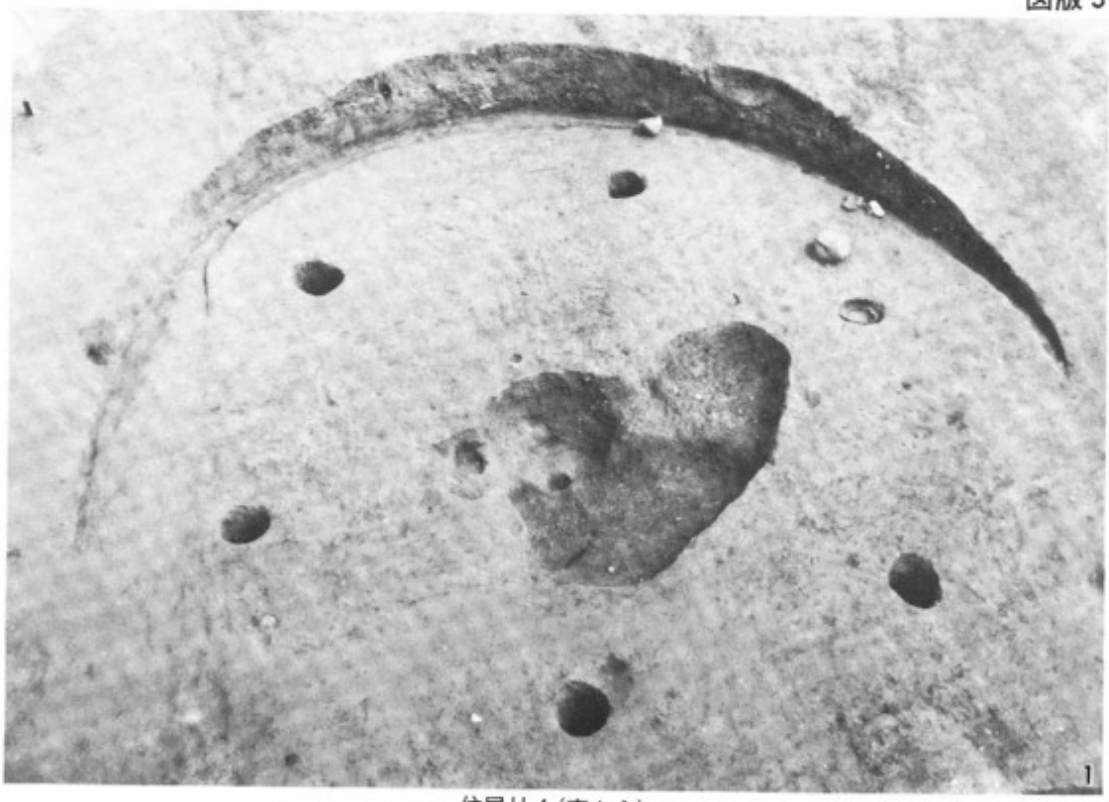
住居址 1 中央穴断面（東から）



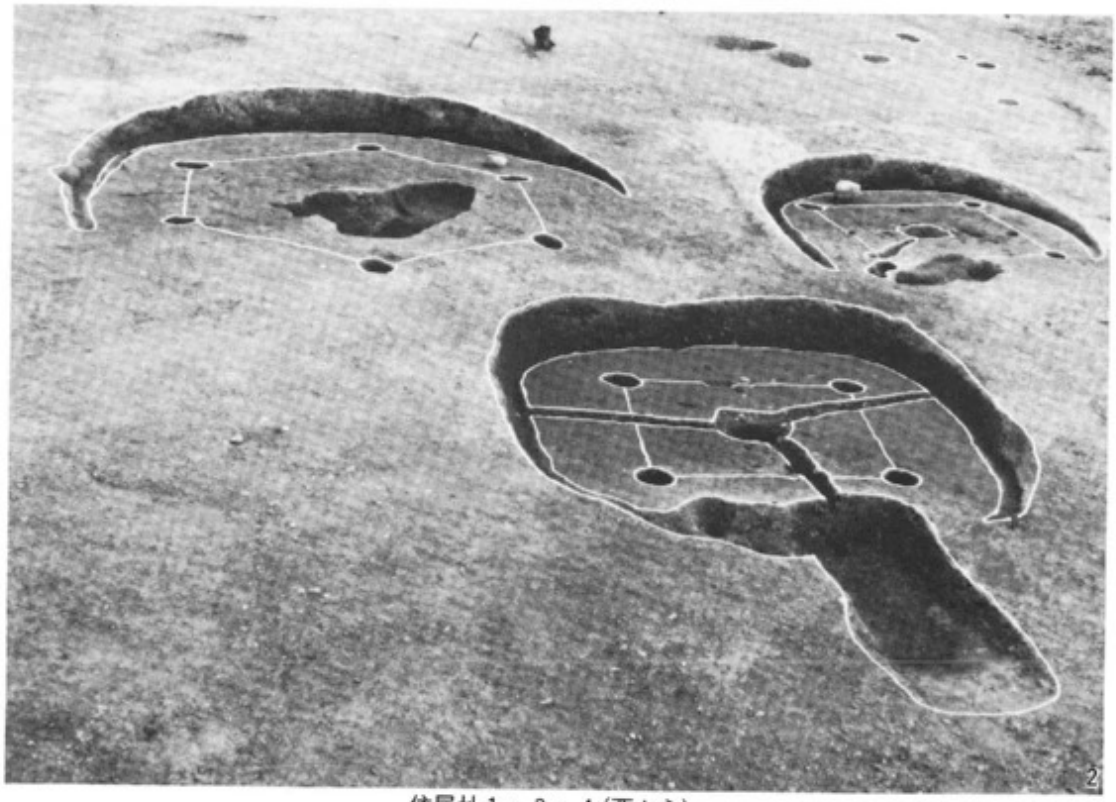
住居址 2 ・ 3 (東から)



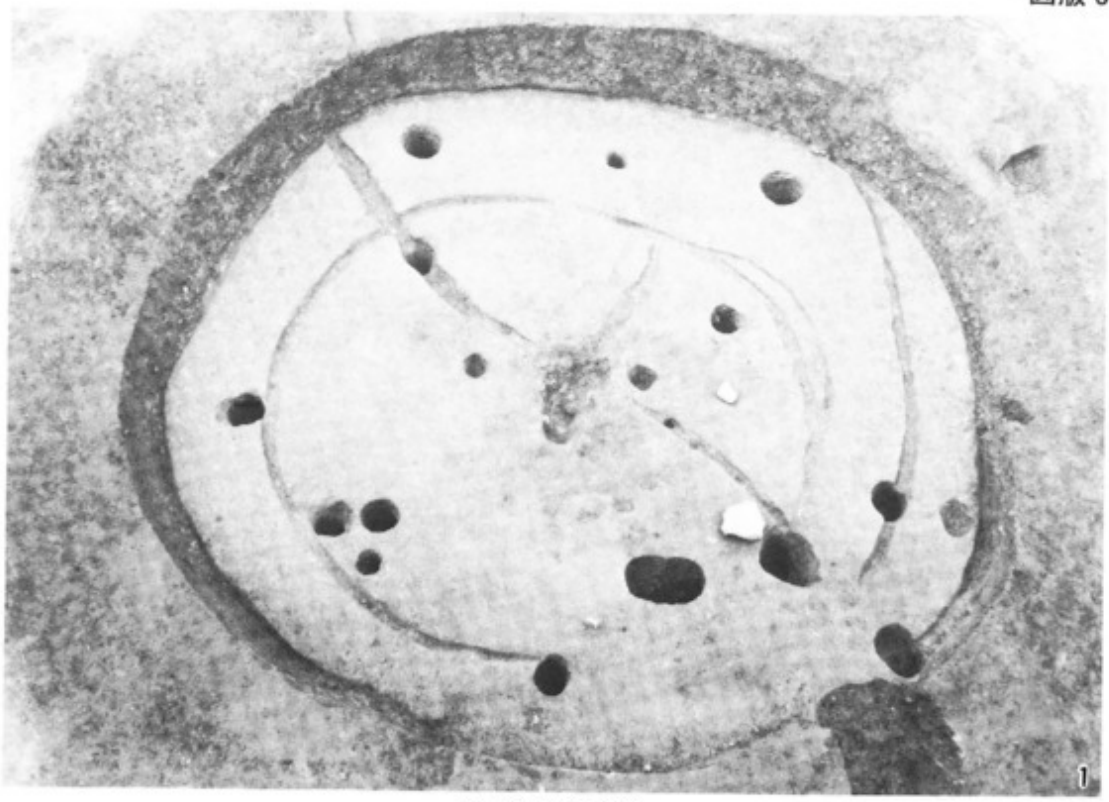
住居址 3 (東から)



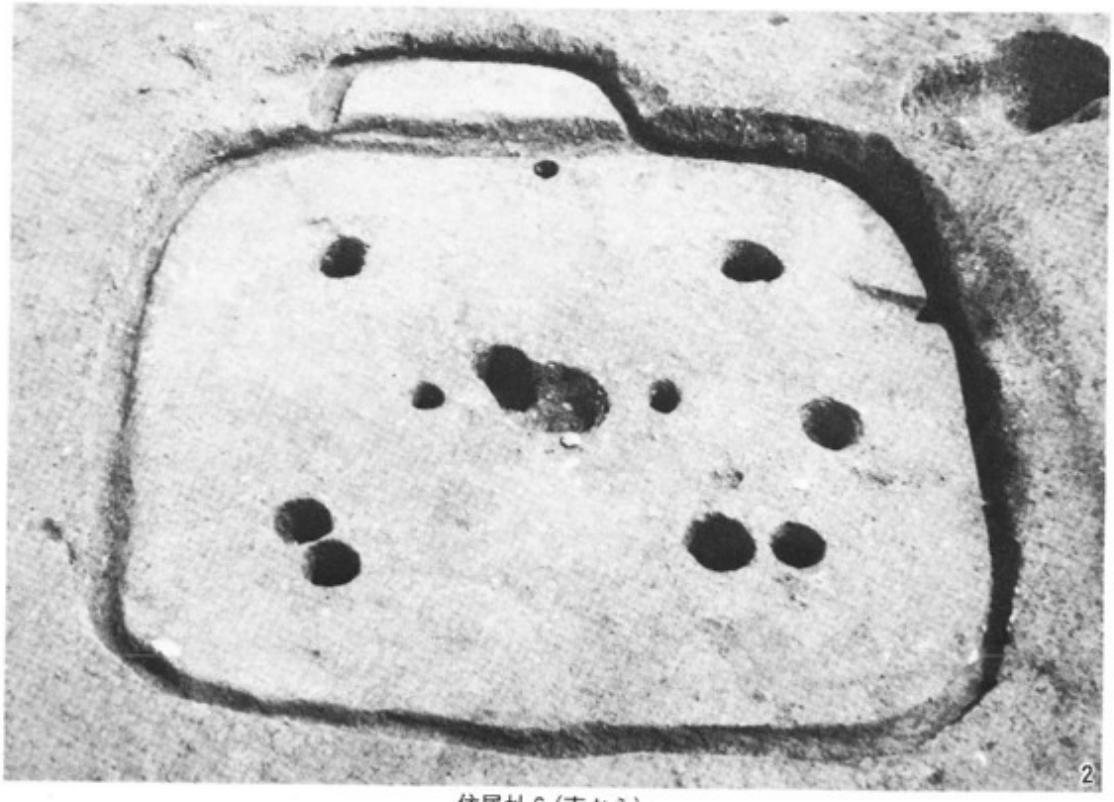
住居址4（南から）



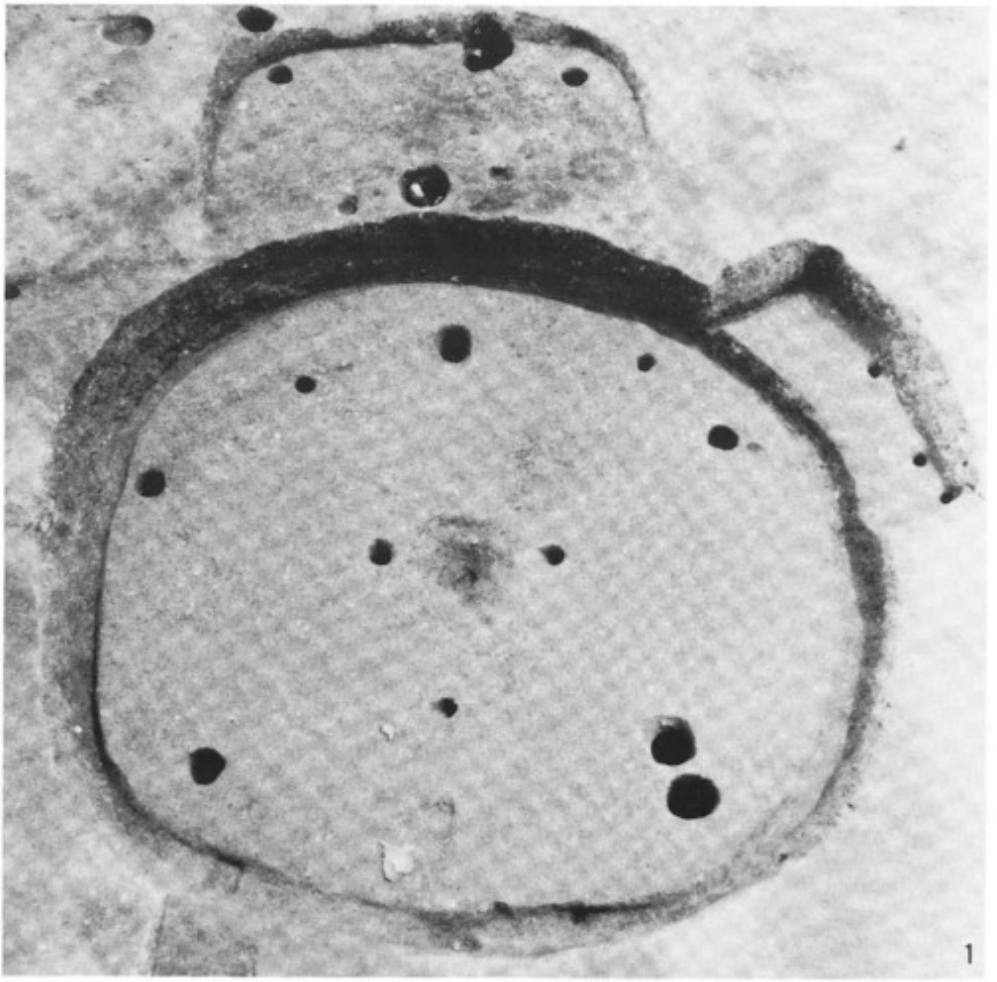
住居址1・3・4（西から）



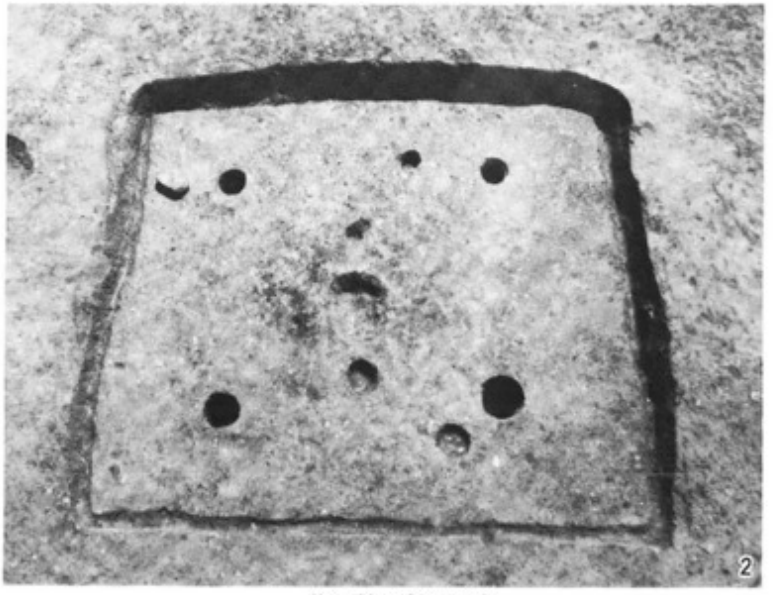
住居址5（南から）



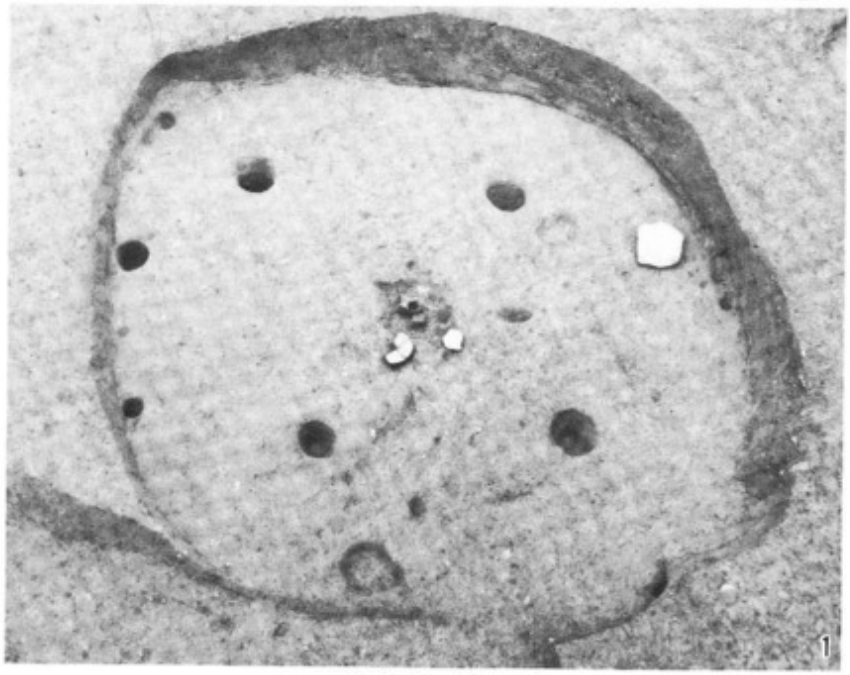
住居址6（南から）



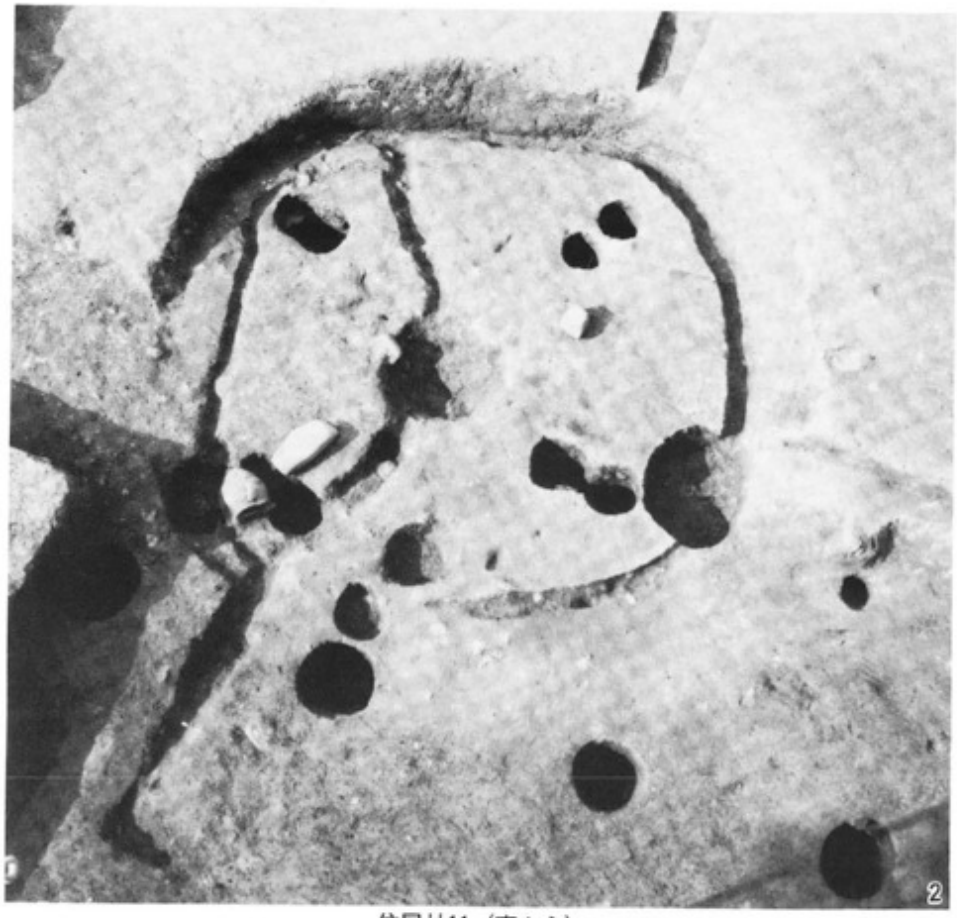
住居址7・8（北から）



住居址9（北から）

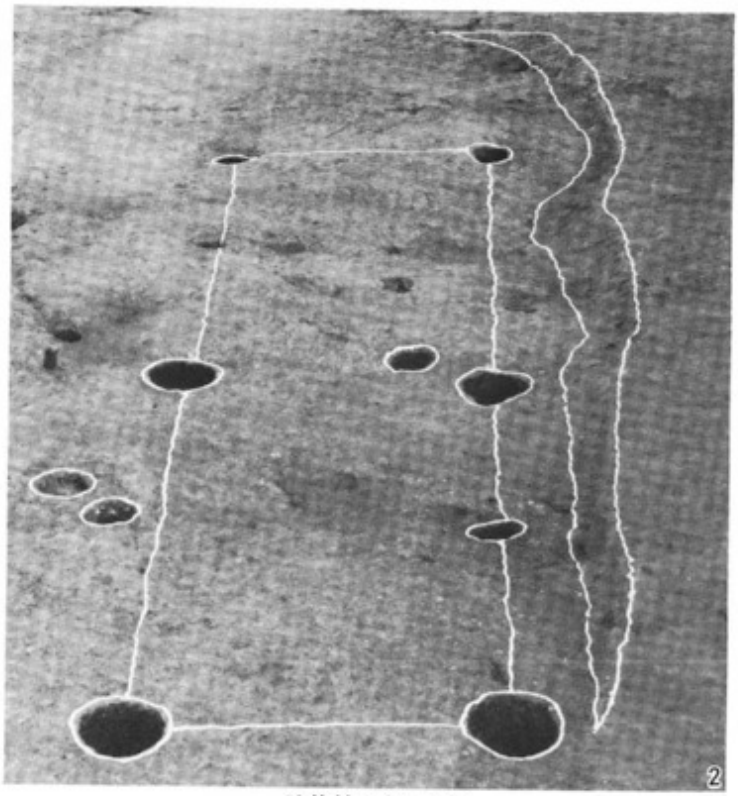


住居址10（南から）

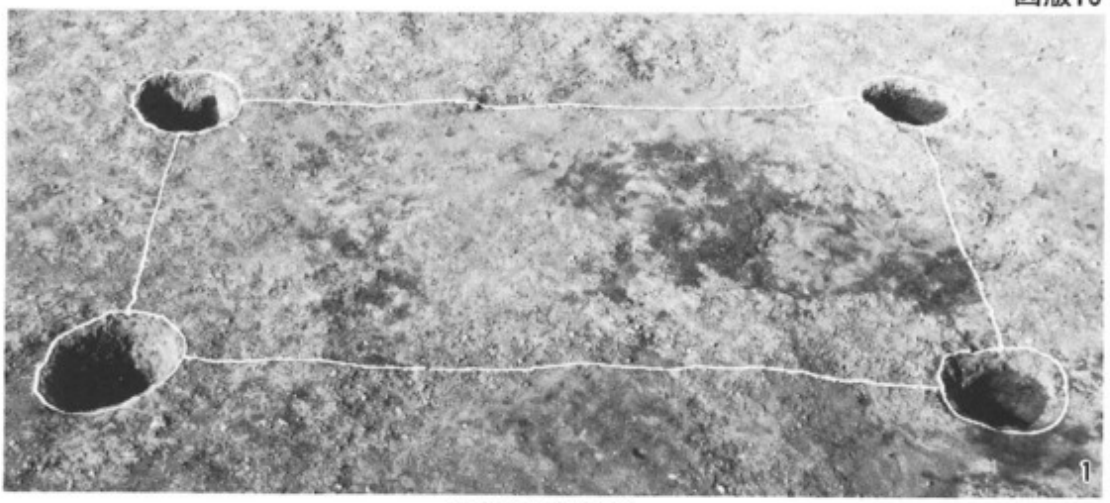


住居址11（南から）

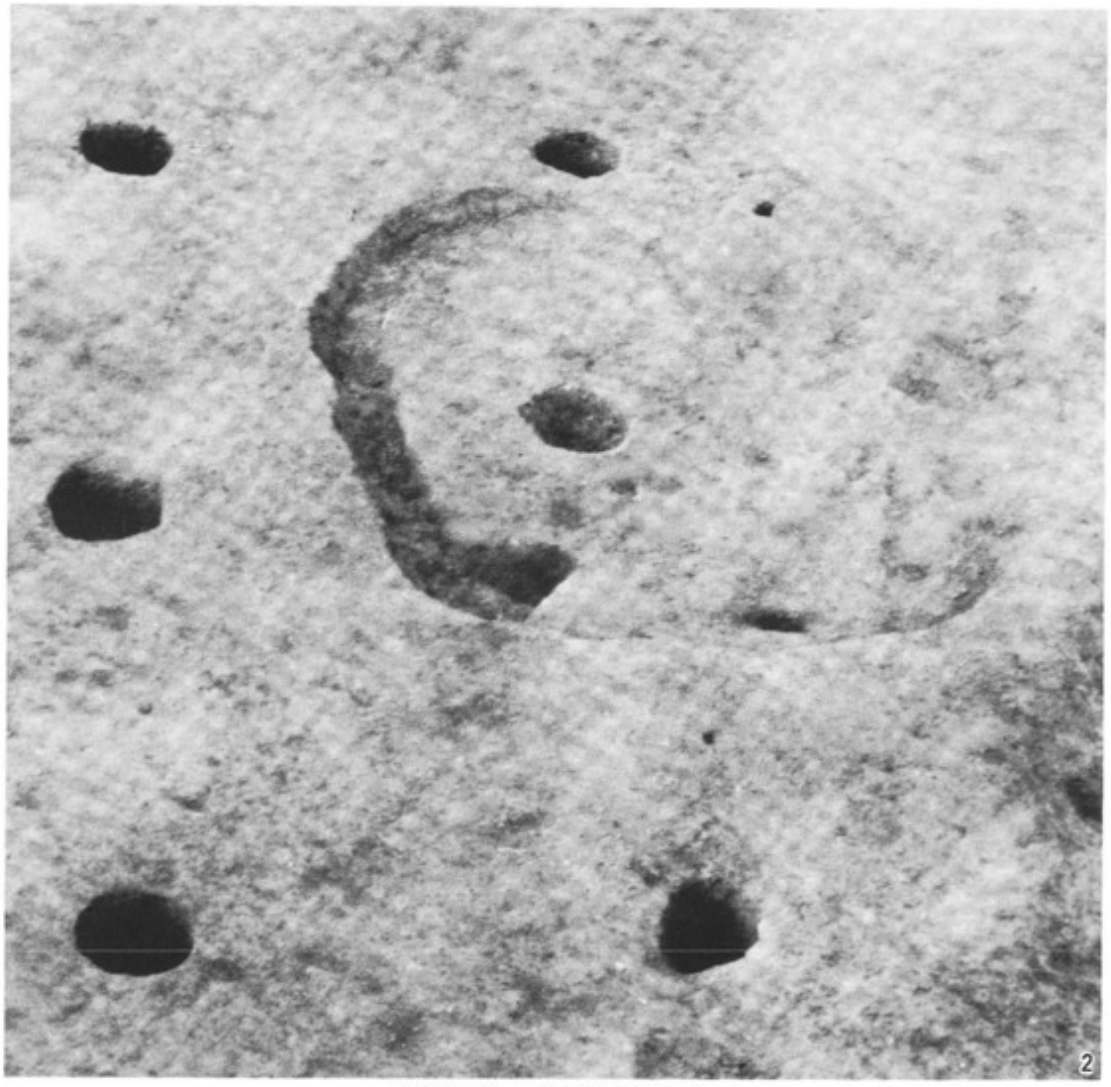
住居址12（西から）



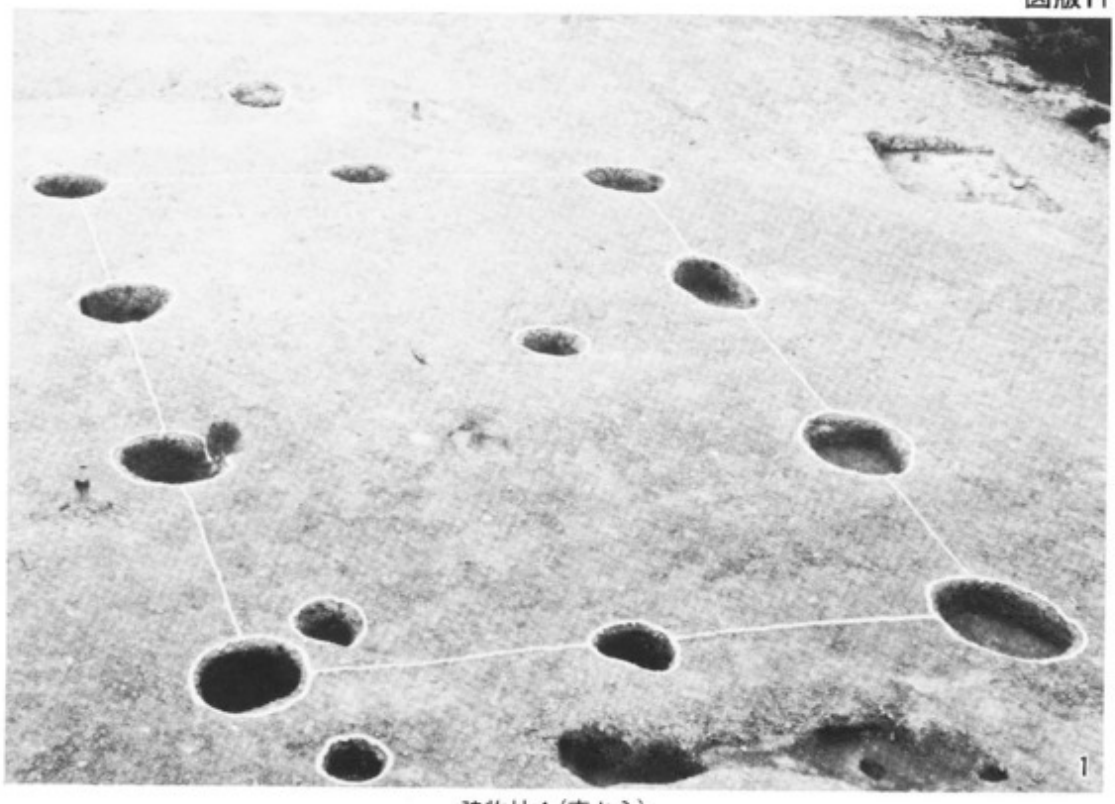
建物址 1（南から）



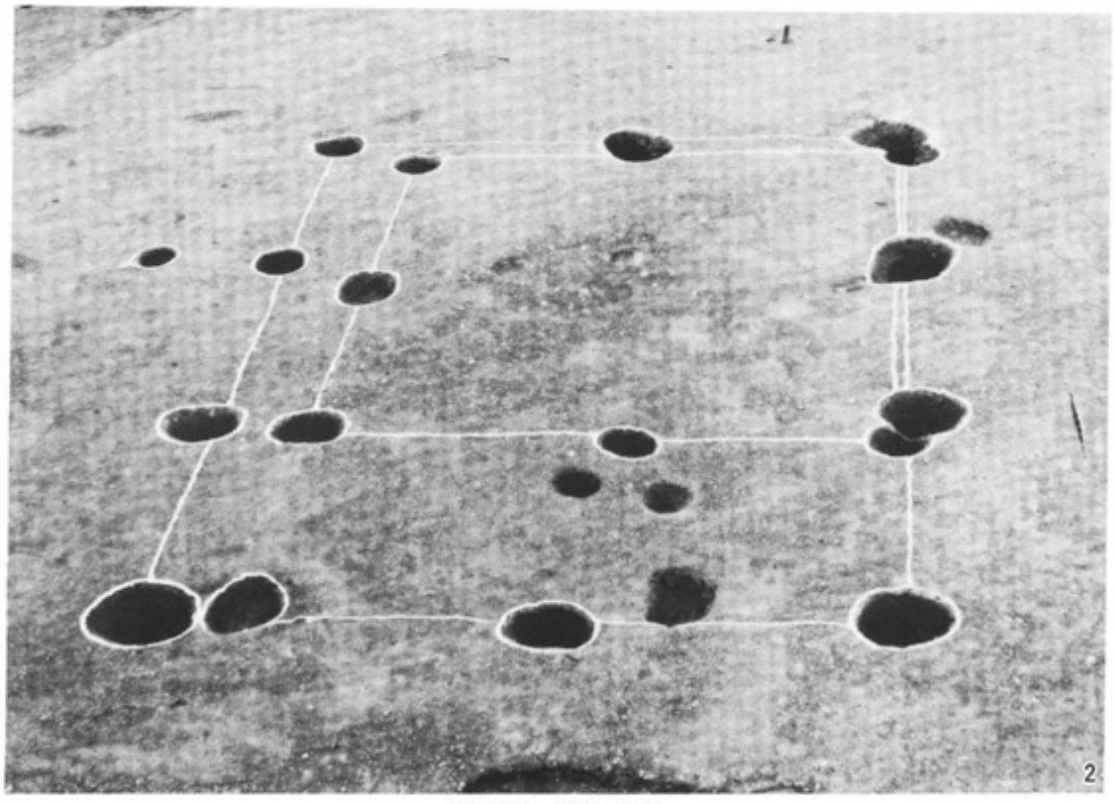
建物址２（南から）



建物址３，住居址14（東から）



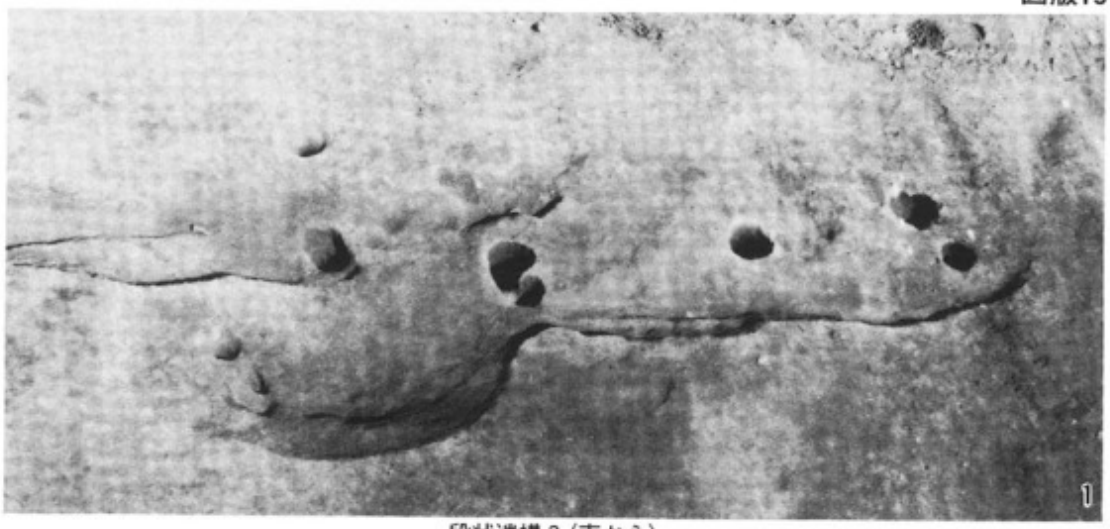
建物址4（東から）



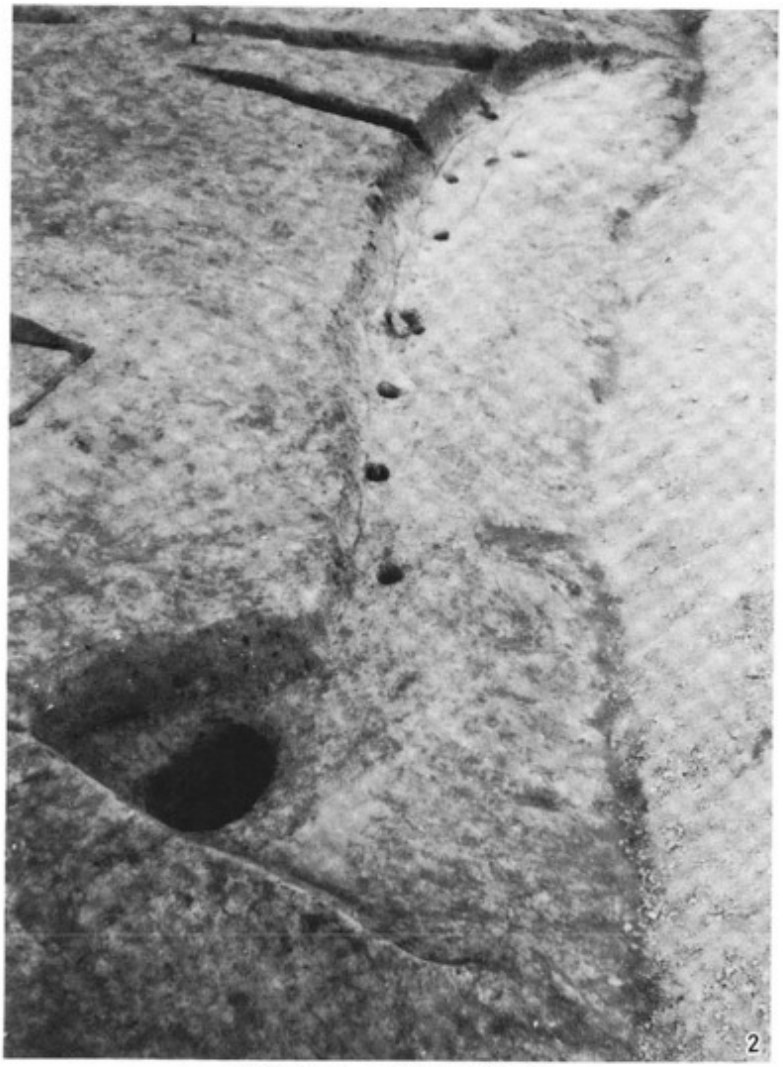
建物址5・6（東から）

段状遺構１（西から）

段状遺構２（西から）



段状遺構３（南から）



段状遺構４，土壙15（東から）

段状遺構５（東から）

段状遺構６（南から）

土壙墓１（南から）

土壙墓２・３（東から）